
魔界闘神伝

日溜ポカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔界闘神伝

【Nコード】

N0741V

【作者名】

日溜ポカ

【あらすじ】

九世界。それは世界に空間を隔てて存在する数多ある世界の中
心たる九つの世界。そして世界全ての総称

天使、悪魔、人間。運命の系に操られるかのように彼らが出会う
時、世界は動き始める

序章

この世界には「空間」という壁に隔てられた無数の「世界」が存在する

そしてそれはこの世で最も強大な力を持つ「八つの種族」と最も異端な種族である「人間」の統治する九つの世界を中心としている

その九つの世界を中心とする世界とその中心である九つの世界を総称して「九世界」と呼ぶ

ここは九世界の空間の狭間。どこの世界にも属さない世界と世界の境界

そこには緑や水を抱いた大陸のように巨大な大地から小さな岩塊までが重力など存在していないかのように浮遊し、果てしなく広がる一面の純白の雲海に抱かれたような世界を厚い雨雲から差し込む光が照らす神秘の空間

そこで一点の曇りも無い純白と純然たる漆黒が真正面からぶつかり合い、世界を揺らしているのではないかと錯覚する程の衝撃と共に消滅する

そして純白と漆黒のせめぎあつたその場所に二つの影が静かに佇んでいた

「やるな・・・」

金色の髪に金色の瞳。その背に二枚の純白の翼を生やした青年が手に持った両刃の大剣を握る手に力を込めて目の前に悠然と佇む人物に鋭い視線を向ける

「それはどうも」

その言葉に皮肉なのかそのままの意味に受け取ったのか、漆黒の

髪と金色の眼を持つ青年が優しそうな笑みを浮かべてその手に持った「大槍刀」と呼ばれる槍のような長い柄に身の丈にも及ぶほどの巨大な刀身を備えた武器をまるで棒切れのように弄びながら答える

「一応、名前を聞いておいてやる。俺はクロス」

「・・・神魔しんま」

クロスと名乗った天使の言葉に神魔と名乗る悪魔は静かに応じる

「・・・そうか」

神魔が名乗ったのを見るとクロスが手に持つ大剣から純白の力吹き上がり、その刀身に絡みつく。クロスの放つ静かで激しい殺気をそよ風のように受け流して神魔は穏やかな笑みを浮かべる

「もう、やめない？このまま戦ったら死ぬのは君のほうだよ？」

「分かってるでしょ？」といった様子で丁寧な口調で話かけてくる神魔にクロスは殺意を緩める事無く答える

「確かに俺よりお前の方が強い。・・・だがそれがどうした？」

クロスの言葉と視線、何よりもその光力くわうりきに宿った決意は揺るがない

クロス自身も神魔の言葉が示す意味を理解していた。しかし理解している事と納得する事は決して同じ事ではない

「・・・やれやれ、まあ確かに僕が悪魔で君が天使。戦う理由としては十分だろうけど出来れば逃げてくれると嬉しいな」

「悪魔に逃げろって言われてはいそうですか？言うと思うか？」

「・・・だよ、ね、なら、仕方ない」

分かりきっていたクロスの返答に神魔は溜息混じりに応じる

その身体から漆黒の力が噴き出し、その手に持つ大槍刀にその黒い力が流れ込んでいく

「・・・っ！」

「さっさと終わらせてもらおうよ。連れも待たせてるしね」

自分のものとは比較にならない圧倒的な冷たさと恐怖をはらむ殺気にクロスはわずかに眉をひそめる。神魔も言った様にわずかだが神魔の方が強い

その言葉の通り決して圧倒的といえるほどには違わないその実力

差でも放つ殺気の冷たさと重さは悪魔である神魔の方がクロスを遥かに凌駕する

「いくよ」

優しく穏やかな神魔の口調はその軽い耳障りとは無縁のドス黒い殺意を宿している。

その言葉に気圧される事無く神魔と視線を交差させるクロスは大剣を握り締めて戦意を研ぎ澄ませる

「・・・来い」

刹那、二人の姿は漆黒と純白の光となって奔る。一瞬にしてその間合いを詰めた二人は漆黒と純白の力を纏った武器を相手に向けて振り下ろす

「おおおおおっ!!!!」

漆黒と純白の力が真正面からぶつかり合い、絡み合い、収束し、相手を呑み込み、掻き消そうとその殺意のままに牙を剥く

「・・・くっ!」

一瞬の均衡。しかしその力の圧力にクロスは歯を食いしはる

神魔の言う通りわずかに、しかし確実に神魔の方が強い。その漆黒の力に呑み込まれないように全霊の力を振り絞ってその圧力に耐える

「おおおおおっ!」

クロスは自身の出せる限りの力を振り絞る。しかし必死に力を振り絞るクロスとは対照的に神魔の表情には余裕すらも伺える

わずかだが確実な力の差は真正面からぶつかり合ったクロスを圧倒し、何とか踏みとどまっていた均衡が徐々に崩れ、純白を漆黒が浸食していく

(・・・!やられる・・・!!!)

神魔の漆黒の力に飲み込まれ、自らの命の終わりをクロスが予感したその瞬間

世界が悲鳴を上げた

「!!?!?」

神魔とクロスが一瞬目を見開く

世界が悲鳴を上げて、空間が軋む。二人の力がぶつかり合うその中心から空間が歪み、それが世界を歪めて亀裂を奔らせる

「・・・なっ!？」

その異常事態に二人が離れようとした時には時すでに遅かった

二人の力の接触点から発生した世界の亀裂は一瞬にして世界の渦となり、二人を呑み込む

クロスと神魔を呑み込んだ空間の渦は世界の持つ自己修復機構によつて拡大する事無くそのまま縮小して、消滅する。

空間の渦と共に二人の姿が消え、静寂を取り戻したその場所を遙か彼方から見つめる1人の人物がいた

「・・・!」

黒い着物の上に足元まで届く白い陣羽織を羽織り、膝の裏にまで届く長い桜色の髪をなびかせるその人物は一度だけ小さく息を呑むとそれ以上言葉を発する事無くただその場所を見つめていた

界道姉弟

・・・これは「救い」。これは「呪い」

いつか「その時」が来たとき、この子はきつとその身に宿した逃れる事は出来ないこの「運命」に命を懸けて立ち向かわなければならぬでしょう

そしてその時が来たら、この子は永遠にあなた達の元を離れてしまおう。

それでも・・・

その時まで精一杯愛してあげてください。眼の前に立ちふさがる運命にこの子が呑みこまれて絶望してしまわないように。愛された愛しい記憶を誰かを愛するために使えるように・・・

そう言って優しい微笑みを浮かべていた

けれどその心は悲しみと痛みと懺悔に彩られていた。心の中でその運命を授けてしまう事になる子供に謝り続けていた

「彼女」は愛おしそうにその子供の頭を優しく撫で・・・そして二度とその姿を現すことはなかった

朝。布団の中で身体を丸めて、安らかな寝息を立てる少女の枕元に置かれた目覚まし時計がけたたましい音を鳴り響かせる

「・・・ん・・・ん」

深い眠りを覚ます目覚まし時計の音に閉じていた目をうつすらと開き、未だ覚醒しきる事のない虚ろな目でゆっくりと周囲を見回す。その目に映るのは見慣れた自分の部屋の光景。寝ぼけて霧がかか

つた頭で、未だに音を鳴らし続けている目覚まし時計に目を移す
「！！！」

その時計を見て少女はベッドから飛び起きてかじりつくようにその時計を見る

「7時30分」その時計は間違いなくその時間を示している
「遅刻！！」

少女は身体を起こすと着ていたパジャマを脱ぎ捨て2年間着続けている中学の制服に身を包むと部屋の扉を勢いよく開けて外に飛び出す

「どうして起こしてくれなかったの!？」

時間に追われながら階段を下りて一階のリビングに下りて行くところにはすでに見慣れた朝の団欒があった

母が朝食の用意をし、父はすでに仕事に出かけようとしている。

そしてテーブルには少女の双子の弟が静かに腰掛けて少女と同じ年とは思えない落ち着いた雰囲気です。コーヒーマシンに口をつけている

「おはよう。詩織」

キッチンに立つ母の聞きなれた優しい声に朝の挨拶を返すと詩織と呼ばれた少女は私服でコーヒーマシンを飲んでいる自分の弟に声をかける
「大貴。あんたものんびりしている場合じゃないでしょ!？遅刻するわよ！」

「・・・春休みに学校に行くのか？」

急かすように声をかけた弟から帰ってきた弟の冷めた言葉に詩織の頭は一瞬停止する

「・・・え？」

「制服着て起きて来たと思ったら、寝ぼけているの？」

母はそんな詩織の様子を見てクスクスと笑みを浮かべ、弟は盛大に溜息をつく

「・・・春、休み・・・」

呟いてカレンダーを見れば今日は4月1日。呆然とカレンダーを見ている詩織に双子の弟が再び盛大に溜息をつく

「今月から中3になったんだからもう少ししっかりしてくれよ」
少女の名前は「界道詩織^{かいどうしおり}」。少年の名前は「界道大貴^{かいどうたいき}」。2人は
双子の姉弟であり、どこにでもいるようなごく普通の中学生だ
「う……」

寝ぼけて騒いでいた事に気付くと激しい自責の念と共に詩織の顔
が羞恥で真っ赤に茹で上がる

「まあ、折角起きてきたんだし朝ごはん食べちゃいなさい」

「……はい」

母の言葉に小声で頷き食卓の椅子に座った詩織を見て大貴は小さ
く笑みを浮かべ、詩織は生まれた時間が数分しか違わない弟に抗議
の意味を込めて鋭い視線を向ける

いつもと変わらない日常。終わることなど考えもしなかった平凡
が失われようとしている事に詩織と大貴の二人が気付く事はなかった

それとほぼ時を同じくして日本のはるか上空、雲よりも高く宇宙
よりも低い場所にある空間が一瞬にして軋み、巨大な渦を作り出す。
するとその中から二つの流星が吐き出され、一つは天よりも高く舞
い上がりもう一つは雲を貫いてその下へと降下していった。

「……ここは……」

雲を貫いてその下に広がる光景を目の当たりにした神魔は静かに
呟く

「……他の世界に飛ばされちゃったのか……」

神魔の脳裏には自分とクロスの力の激突によって生じた空間の渦
が思い出される。二人の力が空間を歪めて破壊し、異なる世界への
扉となって二人をこの世界に誘ったのは明白だった

(……変だな。そんな事になるはずは無いのに……)

内心で静かに首をかしげて神魔はすぐにその疑問を頭の奥にしま
い込む。過程がどうであれ結果的には現実には二人は世界を渡って

いるのだからそれを考える事は今必要ない事だと判断したからだ

「・・・でも、この世界は・・・」

周囲に広がる町の光景を見て神魔は静かに呟く

「・・・かなり力の弱い種族・・・それに、この力の感覚は・・・」

眼下に広がる町並みを闊歩する人々の「力」を「知覚」して神魔は怪訝そうに眉をひそめる

九世界の存在は生物、無生物など例外なく「力」を宿している。

それは言うなれば「存在の力」、「魂の力」とも呼ぶべき力。その力は個人や、種族によって性質が異なるため、その力を知覚すれば種族や個人まで気配だけで察知する事が出来る

そういった相手の力を感じ取る「知覚」は五感と同じ感覚であり、個人によって差はあるが九世界の存在は誰もがその力を持っている

その世界の存在が宿す力を知覚した神魔は、今まで感じた事のないその力の波長に一瞬眉をひそめるがすぐに小さく目を見開く

(小さな力。微弱だけどこの力の感覚・・・)

「!・・・まさか・・・!」

同時にその頃、空間の歪から天高く舞い上がったクロスは眼下にある白い雲が渦を巻いている青い球体を静かに見下ろしていた

その純白の翼と金色の髪をもったその存在は、小さな光を抱く漆黒の世界の中に映え、太陽よりも眩く煌めく

「・・・この世界は・・・間違いないな・・・」

『ゆりかごの世界・・・!』

四月の初日。春の陽気に照らされる街に詩織と大貴の姿があった

「何で俺まで・・・」

「いいじゃない。買い物くらい付き合ってくれても」

朝の事でへそを曲げているらしい詩織は大貴を八つ当たりとばかりに買い物に連れ出していた

二人が住むのは首都を抱く都心に近い街。首都で働く人々のベツドタウンとして有名だが、街自体も十分に発展している

「・・・まあ、仕方ないな」

下手に話をこじらせて姉の機嫌を損ねたくない大貴は詩織の言葉に小さく頷く

「ただ、金は貸さないぞ」

「そんなことしないわよ。弟にお願いしなきゃいけないほど困ってるわけじゃ無いんだから」

冗談半分で言った大貴の言葉に詩織は「失礼な」と言わんばかりの表情で言う

「ならいいけどな」

少し意地悪っぽく言った大貴の言葉に詩織は小さく微笑んだ

天よりも遥かに高い場所から地球を見下ろすクロスは不愉快そうに眉をひそめた

「どういうことだ？神魔以外にもう一人、悪魔がいる・・・！」

クロスの知覚能力は、眼下に広がる青い惑星の中に神魔以外の「魔力」を感じ取っていた。神魔も当然気付いているらしく、その魔力に対して一定の警戒態勢を取っている事が感じ取れる。恐らく神魔が早々にこの世界を立ち去る様子を見せないのはその所為だろう。相手の方もこちらに気付いて様子をうかがっている気配はあるが自身の魔力を一行に隠す気配は見せない。しかも幸か不幸かもう一人の悪魔の存在は神魔とそれほど離れていない

直線距離にして10kmほど。接触到一秒もかからないほどの距離だ

「ゆりかごの世界ではあんまり戦いたくないんだがな・・・」

万が一その二人が接触し、戦闘になるうものならば自分が止めなければならぬとクロスは静かに決意を固めて二人の様子を静観する

一方その頃、神魔は乱立するビル群の屋上で静かに佇んでいた
「・・・来た」

神魔が目を見開くと、一瞬にして神魔の元へやって来たもう一人の悪魔が、宙に浮きながら刃のような金色の視線を神魔に向ける
逆立った真紅の髪、金色の眼、額と両肩から漆黒の角を生やしたその「悪魔の男」はゆっくりと神魔の近くに降り立つ

「俺は紅蓮^{くれん}。お前は？」

「・・・神魔」

「神魔か。お前なんでここにいて天使と一緒にようだったか・・・何者だ？」

紅蓮と名乗った悪魔は眉をひそめて神魔に視線を向ける

天使と悪魔は九世界では敵対関係にあり、行動を共にする事はほとんどない。それが行動を共にしていればいやでも目に付く

「違うよ。あの天使とはそんな関係じゃないから」

神魔は紅蓮の言葉に小さく苦笑して簡単に事情を説明する

「なるほど。空間の渦に、か・・・確かにお前たちが現れる前に俺達を使うのとは少し違う空間の扉を感知したからな。信じてやるよ」

「どうも」

紅蓮の言葉に神魔は小さく微笑む

「それで君はここで何をしているの？」

「探し物だ」

「探し物？」

神魔の質問に紅蓮は特に隠す様子も無く素直に頷く

「ある人に頼まれてな。この世界で探し物をしていたところだ」

「・・・ここがゆりかごの世界だって事は知ってるよね？」

「当然だ」

「なら・・・」

神魔の言葉に紅蓮は頷く

「ゆりかごの世界は全て『九世界非干渉世界』・・・その名の通り九世界と交流を持たない、関わってはならない世界だからな」

神魔が言うよりも早く紅蓮は言葉を紡ぐ

「だが、だからこそ宝を隠すにはもってこいの世界だ」

九世界非干渉世界は九世界と交流を持たず、その世界への滞在すら禁じられている。言い方を変えれば、九世界から隠したいものを隠すにはそれほどうってつけの世界はないだろう

「そうまでして隠すモノなんてそんなに思いつかないんだけど？」

「それは秘密だ」

神魔の言葉に紅蓮は悪戯をする子供のような表情で言う

「・・・まあ、お前が俺達の仕事を手伝ってくれるなら上の奴に会わせてもいいがな」

(・・・何かしらの組織って所かな・・・)

俺「達」、「上」という言葉から紅蓮が大なり小なりの組織に係しているという事は容易に読み解く事が出来る

「遠慮しておくよ。僕、そういうの苦手だから」

「・・・そうか」

神魔の言葉に紅蓮は静かに応じる。無理に勧誘する気も無く、また特に邪魔をしなければ攻撃を加えてくるつもりも無いらしい

(さてと・・・そろそろ帰ろうかな。ここに長居する気はないし)

これ以上事に関わる気はなかった神魔はこの世界から帰ろうと考えていた。紅蓮の目的が何かまでは分からないが、仮にそれでこの世界がどうなっても自分には関係ない。

むしろ巻き込まれて「同罪」にされてはたまらないという思考が先に立つ。

「意外に肩透かしだったが、お前に会いに来て正解だったらしい・・・」

「・・・僕は関係ないよ」

紅蓮は神魔から視線を逸らす

神魔も「その存在」には少し前から、具体的には紅蓮と話し始めた頃から気付いていた。この世界に住まう存在の中で他の大勢とは異なる気配を纏った存在に

「・・・邪魔はするなよ」

紅蓮は神魔に無言で釘をさすとその場を離れる

警告を兼ねて一瞬見せた紅蓮の殺意に神魔は静かに目を伏せる

「・・・紅蓮って言ったかな？あいつ、かなり強いね。彼も気の毒に」

その言葉は誰の耳にも届く事無く風に乗って掻き消されていった心の中で紅蓮に狙いを付けられた少年に合掌し、さっさとこの世界を去ろうとした神魔は、しかしその動きを止めて紅蓮が向かっていった少年のほうを見る

「!・・・まさか・・・」

神魔が視線を送る先は紅蓮が追った少年ではなく、その隣にいる少女。その少女の存在が放つ気配に知覚を集中させる

紅蓮が向かったからこそ気付く事が出来たその「力」の波動。それは神魔にとつて、このまま見過ごして帰る事を許さないほどに意味のあるモノ。

「・・・少し、確かめてみる必要があるかな」

神魔は小さく呟いて紅蓮が向かった方向へ視線を向けた

「・・・はあ・・・」

姉の後を歩く大貴は溜息をつく

「あんた溜息多いわよ。そんなんじゃ幸せが逃げちゃうんだから!」
大貴の溜息を聞いた詩織は、後ろを歩く大貴に人差し指を立てて諭すように話しかける

(・・・いや、普通溜息くらいつくだろ?)

手に持たされた詩織の荷物を見て大貴は内心で渦巻く不満を呑み

込む

荷物を持たされるのはまだ許せる。そのくらいなら仕方ないと割り切れる

しかしそれ以外が拷問なのだ。古の昔から語り継がれる「女の買物物は長い」という伝説はこの姉にも例外なく適応される

大貴の性格を熟知している姉は何を聞いても「いいんじゃないか？」と答える事を知っているため、さすがに品物を選ばされる事は無かったが、選ぶのにかかる時間は長く、それを待ち続けるのは退屈と言う名の苦痛でしかない

しかも所詮は中学生。手持ちの軍資金は限られているため、尚の事時間を要する事になった。恐らくもつとお金があつたなら、冗談みたいな数の紙袋を両手と首にぶら下げられていたかもしれない

「心配しなくてもジューズくらいはおごつてあげるわよ」

「……どうも」

詩織の言葉に大貴は力なく呟く事しか出来なかった

「……！」

その瞬間。大貴は今まで感じた事のない感覚を覚えて足を止める頭の奥で琴線が鳴っている様な不思議な感覚が周囲に満ちているのを感じる

「?どうしたの?」

大貴の様子に首をかしげる詩織を見て大貴は周囲に気を張り巡らせる

「姉貴……!?!」

魂の奥底から告げられる本能のような危険信号に大貴は詩織に声をかけようとするが、目の前にいた筈の姉が消えている事に気付いて言葉を詰まらせる

「なっ……!?!」

驚いて周囲を見回すとそこには今まで歩いていた街と同じ風景があるが、人の気配が全く無い事に気付く

「……いなくなったのは俺のほうか!?!」

「意外に勘はいいほうだな」

その言葉に大貴が視線を向けるとそこには逆立った真紅の髪に金色の目。額と両方から漆黒の角を生やした男・紅蓮が宙空に佇んで不敵な笑みを浮かべていた

出会い

「何だ・・・？お前！？」

大貴は目の前に現れた紅蓮を見て目を見開く

逆立った真紅の髪に額と両肩から生える漆黒の角。普段ならそんなものを見れば「コスプレか？」と思うだろう

しかし目の前にいるその人物は違った。宙に浮いているとか、目が金色とかそんなことではない。その男を目にした瞬間、魂と身体がその全てで警戒と警告を鳴り響かせている

一目見れば分かる。否が応でも認識させられる。目の前にいるのは「死」と「恐怖」が服を纏って立っているような、形容しがたい絶対的な存在だと

「空間隔離にも気付いてはいたようだが、やはり使っているわけではないのか」

紅蓮は大貴を品定めでもするように見る

「その内側のは何だ？」

「内側？何の事だ・・・！？」

いかにしてこの危機的状況を切り抜けるかを、次元がまるで違う圧倒的存在を前にして痺れる脳を叱咤して考えていた大貴は紅蓮の言葉に裏返りそうになる声を必死に抑える

逃げる事はできない。逃げられないと本能が叫んでいる。戦う事は出来ない。相手にもならないと本能が拒絶する。大貴はすでに自分の命が風前の灯であることを理解していた

(一層、土下座でもして命乞いするか・・・？)

心の中でそんな考えが浮かぶが自分自身で即座に否定する

(・・・逃がしてくれそうには無いか)

心の中で独白する大貴の心情など全く理解していないであろう紅蓮は顎に手を当てて何やら思索するそぶりを見せる

「・・・とぼけているわけではなさそうだな。と言うことは本人の知らない内に、と言うことか」

一人で呟いて納得したような表情を見せた紅蓮は大貴に鋭い視線を向ける

「とりあえず、お前の中のモノを貰おうか。器を壊せば出てくるだろ」

大貴には紅蓮の言葉の意味する所は全く理解できなかったが、それが自分を殺すという意味だと心のどこかで理解していた

「・・・っ!」

紅蓮の身体から噴き上がる殺気に大貴は身を怯ませ、倒れそうになる身体を何とか支える

殺気などというものは空想の産物に近いものだと思っていた大貴は、紅蓮の放つ質量と圧力を伴って襲い掛かってくるような本物の殺気に身も心も凍りつかせ、無意識に死を覚悟する

(生まれて初めて見た。・・・こんなただ立っているだけで人を殺せるような奴を)

ただ向き合っているだけで命が削られるように感じる。ただ見ているだけで全身が闇に落ちるような感覚が頭の中から指の先までを支配する。一呼吸ごとに死が体内に入り込み、浸食しているような絶対的な死の予兆

そんな中でも大貴が狂う事がなかったのは紅蓮の殺気がそれすらも許さないほどに圧倒的なものだったからだ

「ほう・・・その辺の半霊命ネクストならとつくに死んでいるはずなんだが・・・」

(ネ、ネクス・・・?)

感心したような紅蓮の言葉と共に大貴は目の前が真っ暗に塗りつぶされていくのが分かった。死を迎えるのか、意識を失うのかは分からないが、これが最期だという事は理解できる

紅蓮の手に真紅の光を内包した漆黒の炎が灯る

「さあ、お前の中の力を貰うぞ」

「・・・っ!!」

紅蓮の言葉に大貴が自らの死を覚悟した瞬間、天が砕けた。まるでガラス細工で作られた「何か」のように空に砕け散り、そこから何かが一直線に紅蓮に向かっていく

「!!」

紅蓮は反射的に後方へ飛び退く

「・・・!」

「何のつもりだ」

目の前に現れた光に大貴は目を見開く。1点の曇りも無い純白の翼が視界を遮り、一瞬何が起きたのか理解できない大貴の目の前で、紅蓮と大貴の間に降り立ったクロスは静かな殺意を紅蓮にむける

「天使か・・・!」

吐き捨てるように言った紅蓮は、その言葉とは裏腹にわずかに口元を歪めた

「大貴!どこにいるの!?!」

突然消えた双子の弟の姿を探して詩織は周囲を見回す

その表情は青ざめ、今にも倒れてしまいそうに見える

「彼ならここにはいないよ」

「!」

その言葉に振り向いた詩織はその目に一人の青年を見た

その見た目で歳は20歳前後。やや幼さを残した青年といった容姿だが、その幼さの下からのぞく大人の男の雰囲気には優しさと力強さが同居し、信用し、頼れる人だと感じさせる何かがある

漆黒の髪に金色の瞳。着物と洋服を足して割ったような服に、足元まで届く漆黒の羽織を纏っている

「あなたは・・・?」

「はじめまして。僕は神魔って言います」

「しん、まさん・・・?」

詩織の言葉に神魔は優しく微笑むことで応じる

「それよりも、さっきのどういう事ですか？」

その笑顔と雰囲気、一瞬気を取られてしまった詩織はすぐに頭を振って我を取り戻すと、目の前の青年「神魔」の言葉にわずかに気後れしながらもはつきりとその目を見て聞き返す

（この人、何？見た目は人間と同じだけど・・・何か、違う）

神魔が悪魔だと名乗らずとも、詩織は目の前にいるのが「ただの人間ではない」と心のどこかで感じ取っていた

決定的に纏っている雰囲気が違うのだ。見た目は少し奇妙な格好をした人間という程度だが、その存在ともいえるものが放つ気配とつかオーラのようなものは、まるで人間がくすんでしまうほどに気高く神々しいものに思えた

「・・・え？ああ。そうだね・・・君といた男の子は悪魔が作り出した別の空間に閉じ込められてるんだよ」

詩織をじつと見つめていた神魔は詩織の言葉に我に帰ると優しく囁くように言う

「悪魔・・・？空間・・・」

普段なら信じるはずも無いその言葉を、詩織は驚くほど自然に受け入れていた

それが何故なのか詩織自身にもはつきりとは分からない。しかし目の前にいるこの青年がそれを信じさせるに値する人ならざる者であると無意識に理解したからなのかもしれない

「神魔さんなら、大貴を助けられるんですか？」

「・・・」

詩織の言葉に神魔は答ええない。その沈黙に詩織はその質問を変える

「お願いです。私を大貴の所に連れて行ってください」

「君が行っても何も出来ないよ？」

「いいえ。傍に行つてあげる事が出来ます」

「！」

ゆりかこの世界に住む存在が仮に何兆人束になろうとも悪魔に勝つ事はできない。まして一人で行つても太陽に蟻が飛び込むような

ものでしかない。いた事にすら気付かれずに消滅するのがオチだ
しかし神魔の説明などを聞く事無く、神魔が「何も出来ない」と
言い終わるとはぼ同時に即答した詩織の言葉に神魔は小さく目を
見開く

「・・・なるほど」

(偶然にはできすぎてるな・・・)

詩織を見て神魔は小さく笑みを浮かべる

(もしかしたら、この子と一緒にいれば僕のこの心の靄をとる事が
できるかもしれない・・・！)

「わかった。君の名前は？」

「詩織。界道詩織です！」

詩織が名乗ると同時に神魔の身体から漆黒の力が吹き上がる。

「・・・！」

天を穿ち、世界が漆黒に塗り潰されたかと錯覚するほどの強大な
力。その力の持つ神々しいまでの恐怖に詩織は息を呑んだ

「分かった。詩織さん。君の弟さんを助けに行こう」

一方その頃、切り離された空間の中でクロスは背後に大貴を庇い
ながら、相對した紅蓮に静かな殺意を向ける

「お前ここがどこか分かっているな？」

「ゆりかごの世界だろ？」

「ならここがどういう世界かも分かっているはずだな」

「九世界非干渉世界だ」

「この世界の人間に関わる事は禁じられているはずだ。目的を言え」
「さすが、九世界の秩序の管理者を自負する天使様の一人だけはあ
るな」

(ゆりかごの世界？・・・九世界？・・・天、使？)

クロスと紅蓮の会話に耳を傾けながら、聞き慣れない言葉に大貴
は内心で首を傾げる

クロスの放つ荘厳な殺気が紅蓮の殺気を掻き消しているらしく、大貴は事態を把握するだけの冷静さを取り戻していた

「その男の中には何か封じられている。」

「！！！」

その言葉に大貴に知覚を向けたクロスは、紅蓮の言う通り大貴の中に何か封じられているのを感じ取り、大貴は紅蓮の言葉に衝撃を受ける

「だが、これは封じられているというより……」

大貴を知覚したクロスの言葉に紅蓮は微笑を浮かべる

大貴の中に封じられた「何か」は封じられているというよりも、大貴の存在と完全に融合している

「そいつに封じられているモノは『存在と異物を融合し、一つの存在として確立する』という九世界でも使える者は皆無といっていいほどの力によつて封じられている。」

誰が、何のために、何を封じたのか……興味は無いか？」

紅蓮の言葉にクロスはその視線をより一層鋭く尖らせる

大貴の中にあるモノは「異物」を「正常なモノの中に異物として入れる「封印」ではなく、その「異物を含めたそれぞれのモノ」が一つの「正常な存在」として確立されている状態。即ち、切り離すことも取り出すことも出来ない封印より上の「同化」とも言うべき処理が施されている事になる

「……だからこいつを殺すのか？」

「そうだ」

「！！！」

クロスの言葉に大貴は目を見開く

「その方法で隠されたモノは器を破壊しない限り取り出せない」

「器を殺すと同時に消滅する事もあるはずだ」

存在が融合しているという事は、それそのものが命となっているようなもの。器となっている者の命が尽きれば、その命の火と共に消えてしまう事もある。

「その時はその時だ」

紅蓮は冷笑と共に言い放つとその手に漆黒の剣を召喚する。

装飾の一切無い、抜き身の刀を思わせるその刀の刀身の横には金色の模様と、それに飾られた三つの真紅の宝玉が煌めいている。

紅蓮が武器を出したのと同時に、クロスも白銀の刀身を持った自分の身の丈ほどの大剣を召喚し、紅蓮に向けて構える

「なら俺はお前の目的を阻むだけだ」

クロスの身体から神聖な白い光の力が吹き上がる

「来い！この仕事は戦えないから退屈してたんだ！！せいぜい楽しませてくれよ！！！」

それに答えるように、紅蓮の身体から歡喜に彩られた漆黒の力が吹きあがる

「！！・・・っ」

二人が放つ白と黒の対極の力が二人の間でせめぎあう

その圧力に全身が萎縮し、言葉を放つ事も出来ずにその様子を見守っている大貴は自身の身体の、否、魂の内側ともいえる部分に熱のようなものが宿るのを感じていた

(・・・何だ！？この感じ・・・)

「いくぞ！」

紅蓮の言葉に二人が今まさに戦いの火蓋を切ろうとした瞬間、二人の横の空間が漆黒の力によって破壊される

「！？？」

「なっ！？？」

空間を砕くのではなく抉り取るように破壊し、結界の中に入り込んできた人物に紅蓮とクロスは同時に目を見開く

「・・・神魔」

「一触即発だね」

二人を交互に見た神魔は、二人の放つ力の圧力に動じた様子も無く、足元まで届く漆黒の羽織を翻らせて悠然と静かに堂々と空間の中へ足を踏み入れる

神魔が侵入した次の瞬間には、破壊された空間の入り口は一瞬にして修復され、破壊された事が嘘のように元通りの姿を取り戻している

「お前・・・」

「何故ここに来た」という問いがその口からは紡がれる事はなかった。その必要がなくなっただけだ

神魔が空間に足を踏み入れると同時にその「答え」が神魔の背後から現れる

「大貴！」

「姉貴・・・！」

神魔の背後から現れた詩織は、純白の翼を広げた天使の背後で膝をついている大貴の姿を見つけて、わき目も振らずに駆け寄ろうとする

「・・・っ！」

しかしそれをしようと詩織が神魔の背後から数歩前へ出た瞬間、意識と心臓の鼓動を奪うほどの圧倒的な「何か」にその場に崩れ落ちそうになる

意識が何か押し潰されるような感覚。自身の感覚が失われ、声を上げる事すら許さない圧倒的な威圧が詩織の心臓の鼓動すら許さない「姉貴!？」

「俺達の殺気に当てられたただだ。神魔」

突然系の切れたマリオネットのようにその場に倒れそうになる姉に反射的に声を上げる大貴を、クロスが静かな言葉と共に制する

大貴はその内側に封じられている「何か」の影響なのか紅蓮やクロスの放つ殺気や存在の威圧にもかろうじて耐えているが、本来このゆりかごの世界の人間がその中に飛び込めば、それだけで命を落とす事も少なくない

「分かってるよ」

クロスの言葉に静かに頷いた神魔は、そっと手を伸ばして詩織の身体が倒れる前に支え、同時に自身を中心としたドーム状の幕を形

成する

「・・・っ」

神魔の作り出したドームに包まれると、詩織の心身を支配していた圧力が軽減し、詩織はいつの間にか止まっていた心臓の鼓動と呼吸を取り戻してむせ返る

「ごほ、ごほっ」

胸に手を当てて呼吸を整える詩織から手を離れた神魔は、詩織を庇うように前に移動すると、金色の目で肩越しに詩織を見る

「この『結界』の中から出ないようにしてね、外に出たら死んじやうから」

「・・・はい」

神魔の言葉に嘘がない事を身をもって理解した詩織は、自身の手を握りしめて小さく頷く

先程の一瞬で自分は確かに一度死んだ。厳密に言えば一時的な心臓と呼吸の停止。あのまま神魔が手を差し伸べてくれなければ確実に死んでいたはずだ

「なら、大貴のところに連れて行ってください」

「うん」

意外にも詩織の言葉をすんなりと肯定した神魔は、そのままゆつくりと歩き出す。神魔の動きに合わせて二人の周囲を囲んでいる結界も同時に移動する

「大貴」

「・・・姉貴」

クロスの近くに移動した神魔は、その結界を広げて大貴もその内側に包み込む

詩織同様に紅蓮とクロスの威圧から開放された大貴は、その耐性の高さもあつてすぐさま平静を取り戻すと、ゆつくりと立ち上がった心配そうに見守る双子の姉に視線で「大丈夫」と答える

「何のつもりだ？」

大貴を守るような体勢で立った神魔に、紅蓮が殺気を込めた攻撃

的な視線を向ける

その視線は「邪魔するなと言う警告を忘れたのか」と強くほめかし、同時に「邪魔をするなら命は無い」とも雄弁に語っている。「個人的に興味が湧いただけだよ」

紅蓮の言葉に全く動じる様子も無く、神魔は優しく穏やかな口調で答えて微笑みかける

「そうか。なら仕方ない。二人ともこの場で消えてもらうしかないな」

神魔の言葉を敵対と解釈した紅蓮から表情が消える

それは怒気はもちろん、あらゆる感情の無い純粹な「殺意」に彩られた顔。

人間には決して行う事が出来ない、目の前の敵対者を滅ぼしつくす無感情の殺意をもった悪魔の姿

「ここまで連れてきたんだ。その二人はお前がしっかり守れよ！」
「分かってるよ」

背中越しにかけられたクロスの言葉に神魔は小さく微笑んで答える
「できるだけ離れて戦ってね。光力は相性悪いから」

「あいつに言え」
神魔の言葉に、振り返る事無く言い放ったクロスの身体から神聖な光の力が吹き上がり、その身の丈ほどの刀身を持った白銀の大剣が純白の光を放つ

「来い」
漆黒の力を身体から放つ紅蓮の言葉に、クロスはその純白の翼を広げて紅蓮に向かって宙を翔ける

「おおおおおっ!!!」
一瞬にして距離を詰めた二人は、互いの力を込めた武器を真正面からぶつけ合う。

クロスの純白の光と、紅蓮の漆黒の間が真正面からぶつかり、相手への純粹な殺意に彩られた二つの力がせめぎあって炸裂して、隔離されたその空間を白と黒に塗り分けた

条件

白と黒が世界を塗り潰す。

世界が砕けたのではないかと思われるほどの衝撃に、大貴と詩織は反射的に目を閉じる

「・・・っ！」

その光景を微動だにしないままで見ている神魔の背後から見ると、白と黒に塗り潰された世界に二人は目を細める

二つの力は神魔が展開する魔力の結界に阻まれ、その衝撃は微塵も二人の身体に届く事は無い。しかしその力の持つ圧倒的な圧力が二人の魂を押し潰す

「あなた達は一体何なんですか・・・？」

今まさにクロスと紅蓮が戦いを繰り広げている最中、何事も無いかのように佇んでいる神魔の背に、詩織はクロスと紅蓮の力の圧力に震えながら搾り出すような声で問いかける

「僕とあの紅蓮は悪魔、クロスは天使だよ」

振り向く事無く、背中を向けたままで答えた神魔の言葉に二人は息を呑む

「悪魔・・・」

「天、使」

その言葉の背後で、ぶつけ合った力の反動で弾かれたクロスが空中で翼を一度だけ羽ばたかせて空中に留まる

「ちっ・・・」

その視線の先には片手で剣を持った紅蓮がクロスを見上げて小さく笑みを浮かべている

一見圧倒的力でクロスを弾いたかのように見えるが、クロスとの激突で最初に立っていた位置よりわずかに後方に下がっているのは大貴と詩織を除いた全員の目には明らかだ

「・・・っ」

「心配しなくてもいいよ。クロスの光力と紅蓮の魔力の差はそれほど違わない。二人の実力はほとんど拮抗してるから」

背後で口元を覆い言葉を失う詩織と、息を呑んで戦いの行方を見守っている大貴の気配に危機感を感じさせない神魔の穏やかな口調に、二人は神魔の背に視線を移す

「光力、魔力・・・？」

「九世界の存在の全てが持っている力・・・『存在の力』とでもいうべき力だよ。天使の力は『光力』、悪魔の力は『魔力』。

この力は強いほど能力が高いから、必然的にこの力の大きな方が強いって事になる。二人の力は紅蓮の方が若干強いけど、決して運や工夫で覆せないほどには開いていないから大丈夫だよ」

神魔の言葉の背後でクロスは光の流星となり、空中をまるで慣性の法則や重力など最初から存在しないかのように正に縦横無尽に駆け巡り、紅蓮もその動きに合わせて漆黒の流星となって空を駆ける。空中を駆け巡る黒と白の流星は空中で何度も激突し、そのたびに白と黒の力がその軌跡にそってまるで満開の花のように顕現する

「と、飛んでる・・・」

大貴と違つて九世界の存在が空中に浮いているところを初めて見る詩織は、その光景に無意識に言葉をこぼす

「・・・まあ、天使と悪魔なら空くらい飛ぶだろ」

翼のある天使のクロスだけではなく、翼の無い紅蓮までもが自在に空を飛び回る様に声にならない声をこぼす詩織に大貴は静かに答える

「今、どうなってるの？大貴、見える？」

「・・・いや、白と黒の線と時々起きる爆発みたいなのしか・・・」

空中を自在に駆けるクロスと紅蓮の姿は、詩織の目にも大貴の目に映らない。二人の目には二人が通つた白と黒の軌跡と、その激突で生まれる飛び散つた力の残滓たる花がかるうじて見えるくらいだ

「今のところはほぼ互角の戦いだよ・・・紅蓮の方が若干押してる

けど」

詩織と大貴の会話に、目の前の戦いから目を逸らす事無く神魔が背中で答える

「・・・勝てないんですか？」

「4、6くらいでクロスが負けると思っけど・・・今は分からないかな」

不安そうに問いかける詩織に口調を変える事無く神魔が答える

その口調には何の感情もこもっておらず、どちらが勝っても興味がないかのようにも感じられる

「なら、二人で戦ったほうがいいんじゃないですか？」

クロスの分が悪いという話を聞いた詩織は傍観を決め込んでいる神魔に恐る恐る問いかける

「・・・天使と悪魔は仲悪いから」

九世界と接触のないゆりかこの世界の存在にとつて、生まれて初めて見るであろう、一目で自分たちを凌ぐ存在であると理解させる九世界の存在に臆しながらも、話かけてくる詩織の胆力に内心で感心しながら神魔は優しく語り掛けるように言う

「そんな・・・っ」

(まあ、そうだろうな・・・)

神魔の言葉に内心で納得している大貴の隣にいる詩織は、震えそうになる身体と声を懸命に押さえ込みながら唇を強く引き結ぶ

大貴や詩織のような九世界とは無縁の人間ですら「悪魔と天使は敵対している」という概念は常識に近い。むしろ仲のいい天使と悪魔のほうが思い浮かばないほどだ

それは九世界においても間違った認識では無いらしい

「仲悪いからって助けられないのはよくないと思います」

「・・・そういう見方もあるね」

詩織の言葉に気分を害した様子も無く神魔は小さく呟く

「でも僕がここを離れるとこの結界を維持できないから二人、特に詩織さんの方は一瞬で死んじゃうよ？」

「……っ」

神魔の言葉に詩織は息を呑む。この結界から出たら死ぬというのは詩織も身を持って体験しており、その言葉が嘘でない事は十分分かっている。

「ここから離れたらこの結界を維持できないんですか？」

町の風景を残したまま人のいない空間を作ったり、宙を自在に飛び回っている姿から天使や悪魔にはできない事はないと思っていたのだが、そういうわけでは無いらしい

「出来ないっていうわけじゃないけど、この結界は僕の魔力を使って維持しているからね。片手間で助けに入っても足手まといになるだけだから」

最初に紅蓮とクロスの力の威圧だけで一度死にかけた実績を持つ詩織には、神魔の言葉の重みがよく理解できていた

「けど、何も出来ないってわけじゃないんだろ？」

「……どうしてそう思うの？」

詩織に代わって沈黙を破った大貴の言葉に神魔は背中越しに感じる

「お前は『ここを離れると結界を維持できない』って言ったよな？」

裏返せば『離れなければ維持できる』って意味だ。

つまり飛び道具みたいなものを使えば結界を維持したまま戦えるっていう事だろ？」

「そうなんですか？」

大貴の言葉に目を丸くする詩織の言葉に神魔は一瞬沈黙する

「……結構目ざといんだね」

「褒め言葉として受け取っておく」

神魔の言葉に大貴は静かに応じる

「いや、掛け値なしで褒めてるんだよ。ゆりかごの世界の人にとっては存在が空想のそれに近い僕達を見て、僕の言葉を冷静に理解する事ができているんだから。普通ならパニックになって冷静な判断なんてできないと思うよ」

(……！)

神魔の言葉に大貴は内心で息を呑む

確かに普通なら現在の状況を理解できずにパニックになって「何故？」と混乱していてもおかしくはない。しかし時が経つに従って、徐々に冷静な思考と落ち着きを取り戻している自分に気付かされる。「それは君の中に封じられているモノの所為なのかな？それとも・・・」

神魔の言葉に大貴は息を呑む

その言葉の続きは言われなくても分かる。「それともそれが君の本性なのかな？」だ。言い回しの違いこそあれど、そういう意味の言葉を神魔が言おうとしている事は大貴も詩織も、何も言われずに感じ取っていた

「！」

「ぐあっ」

大貴と詩織が言葉を失う中で神魔が一瞬小さく反応したかと思うとクロスの声が詩織と大貴二人の耳朵を叩く

その言葉に視線を向けると、紅蓮との激突で吹き飛ばされたクロスが翼を広げて体勢を整えるところだった

「どうした？もう終わりじゃないだろうな？」

紅蓮は弾き飛ばしたクロスに追撃するような様子を見せず、体勢を立て直すクロスを余裕すら感じられる表情で見る

「・・・ちっ」

自身の左腕から上がる真紅の炎を見てクロスは目を細める。

「身体が燃えてる？」

クロスの左腕が上がった真紅の炎とも煙とも見えるそれを見て詩織は声を上げる

ちらちらと燃え、ゆらゆらと揺れる真紅の炎はそこを覆い隠すように触れたクロスの手が離れるとまるでそんなものなど最初から無かったかのように跡形も無く消える

「・・・今のは、一体？」

「あれは血だよ。」

「血！？じゃあ、クロスさん危ないんじゃない？」

不安に顔を彩らせた詩織の言葉に神魔は動揺など微塵も見せずに
咳く

「そうだね、このまま何もなければならクロスが殺されちゃうね」

「そんな・・・お願いです。クロスさんを助けてあげてください」

「必死になるほどクロスと親しいわけじゃないのに何でそんなに一
所懸命なの？」

詩織の言葉に神魔が背中を向けたままで問いかける

「確かに、クロスさんとは今さつき会ったばかりですけど・・・私
は親しい大切な人も、会った事のない他人でも、死なずに済ませら
れるなら死なないで欲しいって思ってます！」

「俺は、クロスに命を助けてもらったからな」

詩織と大貴の言葉に肩越しに2人に視線を向けた神魔は、小さく
微笑むと紅蓮とクロスの戦いに目を戻す

その視線の先ではクロスの純白の光力と紅蓮の漆黒の魔力が絶え
間なく激突している

「クロスを助けたい？」

「え？」

不意に背中越しにかけられた神魔の言葉に詩織は一瞬言葉に詰ま
るが、すぐに頷く

「はい」

「なら、条件があるんだけど」

「条件・・・？」

神魔の言葉に詩織と大貴は息を呑む

「おおおおおっ」

「ハハハハハッ」

全身を光の流星として紅蓮に向かっていくクロスを、身体から漆
黒の魔力を炎のように燃え上がらせて紅蓮は高笑いと共に迎え撃つ
二人の実力は神魔の言った通り、決して大きく離れているわけで

はない

しかし2人の間に確かに存在する実力差がクロスを紅蓮が圧倒する
という結果を作り出している

「僕にどこか住む場所を提供してくれないかな」

「住む、場所？」

神魔の言葉に詩織と大貴は言葉を失う

「しばらく、この世界に留まりたくなくてね。そんなに立派なところ
じゃなくてもいいんだよ、例えば君達の家を庭先とか物置とかで
もいいから」

「・・・契約つてわけか？」

神魔の言葉に大貴は平静を装いながら言い放つ

大貴にとつて悪魔というモノは何か願いを叶えてくれる代わりに
相手に魂を要求するという印象が強く、神魔のお願いをそういうも
のだと受け取る

「契約？何言ってるの？むしろ人としての常識だよ」

「？」

素っ頓狂な様子で言った神魔の言葉に、詩織と大貴は怪訝そうな
表情を浮かべる

「正直なところ、僕はクロスの生き死になんて興味無いよ。でも
それを助けたいと言ったのは君たち、正確には詩織さんの方。なら
そのための対価は必要不可欠じゃない？」

「対価って！人の命がかかってるんですよ？」

神魔の言葉に詩織はわずかな憤りの色を帯びた声を上げる

「・・・だから？」

「だ、だから対価とかそんな事言っている場合じゃないんじゃない
ですか！？」

詩織のその言葉に神魔は一瞬の間を置いてゆっくりと首だけで肩
越しに振り向く

「調子に乗るなよ」

「！！！」

不意に向けられた神魔の冷徹な視線に、詩織と大貴は身体を強張らせて言葉を失う

神魔の白目だった部分が漆黒に染まり、まるで無明の闇に浮かぶ満月のような金色の目が二人に圧倒的な怒気を孕んで向けられる

神魔が放ったのは殺気ではなく怒気。それも大人が子供をたしなめるような類のそれ。しかしそれは人間である詩織と大貴を震え上がらせるには十分だった

「力ある者が力ない者を助けるって事は『弱者は強者に助けられて当然だ』って意味じゃない」

「！」

「強者には『才能』とか『どんな種族に生まれた』とか一定の優位性^{テイジ}があるかもしれない

けど自分の持つていない誰かの力を借りたいなら、それに見合う対価を支払うのは当然の事でしょう？『弱いから無償で助けられて当然だ』なんて自分達に都合よく解釈するな」

誰かの持つ何かの力はその人物が持つて生まれた才能と後天的な努力と犠牲によって手に入れたもの。

その力を持つていない者がその力を借りたいと思うのなら、その才能と努力と犠牲に敬意を払うのは当然の事

「弱さを傘にきて誰かの力を、まして命を賭けさせる事をさも当然だ。みたいに言わないでよ。強者^{ほくたち}の命も、心も、力も、弱者^{きみ}たちのモノじゃないんだから」

その言葉に詩織も大貴も返す言葉を失う

「君達がやってるのは自分たちが貧しいからって、金持ちの財産を当然の事のように手に入れようとする浅ましい行為だよ」

「・・・っ」

その言葉に詩織は小さく唇を噛みしめて言葉を失う。神魔の言葉に反論できずに詩織はうつむいて手を強く握り締める

その様子を見た神魔は今までの怒気をはらんだ言葉から一転優しい声で今までの様子が嘘だったかのような満面の笑みを浮かべる

「だから、僕に君達の願いを叶えてもいいって思わせて？」

「……っ」

優しく微笑む神魔にしばしの沈黙の後、詩織は握っていた拳を解いて胸に手を当てて顔を上げる

「……分かりました。全力を尽くします」

「姉貴!？」

詩織の言葉に大貴は小さく溜息をつく

「……まあ、いいか」

やや曖昧な詩織の言葉にしばらく考えて神魔は小さく呟く

「僕としても詩織さん達を守るにはここでクロスに力を貸したほうが得だしね」

「……え？」

神魔の言葉に詩織は言葉を呑み込み、大貴は神魔の背を見つめる
神魔にとつては寝泊りの場所など正直どこでもいい。そもそもそんな事はどうだっていいのだから

(……良くも悪くもゆりかごの住人か)

「じゃ、契約成立って事で」

そう言った神魔の手に漆黒の力が収束される。手の平に球体となった魔力の結晶を超光速で戦闘する紅蓮とクロスに向けて開放する。神魔の手から紅蓮に向けて放たれた神魔の身の丈の2倍ほどの直径を持つ漆黒の魔力の破壊波動が空間を震わせる

「!っ、す、すご……っ」

「手からこんなもんも撃てるのかよ……!」

魔力を放つ砲撃に詩織と大貴は絶句する

確かにこれならば神魔が言っていたように「その場から動く事なく」攻撃と戦闘を行う事が出来る

「!ちいっ」

神魔からの援護射撃に瞬時に反応した紅蓮は、魔力を帯びた剣で魔力の波動を切り裂いて拡散させ、消滅させる

神魔の魔力をかき消した衝撃が空間を震わせ、神魔が張り巡らせ

た結界を震わせる

「神魔……」

「……どういっつもりだ！？天使の味方をするのか！？」

「！……」

神魔が魔力砲でクロスを援護した事に紅蓮が声を荒げ、援護されたクロス自身も信じられないといった様子で神魔に視線を送る

「僕は僕のためにしか戦わないよ」

紅蓮の言葉に神魔は不敵な笑みを浮かべるとその手の中に魔力を収束し、漆黒の球体を生み出す

「お前も、そいつの中のモノを狙ってるのか！？」

「僕はそんなものに興味ないよ。ただ詩織さんに泣かれるのが嫌なだけだよ」

「……え？」

神魔の言葉に詩織が言葉を詰まらせる

「さて、どうする？不本意だけど、これから僕はクロスに力を貸すよ？」

「……俺だってお前に助けられるのは不本意だ」

「全くだね」

毒づいて紅蓮に向き直ったクロスに、神魔は小さく苦笑してみせる

「……少し分が悪いな」

クロスと神魔を交互に見て紅蓮は小さく呟く

クロス一人なら勝算は十分にある。10回戦えば8回までは勝てるだろう。油断するか、よほど偶然が重ならない限り負けることは無い

しかしそこに神魔が加われればその勝算はかなり悪くなる。結界を維持する分の魔力と制御、そしてその場から動けなくとも魔力砲による援護はかなり厄介だ

「今日の所は退くしかねえか」

「させるか！！」

紅蓮の言葉に瞬時に反応し、クロスは翼を広げる。

そこに光力が収束し、両の翼に無数の光玉を作り出したかと思うと、それが無数の光の砲撃となつて不規則な軌道を描きながら一斉に紅蓮に向かつて奔る

「焦るなよ。近いうちにまた戦う事になる。そいつがいる限りな」

紅蓮の視線が一瞬大貴に向けられ、クロスが無数の光力砲に手に向けた紅蓮の手の平から魔力砲が広域に拡散するように放たれる

クロスの光力砲と紅蓮の魔力砲が真正面からぶつかり合い、一瞬の拮抗の後、互いに相殺して消滅し、無数の白と黒の波動を華のように空中に咲かせる

「・・・ちっ」

そしてその光力と魔力の残滓が消えた頃には紅蓮の姿も、紅蓮が作り出していたこの異空間も消え、そこには今までの事が嘘だったかのように何ら変わらない日常の光景が広がっていた

ゆりかごの世界

首都を兼ねる都心から電車で一時間足らずにある街。都心で働く人々のベッドタウンとして人気のこの街の一角に界道家はあった。元々ここにあった古民家を改築した家は予算と比べれば広く、かなりいい買い物といえる。

「ただいま」

その扉を開いて一見どこにでもいる中年の男性がその家に入る。彼の名は「界道かいどう一義かずよし」。この界道家の大黒柱であり、詩織と大貴の実父だ。

「お帰りなさい」

一義が実家に帰宅すると、奥から長い茶色がかつた髪を頭の後ろで一つに束ねた女性が顔を出す。

彼女の名は「界道かいどう薫かおる」。一義の妻で、詩織と大貴の母親。歳はたった一つしか違わないが、その外見は時折詩織と姉妹に間違われるほどに若い。

「どうしたんだ？」

正直頭は上がらないのだが、妻として出迎え、尽くしてくれる自慢の女房が駆け寄ってくるのを見るのが毎日の楽しみである。一義は駆け寄ってきた妻を見て違和感を覚える。

普段は落ち着き、笑みを携えて出迎えてくれる妻の表情が青ざめている。

「実は・・・詩織と大貴がお客さんを連れてきたんだけど・・・」
「お客？」

訪ねた問いに言い淀む妻の様子にただならぬものを感じた一義は、はやる気持ちを抑えてその「客」と子供達が待っているというリビングへ向かう。

突然の客、それも詩織と大貴が連れてきた人物だという

そしてリビングの扉を開けた一義の目に映ったのは、テーブルを挟んで双子の子供と向かい合って座る二人の人物。

一人は漆黒のコートと羽織を合わせたような衣装に身を包んだ黒髪、金眼の青年。そしてその隣にいたは金色の髪と目に白を基調とした服を纏った純白の翼を持った人物だった

「・・・つ、まさか!？」

一義の目に最初に飛び込んだのは神魔では無くクロス。この世界にはいない背中に翼を持った存在に一義はまるで心臓を握り潰されたかのような感覚と共に、身体が凍りつくような感覚を覚える。

「・・・」

扉を開いて真っ先に目に付いた純白の翼を青ざめた表情で見ている一義に、神魔とクロスは静かに視線を向ける

(・・・この人も、か・・・)

その様子を見て最初に詩織と大貴の母と会った時の事を思い出す初めて会った詩織と大貴の母である薫も、神魔、特にクロスを見た時に表情を引きつらせた

九世界の存在と面識の無いはずのゆりかこの人間が自分たちを見たとき、好奇の目で見る事や見た事もないものに驚愕するのなら理解できる

しかしこの二人は明らかに違っていた。まるで会いたくないものに出会ってしまったかのような表情を浮かべている

「はじめまして」

しかし神魔もクロスもそれについては言及せずに丁寧に挨拶と自己紹介をする

「・・・あ、ああ、はじめまして」

隣に寄り添う妻の体温に我を取り戻した一義は、可能な限り平静を装って答えるとテーブルに向かい合って座る二人の客人と双子の子供を同時に見る事ができる位置に置かれた椅子に腰掛ける

「そ、それで一体どういう話でしょうか？」

言葉をわずかに詰まらせ、動揺を隠しきれない様子で言う一義に詩織が代表して説明をはじめめる

「実は……」

一通り話を聞き終えると一義は大きく息を吐き出す

それは初めて存在と向き合った天使、悪魔という九世界の存在にではなく安堵の溜息であるように神魔とクロスには聞こえる

「なるほど……それで家に居候したいという事ですか」

「本当は僕一人の予定だったんですけど、それを知った彼が自分もと言つて聞かなくて」

神魔の金色の流し目を受けたクロスは不機嫌そうな表情を浮かべる
「悪魔を一人、住まわせる事なんて出来わけないだろ」

「やれやれ、僕は危害を加える気は無いって言つてるでしょ？むしる守つてあげるくらいの気持ちでいるんだけど？」

「……どういふ風の吹き回しだ？随分とこだわるじゃないか」

「まあ、個人的な事情で」

クロスの言葉に神魔はわずかに目を伏せて答える

その姿には哀愁とも取れる複雑な感情が見え隠れしていた

「……事情を話して国とかに護つて貰うというのは？」

「無理ですね」

一義の言葉を言い終わるが早いか神魔が即答で切り捨て、それにクロスも同意を見せる

「仮にその話を信じたとしても、ゆりかごの世界の力ではどんな事をして俺たちに傷一つつけられない」

「……あの、さっきから言っているそのゆりかごの世界というのは何ですか？」

薫が恐る恐るといった様子で手を挙げるとその言葉にクロスが丁寧な言葉で答える

「ゆりかごの世界というのはこの『世界』の名称です……あなた達

の言葉で言えば『宇宙』と言えます分かりますか？」

「あ、なるほど」

薫が納得するのを見て一義は話を続ける

「話を戻しますが、大貴の中にあるものを取り出す手段は無い。そして大貴を守るのはあなた方だけということですね」

「そうなります」

一義の言葉にクロスが頷く

「それにゆりかごの世界に生きるあなた方と、九世界最強の種族の僕たちとではそもそも存在としての格が違いすぎるから、今みたいな平常時ならまだしも戦闘時には立っているどころか生きて向かい合う事すら出来ませんよ？」

神魔の補足に大貴と詩織が息を飲む

その言葉が嘘ではないのはその圧倒的殺気で命を落としかけた二人は身に染みて理解している事だ

「・・・二人はどうなんだ？」

視線を送られた大貴と詩織は父からの視線を受け止めるとゆっくりと口を開く

「私は、大貴を死なせたくない」

「俺は自分の中に何があるのか、それに向き合うにも二人の力を借りたいと思ってる。それに助けてもらった恩もある」

「・・・そうか」

二人の言葉に目を伏せた和義は大きく溜息をついた

一義もかけがえの無い子供をみすみす死なせるような事はしたくない。そして何も出来ない自分たちが取るべき道はどんなに考えても一つしかなかった

「分かりました。是非、二人を守ってやってください」

一義の言葉に薫は反論しなかった

それは薫自身も一義の下した判断が現状自分たちが取りうる最善の手段であり、唯一の手段だと理解しているからだった

「こちらこそ、お世話になります」

一義の言葉に神魔とクロスは深々と頭を下げた

「・・・では、部屋が使っていない部屋が二つに、屋根裏部屋が一つありますから、どこでも好きなところを使ってください」

「ありがとうございます」

一義の言葉に神魔とクロスの二人は深々と礼を述べる

「・・・何か意外です」

「？」

その様子を見て思わず呟いた薫の言葉に神魔とクロスの二人は視線を向ける

「あ、いえ・・・神魔さんは悪魔なのにすごく礼儀がなっているってどうか、姿形も人間とほとんど変わらないし」

薫の言葉に大貴と詩織も内心で同意を示す。しかし二人は戦闘中に神魔に悪魔とは思えない道徳的な話を説かれているので薫ほどの違和感はない

「それは逆ですね」

「逆？」

「悪魔が人間に似ているのではなくて人間が悪魔ほくたちに似ているんです。九世界の歴史的に見れば僕達悪魔の方が人間よりも先に存在していたので」

九世界の歴史はゆりかうしろこの世界と比べて遥かに歴史が長い。つまり悪魔の方が存在として人類よりも遙か以前から存在しているのだから、後から現れた人間の方が似ているという解釈の方が正しい
「・・・そう言われればそうですね」

「で、よければ九世界というものについて教えてくれないか？もちろん君たちがこの世界に干渉できない事は十分承知だが、可能な限りで構わないんだ」

納得したように呟く薫の言葉に今まで無言を貫いていた一義は、身体を半ば乗り出すようにして鼻息を荒くする

その目は少年のようにきらきらと輝き、未知のものに対する好奇

心に満ち溢れている

「ああ・・始まつちやつた」

「つつたく」

「父さん神話系しんわけいの話、大好きだもんね」

頭を押さえる薫に続いて二人の子供の溜息が聞こえる

「まあ、簡単な話くらいならいいですよ」

好奇心のままに目を輝かせる一義に、クロスはこれからお世話になる恩義を感じているのか、それとも熱意に負けたのかゆっくりと口を開く

「この世界には空間を隔てて無数の世界が存在し、その中で最強の力を持つ八つの種族・・『天使』、『悪魔』、『天上人てんじょうびと』、『鬼』、『聖人せいじん』、『死神』、『精霊』、『妖怪』と九世界で最も異端な存在である『人間』が支配する九つの世界が中心となり、すべての世界を統括しています。

この九つの種族が支配する九つの世界『天界』『魔界』『天上界』『地獄界』『聖人界』『冥界』『妖精界』『妖界』『人間界』を『九世界』と呼び、同時にこの世界にある『世界』全ての名称としてもそれを使います」

「なるほど。で、この宇宙・・ゆりかごの世界は人間界というわけだね」

「違うな」

鼻息荒く得意気に語る一義の言葉を、クロスは何のためらいも無く即座に否定する

「あれ？」

その様子に驚くのは一義だけではなく界道家の全員だった

結局九世界の話が気になる彼らは一義とクロスの会話に耳を傾けている

「厳密に言えば、ゆりかごの世界は人間界の管轄ではありませんが人間界ではありません。言うなれば人間界と接する別の空間といった

ところでですね

もちろん『接する』というのはあくまでも比喻表現で、実際には空間を隔てて存在し、そこを通らなければ干渉する事も出来ませんが」

「なるほど。しかし何故ゆりかごの世界にあなたたちは干渉できず、人間界はこの宇宙と関係を持たないんだい？」

一義は身を乗り出すようにしてクロスに迫る

このゆりかごの世界が「九世界非干渉世界」で九世界の存在が干渉してはならないという事はすでに聞いている

その「九世界の存在」には当然ゆりかごの管理世界である「人間界」も含まれるのだが、何故このゆりかごの世界がそうなるのかという所はその場にいる全員の興味があるところだった

「・・・それは・・・」

一義の問いに言葉を詰まらせるクロスと目が合った神魔は小さく溜息をついてその話を引き継ぐ

「ゆりかごの世界は九世界ではとても異端な世界なんですよ」

「異端？」

「ええ。九世界の世界のほとんどは世界そのものに大地が広がり、空が世界を満たしています。けどこの世界は大地と空が『星』という限られた空間に限定されて存在し、その間を空間が埋めています」

「それってつまり他の世界には『宇宙』がないってことですか？」

「そうです」

詩織の言葉に神魔は小さく頷く

この場合の「宇宙」はつまり大気圏の外に広がる宇宙空間の事を示している

「意外・・・」

「九世界との交流がないあなた達から見ればそう見えるかもしれませんが、僕達から見ればこの世界の形の方が不思議なんです」

啞然として呟く界道家の面々に神魔は静かに言う

「話を戻しますが、その世界の形と同様に、九世界の常識ではゆり

かこの世界の人類・・・つまりあなた達を『人間』という種族とは認めないんです」

「!!!??」

その言葉にクロスと神魔を除いた全員が息を呑む

「九世界において『人間』とは『光魔神』^{こうましん}という神から生まれた存在という定義があります。ゆりかごの中の存在はその神から生まれていないから正確には人間としては扱わないんですよ」

「・・・!」

その言葉に界道家全員が言葉を呑む

かつてこの星では「人は神が生み出した」と信じられていた。しかし科学の発展と研究によって「人は猿から進化した生き物」という事が証明され、その結果「人は神が生み出した」という定説は否定される事になった

しかし、もしも「自分達が人間である」という根本的な定義の方が間違っていたとしたら・・・

「・・・だから、人間はゆりかごの世界に干渉しないんですか・・・？」

「その辺りは人間界の事情ですから」

強張った口調で恐る恐る呟いた一義の口調を神魔は落ち着いた声で否定する

「？」

「はるか昔、人間界はゆりかごの世界と交流を持つとしたらしいですよ？でも何故かそれをやめてゆりかごを九世界非干渉地域にしたんです。」

ちなみに、ゆりかごの世界に中途半端にある悪魔とかに関する知識はそのときの名残らしいですよ」

神魔の言葉に一義は感嘆の息を漏らす

かつて人間界はゆりかごの世界との交流を持つとした。しかしそれはなぜか中断されてしまう。その時ゆりかごの存在に与えられ

た九世界の知識

そしてそれが長い年月を経て独自の解釈を加えられたり、誤って伝わったものが現在のゆりかごの世界に残り、多種多様に一人歩きをはじめたのだ

「だから悪魔は私達のイメージとは違うんですね」

納得したように頷く詩織は神魔を見る

悪魔という言葉から連想されるその姿と神魔の姿は大きくかけ離れている。紅蓮には角があったが、神魔は目が金色という以外は人間と比べてもそれほどの違いを感じない

「まあ、どんな印象かはきかないでおきます」

神魔は詩織の言葉に苦笑を浮かべる

「なら・・・」

「はいはい、そこまで」

好奇心に目を輝かせる子供のようさらさら話に話を聞こうとする一義をさすかの貫禄で薫が制する

「ご飯の用意をするから話はその後だね。神魔君とクロス君も、あんまりおもてなし出来ないけど先に部屋を決めてくれるかしら？」

「ありがとうございます」

薫の言葉に一旦解散する事になり、神魔とクロスは詩織と大貴に連れられて空いている部屋を借り受ける

神魔は屋根裏部屋、クロスは空いている一部屋を借り受ける事になった

「・・・神魔」

部屋を借り受けた神魔の元にクロスがゆっくりと歩み寄ってくる

「悪魔のお前が人間を守ろうとするなんてどういうつもりだ？」

「言ったでしょ？個人的な事情だって」

クロスの言葉に神魔は静かに答える

その声からは感情を読み取る事はできないがそれ以上の追求を拒んでいる。これ以上粘っても結果は変わらないと分かっているクロスは小さく息を吐いて話題を変える

「・・・まあいい。それより気付いているだろ？」

「あの二人の事？」

クロスの言葉に神魔が小さく答える。クロスと同じ事を感じていたであろう神魔は、クロスの言葉を正確に理解している

神魔とクロスが話している「二人」は詩織と大貴の両親「一義」と「薫」の事だ

「ああ。あの二人、多分天使と面識があるぞ」

「・・・だね」

呟いた神魔の言葉はクロス以外の耳に届く事無く、静寂の中に静かに響いた

全霊命（ファースト）

薫に呼ばれてリビングに戻ると、テーブルの上にはごく平凡な家庭料理が並べられていた

「ごめんなさいね。こんなものしか用意できなくて」

「いえ。わざわざ僕たちの分までありがとうございます」

悪魔とは思えない丁寧な言葉遣いで薫に頭を下げた神魔と、クロスは用意されたテーブルに座る

「そういえば、普通に用意しちゃったけど悪魔や天使って何を食べるの？」

ふと思いついて薫は神魔とクロスに問いかける

「つい何も考えずに二人に普通の家庭料理を出してしまったが、もしかしたら天使や悪魔が食べる物はこちらの人間とは違うのかもしれないと今さらながらに気付く

「大丈夫ですよ。僕達は食べ物なら何でも食べられますから」

その質問にさらりと返した神魔の言葉に薫は胸を撫で下ろす

「そう？よかった」

「九世界では普段どんなものを食べているんだい？」

食事を始めると同時に、待ちきれないかのように一義が目を輝かせて二人に話しかける

「それぞれの世界にいる生き物とか、たまに他の世界から入ってくる物とか色々ですね。全然食べない人もいますけど」

「え？食べない人がいるんですか？」

神魔の言葉に詩織が目丸くする。それは界道家の他の面々も同じように一斉にその視線が神魔とクロスに向けられる

「半霊命ネクストであるあなた方から見れば不思議でしょうけど、僕達全霊命ファーストは基本的にエネルギーが無尽蔵なので、食事スートも睡眠も必ずしも必要ではないんです」

食事や睡眠は、僕達にとっては娯楽といった認識の方が正確ですね。

「じゃあ、食べなくても寝なくてもいいの？」

「はい」

（う、うらやましい・・・それなら家計がどれだけ浮くか・・・）

食事をしなくてもいいという事実を聞いた薫が、頭の中で食費と献立を考えて家計に想いを馳せたのは主婦の性というものだろう

「ところでさっきのネクストとかファーストと違って何のことなんだ？」

大貴の脳裏には紅蓮の言葉が思い出されていた

《並みの半^{ネクスト}霊命なら死んでいてもおかしくないんだがな》

紅蓮の気配に押し潰され、意識が朦朧としていたために自分の記憶を疑っていたが、神魔の言葉でその言葉が靄が晴れたように脳裏に甦ってくる

「九世界の存在の体系だ」

そう言ってクロスはその手に純白の光の炎を灯す

「天使なら光力。悪魔なら魔力。この力は物理を超越する力。分かりやすい表現を取れば霊的な力、魂や存在とでも言えばいいかな」

そう言ってクロスは手に灯した純白の炎を消す

「霊的な力・・・」

「これはこの世に存在する全てに宿る力です。あなた方はもちろん、道端の石などにも力の格の違いや大小はあれど必ず宿っているものです

それで、この『力』によって存在を100%構成されている存在を『全^{ファースト}霊命』、物理的な肉体を介してこの力を行使する存在を『半^{ネクスト}霊命』と呼びます」

クロスの説明を神魔が続ける

「この力はかなり『格』を持っていない限り、この力だけで天使

や悪魔のように肉体として存在を構築する事が出来ません。通常は物質の身体を介して存在、魂から顕現するこの力を行使しています。命や心といったものもこの『力』の一つで、意識していきましょう。まいが、どの存在も生きているだけでこの力を行使できます」

「・・・我々でいう所の『気』のようなものか」

「そうだな。人間の使う『力』を『気』と呼ぶし、そういう認識でいいと思う」

一義の言葉にクロスが静かに頷く

「つまり全霊命はその霊的な力によって身体や存在の全てが作られ、半霊命は物質の身体でその力を使うという事でいいかな？」

「はい。その通りです」

一義の言葉に神魔が頷く

「けど、その全霊命と半霊命は見た目はあんまり変わらないのね・・・」
感心したように薫は神魔とクロスを交互に見て呟く

「そうですね。翼とか角とか多少の差異はありますが、全霊命の見た目は基本的にこんな感じですよ。例外もありますけど」

「ただ、さっきも言ったように自身の『力』そのもので存在が構築されている全霊命は永久無限の自分の『存在の力』で存在そのものを維持しているから『食事』や『睡眠』は娯楽程度で涙を流したり、気絶したり、排泄したりはしないって感じだな」

神魔の言葉にクロスが続く

何もしなくても無限かつ無尽蔵に供給される存在の力によって存在し続ける全霊命にとって、消化器など無用の代物。摂取した食物は完全にエネルギーに変換する事が出来る。

また気絶とは存在の弱い半霊命の自己防衛機能。存在そのものが強者であり、勝者である全霊命は気絶もしない

「まあ、涙が流せないのは、身体から出た時点で力そのものに変質してその形状を維持できないだけなんですけどね」

涙が流せなくてもちゃんと感情はありますし、食事しなくてもいいとはいえ、ちゃんと料理の味は分かりますし、寝なくても良いとはいっても布団の気持ちよさも分かりますから」

「なんていうか・・・ものすごく無意味にハイスペックなんですね」「そうですね」

啞然としながら言う詩織に神魔は穏やかに微笑みかける

半^{ネクスト}霊命というのは往々にして必要な能力だけを持っている。進化の過程で必要とされる能力に特化して進化し、生存競争を生き抜いてきた。そのため不要な能力や必要以上の力を持っていないことは少なくない

しかし全^{ファースト}霊命はこの世で恐れるモノは同じ全^{ファースト}霊命のみ。限り無く最強で無敵に近く、この世で最も格の高い存在である全^{ファースト}霊命は、それゆえか必要以上に不必要な身体スペックを持ち合わせているのだ。

何だか、すごくデタラメな存在って事は分かったわ

神魔の言葉に内心で納得し、興味と好奇心に満ちた視線を二人に向けて薫はふと呟く

「・・・ちよつと、触ってみてもいい？」

「私もいいかな？」

その視線の先にはクロスの純白の翼があった。天使という種族の証である柔らかそうなその純白の翼の触感への興味を覗かせる薫に、一義も鼻息を荒くしてやや興奮気味に言う

「・・・あ、ああ」

クロスが苦笑しながら言うと二人は席を立ち、クロスの純白の翼にそつと手を這わせる

「もふもふしてる・・・それにシルクみたいな・・・すごい」

「おおっ・・・何とこれは・・・」

極上のシルクをも凌ぐ肌触りとその羽の柔らかな触感のもたらすあまりの感動に、二人が声にならない声を上げるのを見て詩織もそつ

と立ち上がる

「本当だ・・すごく気持ちいい」

うっとりとして翼に触れる三人の姿を冷めた目で見る大貴と、笑いかみ殺している神魔にクロスはややうらめしそうに視線を送る
「ついでにこっちも」

そう言つて一義はまるで子供のように神魔とクロスの手を握る

「「？」」

「翼にも肌にも体温らしきほんのりとした温もりがある。半^{われわれ}霊命とさほどの違いは感じられないが・・・」

身体の全てが「^ス霊」の「力」によつて構築されているという全^フ霊命の身体は触れる限りでは人間とさほどの差を感じない。せいぜい生まれたての赤ちゃんと同等以上の肌触りがある程度だ

「見た目にはそれほど違いませんかよ？」

「・・・その様だ」

神魔の言葉に感心して頷く一義に代わつて二人の手を取つた薫は思わず目を瞠る

「すごい！神魔達のお肌スベスベでつるつる！！」

「ええっ！？」

薫の言葉に詩織が即座に反応する

（それ、今大事な事か？）

内心で呆れながら無言で視線を向ける大貴の前で、薫と並んで神魔とクロスの手の感触を確かめ、穴が開くかと思われるほど凝視した詩織は感動しつつもがつくりと肩を落とす

「・・本当だ」

（私よりずっと綺麗な肌してる・・なんか複雑かも）

二人の肌は産毛の一つすらなく、まるで陶器のようにスベスベでありながら絹のような極上の肌触りを持っている

「^フ彼等全^ア霊命の身体は霊的な身体。言つてしまえば質感と肌触りを併せ持った絵のようなもの。ということか」

冷静な分析をした一義が納得したように頷く傍らで詩織と薫の母

娘は別の衝撃を受けていた

((うらやましい・・・!))

「確かにそういう認識で間違ってはいませんが、こういう肌とか九世界では割と普通ですよ？人間界の人間もそうですし。むしろゆりかごの中の人間が九世界の普通とは違っているんです

さつきも言いましたが、フェアースト全霊命や九世界の人間は神の写し身。ゆりかごの人間はそれとは異なる『生物の進化』という形で生まれた存在ですから

「！なるほど。そういう事か」

神魔の言葉に一義が感嘆の息を漏らす

神から生まれた存在である全霊命フェアーストや九世界の人間はそのまま「神の写し身」ともいえる存在。

しかしゆりかごの人間はそれとは異なり、「猿から進化」した、言い換えれば「人間に似た猿」ではない

「いかな。どうしても、人間として常識が先にたってしまっている・・・」

結果的に見た目は似ていても細かな部分で大きな差異が生じている

それを理解した一義は腕を組んで低い声で唸る

「俺達の常識は、九世界じゃ非常識って事か・・・」

静かに呟いた大貴の言葉に、神魔は静かに微笑む

「僕達もあなた達も、誰だって自分の主観で世界を見て勝手に世界を計る。常識なんて言ってしまえば主観や思い込み、決め付けみたいなものですから、九世界を知らないあなた達が自分達の主観で世界の常識を決めるのは仕方のない事です」

神魔の言葉に一義は納得したように頷く

「確かに我々の常識は自分達の中でだけで通用するものだ。例えば我々の常識はきつと宇宙人には通じないだろう。もしかしたら異なる世界を知るということは自分達の常識を失う事なのかもしれない」

その言葉に一瞬の静寂が界道家の食卓を包む。

人類はこの星で良くも悪くも文明を持った唯一の知的生命体。だからこそ世界を自分達の常識で塗り固める事が出来ていた

しかし、この宇宙が本当の世界から干渉されないほど見放されている世界だと知ったら？高等な生物を自負していた人類が実は真の世界の中ではあまりに取るに足らない下等な存在だと知ったら・・・今まで信じていたものが自分達の勝手な思い込みに過ぎないと気付いたら・・・？

「もし、それをこの世界の人知ったら全霊命であるあなた達九世界の人とは仲良く出来ないでしょうね」

薫が静かに呟きそれに一義が続く

「昔から地球われわれの人類は、自分達こそが最も優れた生物だという考えで今まで生きてきた。もしそれを知っていれば・・・

いや、あるいはだからこそ九世界の全霊命ファーストは、この世界の半霊命ネクストを見捨てたのかもしれない・・・」

神魔とクロスは言っていた。「人間界の人間はかつてゆりかごの世界の人間と共存を求めたが、何かの理由でそれを断念した」と

もしそれが、人類が九世界から見れば決して優れていないはずの自分達の存在を驕り、自らの分をわきまえなかった為だとしたら

「違いますよ」

一義の言葉を遮ってクロスがはつきりと言い放つ

「確かに力の差は歴然としてますが全霊命ファーストは半霊命ネクストを見下してはいません。何しろこの世界の存在は99%が半霊命ネクストで、全霊命ファーストはほんの一握りですから」

クロスの言葉に続いた神魔の言葉に界道家の全員が目を丸くする

「？そうなのかい？」

クロスは小さく頷く

「ええ。『神から最初に生まれた存在』という意味で『全霊命ファースト』。それに『次いで生まれた存在』と言う意味で『半霊命ネクスト』

全霊命ファーストはこの世界で神から直接生み出された存在の事で、確かに

九世界最強の存在ですが、数はそれほど存在しませんから」

クロスの言葉に神魔が続く

「九世界の中枢をなす九つの世界でいえば、人間界を除く八つの世界を支配する種族と、あとほんの一部だけが全霊命ファーストです。他の種族も絶対数はかなり少ないので全霊命ファーストの大半はその八つの種族に限られます」

「その話、変じゃないか？」

その言葉を聞いた大貴が不意に口を開く

(え！？何が・・・)

しかし、大貴の問いの意味を理解できない詩織は内心で首を傾げる

「九世界の人間は『光魔神こうましん』という神から生まれたと言ったのに、

九世界の人間が全霊命ファーストじゃないから・・・かな？」

「あ、ああ・・・」

質問の内容を先に言い当てた神魔の言葉にわずかに驚愕の表情を浮かべながら大貴が頷くと、それに気付いた一義が顎に手を当てて思案するような表情を見せる

「確かに・・・おかしいな」

(だから、何が?)

未だに大貴と神魔達の会話の意味を理解できない詩織は、内心でさらに首を傾げるが、それを質問する事が出来ずに、ただ会話に耳を傾ける

「つまり、九世界の人間は、全霊命ファーストじゃないってことだよな」

「ああ」

大貴の言葉にクロスが頷く

「だから人間は九世界の中でもっとも異端な種族なんです・・・何しろこの世界で人間だけが唯一全霊命ファーストとして生み出されるはずだった半霊命ネクストなんですから」

「！？どういう・・・？」

神魔の言葉に、界道家一同の脳裏にクロスの言葉が甦る

《八つの世界に、最も異端な存在である人間の支配する世界を加えた九つの世界を総称して九世界と呼ぶ》

「つまり、人間っていうのは元々全霊命ファーストとして生み出されるはずだったんだが、ある事情で半霊命ネクストとしてしか存在できなかったんだ。」
「ある事情？」

首をかしげる大貴に、神魔が話を続ける

「さつき見せた僕達の『力』・・・『光力』は『光』の力、悪魔の『魔力』は『闇』の力。物質と違って霊質は、対極にある力と反発しあう特性を持っていて、九世界ではその方が常識的な認識です」
神魔は静かに話し始める

霊と物質は全く異なる「力」。そのため特性や性質も物質とは全く異なっている

「つまり、磁石なら『N極』と『S極』の様な対極にある力が引き合うのは実は物質だけの特性で、霊はそういった対極の力を拒絶する性質を持つ。だから『光』か『闇』のどちらかしか力を持ってない。しかし『光魔神』だけが九世界で唯一の例外。この神は九世界で唯一の『光と闇の力を同時に持つ』神。必然的にその神が生み出した人間も光と闇の力を同時に持っている」

クロスの言葉に神魔が続く

「九世界では光と闇の力は同時に使えないのが常識です。現に九世界の九つの世界でも、人間界を除いた八つの世界は半分が光の世界、半分が闇の世界と完全に分かれています」

神魔の言葉にクロスがさらに話を続ける

「光魔神も最初は人間を『光と闇の力を持つ全霊命ファースト』として生み出すつもりだったらしい。しかしその性質は光魔神だけのもの。いかにその被造物である人間でも光と闇の力の反発によって存在を維持できなかつた。」

そこで光魔神は、人間の存在を光と闇の両質を内包できる物質で構成された半霊命ネクストにまで劣化させる事で、人間をこの世界に生み出

した」

クロスの言葉に、大貴が口元に手を当てて頷く

「なるほど・・・光と闇の相反する力を同時に持っているから全霊命ファーストになれずに、半霊命ネクストとしてこの世界に生み出された・・・

それが、九世界の人間が『異端』って呼ばれている理由って訳か」
「そうです」

大貴の言葉に神魔が頷くと、それにクロスが続く

「ああ。人間は九世界において、光と闇の調和を表す象徴的な存在だからこそ、その『異端』さが九世界の一端を担う理由なんだ」

光と闇の力を同時に併せ持つ「人間」は、最も異端な種族でありながら「光と闇の調和」の象徴。

故に「力」においては他の八つの種族に遠く及ばない半霊命ネクストでありながら、「世界の中枢」たる「九世界」の一角を任せられている

「光と闇、それぞれ四種族ファーストずつの全霊命が、光と闇を象徴し、人間が光と闇の調和を象徴することで、九世界という世界の在り方を表しています」

「なるほど、大体分かったよ」

「そう？よかった」

「うむ・・・やはり、人間の知らない事は多いものだ。な？詩織」

「え！？あ・・・うん・・・そう、だね・・・」

突然話をふられた詩織は、それに呆然としながら頷く

（あんまり理解できなかった・・・何で、父さんも大貴も、あの話についていけるの？）

クロスの翼の感触を楽しんでいた詩織は、一義の言葉に分かつているかのように言いながらも、内容の半分ほどしか理解できずに頭を悩ませる

その所為か、ふと力のこもった手がクロスの純白の翼から透き通るように美しい白い羽を抜き取ってしまう

「あ。ご、ごめんなさい」

思わず抜いてしまった白い羽を手に、詩織は深々とクロスに頭を

下げる

「気にすることじゃない。天使の羽は結構簡単に抜けるんだ。それに一枚くらい抜けたうちには入らない」

「でも・・・」

その時、申し訳なさそうに言う詩織の手に握られた新雪よりも白い羽が、光の粒子となって詩織の手の中から消滅して消える

「！羽が、消えた・・・！？」

驚愕に目を見開く詩織と他の面々に神魔が口を開く

「ああ、それはクロスの身体が力に戻っただけですよ」

「どういう事ですか・・・？」

その言葉に首をかしげる詩織に、神魔は話を続ける

「全^{ファースト}霊命の身体は『力』そのもの。その『力』は、僕達の『魂』や『存在』から生み出され、それによって僕達の心体は具現化され、維持されています。」

だから僕達全^{ファースト}霊命の体組織は、身体から離れた瞬間にその概念を失い、力に戻ってしまうんです。」

「？」

「詩織さんと大貴君はクロスが怪我して血を出すのを見てたでしょ？あれは身体の外に出た『血』が、その『概念』を失って『力』に戻ったんだよ」

「そっついえば・・・」

「え？え？どういう事？」

「つまり、全^{ファースト}霊命の身体は、自分の本体から離れると消滅するって事だ」

神魔の言葉に頷く大貴と、首をかしげる詩織にクロスが続ける

紅蓮との戦いで傷を負ったクロスの傷口から出た血は、まるで赤い炎か煙のように傷口から立ち昇っていた。

あれは血が身体の外に出て「血」という概念を失ったため、元々それを構築している「力」に戻る事で、まるで赤い炎か煙が立ち昇

っているように見えたのだ

「まあつまり、あれは俺たちの生理現象みたいなものだから気にするなって事だ」

「・・・はい」

クロスの言葉に、詩織は小さく頷く

「何だつて!!!!・・・そうか、それで・・・」

突然の一義の言葉に、その場にいた神魔とクロスを含めた全員が目を見開く

「昔から『天使は火から作られた』という神話の伝承があつた・・・つまりそうやって傷口から血が炎か煙のように立ち昇る様を見てその身体が炎で出来ていると錯覚したのか・・・!?!?」

いや、『炎』とはそもそも全^{ファースト}霊命を形作る霊的な力の事なのか?

そうだとすれば同じように人間を作った『土くれ』とは物質の事という事に・・・まさか、まさかこれが・・・神話の真の姿なのか!?!?!?」

「・・・また始まったわね」

呆れて溜息をつく薫の言葉に、大貴と詩織が同意を示して無言で頷く

「かつてゆりかごの世界にやってきたという人間がこの世界で伝えられた九世界の事実がその様に解釈されてこの世界に残った・・・もしや世界のいたるところに存在するというOパーツもその時の知識から生み出された遺産だったのか・・・フフ・・・フフフ・・・」

「?」
何やら歓喜して独り言を呟く一義に、冷ややかな視線を送って薫は大貴と詩織に声をかける

「さ、早くご飯食べちゃいなさい。神魔さんとクロスさんに迷惑かけちゃ悪いから」

「はい」

その言葉にクロスの翼から離れて薫と詩織は自分の席に戻って食

事を始める

「二人もあの人の事はあまり気にしなくていいから」

「はぁ・・・」

不気味な笑いを浮かべる一義に視線を向けた薫は、神魔とクロスを見て微笑んだ

「私は今、世界の真実に触れている！！！！」

その歡喜に満ちた叫び声は夜の闇に静かに吸い込まれていった

最強の拳

次元の狭間。空間と空間の境に目を閉じ、真紅の髪を揺らして静かに紅蓮は待つていた

「来たか」

空間を越えてきた者の魔力を感じ取り、閉じていた目を開けて紅蓮は静かに呟く

「・・・よお、久しぶりだな、紅蓮」

その声の方に視線を向けると、そこには一人の悪魔が静かに佇んでいた

何よりも目を引くのはその髪型。漆黒のアフロは身体を包み込むほどに巨大で、まるで漆黒の茂みを背負っているように見える。

筋肉質で年季が入った渋く精悍な顔立ち。額と両手両足には骨のような白さを持った鎧を纏っている

「相変わらずの頭だな。『レド』」

「はっ。神懸かったこの髪型の良さがわからねえようじゃあ、まだまだだな。・・・で？お前が俺を呼びつけるなんて何事だ？確か今のお前の仕事はゆりかごの世界で『ブツ』を探す事だろ？」

「ああ・・・だが、面白い事になった」

「？」

レドの言葉に口元を歪めて紅蓮は不敵に笑い、その事情を説明する

「・・・なるほど、天使に悪魔、それに『何か』を宿したゆりかごの住人か。確かに面白そうだ」

「まあ、そいつの中にあるモノが例のモノである可能性も捨てきれないんでな。お前の力を借りたい」

紅蓮の言葉に、レドはまるで悪戯を仕掛ける子供のような視線で紅蓮を見る

「いいのか？お前の仲間チームに相談しなくて」

「『姐さん』はともかく『墮天使』の方とは馬が合わん」

「ククク。確かに戦闘馬鹿のお前や俺とは違うタイプだからな」

紅蓮のそっけない答えに、レドは噴き出しそうになる笑いを堪えて言うつと、獲物を狙う獣のような視線で紅蓮に微笑みかける

「いいぜ、力を貸してやる・・・俺の『最強拳』をな」

神魔とクロスがやって来て、一夜明けた界道家

一義は会社へ行き、薫は台所で食器の後片付け。春休み中の詩織と大貴、クロスはリビングで他愛もない時間を過ごし、神魔はリビングの窓の外にある小さな縁側に腰掛けて無言で空を仰いでいる

「神魔さん、何してるんだろ？」

「さあな」

詩織の言葉に大貴はぶつきらぼうに答える。それが大貴の性格だと分かつてはいるが、詩織はその言葉にわずかに唇を尖らせる

（あれは・・・いや、まさかな。そんなはずは無いか・・・）

神魔の後ろ姿に視線を送っていたクロスは、一瞬頭をよぎった疑問を振り払う

ここが九世界のどこかならそれもありえたかもしれない。しかしこのゆりかごの世界の中ではそんなことはありえないのだから

（何が目的なんだ？あいつは・・・）

クロスは、神魔達悪魔にとって天敵ともいえる天使の自分に対して、無防備に背を向けている神魔に疑惑の視線を向ける

《あの事は隠しておく気？》

昨夜、就寝となつて解散し、詩織と大貴、一義と薫が各々の部屋に戻っていく中、神魔はクロスに静かに問いかけた

神魔の言葉の意味する所はクロスが誰よりも分かっている事だった。説明の中で意図的に話をしなかった部分。ゆりかごの真実

「あれはお前もそうしただろ？」

「クロスが一向に言わないから、そういう方面に話をずらしたただけだよ。何しろ天使は一応九世界の秩序の守護者って事になっているしね。その意志を組んであげただけだよ」

「それはご親切に」

神魔の皮肉めいた言葉に、クロスは感情のこもらない淡々とした口調で応えると、しばらくの沈黙の後でゆっくりと口を開く

「・・・真実を知らなくていいことも、知らずにすむ方が幸せな事もある・・・特にこの事はな。知ったところでどうする事もできないんだからな」

「そう。なら僕は何も言わないよ」

そう言って神魔は自分の部屋に向かった

「それにしても神魔さんって、悪魔って感じしないよね。優しそうで全然怖くないし・・・クロスさんは天使ってイメージだけど」

「そうだな・・・」

詩織の言葉に、神魔とクロスを交互に見て大貴は小さく呟く

「案外、天使と悪魔ってそんなに違わないものなのかも」

「そんな事は無い。天使と悪魔・フェースト光の全霊命と闇の全霊命フェーストには決定的な違いがある」

二人の会話を遮ったクロスの鋭い声音に、詩織と大貴は息を呑んでクロスに視線を向ける

「決定的な違い・・・」

「使う力が『光』と『闇』とかそんな事じゃない。

闇の存在は、大切なモノを守るために他の犠牲を恐れない。・・・自分にとって大切な、たった一人を救うために何万だろうが何億だろうが、それ以外の全てを平気で切り捨てる。

それが光と闇の決定的な違いなんだ」

「・・・!!」

クロスの言葉に二人は息を呑む

「闇の存在は決して邪悪じゃない。むしろ神魔のように優しく、穏やかな性格の奴の方が多い。あいつらの心の在り様はむしろ、俺達光の存在よりも一途で純粹だ

だが、だからこそ恐ろしいんだ。たった一つのために、それ以外の全てを切り捨てる事をいとわないあいつらの心は、純粹と言う名の悪なんだ」

闇の存在は純粹すぎる。一途過ぎる。それ故にそれ以外の全てを殺せる。

その心はまるで一点の曇りも無い漆黒の如く、ただ黒一色。

例え身内や友人であろうと、そのために殺す事を躊躇わないその黒い純粹こそが闇の存在の最大にして最悪の特性なのだ。

「・・・でも、でもそれでも神魔さんはただ悪い人じゃありません」

真つ直ぐ目を見て怯む事無く、力強く言う詩織の言葉にクロスはわずかに目を細める

「・・・そうだな。それだけ注意しておけば普通に接している分には問題ない」

(普通に接している分には、な)

最後の言葉は口に出す事無く、心の奥に留めてクロスは神魔の背中に視線を向ける

「!!!」

それと同時に身体を貫く感覚に、神魔とクロスは一斉に同時に空を仰ぎ見た

「?どうしたんですか?」

「もう、戻ってきやがった!」

「え?・・・!」

一瞬クロスの言葉の意味を掴みあぐねていた詩織だが、すぐに昨日出会った紅蓮という悪魔の姿が脳裏をよぎり、その意味を理解する視線を送れば、とつくにその意味に気付いている大貴が警戒を強めていた

「しかも二人が増えてやがる」
そして次の瞬間、空中に二人の悪魔が現れた

宙に浮かんで視線を向けてくる紅蓮とレドを見て詩織が息を呑む
「どうしてここが・・・!?」

「このゆりかごの世界で、魔力と光力を垂れ流していれば馬鹿でも分かるだろ？」

紅蓮の隣にいるレドが不敵な笑みを浮かべる

レドが動いた際に、身体を包み込むほどの巨大なアフロヘアが揺れ動き、それが否が応でも目を引く

(（それよりも何だ、あの髪型??))

(アフロ?・・・いや、あそこまでいったら茂みかな?)

(つつこんだ方がいいのか?でもそれをしてたら負けた気がするな)

(オシャレなのかな?あの変な髪型。だとしてたら美的感覚が死んでるなあ)

内心で様々な思惑を持ちながら、レドの理解不能な巨大アフロに見入る一同の視線に気付いたのか、レドは自分の髪を親指で指し示して得意満面の笑みを浮かべる

「何だ!?俺の最高にオシャレなこの髪に魅入ってるのか!?!」

(オシャレだと思ってる!!!!!!)

あまりに奇抜な髪型を自信満々に自慢するレドの言葉に、一同は声を出す事も出来ないほどの衝撃を受ける

「と・に・か・く・その小僧の中の力とやらを見定めに来てやつたぜ」

「!?!」

レドの言葉に、神魔とクロスの表情と気配が一気に鋭いものに変わる

「・・・どうした?返事が無いって事は始めてもいいのか?」

瞬間、レドの拳が漆黒の魔力に包み込まれ、一瞬にしてその腕に、燃え盛る炎のような装飾を施された金色の手甲を纏わせる

アタマスフレア
『金剛炎！！！！！』

「神魔！」

「分かつてる。大貴君！！！」

自分の身の丈に匹敵するほど巨大な白銀の大剣を召喚したクロスが声を上げると同時に、神魔が大貴に手を差し伸べる

「？」

「彼らの狙いは君だ。一緒にここを離れるよ」

差し伸べられた神魔の手に戸惑いを見せる大貴に、静かに声をかける

紅蓮とレド。二人の前に移動したクロスは大剣を構えて臨戦態勢を取って二人と睨みあい、牽制している

「・・・分かった」

神魔とクロスの意図を理解した大貴は、躊躇い無く神魔の手を取る「待つてください」

その時、力強く響いた詩織の言葉に、神魔は詩織に視線を向ける「・・・私も連れていってください」

自身の胸に手を当ててはつきりと言い放ったその言葉に、神魔と大貴は目を瞪る

「姉貴！？何馬鹿な事言ってるんだ！？ここで待つてる」

その言葉を即座に否定する

「嫌。大貴だけを危険な目に合わせるわけにはいかない」

「詩織さん・・・」

「神魔！！！」

詩織を説得しようとした神魔に、クロスの言葉が叩きつけられるクロスが対峙する紅蓮とレドは場所を変える事に異存が無いのか、武器を構えながらも今すぐ戦闘に移る気配は無い

先程から詩織と大貴が動き回っているのがその証拠だ。もし二人が本気で今すぐ戦おうとしているならば、先日のようにその力の圧力と殺気で二人は動く事も出来なくなっていただろう

しかし楽観はしてられない。二人は少しの間。神魔とクロスが

大貴を連れて場所を変えるのを待っているだけに過ぎない。

あまり時間をかければ、痺れを切らしてこの場所で戦闘に入るのは二人の様子から明らかだった

「・・・っ、仕方ないか」

小さく歯噛みした神魔は、詩織の手を取って一瞬でその場を移動する

一瞬にして二人の目に広がる光景が見た事もない高層ビル群に変わる。

光をはるかに超える速度で移動できる全霊命ファーストに連れられて移動した二人は、移動する瞬間すら把握できずに別の場所で連れ出されたのだ。

「っ、ここは・・・」

見慣れない光景に周囲を見回す詩織と大貴を、神魔の魔力がドームのようになって包み込む

「二人は僕が守るから、そこでじっとしてて」

「神魔さん」

魔力の結界を張り巡らせた神魔の背中越しの言葉に詩織は小さく頷く

それと同時に、世界が崩れたかと錯覚するほどの轟音を響かせて、純白の光力を纏ったクロスの攻撃が、紅蓮の剣が放った魔力の斬撃が阻まれる。

「っ、この前みたいに人払いしないのか!？」

周囲を見回すと、紅蓮とクロスが放つ力の圧力と殺気に、人々が倒れているのが目に留まる

「あれは生成と維持に余計な力を消費するからな。全力で戦う時はアレは使わないし、使えないのさ・・・特に俺たちみたいに実力が拮抗していればしているほど、な」

大貴の言葉に応じたレドは、金色の手甲を纏って神魔の正面に静かに佇んでいた

「やっぱりこのために二人できたのか・・・」

「アア」

神魔の言葉にレドが口元を歪める

「どういう事・・・？」

「クロスと紅蓮を戦わせてその間に俺を狙うって事だろ」

レドの言葉に首をかしげる詩織に、大貴はレドから視線を外さずに吐き捨てるように言い放つ

「そう言う事、だ！！！」

言い放つと同時に地を蹴ったレド、は目にも留まらぬ疾さで神魔に肉迫し、金色の手甲をまとった拳を放つ。

しかしその拳は、神魔の武器である漆黒の刀身を持つ大槍刀によって防がれる。

ぶつかり合った金色の手甲と、漆黒の大槍刀の刃が、世界を轢き千切る様に軋み、魔力の火花を散らせる。

「そっういえばまだ名乗っていなかったな、『レド』だ」

「・・・神魔」

手甲で武装した拳と、大槍刀の刀身が金属音を立てて擦れ合い、二人の鋭い視線が交錯する

神魔は大槍刀の柄を握る片方の手を離し、レドの方へ向けた掌に魔力を収束させる

「！！」

刹那、神魔の手の平に収束された魔力が全てを滅ぼす破壊の砲撃として放たれる。

解放された神魔の魔力が漆黒の砲撃となって、目と鼻の先にいるレドに向かって一直線に世界を貫く

「・・・『最強拳』！！！」

眼前まで肉迫した神魔の魔力砲を、高らかな咆哮と共にレドの拳の一撃が打ち砕き、霧散させて消滅させる

「！！！」

「・・・どうだ？俺の最強拳は！？」

目を見開く神魔にレドは不敵な笑みを浮かべる。

(最強拳って・・・なんてイタい名前・・・)

息もつかせぬ緊張感の中で、詩織はレドの技名に心の中で冷静な感想を述べる

「最強拳とは随分大仰な名前だね・・・まあ、名乗るだけの事はあるけど。さすがに驚いたよ」

しかし小さく笑みを浮かべながら言う神魔には、明らかに動揺の色が浮かんでいた

「?今のそんなにすごいのか?」

「そんなこと俺に聞くなよ」

「・・・そう、よね」

小さく呟いて、眼前で向かい合う神魔とレドに視線を戻す

「良いだろう。説明してやるぜ、ゆりかこの人間ども!」

大貴と詩織の会話に、レドが自信満々、得意満面の笑みで、自分を指差してみせる

「普通はどんな奴でも、一度に放つ事が出来る力は自分の力の絶対値と同じ。つまり100%だ。逆に言えば誰しも自分の絶対値以上の力を放てない。・・・普通はな」

この世に存在する力には全て「絶対値」が存在する。筋力も、銃弾も、火薬も、各々「絶対値」があり、決められた以上の力を出す事はできない。それは全霊命ファーストであっても例外は無い

「だが、俺の『最強拳』は自分の力の絶対値を越えた力を放つ事ができる。その意味が分かるか!?俺の拳はどんな力も凌駕する事が出来るって事だ!」

「!?!」

レドの言葉に詩織と大貴は息を呑む

つまり最強拳とは、自分の力の限界を越えてどこまでも力を出す事が出来る攻撃という事。その威力に上限が無いのならばいつかは誰の力でも凌駕してしまう

まさに「最強」だ

「け、けど、そんなことしたら身体が・・・」

「神魔、そんな風に思ってるなら考えを改めろよ。この力に負荷な
んざねえぞ!」

「・・・その武器と体質かな?」

「!?!」

神魔の静かな言葉にレドは小さく目を見開く

「何だ、一発で見破ったのかよ?可愛くねえな、もう少し驚いてく
れても良かったんだが」

「その程度。魔力の流れを見ればクロスでも分かるよ」

「それはどういう意味だ!?くっ!!!」

神魔の言葉に反論したクロスに、容赦なく紅蓮の剣が襲いかかる

「・・・神魔、お前の言う通りだ」

そう言つてレドが握つた拳から魔力が吹き上がる

「俺の武器『アダマスフレア金剛炎』は俺の魔力を蓄積、圧縮して威力を高める能
力を持った手甲。そして俺の身体は悪魔の中では治癒力が特に高い。
多少の負荷くらいは一瞬で治癒させられる!!!俺の攻撃をいつまで
防げるかな?」

「神魔さん・・・」

勝利を確信したかのような余裕を見せるレドの言葉に、詩織が神
魔に視線を送る

「その程度で随分得意気になるんだね」

「!?!」

レドの言葉に神魔は冷徹な表情を崩す事無く静かに言い放つ

「魔力を蓄積させる能力つて事は、徐々にその力を溜めていく能力
つて事だよな?・・・なら」

そう言つて大槍刀に注ぎ込んだ魔力を斬撃の波動にしてレドに放
つ。

「効かねえよ!!!」

レドの拳が飛来した神魔の漆黒の波動を、ガラスのように打ち砕

いて消滅させる

「!!!!」

しかし次の瞬間、レドはその目を大きく見開かせる。

斬撃、斬撃、斬撃。

視界を全て埋め尽くす漆黒の斬撃の波動が、光を超越した速度で動く事ができる全霊命ファーストの絶対特性を以つて、限り無く0に近いタイムラグで、幾重にも折り重なって放たれる。

(これは……!)

神魔が目にも留まらぬ速さで、その身体よりも大きな大槍刀を振り回し、次々に魔力の刃を放つ。その刃はあまりの速さにほぼ同時にレドに命中し、漆黒の爆発でレドを呑み込む

「……ちっ」

「威力が何倍にもなるなら、こっやって数発分が一発として命中するようにして撃てば問題ないよ」

凶悪な笑みを浮かべるレドに、神魔はいつも通りの優しい笑みで微笑む。

レドの攻撃は自身の力の蓄積、つまり自分の力を足し算しているに過ぎない。威力が二倍になるなら一瞬で二回、三倍になるなら三回打ち込めば、確かに理論上は同じ威力になる

「けど、そんなデタラメな理屈」

「今に始まった事じゃないけどな……」

あまりの暴論に言葉が出ない詩織と大貴の目の前で、神魔の漆黒の力がかき消される

「……てめえ」

漆黒の中から現れたレドは身体中に浅い傷を負い、真紅の血炎を立ち昇らせて神魔を睨みつける

「さ、種明かしもしたし……そろそろ本格的に始めようか」

「……すぐに吠え面かかせてやるよ」

大槍刀の刀身に向けて小さく微笑む神魔に答えるように、レドも獣の笑みを浮かべた

覚醒の兆し

漆黒の力が天を衝く。世界を黒に塗り替える魔力の激突が世界が砕けるのではないかと思わせるほどの力の圧力をもって荒れ狂う

「オオオオオッ」

レドの金色の手甲を纏った拳と神魔の大槍刀が真正面からぶつかり合い、そのたびに魔力が世界を揺るがせる

一見武器のリーチで神魔が有利と思わせるが、その攻撃をかいくぐりレドは無数の拳を繰り出す。懐にもぐられれば不利なはずの長柄武器を扱う神魔はしかしそんな事など意に介してもいないかのように懐に潜り込んでくるレドの攻撃を巧みに捌く

目にも留まらない刃と拳の応酬の後、神魔から距離を取ってレドは軽く手を払って神魔に不敵な笑みを浮かべる

「やるな。・・・だがそれだけに残念だ、出来れば全力のお前と戦いたかったんだがな」

「・・・？」

レドの言葉にその意味を把握しきれない詩織と大貴は結界の中で首をかしげる

「お前の方が俺よりも僅かに強い。しかし俺達の力の差はほんの僅かしかない。だからこそ、お前は俺に勝てない」

言い放ったレドの身体から魔力が吹き上がり、その金色の手甲に魔力が収束していく

「いくぞー!!」

「・・・っ!」

まるで閃光のような速さで一瞬にして神魔の懐に移動したレドは片腕を神魔に、片腕を詩織と大貴を守っている神魔の結界に向けて魔力を開放する

「きゃあっ」

「くっ」

結界に炸裂したレドの拳から放たれる魔力が二人の視界を漆黒に塗り潰す

その漆黒の闇を切り裂いた神魔の大槍刀の刀身に瞬時に反応したレドはそれをかわして距離を取る

「その状態で反撃まで出来るとは、場数も大分踏んでいるな・・・だが」

レドが視線を向けると結界の前に立ちはだかる神魔が大槍刀の柄を地面に突き立てて脇腹から真紅の血炎を立ち昇らせている

「神魔さん」

炎煙のような血を立ち上らせる神魔に詩織が声を上げる

「・・・っ」

口端から真紅の煙を立ち昇らせてレドに鋭い視線を向ける神魔とレドの視線が交錯する

その光景を上空で紅蓮と戦いながら知覚で感知していたクロスはそちらに視線を向ける

「・・・神魔」

「やはり、後ろに彼らを庇いながらでは実力も半減だな」

「っ！」

漆黒の魔力を纏う紅蓮の刀身をクロスは純白の光力を纏わせた大剣で受け止める

（不本意だが神魔を助けにいかないで大貴達が危ない。さっさと決着を付けたいのは山々だが・・・）

目の前で獣のような笑みを浮かべる紅蓮を見てクロスに焦燥が浮かぶ

「俺達の実力は拮抗している。本気で勝ちたきや全身全霊の魔力を相手に向けて戦わなくちゃならねえ。だがお前は後ろの二人を守るために自分の魔力で作った結界を維持しながら戦っている

しかも結界を維持し続けるためにその場所を離れられない上、どれほど上手く戦闘と結界に使う魔力の配分を変動させていてもそれぞれに込められた魔力は全力には届かない。ましてさっきみたいに
お前と結界と両方に攻撃されれば、どっちかが疎かになるしな」

「・・・そんな・・・」

レドの言葉に詩織は言葉を失う

「そうなのか！？神魔」

「まあ、一応・・・」

大貴の言葉に神魔はバツが悪そうに答える

結界は一種の盾。自分から離れた場所には展開できない。できる者もいなくは無いが少なくとも神魔にはできない。

そして結界は魔力砲を常に出し続けているようなものであるため、その維持には常に魔力を注ぎ込んでいなければならない。だからこそ結界を維持させ続けるには魔力を何割か割く必要がある

結果的に戦闘に使える魔力は結界の維持に必要な分ずつ割かれ、神魔の魔力と行動に制限を設けてしまう

「そんなの卑怯じゃないですか！神魔さんが全力で戦えないようにするなんて・・・」

詩織の言葉をそよ風のように聞き流してレドは詩織に視線を向ける

「これは遊びじゃねえ、殺し合いだ！命をかけた戦場で自分が有利に戦うようにするのは当然の戦略だろうが！？それともお前は自分が有利なのはいいが自分が不利になるのは許せないって言うのか！？」

「・・・それは・・・」

レドの言葉に詩織は声を詰まらせる

詩織の脳裏に思い出されるのは昨日の戦い。紅蓮一人に対してクロスと後方から魔力砲による狙撃だけだったが確実に神魔も戦いに加わっていた。その時、自分はそれを卑怯な戦い方だと感じてはいなかった

「神魔、まさかお前も卑怯だなんて言わねえよな」

「まさか、普通の事でしょ？」

レドの言葉に神魔は表情を変える事無く応じる

「だ、そうだけぞ。文句を言いたきゃ足手まといでしかない自分達に言っただな」

「・・・！」

その言葉に詩織は言葉を失う

この戦いに赴く前、自分が無理を言っつてこの戦いについてきた事が脳裏をよぎる

それは決して好奇心などでは無く純粹に大貴を心配していたからだ
と今でも確信を持って言える。しかし決して戦う事もできないのに
無理を言っつてついでにきたこともまた事実

「ごめんなさい、神魔さん、私の所為で・・・」

「気にする事ないよ。僕がやりたくてやってる事だから」

神魔は静かに言々と大槍刀の刀身を地面につきたてる。それと同じに大貴と詩織だけを包み込んでいた魔力の結界が神魔までを包み込む

「なるほど、守りに徹する気か」

詩織と大貴を守るためには全ての魔力を攻撃に回せない。しかし
防御に回す事ならできる

「神魔さん！」

「大丈夫。詩織さんは僕が守るから」

(・・・！)

神魔の言葉に詩織はわずかに頬を染めて目を見開く

その優しい言葉は詩織の心の奥底に染み込み、不思議な安心感を
与えてくれる

「いいぜ。お前の力がどれだけ俺の最強拳に耐えられるか試してやるよ」

静かに言い放ったレドは自身の腕に魔力を収束させていく。自身の魔力の絶対値を越えて魔力を蓄積させる事が出来るレドの「最強拳」が魔力の黒い炎を上げながらその威力を高めていく

「・・・っ！」

世界を震わせ、軋ませるほどに増大していくレドの魔力に神魔は目を細める

全霊命ファーストは相手の力の大きさを知覚し、その威力や特性を把握する事が出来る。当然その攻撃を自分が防ぐ事ができるかどうかも

「二人とも伏せて」

「！」

神魔の言葉に詩織と大貴は息を呑む

頭を伏せての防御姿勢を要求する、それはレドの一撃を自分の結界が防げないと神魔が判断したという事だ

「いくぜ」

十全に魔力を蓄積したレドは地を蹴り、漆黒の光となって神魔に向かつて突撃する。収束し蓄積、圧縮した魔力は全て右の拳へ

神魔の魔力値を上回る防御不可の一撃が神魔に向かつて一直線に放たれる

「オラアアアアアッ！！！」

全霊の魔力を注ぎ込んで張り巡らされた神魔の結界にレドの最強の一撃が打ち込まれる。世界が壊れてしまったかと思わせるほどの圧倒的な漆黒の魔力の奔流。それが全てを塗り潰し、結界ごと神魔を呑み込む

「きゃああああっ」

「くっ・・・」

砕け散る結界に頭を抱えて詩織と大貴はなす術も無く黒い爆流が行き過ぎるのを待つ

「・・・っ」

神魔の結界が砕けた事で存在そのものを押し潰し、漆黒の彼方へ呑み込んでしまう殺意と威圧が詩織と大貴の魂を握り潰さんばかりの威圧を与えてくるが、かろうじて残る神魔の結界がそれを軽減し、命を奪うのを紙一重で阻む

永遠とも思える一瞬の恐怖が過ぎ去る

「っ、と、止まった・・・神魔さんっ」

自分と大貴が無事な事を確認し、自分の周囲を包み込んでくれたいた神魔の魔力の結界が所々砕けているのを見て詩織は神魔に視線を移す

「何？」

その声にもいつもと変わらない口調で応えた神魔を見て詩織と大貴は言葉を詰まらせる

「・・・っ」

神魔の左腕は途中から失われ、その傷口からおびただしい量の真紅の炎を燃え上がらせる。魔力で形作られる真紅の血液が魔力に還元され空気に、世界に融けていく

「・・・驚いたな。確実にお前の結界を破壊しつくす威力にまで魔力を高めていたはずだが、腕一本で止めるとは」

距離をとったレドは驚愕を隠せない様子で声を漏らす

レドが最強拳によつて高めた魔力は神魔の魔力の絶対値を大きく凌駕していた。その威力は確実に神魔と結界を同時に完全に破壊できるはずだったのだ

レドが離れると同時にその拳によつて破壊された神魔の魔力の結界も瞬時に復元し、その機能を取り戻す

「神魔さん・・・腕が、・・・それにすごい血が出て」

「っっ、大丈夫。全^{ファースト}霊命は生命力が強いからこの程度じゃ死なないよ・・・それよりもそこから動かないでね。今の僕じゃ動き回らると守りきれない」

失われた腕の苦痛にわずかに顔を歪ませた神魔の静かな言葉に詩織と大貴はその言葉に従う

人間ならショック死してもおかしくないほどの激痛と出血でも全^{アースト}霊命の命を奪うことは出来ない。魔力を傷口に収束して痛覚をある程度遮断する事もできる

（神魔さん・・・）

腕から真紅の炎を立ち昇らせている神魔の背を詩織は祈るように

手を合わせて不安そうに見つめる

戦う力を持たない自分たちが何をしても神魔の足手まとい以外のものになれない事を自覚している大貴は片腕を失っても尚、自分たちを守るために立つ悪魔の背に思わず声が漏れる

「・・・何で、そんなになつてまで俺達のこと守ってくれるんだ・・・？」

「僕がそうしたいから。だよ」

躊躇う事無く言い放たれた神魔の言葉に大貴と詩織は目を見開く
(たった、それだけ、か・・・)

使命でもなく、義務でもなく、仕事でもなく自己満足以外に利益も見返りもない。しかしそれに躊躇いもなく命を懸けている神魔の行動と心の有り方は人間の心理では理解し難いもの

そしてそれは二人に全霊命、^{ファースト}悪魔という人あらざる存在に対する畏怖と尊敬の念を抱かせるには十分なものだった

「だから、二人は何も気にしないで僕に守られてて」
(・・・っ！)

神魔の言葉に詩織は声にならない想いに拳を握り締め、その横で大貴は神魔の背に視線を向ける

「まあ、いい。俺としては不本意な形ではあるが、お前を弱らせる事には成功した。これで計画を始められる」

「計画？」

レドが小さく指を鳴らすと周囲に魔力の渦が生まれ、その中から巨大な獣が現れる

それは漆黒の体毛に覆われた全長三メートルはあるつかというゴリラに似た巨大な生物。頭部には巨大な角、禍々しく爛々と輝く血のような目と鋭い牙。

数十匹が一度に出現したその獣はゆっくりと移動して神魔の結界を取り囲む

「・・・な、何だ？こいつら」

「・・・魔獣か」

周囲を取り囲む巨大な獣を警戒して視線を動かす大貴と詩織の正面で神魔は静かにレドに視線を向ける

「・・・ゆりかごの世界に魔獣まで持ち出してきやがって」

下で繰り広げられる戦いに知覚を傾け、クロスは純白の両翼から光の雨を紅蓮に放つ

「あいつ一人ではあの二人を守って戦うのは難しい。そんな事は最初から分かっていただろう？」

クロスの光の雨を漆黒の魔力の刃を放ってかき消し、紅蓮が高らかに声を上げる

結界を維持したまま全力で戦えないのは九世界では常識のようなもの。そのため神魔に結界を任せるならばクロスがその前で結界とそれを作っている神魔を守って戦わなくてはならない

しかし現状その戦法は紅蓮がクロスをひきつけている為に行えない
「言われなくても分かっている。だからさっさとお前を倒さなきゃいけないんだろうが！」

純白の光力を大剣の刀身に纏わせてクロスは一条の白い流星となつて紅蓮に向かって飛翔し、紅蓮がそれを迎え撃つ

二人が激突した瞬間、光力と魔力が砕けて生み出された白と黒の花弁を持つ花が宙に開いた

「・・・魔獣？」

周囲を取り囲む巨大な漆黒のゴリラに似た魔獣に怯えた視線を向けて詩織が小さな声を漏らす

神魔の結界の周囲を取り囲む魔獣は一定以上の距離を保ち静観を決め込んでいる。その獣とは思えない冷静な佇まいに詩織の背を嫌な汗が流れる

「魔獣は魔界に住む獣だよ。知性が高くて高い戦闘力を持ってはい

るけど半^{ネクスト}霊命だから大丈夫

半^{ネクスト}霊命は全^{ファースト}霊命には絶対に勝てないから。僕がここにいる限り彼ら

は攻撃してこない」

（神魔がここにいる限り、か・・・つまり神魔がいなくなったらあいつらが襲ってくるわけか）

神魔の言葉に大貴はその言葉の意味を正確に汲み取って周囲を取り囲む魔獣を見回す

知性が高いという言葉の通り、魔獣たちは静観に徹するのみで決して神魔を煽る様な威嚇はしない。いかに隻腕になっても自分たちの力が及ばない相手だと理解し不必要に怒りを買うのを避けているのだ

「さて、ルールは理解出来たな？しつかり守れよ」

凶悪な笑みを浮かべたレドは魔力を込めた金色の拳を構えて神魔に向かって地を蹴る

「っ！」

そのレドの攻撃を神魔が魔力を込めた大槍刀で迎え撃つ

レドの攻撃は神魔の全力の結果を破り得る。ならば何度結界を張り巡らせても結果は先程と同じになるのは分かりきっており、さらに次は無い

神魔に取れる選択肢は例え魔力を分散させる事になろうともレドを真正面から迎撃する事だけだ

「ぐっ」

目にも止まらぬ一瞬の攻防。瞬きほどの一瞬で数千或いは数万を越える斬撃と拳撃の応酬が漆黒の魔力の波動を撒き散らして空間を震わせる

しかし隻腕になった上、魔力を全力で使えない神魔と万全のレド。その激突の結果は火を見るよりも明らかで神魔はレドの拳を避けきれずにその場から殴り飛ばされてしまう

「っ！」

（！）やっぱり、僕を倒すよりも結界の前から引き離してきたか・・・！）

レドの攻撃は神魔を倒す事よりも結界から遠ざける事を目的とし

ていた。分かりきってはいた事だが、神魔にはそれが分かっているもそれ以外の行動の選択肢は存在しない

殴り飛ばされた神魔の身体は立ち並ぶ高層ビル群を軽々と貫通して地面に墜落し、天をつくほどの粉塵を巻き上げる

「っ、神魔さん」

その様子を見ていたクロスは目を見開き、紅蓮は口元に笑みを刻む
「神魔・・・っ」

クロスは方向転換しようとしたところを紅蓮に阻まれる

「どこに行く？俺との決着がまだついてないぜ」

「・・・っ」

クロスは目の前の紅蓮とレドに知覚を向けて齒軋りをする

「そんな顔するなよ。ようやくあいつの中にあるモノが見れるんだぜ？」

紅蓮は焦燥を浮かべるクロスに小さく笑みを向ける

「結界が・・・っ」

レドによって神魔が結界の前から引き離された事で張り巡らされた魔力の結界がまるで空気に溶けるように消える

そしてそれは同時に魔獣たちを阻んでいた檻が消えるのと同義

「ガアアアッ」

その様子を見ていた魔獣たちは大貴と詩織との距離を縮めて威嚇の声を上げる

魔獣に取り囲まれる今の詩織と大貴はライオンの檻に投げ入れられた無力な兎と同じだった

「・・・っ」

周囲を取り囲む魔獣を見て大貴は息を呑み、詩織はその場から動く事すらできずにいる

獣といつても魔界に住んでいるというだけあって魔獣の「格」は桁外れだと向かい合えば一目で分かる。初めて悪魔や天使を見たとき

ほどではないが、それに似た別格の存在を見たときに覚える畏怖と恐怖が二人の心を塗り潰す

「ガールルッ」

魔獣たちは一声呻いて鋭い爪を持ったゴリラのような腕を軽く振るう

「っ」

その手の爪が大貴の服を撫で、その繊維を軽々と引き裂く

「大貴！」

髑つているのか一切殺気のコもらない攻撃を加えてゴリラに似た魔獣はその表情に邪悪な笑みを浮かべる

それはまるで人間の子供が捕まえた虫の手足を千切る様な無邪気でそれ故に性質の悪い邪悪な笑み

(遊んでやがる・・・)

身体の中に封じられた何かによってある程度耐性のある自分だけでなく身体を竦ませてこそいるが詩織が平然としているのを見てレドが殺気や威圧を抑えているのだと容易に推察できる

「ガール、ガール」

命令でもされているのか魔獣たちの凶悪な腕は決して殺さないように、大きな怪我也させないようにただ身体を掠める程度に大貴に触れるだけ。

しかし魔獣の圧倒的な力に大貴の身体は軽々と宙に舞う

「く、そ・・・」

(このままじゃ、殺される・・・っ)

大貴の心を恐怖が支配する

(このままじゃ、大貴が・・・)

恐怖に震える心と頭で詩織が考える事が出来たのはたったその程度の事。何かしようと、何かしたいと思うのに身体は全く言う事を聞いてくれない

「・・・少し、痛めつけたほうがいいか？」

その様子を見ていたレドは小さく呟くと指笛を吹く

その甲高い音に反応して一匹の魔獣が大貴の腕をその爪で切り裂く
「・・・う、くっ」

(こんな所で死ぬわけには・・・いかない)

魔獣の爪が優しく撫でるだけで大貴の腕は切り裂かれ、鮮血が迸る

(死にたくない・・・)

「っ」

思わず口元を押さえる詩織の目の前で魔獣たちの爪が大貴の身体を撫でる度にその身体から赤い血が踊る

(死んで・・・たまるか!!)

「い、や・・・」

声にならない声を震わせる詩織の傍らで大貴は死の恐怖の中で自分の内に何かが目覚めるのを感じ始めていた

(何、だ?・・・この感じ・・・)

身体が傷つけられ、流れ出る血と共に死が迫り、死の恐怖が心身を塗り潰していく中で魂の奥から何かが沸き上がってくるような、自分が塗り変わっていく感覚

(力が欲しい・・・生きるための力が)

周囲を囲んで今まさに自分を嬲り殺そうとしている魔獣を見て思う
(力が欲しい。守るための力を)

視界の端で無力と恐怖に震える姉を見て、自分たちを守ろうと腕を失っても微動だにせず立ち続けた神魔を思い出す

秘められた力を呼び起こす鍵は我を忘れるほどの怒りか死の恐怖。

それは全^{フェースト}霊命でも半^{ネクスト}霊命でも変わらない

そして今逃れられぬ死の恐怖に直面している大貴はそれによって自身の魂の奥底に眠る力の鍵を開こうとしている

・・・これは「救い」。これは「呪い」

いつか「その時」が来たとき、この子はきつとその身に宿した逃れる事は出来ないこの「運命」に命を懸けて立ち向かわなければな

らないでしょう

そしてその時は今。それが早かったのか、遅かったのか、それは誰にも分からない

しかし大貴が生きるために「その力」を求めた事で「界道大貴」という存在に融合したその「力」が目を覚まし、自分自身が求めるままに眠っていた力を呼び起こす

「「・・・さあ、見せてみる」「」

光魔神

魔獣達は目の前で翩っている人間の少年を脅威とは思っていなかった。魔獣はゆりかごの人間と比べて遥かに上位の存在。力はもちろぬあらゆる面において劣ってなどいないのだから

「……っ、大貴君……」

失われた左腕を押さえながら身体を起こした神魔は魔獣達を牽制しようとしてその動きを止めた

魔獣よりもさらに格上の存在である悪魔ならばその一睨みで魔獣達を殺してしまう事すら出来るのだからそれは造作もない事だった。しかし神魔がそれをしなかったのは大貴の内側から湧き上がる何かをその知覚が感じ取ったからだ

(……何だこの『力』……)

大貴の魂の奥に灯った力の火。相手の力を感じ取る知覚能力に長けた全霊命ファーストにしか捕らえられないその「力」を感じ取った神魔、クロス、紅蓮、レドの四人は思わずその動きを止めていた

「……馬鹿、な」

力が欲しい。守るための力が

力が欲しい。死なないための力が。

力が欲しい。戦うための力が。

死の危機に瀕した「恐怖」が、生まれてはじめて知る「無力」という絶望が、自らの無力に対する怒りと生まれて初めて感じる心の底から湧き上がる「力」に対する渴望が

「界道大貴」という存在と一体化した『力』をその願いのままに呼び起こす

不意に身体の奥に感じた違和感に大貴は目を見開く

(!?!?・・・何だ、この感覚・・・)

それはまるで自分の魂の中にあつた鍵のついた扉の鍵が外れ、その扉が開くような不思議な感覚。開け放たれた扉から湧き出す「力」にも「意思」にも似た「何か」の感覚が一瞬にして自分の身体中を満たしていくのが分かる

(身体についていた錘が取れたような・・・いや、まるで俺自身が生まれ変わったみたい・・・)

自分の身体に生じた感覚に戸惑いと同時に、失っていた自分を取り戻したような歓喜と安心感が入り混じつたような感覚を覚える大貴は自分の内側に宿つた「力」が心臓のように脈打ち、自分に語りかけてきているのを本能や直感ともいえるものとして感じていた

『解き放て。力を。・・・お前自身を!!!!!!』

『ああ』

己の魂が求め、己の魂の導くままに大貴は自らの存在を満たす「自分自身」に呼び起こす

刹那。世界が塗り変わった

「・・・馬鹿、な」

誰ともなく呟いた言葉が水滴の音が静寂に響くように周囲に広がっていく

その場にいた誰もが言葉を失っていた。詩織だけでなく神魔もクロスも紅蓮もレドも驚愕を隠す事が出来ずにただただ目の前に広が

る信じがたい光景に目を見開いていた

大貴の身体から「白」と「黒」の力が放出される。それは白い「光」と黒い「闇」

一切の混じり気のない純粹な白と黒が絡み合い、互いに侵食する事も打ち消す事もなく、ただ白と黒、光と闇の力が天を衝く

「嘘だろ・・・？光と闇の力を同時に・・・しかも全霊命ファーストと同レベルの『神能』ゴットクロア・・・この力を持つてるのはこの世界でただ一人・・・」
クロスが驚愕を隠し切れずに思わず呟く

大貴の放った白と黒の力が消えた時、そこには自らの力に完全に目覚め、新たな姿に生まれ変わった大貴が静かに佇んでいた

「・・・おいおい、嘘だろ・・・とんでもないもんが出てきやがった・・・」

その姿は正に「白と黒」。黒一色だった大貴の髪は黒と白が交じり合った二色、着物を洋服にしたような白と黒の二色を基調とする衣服を身に纏い右が金色、左が緋色の左右色違いの眼が光る

その身体に纏う力は「白」と「黒」それは決して相容れるはずがない「光」と「闇」の力

「光魔神・エンドレス！！！！」

「これが・・・大貴君の中に眠っていた力・・・」

険しい表情で覚醒した大貴を見つめる神魔が静かに呟く

白と黒、「光」と「闇」を同時に纏う九世界で唯一の全霊命ファースト。九世界において人間を生み出した「神」

「・・・何故、こんなところにお前がいる！？！？」

声を上げたレドに光魔神となった大貴は静かに視線を向け、自分の周りを囲むゴリラに似た魔獣に視線を向ける

今まで大貴を玩具のように弄んでいた魔獣達は恐怖で竦んで動けなくなっていた。今まで生命として、存在として圧倒的に上位であ

つたはずの自分達が存在として格下に成り下がっている現実と目の前に立つ圧倒的存在に対する恐怖が魔獣達から戦意を奪っていた

「・・・いくぞ」

大貴が自分の「力」のままにその手から白と黒、光と闇という相反する力を同時に持った力を放出するとそれが一瞬にして武器の形状を取る

それは刀。日本刀の形状を持った武器。柄と鍔は黒。刀身は白。

刃は黒。白と黒で構成される刀

「・・・太極神たいきよくしん・・・」

刀を握った瞬間、まるでその刀から流れてきた言葉を不意に呟く大貴はなぜかそれがこの刀の名前だと理解し納得していた

「・・・いける」

白と黒の刀の柄を握り締めた大貴の背に翼が展開した。それはクロスクロスの翼とよく似ていたが右の翼は白い翼に羽の先端が黒、左は黒い翼に羽の先端が白の左右非対称色の翼

「待つ」

クロスが静止するよりも早く大貴は刀を振りぬき、次の瞬間、空中に一筋の軌跡のみを残して魔獣が全て一刀の元に両断されて血飛沫を上げて崩れ落ちる

「・・・完全に全霊命フェーストになっている」

紅蓮は一瞬で全ての魔獣を斬り裂いた大貴に視線を向ける

大貴の刀で切り裂かれた魔獣はその圧倒的な力によって存在の欠片も残さずにこの世から消滅する

一半霊命フェースト（半霊命）であるはずのゆりかこの人間が光魔真ネクストとして覚醒した事で完全に全霊命フェアーの身体になっている。そして半霊命フェアーは全霊命フェアーに勝てない。これは当然の結果だった

「ハハハハッおもしれえ！まさか光魔神とやりあえるとはな！！」

歡喜の雄叫びを上げてレドは魔力を込めた拳を大貴に向かって放つ

レドの攻撃に一瞬で反応した大貴はその拳を刀で受け止める

瞬間、手甲と刀が激突し、魔力と白と黒の力が弾けて衝撃波と共に大貴の身体が後方に吹き飛ばされる

「・・・っ、馬鹿力め」

「・・・なるほど、力の使い方はまだまだだな」

吹き飛ばされた大貴を見て小さく呟いたレドはそのまま大貴に向かつて地を蹴り、一瞬でその距離を零にする

「どうした？そんなもんじゃねえだろ!?」えんたくのしんざ「円卓の神座」の頂点の力は!!!」

レドの嵐のような拳が大貴の身体に降り注ぐ。軌道と体勢の全てを無視した拳撃の嵐を懸命に刀で捌く大貴だが、その乱打を捌ききれずに十回に一回は身体に打ち込まれる

「・・・っ」

その拳の雨から逃れるために後方へ移動する大貴の動きにレドは全く離される事なくついていきながら拳を繰り返す

(くそ・・・っ、反撃しないと・・・!!)

レドの魔力を帯びた拳を受けながら大貴は刀を握る手に力を込める。しかしレドの姿を視界に捉える大貴はその攻撃をわずかに躊躇う

「あいつ、まさか攻撃できないのか?」

その様子を見て紅蓮は静かに呟く

「ためえ、力の扱いがお粗末だぞ!」

「さつき使えるようになったばかり力をそんなホイホイ使えるか!」

レドの拳を刀で力任せに弾いて大貴は上空へ飛翔する。ふと視線を向けるといつの間にかクロスが詩織の近くに移動して光力で結界を張っているのが見えた

(姉貴の方は大丈夫みたいだな)

「・・・そういう意味じゃねえよ」

心の中で安堵の溜息をついた大貴の背後から低く響いてきたレドの言葉に視線を向けた大貴に魔力を込められたレドの拳が炸裂する

「ぐあっ」

「大貴!」

漆黒の爆発を受けて吹き飛ばされる大貴を見てクロスの光力の境界の中から詩織が声を上げる

空中で左右非対称色の翼を広げて姿勢を整えた大貴は口元から立ち昇る真紅の血炎を手で拭って目の前のレドに視線を向ける

(くそ・・・動きはでたらめのくせにやたら疾い。しかも一撃が滅茶苦茶重い・・・これが全霊命か・・・)

「・・・お前まさか俺に攻撃するのを躊躇ってるのか？」

「!?!」

レドの言葉に大貴は小さく目を見開く

「『力』がぶれたな・・・光魔神の力・・・確か『太極』^{オウル}だったか。

九世界で唯一の力が台無しだな」

やれやれと溜息をついてレドは殺気に満ちた視線で大貴を睨みつける

「どうした？殺す気で来いよ。じゃねえと俺がお前を殺すぜ？」

「・・・！」

(殺すとか殺せとか簡単に言いやがって・・・！)

レドの言葉に大貴は刀を構える

その様子を光力の結界の中から見つめている詩織にクロスが静かに口を開く

「さつきから大貴に殺気が感じられないな・・・」

「当たり前じゃないですか。私も大貴も人殺しなんてした事ないんですから！」

詩織はクロスにやや強い口調で言うところと空中にいる大貴に視線を戻す優しい性格をしている大貴がいくら自分に殺意を向けられているからといって安易に相手に殺意を持って攻撃できるような人間でない事は姉である詩織は十分に理解している。さつきを持った攻撃が出来なくても仕方がない

「・・・なるほど」

クロスは小さく呟くと大貴とレドの戦いに視線を移した

一方

「・・・どうした？こんなに待ってやっているのに攻撃してこないって事はこっちから攻撃してもいいってことか？」

そう言ったレドはその金色の手甲に魔力を凝縮し始める。己の出せる魔力の限界値以上に魔力を蓄積して放つ「最強拳」。神魔の境界をも一撃の下に破壊したレドの最大の技だ

「・・・っ」

レドがしようとしている事を理解した大貴は意を決して刀の柄を握る。少しの間だが神魔やクロス達の戦いを見てきた。自分の「力」を砲撃として放つたり、武器に纏わせて攻撃する様子は今でも脳裏にしつかりと焼きついている

神魔やクロスがやっていた姿を思い出し、自分の力に意識を集中してそのイメージを重ねる。覚醒したばかりで使い方など全く分からないが、この「力」を使わなければみすみす殺されてしまうことだけは分かる

(自分の力を武器に注ぎこんで纏わせるイメージ・・・)

心の中で反復するとまるで大貴の意志に答えてくれたかのように大貴の刀「太極神」の刀身に白い光の力と黒い闇の力が絡みついて渦を巻く

「・・・多少力は使えるみたいだな」

(この一撃で何とかあいつを戦闘不能にする！)

自らの力を各々の武器に注ぎこんだレドと大貴はどちらからともなく弾かれたように空を翔る

互いに全身全霊を込めた一撃を相手に打ち込むべく一瞬にして相手との距離を縮める

「おおおおおおおっ」

「レド！上だ！」

今まさに大貴の光と闇の力を同時に持った斬撃とレドの何十倍にも高められた魔力の拳がぶつかり合おうとした瞬間、紅蓮の音が空を切り裂いた

「!?!」

その声に反射的に上に知覚を向けたレドは春か上空から飛来する漆黒の魔力に気付いた

(しまっ・・・)

気付いた瞬間にはもう手遅れだった。天空から漆黒の流星となつて垂直に降下してきた神魔は自らの魔力を込めた大槍刀の刀身でレドの身体を貫く

「がっ、ああ」

「レド!!!」

「神魔!?!」

それに思わず手を止めた大貴の目の前で左肩口を神魔の大槍刀に貫かれたレドがそのまま神魔の魔力に飲まれて地面に向かって落下する

レドを呑み込んで地面に墜落した神魔の黒い流星はそのまま漆黒の爆発を起こして天を貫く

「・・・っ」

(やられた!全員が光魔神に気を取られている隙を衝いてレドを仕留めにきやがった!)

紅蓮が魔力によって地上に生み出された漆黒の渦に視線を向ける
「光魔神たいきくんに気を取られすぎだよ・・・まあ、不意打ちになるけど・・・

」

魔力の黒い渦の中から神魔の声が響き、それに伴って黒い渦は徐々に消え、その中から地面に横たわっているレドの首筋から左胸を大槍刀の刃によって貫いている神魔の姿が現れる

「卑怯だなんて言わないよね?」

レドの身体から大槍刀を引き抜いた神魔は軽く目を伏せて全く感情を見せずに静かに言う

「・・・っ!」

大槍刀を引き抜いた後からまるで火柱のように天に向かって吹き上がる血炎に詩織は口を押さえて目を見開く

「終わりだな」

クロスの言葉が詩織の耳に届く。その言葉の意味は詩織にもそれを呆然と見ていた大貴にも説明されるまでもなく理解できる・・・それは「命の終わり」

(・・・レドって奴の気配が消えてく・・・)

まるで命の灯が消えるような感覚に大貴は眉をひそめて目を伏せる
「目を伏せるな」

「!?!?」

それをクロスの鋭い声が遮る。その言葉に大貴と同じように目を閉じていた詩織は目を開いてクロスに視線を向ける

「目を逸らさずに最後まで見届けるのがあいつの命に向き合ってた事だ」

その言葉に詩織と大貴は地面に横たわるレドに視線を向ける。紅蓮もクロスも神魔もただ真っ直ぐにレドに視線を向けており、それはまるでその命の終わりを自分の中に焼き付けようとしているように見える

「・・・すまねえ・・・紅蓮・・・しくじっちゃった・・・みてえだ・・・」

うつすらと目を見開いて小さく呟いたレドの身体が光の粒子になつて崩れて消えていく

「・・・身体が・・・」

「あれが全^{ファースト}霊命の死だ・・・全^{ファースト}霊命の身体は全てが自分の『力』で出来てる。その姿や機能を維持しているのは俺達の命・・・それが消えれば俺達の身体は無力な『力』に戻って消える・・・跡形も残さずに、な」

(死んでも何も残らないなんて・・・可哀相)

その様子を見て大貴は目を細める

全^{ファースト}霊命の死は何も残さない。半^{ネクスト}霊命のように死体が残るわけでは

なく、ただそれを見届けた者の心には留まらない儂い夢のようなもの

(だから・・・それを見るって言ったのか・・・)

「さてと・・・君の相方は死んじゃったけど、どうする？」

レドの身体が一瞬にして力の粒子になって消滅したのを見届けた神魔は紅蓮に金色の視線を送る

「・・・とりあえず、今回はここで引かせてもらおう」

「そう」

紅蓮の言葉に深追いする気は無いのか神魔は持っていた漆黒の刀身を持つ大槍刀を消し去る

(・・・光魔神、か)

大貴に視線を向けた紅蓮はその場から一瞬にして消える

「行ったみたいだな」

紅蓮の魔力が完全に消えたのを見届けるとクロスは光力の結界を解除する

「大貴」

詩織は白と黒の左右非対称の翼を羽ばたかせて地面に下り立った大貴に駆け寄る

「姉貴・・・」

それを見た大貴は張り詰めていた緊張が解けたのか一瞬で元の姿に戻ると気を失ってその場に崩れ落ちた

「アハハ。これは面白い事になったなあ」

それははるか彼方。ゆりかごの世界・・・宇宙空間を漂う小惑星軍に腰掛け、オペラグラスに似た双眼鏡のような物からそっと目を離す

それは一見どこにでもいるようなやや幼い顔立ちをした青年。肩にもかからない金色の短い髪だが、前髪は顔の右半分を隠している。深々とかぶったニット帽の下から覗く眼はまるで好奇心に満ち溢れた子供のように輝いている

「まさか、光魔神が出てくるとはねえ・・・いや、これもあの人の

思惑通りつて事か・・・」

笑みを崩さずに独り言を呟いた青年は手に持ったオペラグラスのレンズを覗き込む

「まあ、いつも通り僕はこのまま傍観させてもらおうかな・・・」

「光魔神が覚醒しましたか」

「はい」

純白に彩られたゴシック建築を思わせる荘厳な建物の廊下をゆっくりと二つの人影が移動していた

肌を見せない白く壮麗な衣装に身を包んだ女性に子供ほどの背丈の少女が続く。少女からは見えないが目の前を歩くこの女性がこの世で最も美しい女性の一人であることを少女は知っている

目の前にあるのは目の前を行く女性の足元まである金色の長い髪。その髪は優しく淡い金白色の光を放っており、女性の歩みに合わせてその流麗な金髪が揺れるたびに空中に金白色の蛍が舞う

「光と闇とその両質である者、そしてそのいずれにも属さぬ者が出会いました・・・」

金白色に淡く輝く金色の髪の女性が透明に澄み渡った美しく清らかな落ち着いた声で静かに言葉を紡ぐ

この世のどんな楽器や音楽よりも心に染み渡ると感じさせるその美しい声に耳を傾けて少女は目の前を歩く女性に視線を向ける

目の前にそびえ立つ白く巨大な荘厳な壁は女性が近づくとひとりでに開き、その扉の内側へ二人を招き入れる

「これは全ての始まり。これから始まるのです。全ての世界を巻き込む争いが」

その言葉とともに金白色に淡く輝く女性の金色の髪がまるで金色のオーロラのように広がった

託された想いと芽生えた想い

朝の陽光を浴びて静かに佇んでいた大貴が意識を自分の内側に集中させると一瞬でその姿が人間のそれから黒と白の髪に金と緋色の眼をもった光魔神の姿へと変わる

「・・・ふう」

覚醒して以来、不思議とこの光魔神の姿でいる事に落ち着きを覚えるようになり、今では15年間過ごし、慣れ親しんでいるはずの人間の姿に息苦しさにも似た窮屈な感覚を覚える

「・・・」

自分の手を見て昨夜の会話を思い出す

昨夜、光魔神として覚醒した大貴はその姿を帰宅した一義と薫の前で見せる

「・・・これが光魔神」

その姿を一義は好奇心に満ちた視線で舐めるように見回す

「ええ、九世界における人間を創造した神です。最もまだ覚醒は不完全なようですが」

「不完全？」

神魔の言葉に薫は首を傾げた

「今の大貴くんの力は僕達と同じ程度。でも光魔神の本当の力はこんなものではないんです。何しろ『円卓えんたくのしんざの神座』の頂点に位置する神ですから」

「円卓の神座？」

「九世界には3種類の神が存在します。正統な神である『光の神』『闇の神』。そしてそのいずれにも属さない『異端神いたんしん』という正統な神と同等以上の力を有した無属性の神

その中で最強の力を持つ『13柱』の異端神を総称して『円卓の

神座』と呼びます。光魔神はその中で最強の力を持つ3柱の神の1柱『円卓の神座・No.1』なんです」

「まあ、光魔神だけは全ての神、異端神の中で唯一光と闇の両方の力を同時に持つているが、一応異端神扱いになる」

神魔に次いで話すクロスの言葉を聞きながら詩織は神魔の左腕に視線を向ける。黒いコートと陣羽織を足したような神魔の服はいつの間にか元に戻っているがその左袖の中にはあるべき腕がない

その会話の最中、落ち着かない様子で詩織は神魔に視線を向ける（何で、私こんなに神魔さんの事、気になってるんだろ・・・）

神魔に何度も視線を送っては離してを繰り返していた詩織は制御できない自分の感情に戸惑っていた

特にどうという事も無いはずなのに神魔が気になってしょうがない。ただ神魔を見ているだけで胸の奥に何か温かなものが生まれてくる

「?どうしたの、詩織さん」

「え!?えっと・・・」

そんな詩織の様子に気付いた神魔に視線を向けられ、詩織は戸惑いながら咄嗟に眼に入った神魔の失われた左腕を見る

「神魔さん、本当に腕平気なんですか?」

咄嗟に取り繕った詩織の言葉に合点がいったのか神魔は優しく微笑む

「大丈夫ですよ。僕達全霊命ファーストは死んでさえいなければ身体をいくらでも復元できますから。この腕も大人しくしてれば2、3日で元通りに治ります」

神魔の言葉にわずかに心配そうな表情を浮かべながらも詩織は小さく安堵の息を漏らす

(ふう・・・)

「神魔君、そんなになつてまで子供達を守ってくれてありがとう。改めてお礼を言わせて欲しい」

「いえ、謝るのはこちらの方です。結局大貴君を守れなかったのは

事実なんですから」

深々と頭を下げて感謝の意を述べる一義の言葉に申し訳なさそうに応じる神魔の言葉をクロスが遮る

「そんな事はどっちでもいいが、こうなった以上二人達には光魔神が大貴の中にあつた理由を正直に答えてもらうしかない」

「！」

クロスの言葉に一義と詩織は小さく目を見開く

一義と薫に対する口調がいつの間にか敬語から地に戻っているのはそれだけ界道家の面々特に一義と薫に慣れ親しんだという事なのだろうか

「どういうことですか？」

クロスの言葉の意味が理解できない詩織が問いかけるとその質問に神魔が答える

「光魔神はるか昔に九世界で起きた戦争『異神大戦』いしんたいせんで死んでるんです」

「！！！」

「そして前にも言ったようにあなた達ゆりかごの中の住人は正確には人間じゃない。もし何らかの方法で光魔神が転生したとしてもゆりかごじゃなくて人間界の方に生まれるのが自然だ

教えてくれ。あんた達が知っている天使のことと合わせて、何で大貴の中に光魔神がいたのかを」

「！？お父さんたちが天使と・・・？」

「どういうことだ？」

神魔の言葉に全員が絶句する中で続けられたクロスの言葉に一義と薫は目を見開き、詩織と大貴の眼は驚愕に見開かれる

「・・・気付かれていましたか」

「最初に会った時、俺を見てあんた達が見せた様子は初めて天使を見たものにしては違和感があつたからな」

「あなた！？」

観念したように息を吐いた一義は口調を強くした薫に視線を送る

「・・・これ以上は隠し通せないのはお前も分かるだろう？それに来るべき時が来たということだろう・・・」

「・・・っ」

その言葉に薫は反論できずにうつむく。その様子にただならぬものを感じたのか詩織と大貴は父に視線を送る

「二人も聞いておきなさい。出来ればこの話はしないで済む事を願っていたのだが」

詩織と大貴に視線を向けた一義は一瞬だけ言い淀むがすぐに口を開く

それはおよそ15年前・・・詩織と大貴の双子が生まれて間もなくの事だった

休日に一義と薫はそれぞれ「詩織」「大貴」と名付けた二人の子供を連れてデパートに買い物にやって来ていた

ベビーカーに乗せた双子の子供達は二人の幸福の証。ただ見ているだけで心は幸せに満たされ、触れればその温もりが愛おしさを以って伝わってくる

しかしその幸福はその日、一瞬にして崩れ去る事になる

「・・・う」

気を失っていた一義が身体を起こすと目の前には倒れて気を失った香る薫。そして変わり果てた光景が広がっていた

けたたましい消防サイレンの音、周囲を埋め尽くす炎と煙が周囲を取り巻いている

「・・・一体何が？」

何が起こったのかは一義本人にも分からない。突然の轟音と衝撃に巻き込まれ樹がいたらこの有様だったのだ

(あの衝撃は地震じゃないな・・・爆発か?)

「薫」

痛む身体を起こして目の前で倒れている妻の身体を揺ると、すぐに薫は意識を取り戻した

「・・・あなた」

虚ろな視線で一義を見た薫はすぐに目を見開いて身体を起こす

「詩織と大貴は!？」

周囲を見回せばそこには横倒しになったベビーカー。慌てて駆け寄った二人は言葉を失う

「大貴」

横倒しになったベビーカーの中にいた双子の子供は血にまみれていた。詩織の方はかろうじて擦り傷程度だが大貴のほうは額からおびただしい量の血を流しており、息も弱くなっていた

「大貴、大貴・・・」

「落ち着け。誰か人を・・・」

取り乱しそうになる薫と自分自身に言い聞かせて一義は周囲を見回す。しかし煙の充満したその場所の視界は悪く鳴り響く警報ベルが全ての音をかき消してしまっている

「あなた、大貴が・・・」

薫の声に視線を戻せば大貴はぐったりとして息をしていない。触れている薫には大貴の身体から体温が抜けていくのがはっきりと感じられた

「・・・そんな・・・大貴・・・」

二人の心を絶望が塗りつぶしていく。愛する子供の命が目の前で尽きようとしている様を見て一義は、薫は心の底から救いを乞う

「その子供を助けたいですか？」

「!」

薫にも縋るような、神に祈るようなそんな二人の想いが届いたのか二人に優しく静かな声がかけられたかと思うと二人と双子を取り巻くように金白色の光のドームが展開される

目の前にいたのは足元まで届くかと思われるほど長い金色の髪を束ね、一点の穢れもない純白の翼を持ったこの世のものとは思えな

いほどに美しい女性だった

「・・・天、使・・・？」

目の前に立つ美女の姿を見て薫は思わず言葉を漏らす

「私の名は天使『ロザリア』・・・その子供を助けたいですか？」

「た、助けてくれるんですか!？」

「お願いします」

ロザリアの言葉に一義と薫は懇願する

目の前の存在が本物の天使かどうかや信用に当たりるかどうかなど今の二人にとってはどうでもいいことだった。二人にとって何よりも大切なのは大貴の命だったのだから

「・・・しかし、その子の命はすでに尽きています。私には命をなくした者を甦らせるだけの力はありません」

「!？」

その言葉に自分の腕の中にいる大貴に視線を落とした薫は息を失ってしまった大貴を抱きしめて天使を睨みつける

「なら、どうして助けるなんて!・・・」

涙で言葉が続かない薫に向けて差し出されたロザリアの手に白と黒の光によって構成された成人の顔とほぼ同じ大きさの光の珠が出現する

「これをその子の命の代わりにすればその子は新たな命を得て生きながらえる事が出来るでしょう」

「・・・なら」

それを見た薫と一義は顔に絶るような希望を浮かべる

「ただし」

ロザリアの言葉が二人の言葉を遮る

「これは持ち主の命を奪ってでも手に入れたいと思うものがいるほどに価値のあるモノ。これをこの子が持っていることを隠し通しておくことは出来ません

いつかそれが知られた時この子はこの世界での居場所を失い、あなた達の前から去る事を余儀なくされるでしょう

確かにこれを与えればこの子の命は助かります。しかしそれは同時にここで死ぬよりも過酷な運命をこの子に強いるのと同じ事です。それでも」

ロザリアの言葉に薫と一義は言葉を失う

「それでも助けたいですか？」

ロザリアのその言葉はまるで死刑宣告のように冷たく響き渡った大貴の命を繋ぎとめる事。それはいつか繋ぎとめた大貴の命を危険に晒す事になる。居場所を奪い、命の戦いにその身を投じる運命を与えるくらいならばここでこのまま眠らせてあげたほうが幸せかもしれない

「・・・それでも」

そんな一義の考えを薫の声が遮る

「この子には生きていて欲しい。私達の子供として生まれてきてくれたこの子にこの世界を見て、感じて、生きてほしい・・・」

「薫・・・」

妻の肩にそつと手を回して一義はロザリアに視線を向ける

「・・・分かりました」

その視線に小さく頷くとロザリアは手に持っていた白と黒の光球を大貴に向けてそつと差し出す

それと同時にロザリアの手に巻かれていた金色の腕輪が光の円陣を作り出すと、白と黒の光球を包み込んで大貴の胸の中へと入り込んでいく

「・・・これは『救い』であり、『呪い』です・・・」

大貴の中に白と黒の光球を送り込みながらロザリアはそれを見守る一義と薫に静かに優しく語り掛ける

大貴の命を取り戻す代わりに決して逃れられない戦いを強いる呪い「いつか『その時』が来ればこの子はその身に宿した逃れる事は出来ないこの『運命』に命を懸けて立ち向かわなければならぬでしょう。そしてそれはあなた達とこの子の別れをも意味します・・・」この力は大貴を生かす。しかし同時にこの世界にそぐわないこの

力は望むと望まざるとに関わらずこの世界での居場所を大貴から奪ってしまう

「それでも・・・」

白と黒の光球が金色の円陣に導かれて大貴の身体の中に吸収されると止まっていた筈の心臓と呼吸が動き出し、再び生命活動が開始され、大貴の身体に徐々に体温が戻り始める

「大貴・・・」

歓喜の声と上げ、嗚咽を堪えて薫と一義は命を取り戻した大貴を優しく抱きしめる

「その時まで精一杯愛してあげてください。この子の前に立ちふさがる運命に彼が呑みこまれて絶望してしまわないように。愛された愛しい記憶を誰かを愛するために使えるように・・・」

例え逃れられない戦いが待っていても、別れが待っていてもそれまでに彼が受けた愛情はその中でも失われる事なく大貴を支え続け、いつか味方になってくれる人を作ってくれるはず

「彼は注がれた愛情の分だけ誰かを愛し、それがきつと彼を助ける力になってくれるはずです」

そう言っただけでロザリアは優しい微笑みを浮かべるとそつと大貴の頭に白く細い指で触れる

「・・・あなたにこんな運命を背負わせる原因を作った私がこんな事を言うべきではないのかもしれないけれど・・・」

大貴を抱きしめている薫がようやく聞き取れるほどの小さな声で小さく大貴に囁きかけるとロザリアは整ったその柳眉をわずかに歪める

（ごめんなさい・・・）

閉じていた目を開くとロザリアは愛おしそうに大貴の頭を優しく撫でる

「あなた方に輝ける光の導きがあらん事を祈っております」

それと同時にロザリアを中心に発生した光がロザリアの身体を呑み込んだかと思うと一瞬でロザリアの姿が消え失せる

そしてロザリアは二度とその姿を現すことはなかった

「・・・これが全てです」

一義が話を終えると一瞬の静寂が界道家の食卓を包む

「私たちは大貴を失う事が恐ろしくて、大貴に過酷な運命を背負わせる道を選んでしまった・・・すまない、大貴」

一義の言葉に大貴は一度目を伏せてから両親に視線を向ける

「その話に怒る必要なんて無いだろ・・・それだけなら今日は疲れだから俺は先に寝る」

それだけ言っただけで立ち上がった大貴に神魔は静かに声をかける

「大貴君、明日少し時間をもらえるかな？光魔神の力の使い方を覚えてもらいたいから」

「・・・分かった」

リビングから大貴が立ち去ると詩織は盛大に溜息をつく

「全く、照れちゃって」

詩織の言葉に一義と薫は小さく笑みを浮かべる

ずっと罪悪感に苛まれていたであろう二人は大貴の言葉によって幾らか心の荷を下ろす事が出来たのだろう

「神魔君、クロス君・・・息子の事を頼みます」

「・・・はい」

「ああ」

深々と頭を下げた一義の言葉に二人は小さく頷く

その日の深夜。クロスは夜の闇を映す窓に映った自分の姿を見つめる

部屋に明かりはついていないがクロスの目はこの暗闇でも全ての物を昼間のように見通すことが出来る

（ロザリア・・・少なくとも俺の知らない天使だな。二人の言葉から

考えると少なくともロザリアは光魔神って事を知っていて大貴に埋め込んでいる・・・しかもそんな事を出来るとなると・・・神器しんぎ使いか・・・?)

クロスは脳裏に今日に至るまでの様々な出来事が思い起こされる「少なくとも光魔神のことは報告しておかないとまずいか・・・」クロスは小さく独白するとその純白の翼を広げると同時にその姿は煙のように消え失せていた

クロスが消えた部屋には白い羽が数枚宙を舞い、そのまま空気中に光の粒子となって消える

界道家の屋根裏部屋。神魔が借りているその部屋でくつろいでいると不意に扉が数回ノックされる

「・・・ようやく、か」

神魔は息を吐いて扉を開けるとそこには詩織が佇んでいた

詩織が扉の向こうでうろついていたことなど最初から気付いている。何度かこの部屋に入ろうとしては思い止まり、しばらく逡巡しては入ろうとしてを繰り返していた事は知覚で分かっていた

「あ・・・」

言いくそつに口ごもる詩織に神魔は優しく微笑む

「入ります?」

「・・・いえ、ここで」

神魔の言葉に一瞬戸惑って小さく首を横に振ると詩織は神魔の中に何もない左の袖を見てわずかに目を伏せる

「そんなに気にしなくても本当にすぐに再生するから心配しなくてもいいよ」

詩織の視線に気付いた神魔は普段と変わらない口調で詩織に声をかける

「・・・でも・・・」

「それより詩織さんも怪我は無かった?」

「は、はい・・・神魔さんが守ってくれたから・・・」

神魔の言葉に詩織は恥らいながらわずかに顔を赤らめて俯く

「そう、詩織さんに怪我が無くてよかった」

「!・・・」

神魔が優しい声音で囁いた言葉に詩織は頬を赤く染める

「よ、喜ぶところじゃありません。そんな怪我して・・・もし取り返しつかない怪我したらどうするんですか!？」

顔が赤くなっているのを隠すように目を逸らして弱弱しい口調で答めるように言う詩織の言葉に神魔は真剣な表情で答える

「そんな事しないよ」

神魔は詩織と真正面から向き合つとその金色の眼で詩織を覗き込むように見つめる

「それで僕に何かあつたら詩織さんが悲しむでしょ？僕は詩織さんの笑顔も守りたいから悲しむような事はしないよ」

「!・・・」

目を合わせて真剣な表情で言う神魔に詩織の顔と心の温度が急上昇する

「だから詩織さんにはいつもみたいに笑って欲しいな」

「・・・と、とにかく！あんまり無茶はしないで下さいね」

完全に茹で上がっている顔を診られないようにうつむいてそれだけ言つと詩織は神魔の部屋から走り去る

「・・・本当に・・・」

突然走り去つた詩織を遠いところを見るような視線で見送つて神魔は部屋の中に戻る

そんなやり取りがされている頃大貴は自分の部屋の布団の中で目を開けてただ虚空を見つめ続けていた・・・

神能（ゴットクロア）

「お待たせ」

光魔神の姿になって静かに佇んでいる大貴の背後から神魔が声をかける

「・・・なんだ、クロスはともかく姉貴も一緒なのか」

神魔と一緒にクロスと詩織がいるのを見て大貴は軽く目を瞠る

「何よ、文句あるの？」

「別に」

唇を尖らせる詩織を軽く流して説明を求めるように神魔を見る

「ほら、この腕だから大貴君の特訓はクロスにしてもらおうと思っ
て・・・例にもよって僕は結界係だよ」

神魔の左腕は昨日の戦いで失われている。内心で納得していると

神魔が魔力で空間を切り取り、詩織と自分を包み込む結界を展開する
それは最初に紅蓮と会った時に使っていた風景だけをそのままに
それ以外がすべて排除された空間

「じゃあ、クロスお願いね」

「ああ」

神魔に命令されるのが不満なのかややつつけんどんに答えたクロ
スが光魔神となった大貴に向き合う

「じゃあまずは基本からね・・・僕達全霊命ファーストが使う力・・・天使なら

『光力』悪魔なら『魔力』っていうこの力を総称して『神能』ゴットクロアとい
います」

「神能・・・」

「光魔神の場合は太極オーレルって言うんだけど神能は通常4つの姿がある
んだ」

「4つの姿？」

神魔の言葉にクロスが続く

「1つは『神能』ゴットクロア・・・つまり俺達が使っている力、存在、魂そのも

のから発せられる力、天使では『光力』悪魔では『魔力』と呼ばれる力。

1つは『全霊命』^{ファースト}その力によって構成される俺達の魂と身体そのもの。

そして残りの2つが『武器』と『霊衣』^{れいゐ}だ」

そう言つてクロスは白銀の刀身を持つ両刃の大剣を召喚する

「俺達全霊命の使う武器、それと俺達が着ている『霊衣』^{れいゐ}と呼ばれる服や鎧は神能が各々の特性に合わせて変化した『攻撃のための自分』と『防御のための自分』の姿だ」

「・・・なるほど・・・通りで・・・」

大貴は自分の身体を見回し、手に黒と白の刀『太極神』を召喚して軽く振る

変身に合わせて姿や服が変わり、望むままに武器を顕現させる事

が出来るのはそれが自分自身の力神能^{ゴットクロア}そのものが変化したものだから

「その性能は自分の神能に比例する。自分の力がそのまま攻撃力と防御力に変化された武器と霊衣は仮に破壊されても生きている限り再生する」

「・・・便利ですね」

「そうでもないよ」

詩織の感嘆の溜息を漏らすのを背後で聞きながら神魔はクロスと大貴に視線を向ける

「ただし欠点もある。霊衣はともかく武器の方は俺達の戦意そのものだ。力が互角でも心が弱いと簡単に折られる上、武器の破損は魂にダメージを与える」

全霊命^{ファースト}の武器は自身の戦意が。霊衣は自身の防衛本能が具現化したもの。その性能は自身の意思に強く左右されるという特性を持つ

自身の命を本能的に守る自衛と防衛を司る「霊衣」と違い攻撃を司る「武器」は使用者の「戦意」や「殺意」に強い影響を受けてしまう。戦意が弱ければ武器の性能はその分落ちるそれが全霊命^{ファースト}の武器の唯一にして最大の欠点

「・・・なるほど」

「気をつけるよ？昨日みたいに戦う事や殺すことを躊躇って戦うとお前のその武器は簡単に折られるぞ」

「！」

クロスの言葉に大貴は息を呑む。それを見たクロスは小さく笑みを浮かべて武器を下ろす

「とりあえず取り返しがつかない事になる前に基本だけは教えておく」

そう言つてクロスはその手に純白の光を出現させる

「おれたち全霊命の使う神能ちからはこの世界に存在するものの中で最も優れた力だ。」

そして神能には2つの大きな特性があつてその最大の特性は『自分の望む結果を現象として顕現させる』事にある」

「・・・どういう意味だ・・・？」

首を傾げる大貴にクロスは話を続ける

「ゴットクロア神能を使って戦う俺達全霊命ファーストの戦闘力は一撃で世界を滅ぼすほどの力を持ち、移動速度は光の速さを遥かに凌ぐ。さらに物理法則をはじめとするあらゆる事象や現象を完全に無視する事が出来る

つまり今ここに居る俺達以外・・・例えば神能ゴットクロアの練習をしようと思つてその辺にある岩か何かに攻撃を加えようものなら最低でもこのゆりかごの世界を含めた、無数の世界が消えてなくなる」

「・・・」

「・・・嘘・・・」

クロスの言葉に大貴は絶句し、詩織は思わず声を引きつらせる

「だが、俺達がそうしてもそうはならない。それがこの世の法則や理論を全て無視して自分が望んだ結果を現象や事象として発現させる事が出来る神能最大ゴットクロアの特性だからだ」

そう言つてクロスは手に出現させた光力の玉を大貴に向けた放つ
「！」

不意の攻撃に反応できなかった大貴はその光力の一撃を真正面か

ら受けると光力が炸裂し、純白の光の爆発と共に神魔の魔力によって隔離された空間が一瞬にして跡形もなく破壊される

「大貴！」

純白の爆発に巻き込まれた弟を案じて声を上げる詩織の目の前で光力の爆発が収まるとそこには傷一つ負っていない大貴が静かに佇んでいた

「・・・？何ともない・・・」

「え、あれ？・・・でも確かに大貴に命中してたのに・・・」

「ユットクロア神能は俺達の意志によってその力を示す・・・今は『お前だけに對して破壊力を發揮しない』って感じに『攻撃対象を限定』したんだ。だからお前は無傷でその場に立っている」

「・・・！」

クロスの言葉に大貴は静かに息を呑む

「『相手を殺す』と思って攻撃すれば世界を容易く滅ぼすほどの力で攻撃を加え、『被害を出さない』と限定すればその効果を与える対象を限定できる

ユットクロアこの神能の力そのものの存在である俺達ファースト全靈命はこの世の法則や理論の影響を一切受けない。当然毒や洗脳も効かない。だから俺たちを傷つけ、殺す事が出来るのは同等以上の力を持ったファースト全靈命のユットクロア神能による攻撃に限られている」

「まあ、一言で言えばユットクロア神能以外の全てに對して僕たちは絶対無敵の存在って事だよ」

「・・・」

クロスと神魔の言葉に改めてファースト全靈命という存在のあまりの非常識さを思い知らされた二人はただ声を出す事も出来ずに立ち尽くす

「俺達の一撃は容易く世界を滅ぼし、俺達の動きは光の速度を軽く凌駕し、俺達の存在は全ての法則の束縛を受けない。これがユットクロア神能全てに共通する基本的な概念だ」

ユットクロア神能の破壊対象は物理兵器と違って放射状には広がらない。効果を限定した一定空間、個人に對してのみその効果を発動する事が出

来る。だから攻撃を外しても世界を破壊する事は無く、必要以上の破壊を行う必要が無い

しかしその制御を行わずに無尽蔵にその力を解放してしまえばそれだけで世界を滅ぼしてしまう

「昨日覚醒した時は無意識で制御したんだろうが、もしそれをしていなかったら今頃この世界は周囲の世界をいくつか巻き込んでまるごと消滅してたぞ」

その言葉に詩織と大貴は冷たいものが背筋を撫でる感覚に襲われる覚醒したばかりで全く力の制御を行わずに大貴が力を解放していたらそれだけで家族や友人がいるこの世界をまるごと消し去ってしまったのかもしれないのだ

運が良かったと胸を撫で下ろしつつも最悪の想像に恐怖を覚えるのも仕方が無い

「イノチ神能にはそれだけの力は軽くある。その力を使う意味と責任を忘れるなよ」

「・・・分かった」

クロスの言葉に大貴は自身が手に入れた力の強大さとそれに伴う責任を認識させられる

「でも、それ変じゃないですか？私、今までの戦いちゃんと見えてましたよ？光より早く動いているなら私なんかの眼に見えるはず無いじゃないですか」

大貴の言葉の後に詩織が口を開く

もし全霊命フーリストが光の速さを越えて動いているなら光の反射でもものを見ている人間の眼にはその姿を捉えることもできない

しかし詩織の眼にはこれまでの戦いで神魔達が見せた動きはある程度見えていたし、会話も聞き取れていた

「それは僕の結界の中にいたからだよ」

「？」

詩織の言葉に神魔が静かに答える

「僕達全霊命フーリストの結界には中にいる人に自分の知覚を与える効果があ

るんだよ。だから僕が今までの戦いの時そういった情報を詩織さんに与えていただけ。もちろん僕の知覚がそのまま還元されているわけじゃないから多少の誤差はあるけどね」

「え、そうなんですか・・・？」

「つまりはそういうことだ。光魔神になったお前なら光を遙かに凌ぐ速度で動く俺達の動きはもちろん、会話も認識できるはずだ。俺達の声も普通の音じゃないからな」

「分かった」

体つきなどが酷似していても全霊命ファーストの組織は人間のそれとは大きく異なる。光より早く動いても物を当然のように色つきで見える事が出来るし、光速を越えた中でも当たり前のように会話が出来る。それらも全て現象を結果として表す神能ゴットクロアの効果なのだ

「さて、後は実戦でお前が自分の力の使い方を認識するだけだ」

クロスはそう言うて手に光力で構成した身の丈ほどもある白銀の両手剣を召喚すると立ち尽くしている大貴に向けて闘気を向ける

「全霊命おれたちの戦いはそのまま意志の戦いだ。感覚そのもので戦っているといてもいい。だから各々戦い方が違う。お前はこれから俺との実戦で自分に合った戦い方を見つけてるんだ」

本来全霊命ファーストは誰に教えられるわけでもなくその手段を知っている。それは人間が立つのと同じ、鳥が飛ぶのと同じ、本能ともいえるもの。しかし昨日まで半霊命ネクストであった大貴はその感覚が鈍い

その本能を揺り起こすには実戦を行う以外には無い

「・・・分かった」

「可能な限り手は抜いてやるが容赦はしない。いいな」

「ああ」

そして二人は身体からそれぞれ「光力」「太極オーレル」の力を放つとその力を相手に向けて放った

それからしばらくの後、身体中から血炎を上げる大貴が呼吸を乱しながら横たわっていた

「ゼエ、ゼエ……」

その様子を神魔の結界の中から見つめる詩織はその様子を静かに見つめていた

「初日から随分ハードですね……」

「大分落ち着いてるね」

「まあ、クロスさんが相手ですから……死なないように加減してくれてるでしょうし」

神魔の言葉に苦笑しながら答えた詩織は大の字になって横たわっている大貴に視線を移す

（全霊命^{ファースト}って息は乱しても汗はかかないんだ……）

呼吸を乱していても大貴は汗を一滴もかいていない。それは大貴を見下ろしているクロスも同じである事からそういうものなのだろうと判断する

「まあ、神能^{ユリトクロア}の扱いは実戦で覚えるのが一番効率がいいからね。理論は大事だけど意志で制御してる分ちよつと気後れすると力の精度とかに顕著に現れるから」

「そうですね……ただちよつと気になっただけですけど」

「何？」

「戦い方が……何ていうか、こう……見ていて雑なんですよ。大貴も、クロスさんも……まるで力任せに闘ってるって言うか？」

「ああ、それは……」

「この世の法則を無視できる神能^{ユリトクロア}を使って戦う全霊命^{ファースト}にとって体勢や姿勢は関係ない。全霊命^{ファースト}の戦いは理屈も糞も無いただ力に任せて相手を倒す戦いって事だろ？」

「……その通り、さすがだね。もう全霊命^{ファースト}の力と戦い方を感覚的に掴んでるんだ」

神魔の言葉を遮った大貴の言葉に神魔とクロスは感嘆の息を漏らす
「……なるほど」

(つまり、ライオンはその身体能力に任せて野生の勘で戦うってことね・・・)

内心で納得して詩織は神魔達に視線を向ける

あらゆる物理法則を無視できる全霊命ファーストにとって体勢や姿勢などは関係ない。どんな不利な体制からでも、どんな姿勢でも理屈や体構造を無視して常に100%の力を使う事が出来る

武術とは弱い者がより強い者と戦うための手段。動きの無駄を削ぎ落とし、効果的に必殺の一撃を叩き込むことで勝利を掴もうとした人間の劣等感せうとうかんが生み出した戦闘手段

しかしその戦い方は弱いからこそ生まれるもの。真の強者はその手段すらもただ純粹な感覚と能力のみでねじ伏せ、全ての敵をただその力のみでなぎ払う。それはこの世界の頂点に位置する完全なる勝者の戦術

(やっぱり全霊命ファーストって規格外っていうか・・・反則だなあ)

そんな事を詩織が内心で思っていると神魔、大貴、クロスが何かに反応して視線をほぼ同時に神魔の魔力によって閉ざされたこの空間の空に向ける

「!」

「・・・この感覚・・・」

「?」

その様子に詩織が首を傾げていると大の字になって横たわっていた大貴が上半身を起こして口を開く

「この感じ・・・これ、光力だよな」

「そうだね・・・それもクロスと同程度の」

大貴の言葉に答えた神魔にクロスが声をかける

「神魔、俺の客だ。入れてやってくれ」

「・・・ん」

神魔はたった一言だけそう応えると、空間を切り取って作り出された空間の上空に穴が開く

「・・・っ」

空間の空に開いた穴から現れた天使に詩織は思わず目を奪われる
(綺麗・・・)

空間の結界から現れたのは美しい天使だった

雪のように白く透き通るような肌、細くしなやかな体型はその人物が女性であると見る人に一目で認識させる

腰まで届く癖のない金系の髪を揺らし、ドレスのような衣装を身に纏い、左右二対4枚の白い翼を羽ばたかせてゆっくりと降下してくるその天使の姿は正に天から降臨する天使そのものといっていいものだった

(うわぁ・・・すっごく可愛い)

ゆっくりと地面に下り立った金色の天使を見た詩織は目を見開く
目の前にいる天使の少女は同じ女性である詩織から見てもとても可愛らしい少女だった。見た目は神魔やクロス、自分たちと同じ20前後。しかし大人びていながらもどこかあどけなさの残る大人になりきっていない少女という印象を持つその少女はまさに美少女と呼ぶに相応しい存在だった

「やっぱり、お前が来たかマリア」

「うん、久しぶりだね、クロス」

降り立った天使の少女に声をかけたクロスにマリアは陽だまりのような満面の笑みを浮かべて微笑むと神魔、詩織、大貴に順に視線を送ると胸元にそっと手の平を当てる

「はじめましてマリアといいます」

「あ、私は・・・」

「知っていますよ。界道詩織さんですよね？」

「は、はい・・・でもどうして私の事・・・」

マリアが自分のことを知っている事に詩織は少し驚いた表情を見せる

「クロスから大体の報告は受けていますから。そっちの悪魔が神魔さん・・・そしてあなたが・・・」

詩織にそれだけ応えてマリアは光魔神の姿のまま上半身だけ起こした体勢になつてゐる大貴の近くに移動する

「あなたが界道大貴さん。光魔神・・・なるほど・・・本当に光と闇の両質の神能デュアルクロアを持つてゐるんですね」

感心したように呟くとマリアはその場に膝をついて大貴と視線を合わせる

手を伸ばせば簡単に触れられるような位置にいる同性の詩織ですら見惚れる美少女のマリアからは甘い香りが漂い、ただでさえ女性に免疫の無い大貴は気恥ずかしさに頬をわずかに赤くし、緊張で反射的に身体を強張らせる

「じつとしていてください。傷を癒すだけです」

そう言つて大貴にかざしたマリアの手の平から柔らかな光力の光が注ぎこまれると、血炎を上げてゐる大貴の傷が見る見るうちに癒され瞬く間に傷跡一つ残さずに完治する

「！」

一瞬にして癒された傷に少し驚いたような表情を見せる大貴の傍らで立ち上がったマリアは困つたようにクロスを見る

「神能デュアルクロアの使い方とか戦い方を訓練してあげるのはいいいことだと思つけどちゃんと傷くらい癒してあげなきゃ」

「お前はファースト大袈裟なんだよ。あの程度の傷、俺達全霊命ならすぐにも塞がるだろ？」

「そういう問題じゃないの。全く」

クロスのみで腐れたような言い方にマリアは腰に手を当てて困つたようにクロスに視線を送る

「あ、あの」

「？何ですか」

「さっきの光で神魔さんの傷も治せませんか？」

マリアに声をかけた詩織は今まで詩織を守る結界を張つていた神魔に視線を向ける

神魔の左腕は昨日の戦いで欠損し、未だ袖だけの状態になつてい

る。全霊命ファーストはいかなる傷も癒す事ができ、数日で再び生えると言われてもやはり案じずにはいられない

「それは無理ですよ。だって彼は悪魔ですから」

「そんな事・・・」

一瞬不満を滲ませた非難するような視線を向けた詩織を見てマリアはふと気付いたような表情を見せる

「・・・もしかして光と闇の力の関係性について何も聞いていないんですか？」

「え？」

「・・・クロス・・・」

呆れたように視線を送ってくるマリアにクロスは口うるさい姉に不満を述べる弟のような表情を見せる

「そんな一度に教えても身につかないだろ！？それに光魔神はどっちも使えるんだからいいだろ？」

クロスの言葉にマリアは小さく溜息をつく

「詩織さん、光の力には闇の力を制する能力があるので光の力で悪魔に癒しを施しても逆効果になってしまうんですよ。大貴さんを私の光で治癒できるのは光魔神が光と闇の両質を持っているからに過ぎません」

その言葉に半分口を開けて聞いている詩織にクロスが話を引き継ぐ
「俺たちの力ゴットクロア神能は光と闇の力で効力が全く同じってわけじゃない。光には出来て闇にはできない事、その逆の事も当然ある」

「光の力は闇の力を持つ者以外を癒し、闇を制する力を持っています。闇の力は同じ闇の存在でも癒す事はできません。闇は光に対して劣勢である代わりに光よりも強大な力を持っています」

マリアの説明にクロスが続く

「光に比べて闇の力はより強大な力を持ちます。その代わりに光の力は闇の力に対して常に有利になる特性を持っています」

具体的には光1に対して闇10で互角くらいですね。だからゴットクロア神能の総力ではクロスより神魔さんのほうが10倍以上離れています。が、

光の力の特性によって二人の実力はほぼ互角になっているという事です」

「・・・俺が弱いみたいに言うなよ。力の特性の問題だろ」

マリアの説明にクロスは不満を隠さない口調で言う

「つまり、闇の全霊命ファーストの神魔さんには癒しの光が効かないって事ですよね？」

「ええ。闇の力は強大ですが基本的に攻撃に特化しているため光のように癒しの力などは使えません。光の力を持つ癒しを闇の存在に施せば、逆に癒しの光で身体を焼かれてしまいます」

「そうなんですか・・・」

肩を落とす詩織に神魔は優しく微笑む

「そんなに気を使ってくれなくても大丈夫ですよ、詩織さん。癒しの力が無い代わりに闇の全霊命ファーストは光の全霊命ファーストに比べて生命力が強いから」

「・・・はい」

「心配してくれてありがとう」

肩を落として落ち込む詩織に神魔は優しい笑みを浮かべて微笑む

「・・・っ！」

神魔に微笑みかけられた詩織はその笑顔に不意に顔を赤らめる

「・・・」

その様子を見ていたマリアの瑠璃色の大きな目には冷たく剣呑な輝きが宿っていた

新学期

その夜界道家の食卓にはいつもの面々に加えて純白の4枚の翼を折りたたんだマリアが座っていた

「・・・と、いうわけで天界より光魔神とゆりかごの世界の監視を仰せつかったマリアといます。どうぞよろしくお願いします」

「監視？」

「クロスが天界に告げ口したって事ですよ」

首を傾げる詩織と大貴の父、一義に神魔が静かに言う

「報告だ。そもそも干渉が禁じられているゆりかごの世界にお前やあの紅蓮って悪魔がいる上、光魔神なんてもんが出てきて知らん振り出来ないだろ」

神魔の言葉にクロスが不満を露にする

「本来光魔神は人間の神・・・人間界のほうには天界王様の方から話がいくと思いますので私はその処遇が決まるまで事態の監視を仰せつかっているにすぎません」

「処遇？それってどういう意味なの？」

詩織と大貴の母である薫の言葉にマリアは静かに淡々と応じる

「光魔神は人間界の神。それが生きていると分かれば人間界が放っておくはずがありません。そして九世界も・・・何しろ光魔神は今現在九世界最強の存在ですから

どういった処遇が取られるかは分かりませんが私が言えるのは光魔神・・・大貴さんには少なくとも十分な待遇があるということくらいでしょうか」

「じゃあ、特に危険があるということではないのね？」

「それは保障しかねます。私がここに来た理由の一つでもあります
が光魔神の力を狙う者は決して少なくありませんから」

安心したように言った薫の言葉をマリアは静かに否定する

「九世界は決して平穏で平和な世界じゃない。天使と悪魔おれたちみたいに

光と闇の世界はもちろん同じ全^{ファースト}霊命同士でも命を懸けた戦いが繰り広げられている

だから光魔神を引き込みたいって奴は少なからずいるだろ・・特に人間界はな」

クロスの言葉に一瞬の静寂が場を包む

「これが・・あの人の言っていた事か・・・」

呟く一義はロザリアの言葉を思い出していた

《いつか『その時』が来ればこの子はその身に宿した逃れる事は出来ないこの『運命』に命を懸けて立ち向かわなければならぬではないでしよう》

光魔神という存在となった大貴はその力ゆえに世界から放つて置かれることは無い。光魔神の力を狙う者から身を守るために闘い続けなければならない

「大丈夫。そのために俺達がいるんだ」

「！」

クロスのその言葉に一義は目を見開く

「大貴さんは私たちが全力でお守りいたします」

「大貴君も詩織さんも僕にとっては大切な友人ですから」

クロス、神魔、マリアが三者三様の笑みを浮かべ、大貴と詩織も

何一つ不安な表情を浮かべない事無く一義と薫に視線を送っている

「ま、そういう事だ」

「・・・うん」

大貴と詩織の言葉に同じようにロザリアが言った言葉が一義と薫の脳裏をよぎる

《彼は注がれた愛情の分だけ誰かを愛し、それがきつと彼を助ける力になってくれるはずで》

「・・・そうだな」

「ええ」

一義と薫は胸の奥から湧き上がる熱く温かいものを呑み込むと顔を見合わせて小さく頷く

九世界の事情などは分からない。しかし大貴はとてもいい人たちが巡り合う事ができたと思えるのはきっと彼らの心が真正面から真実を述べているからなのだろう

「あらためて息子の事をよろしくお願いします」

一義の言葉に神魔、クロス、マリアの3人は静かに微笑んで頷き、大貴と詩織はその様子をほほえましそうに眺めていた

「それに、俺だって何もしないわけじゃない。ちゃんと戦えるようになるために今色々教わってるんだからな」

大貴は強い決意のこもった目で両親を見据える

「大貴・・・」

「大丈夫ですよ。今はまだ不完全な覚醒ですが光魔神は今の九世界で最強の存在の1人です。大貴君が完全に光魔神に覚醒したら僕たちはもちろん九世界が束になってかかってても傷1つつけられないくらい強い強さになるんですから」

「・・・それほどの存在なのか、光魔神というのは」

神魔の言葉に一義が息を呑む

「それでも、大貴は私達の元から去ってしまっただけなの？」

その言葉に薫が目を見伏せ、その様子にその場にいる全員が脳裏にロザリアの言葉が甦る

《そしてそれはあなた達とこの子の別れをも意味します・・・》

「そうだな。光魔神・・・大貴がどれほど強くてもそれはどうしようもない」

クロスは静かに、しかしはっきりと言い放つ

九世界の誰もが傷つけられないほどの強さを持つはずの光魔神であつてもその言葉を覆す事は出来ない

「そんな・・・」

子供はいつか親の元を離れるもの。それは仕方の無い事だと頭では分かっているしかしその言葉の持つ不吉な印象が薫と一義の不安をより一層強くする。最悪の状況を想像せずにはいられなくなる

「その言葉はそういうことじゃないと思いますよ？」

「え？」

マリアの言葉に一義と薫は目を見開く

「そうだな。その言葉を素直に受け取れば『それほど遠くない内にこのゆりかごの世界にいらなくなる』って意味だけど危険だからって意味じゃないな」

「どういうことだい？」

クロスの言葉に一義が首を傾げる

「私達全霊命は不老不死なので完全に全霊命として覚醒した大貴さんがこの世界で生きていくのは不可能という意味でしょう」

「・・・え？」

マリアの言葉に界道家全員が言葉を失う

「私達全霊命の力神能には2つの大きな特性があるのですが、その内の1つが『最高の状態を半永久的に保つ』事なんです

その効果によって私達全霊命は心身の最盛期を維持し、歳をとつても衰える事なく、どれほど怠けても鈍る事なく生き続ける事が出来ます」

「えつと・・・？」

「つまり僕達全霊命は『最盛期を維持したまま殺されるまで死なない』って事ですな」

言葉の意味を掴みあぐねている界道家の面々に神魔が言う

「俺達全霊命には毒も洗脳も効かないし、酒に酔うことも無い。それは俺達の身体を構成する神能が心身を最も健康な状態に常に保っている

神魔の腕もそうだが全霊命ファーストがどんな傷でも生きていけば元通りに治るのもこの特性で最強の状態に身体を維持するのが理由だ」

肉体的、精神的にあらゆる不利な状態を発生させない神能「ゴットクロア」の持つその特性によつて全霊命ファーストは限りなく完全な存在としてこの世に在るいかなる傷も生きている限り傷跡すら残さない全霊命ファーストの治癒力もこの「治癒」というよりも「回帰」と表現したほうが正しい特性があるからこそのものである

「同等以上の神能「ゴットクロア」の力で外傷を与えて殺傷すること。これがこの世ファーストで全霊命を殺す唯一無二の手段です」

(何てデタラメな・・・)

強くはなつても弱る事はなく、研鑽される事はあつても鈍る事は無い。毒や病といったあらゆる身体異常は発生せず、精神も決して壊れない。寿命はなく同等以上の力で殺されるまでは常に最強の状態を維持し続ける

それがこの九世界の頂点に位置する存在「全霊命ファースト」だ

「まあ、つまり、いつまでも若々しく生きている光魔神の大貴君が寿命のあるこの世界で生きていくのは難しいのでいずれはこの世界を去らなければならぬって事です」

神魔が小さく笑つて言う

「確かにそんなのがいたら大事になるわね・・・」

表情を引きつらせながら詩織が言う

「つまり、あの『あなた達とこの子の別れをも意味します』っていつまでも若々しい大貴はこの世界では目立ちすぎてここでは生きていけないって事なの？」

「はつきりとは言えませんが、多分そうですよ」

薫の言葉に神魔が頷く

「何だ・・・そんなことだったのね・・・」

大きく安堵の息を漏らした薫と一義は複雑な表情を浮かべながらも肩の荷が下りたのか安堵の表情を浮かべる

「確かに数十年で死んじゃうこの星の人間と一千年経つても今のま

まの大貴じゃ結婚とかも出来ないわね。でもいつまでも若いから何百人も奥さん持てるかもよ」

「・・・姉貴」

両親のその様子を見た詩織のからかうような言葉に大貴は呆れたようなため息をつく

「・・・」

その様子を見つめるマリアに一瞬だけ視線を送ったクロスは再び詩織と大貴に視線を戻す

その様子をほほえましそうに見ていた薫はふと思いついたように神魔達3人に視線を移動させる

「じゃあ、もしかして神魔君たちってものすごく長生き？」

ファースト全霊命に寿命が無く、いつまでも若々しいなら今ここにいる神魔、クロス、マリアの3人も20前後に見える外見とはかけ離れた年齢であつてもおかしくない

その言葉に3人が思案するような表情を見せ、最初クロスが口を開く

「まあそうだな。・・とは言つても全霊命おれたちは寿命が無いから年齢つて概念はほとんど無いからな・・生まれたのが3度目の大戦の後だから兆か京位か？」

「！！？」

(兆！？京！？！？それつて年齢で使う単位じゃないだろ！？！)

クロスの言葉に界道家の面々が目を見開く

「僕も聖魔戦争の後の生まれだから・・・そのくらいかな」

「！！？」

それに続いた神魔の言葉にさらに身体を強張らせる

「私は異神大戦いしんたいせんの前の生まれなのでおそらく不可思議とか無量大数でも足りないくらいでしょうか？」

「！！！！？」

(不可思議？無量大数？何それ！？桁！？！？)

寿命が無いと言われてわかつてはいたことだが最後のマリアの言

葉にはさすがの界道家の面々も驚愕を隠しきれない

その一方でクロスはマリアに「そういやお前そのくらいの生まれっ
て言ってたな」と話しかけ神魔は「そうなんだ」と小さく笑みを浮
かべている

「あなどっていたわ、九世界・・せいぜい千歳くらいだと思っ
たのに」

引きつった笑みを浮かべて薫が言う

「まさかそこまでは・・・」

一義もそれに同意を示すように何度か頷く

「ところで聖魔戦争とか異神大戦とかが何なんだ？」

大貴の質問に神魔が答える

「九世界には九世界全体を巻き込んで起きた『三大大戦』って言う
戦争があっただけ、九世界では長い歴史の節目の表現として一
般的に使われるんだよ」

九世界の歴史はもはや数字で数えるなどはかばかしいほどの年月
に上っている。そのため「年号」などで時代を表現する事を放棄し
た九世界では大まかな時期をこの3度の大战を目安として表している
「一度目が『創界神争』、2度目が『異神大戦』、3度目が『聖魔
戦争』間隔は一定じゃないがこの三つの戦争で大まかに九世界の時
代を表現するんだ」

「なるほど・・・」

（ま、確かに無量大数？年とかになったら意味わかんないかも。で
も世界単位の戦争が年号の指標っていうのはちよつと皮肉かも）

詩織がそんな事を考えていると話がひと段落ついたら見たマリア
が改めて口を開く

「あの、それで話を戻しますがよろしければ私もここに住まわせて
もらえる嬉しいのですが、お願いできませんか？」

マリアの言葉に一義と薫が顔を見合わせる

「まあ2人も3人も大差ないか・・・」

「そうね」

「ありがとうございます」

一義と薫にマリアは微笑んで感謝の意を述べる

「マリアちゃんは空いている部屋が一つあるからそこを使って」

「はい」

薫の言葉にマリアは一礼する

「さて、それはそうと二人ともそろそろ学校が始まるんだから用意はちゃんとしないとダメよ」

「せっかかない雰囲気だったのにお母さんの言葉で何か一気に現実
に引き戻された感じ」

母の言葉に現実に引き戻された詩織はやや不満を込めた声で唇を
尖らせると薫は呆れたような声で詩織を咎める

「この子は何を言ってるんだか・・・」

「・・・学校？そついや聞いたことがあるような・・・？」

不意にその言葉に首を傾げたクロスを見てマリアが口を開く

「半霊命ネクストの世界によく見られる子供が社会で生きていくための知識
と経験を得るための教育施設のことよ」

「ああ、そういえば・・・」

思い出したように嘆息するクロスを見て薫は驚いたような表情を
見せる

「？皆は学校に行つてないの？」

その質問に当然のような顔をして神魔は言う

「僕はありませんね」

「俺も」

「私も」

それに同調するようにクロス、マリアが続きその言葉に詩織は目
を輝かせる

「全霊命ファーストの世界は勉強しなくてもいいの？」

「・・・詩織」

その考えが手に取るように分かる薫は詩織に呆れと非難を織り交
ぜた口調を向ける

その声にバツが悪そうに目を伏せた詩織に神魔は苦笑をかみ殺して話を続ける

「全^{ファースト}霊命も勉強しないってわけじゃないよ。勉強したい人はそれぞれの世界が運営する施設とかで研究とかしたりするしね」

「まあ、全^{おれたち}霊命は生まれた時から必要最低限の知識は親から継承されてるからな」

「はい？」

クロスの言葉にその場にいた界道家一同が目を丸くして首を傾げるその言葉の意味を掴みあぐねているらしい界道家の面々にクロスは話を続ける

「俺達全^{ファースト}霊命は両親から記憶以外の全ての知識を引き継いで生まれてくるから生まれた時点で一般教養は持つてるんだ。

で、その上でもし知りたい事や必要な知識がある時だけ調べものをするからわざわざ教育機関なんて作る必要ないんだ」

「それって全^{ファースト}霊命には生まれた時から文字の読み書きとか法律とか常識とかが知識としてあるって事ですか？」

クロスの言葉に啞然とした口調で尋ねる薫に神魔は微笑んで頷く「そうですよ」

知識を継承するという事は「常識」、「教養」、「法律」をまるで動物が生まれながらに歩こうとするように、鳥が空を飛ぶことを知っているように。まさに「本能」と同じように全^{ファースト}霊命は「知識」を継承するということ

唯一の例外は個人の人格が蓄積する「記憶」。知識は記憶の一部でもあるのだが、全^{ファースト}霊命に限らずあらゆる生命は誕生の時人格を形成されないままさらな魂として生まれてくる

(何て、何てうらやましい・・・)

その時心の底から界道家が一つになつたのだが、それを当の本人たちも含めて知る由も無く、ただ全^{ファースト}霊命という世界の頂点たる存在の反則的な能力を改めて痛感させられるだけに留まつた

本来霊的な力には情報を蓄積する特性がある。全霊命ファーストの知識の蓄積はこの特性によって行われ、本来は半霊命ネクストにおいても行われる。しかし半霊命ネクストが知識を継承できないのはその存在の「格」ともいえるものが原因になる。体構造の半分以上が「物質」である半霊命ネクストの身体に物質とは全く異なる霊質で構成された「魂」を注入するということとは水と油を混ぜるようなもの。本来相反する者であるはずの「霊質」と「物質」を一つの存在の枠に納めるために半霊命ネクストは「霊」の特性を限界まで弱めている。その結果知識の継承という特性を破棄する事になる。しかし存在そのものが完全な「霊」である全霊命ファーストの場合はそんな事をする必要がなく、結果的に知識の継承が必然的に行われることになる。

「でも、知識や常識を学ぶだけが学校じゃないのよ。同年代のお友達や恋人を作れるのも学校のいいところよ。そうして出来た友達が一生の宝物になる事だってあるんだから」

「確かに全霊命おれたちみたいに知識や常識があるってだけじゃ友達とかは出来ないな」

気を取り直して明るく言う薫にクロスは同意を示す

知識が継承され、学ばなくても読み書きや計算、一般常識、法律を知っているから勉強しなくてもいいとはいってもそれだけで人間関係を築く事は出来ない

「それで大貴さんと詩織さんはその学校というところへ行かれるのですね？」

マリアの質問に詩織は頷く

「?うん、そうだけど・・・」

「そうですか・・・」

マリアはその言葉に静かに呟いた

そしてそれから三日後、その日は詩織と大貴の通う中学校の始業式の日。校章のついた青いブレザーにチェックのズボンとスカートをいう男女それぞれの制服を身に纏って2人は今年で3年目になる校門をくぐる

詩織と大貴の通う「中学校」は界道家から徒歩で20分程度の場所にあるどこにでもあるごく普通の公立中学校だ

毎年クラスが変わるため玄関の前に張り出される新しいクラスの書かれた掲示板の元へ2人並んで歩いていく

「今年から中3の受験生か・受験か・受験・・・」

「はあ」

「あ、溜息ついたのでしょ？あんたはそう見えて意外に勉強できるもんね。私の苦労なんて分からないのよ」

やや暗い雰囲気纏う詩織は大貴のついた溜息にやや八つ当たり気味の愚痴をこぼす

「お、界道姉弟じゃないか」

「あ、ポピーちゃん」

背後からの聞き慣れたハスキーボイスに詩織は満面の笑みを浮かべて振り向く

そこに立っていたのは髪を短くした背の高いボーイッシュな少女。すらっと背の高いその少女はどこかモデルのようにも見える

「2人とも同じクラスだよ。ちなみに私も」

「本当!？」

その少女の言葉に顔を綻ばせた詩織はその少女の元へ近寄ってやや興奮気味の様子で嬉しそうに声をあげる

「これでポピーちゃんとは3年ずっと一緒のクラスだね」

「本当に。幼稚園の頃からの腐れ縁だもんね」

（本当に今年は姉貴と同じクラスか・・・中学になってからは初めてだな）

はしゃぐ2人を横目に大貴は掲示板でクラスを確認する

詩織と嬉しそうに言葉をかわしている少女は「愛崎芥子^{あいさきしょうこ}」。詩織と

は幼稚園から中学の2年まで同じクラスという詩織の親友だ

「ただ詩織。喜んでばかりもいられないよ」

「?何で?」

「あのバカも同じクラスだから」

「!」

「俺の事呼んだか?」

芥子の言葉に詩織が目丸くした瞬間、その声に応えた一人の少年が大貴と肩を組むように腕を回す

やや茶髪がかった黒髪を持つ少年は中々顔立ちもよく一見するとホストを思わせる風貌をしている。この学校でも屈指のイケメンだが「ある理由」から全くモテない残念なイケメンとしてこの学校では有名人だ

「・・・刀護」

大貴は肩に手を回している少年、「火之見櫓刀護ひのみやぐらひご」の腕を振りほどく

「お前はポピーみたいに酷い事言わないよな。だってお前は俺の作った『大和撫子愛好会』の会員1号だもんな」

「お前にそのあだ名を呼ばせるほど親しくなった覚えはないけど?」「いつ俺がお前のその変な組合に入った?」

冷やかな視線を向ける芥子と不快そうに眉をひそめる大貴に刀護は顔を赤らめて身体をくねらせる

「つれない事言うなよ」。クラスは違うことあったけどお前は俺の唯一無二の親友じゃないか」

「・・・はあ」

その言葉に大貴はがっくりと肩を落とす

「1度がつんと言ってやった方がいいよ。じゃないとバカはどこまでも付け上がる」

「非道いよ!そんな暴言を吐かれたら俺のガラスのハートが割れちゃうよ?」

「碎け散ってしまえ、そんなもの」

そんなやり取りをほほえましそうに見守る詩織と呆れて溜息をつく大貴。これが忘れかけていた日常だと思い出させてくれる、そんな穏やかな光景

そんな中で始業式も無事に終わり詩織と大貴はホームルームのために教室の席についていた

今日が初日なので席の並びは五十音順。必然的に詩織の後ろに大貴が座る事になる

「皆は今年中学3年生。大切な高校受験を控えた時期だ。進路を考え、1分1秒を大切にしたい」

眼鏡をかけた中年の担任の先生が教壇の上からそんな話をする

（そんな事言われても特に進路なんて考えてないし。・・・そういえば大貴はどうするんだろ？）

ふと思いついて背後の席に座っている双子の弟に背中意識を向ける

光魔神という人外存在に覚醒した大貴はいつかこの世界で居場所を失う。それまでの事、それからの事をどうするのかという漠然とした不安を伴った考えがふと詩織の脳裏をよぎる

「で、急なことだが今日からこのクラスに転校生が来る事になった」

（転校生！？・・・いや、まさか）

「じゃ、入って」

ふと大貴の頭を嫌な考えがよぎると同時に教室の扉が開き、その転校生が入ってくる

『・・・っ』

その場にいた全員が息を呑んだ

腰まで届く金糸を束ねたような金色の髪。雪のように白い肌に整った顔立ち。細くすらりとしながらも女性特有の柔らかさを兼ね備えた完璧と思えるスタイルを持った美少女に男子ばかりではなく女子までもが思わず見惚れてしまう

「あ・・・あ・・・」

金魚のように口を開閉させる詩織の眼前で教壇に立ったその美少女は満面の笑みを浮かべた

「『マリア・ヘヴンズワールド』です。よろしくお願いします」

転校生は天使

界道家のリビング。純白の翼を折りたたんでソファに座っているクロスに神魔が声をかける

レドとの戦いで失われた左腕はこの数日で完全に復元している

「マリアさんってクロスとどういう関係？」

「！？ただの・・・お、幼馴染だよ。ガキの頃から知ってるってただだ！」

神魔の言葉にあからさまに動揺し、顔を赤くしてクロスが答える

「そう・・・」

クロスのその言葉に神魔はただ一言そう呟く

「何が言いたいんだよ、お前！？」

クロスとマリアは会ったその時から面識があった。その事はそこまで驚く事ではない。よくある事だ

「分かってるでしょ？マリアさんがここに来た理由には納得いった・

・けど僕が気になるのはむしろその事なんだけど？」

神魔の言葉にクロスは視線を逸らしてやや吐き捨てるような口調で言う

「・・・理由は俺も詳しくは知らねえよ。でも俺にはそんな事関係ない」

「そう」

クロスの言葉に神魔は一言で答えるとクロスに背を向けてその場を離れる

(これってどういうことかな?)

その頃目の前に立っているマリアを見て詩織と大貴は目を見開く
着ている服は光力が自身の防御の特性に合わせて具現化した修道服とドレスを合わせたような「霊衣」ではなくこの学校の制服。そ

の姿は普段と変わらないが背中に生えていた4枚の純白の翼は見え
ず、完全な人間の姿になっている

(マリアさん!?何で!?)

(ヘヴンズワールド・って「天界」か。安易な偽名だな)

「じゃあ、空いている席に」

「はい」

人間の姿になって転校してきたマリアに啞然とする詩織と大貴を
横目にマリアは2人の横を優美にすり抜けて空いている席に座る
(つたく、どうなってるんだ?)

背後でマリアが座つたのを気配で感じ取つた大貴は内心で首を傾
げた

「よし、じゃあ、ホムルームHRをはじめろぞ」

休み時間になるとマリアの周囲には人だかりができていた

「どこから来たの?」「ハーフなの?」から始まり「恋人はいる
の?」まで多種多様な質問がマリアに向けられる

その質問に時に聞き流したりしながらマリアはクラスの質問に答
える

「なあ、なあ、あの新入生の子、超可愛いよな」

その様子を遠巻きに眺めている大貴に刀護が声をかける

「あれ?刀護君の好みって昔ながらのおしとやかな大和撫子系じゃ
なかったの?大和撫子愛好会もそれで名乗ってるんでしょ?」

大貴の前の席に座って芥子と話していた詩織の言葉に刀護は拳
を胸の前で握り締める

「何を言っているんだ?詩織ちゃん!!健全な男子たるもの可愛い
子が嫌いなわけ無いだろうが!あんな人間とは思えない可愛い子な
ら尚の事だ!」

(人間じゃないけどな、とは言えないか・・・)

(人間じゃないんだけど・・・)

刀護の言葉に大貴と詩織は心の中で同じ事を考える

「俺！今から彼女とお近づきになってくる」

「・・・はあ・・・」

浮かれた声を上げてマリアの席に移動しようとした刀護よりも先に立ち上がったマリアが詩織と大貴の元へ歩み寄ってくる

「大貴さん、詩織さん」

「何々？あんた達この子と知り合い？」

親しげに声をかけてきたマリアに芥子がマリアと詩織、大貴を交互に見る

「あ、えつと・・・」

「私、2人の家にホームステイさせてもらっているんです」

「！本当^{マジ}！？」

「な、ぬうわぁにいいいいい！?!?!？」

驚愕に目を見開く芥子の傍らで奇声を上げながら刀護が悶絶する

「ですよね？」

「そ、そうなの！マリアちゃんは今、家に住んでるんだ。ね？大貴」

「あ、あぁ」

「話を合わせて」とウインクで合図を送ってくるマリアに2人は頷く

「う、うらやましますぎるぞ、大貴い！こんな可愛い子と1つ屋根の下だとおぉー!!」

「五月蠅い」

叫ぶように言った刀護の頭を芥子が軽くはたく

「これが叫ばずにいられるか！？大貴とマリアちゃんが1つ屋根の下、1つ屋根の下なんだぁああああぁぁ」

「私もいるんだけど？」

高らかに絶叫する刀護に詩織が苦笑する

「え・・・つと」

「ああ、このバカはほつといて。日本の恥だから」

「・・・そうですか？」

溜息交じりの芥子の言葉にマリアは困惑の表情を浮かべる

「あ、私は愛崎芥子。詩織とは友達なんだ」

「俺は火之見櫓刀護。大貴君の唯一無二の親友です！」

「ちよつと待て。何でお前が唯一無二なんだ？」

自己紹介をした2人、特に刀護の言葉を大貴が否定する

「仲がいいんですね」

その様子を見て微笑んだマリアの表情に一瞬影が差した事に誰一人気がつくものはいなかった

ここはゆりかごの世界の外にある世界と世界を繋ぐ時空の狭間

「どういう事だ？レドが死んだってというのは？」

そこで静かに佇んでいる紅蓮の背後に黒で縁取りされた白色の着物のような服を纏い、逆立った漆黒の髪の上に白い鉢巻を巻きつけた青年が紅蓮の前に現れる

「紫怨しおん」

紫怨と呼ばれた青年は漆黒の髪をなびかせ、紫色の瞳を持った鋭い視線を紅蓮に向けると紅蓮は静かに口を開く

「・・・光魔神、か」

「ああ」

一通り話を聞き終えた紫怨の呟きに紅蓮は1つ頷く

「報告したのか？」

「まさか。そんな事してこんな面白い戦いを邪魔されちゃたまらねえからな」

紫怨の言葉に紅蓮は凶悪な笑みを浮かべる

「で、俺にも手伝わせようっていう魂胆か？」

「ああ、レドと組んでたお前も困るだろ？」

「・・・仇討とうと思っただけ親しくなかつたけどな」

紅蓮の言葉に紫怨は冷え切った言葉を向ける

「戦いは俺がやる。お前は邪魔が入らないように足止めしてくれ」

ばいい。誰にも俺の邪魔はさせねえ！

俺がこの組織に入ったのは単に強い奴と戦える機会があると思ったからなんだからな！！」

「そうか」

「！！」

紅蓮の金色の眼に宿った獣のような気配に溜息をついた2人の背後に1つの影が出現する

頭の後ろで1つに束ねた逆立った金髪が腰の辺りまで伸び、額からは天を衝く黒い1本の角。1対2枚の漆黒の翼を羽ばたかせてその人物は2人の近くに降り立つ

「・・・てめえ、姐さんにでも頼まれたのか？」

「ああ」

紅蓮の鋭い視線に答えた漆黒の翼の男は紅蓮と紫怨の姿をその新緑の瞳に映す

「戦闘狂は構わないが、そういう事は報告したほうがいいんじゃないか？」

「・・・なら、『ラグナ』お前が行けよ」

「・・・」

ラグナと呼ばれた漆黒の翼を持った青年は無言のまま目を伏せるとそのまま空間の扉を開いてその場から消える

「相変わらず、いけすかねえ野郎だ」

「あいつの言い分ももつともだろ」

吐き捨てるように言った紅蓮に紫怨が言う

「あいつも俺達と一緒に、自分のやりたいことをやるためにここを利用してるだけだ・・・それが何かまでは分からないがな」

その言葉に答えずに紫怨はラグナと呼ばれた漆黒の翼を持つ男の消えた方向に視線を向けた

下校時刻、詩織と大貴に並んで学校の制服に身を包んだマリアが

金色の髪をなびかせて2人と共に歩いていた

「それにしても驚きました。マリアさんが転校してくるなんて、それに……」

詩織は翼もなく完全に人間の姿になっているマリアを見る

「これが、私が大貴さんの監視と護衛を仰せつかった理由です」

「人間に化けられるって事か？」

大貴の言葉にマリアは目を伏せて一瞬の沈黙の後、優しく微笑みかける

「……そんなところです」

微笑んだマリアの声に感情がこもっていない事に詩織と大貴は気付かない

「ところで質問があるんですけど」

「何ですか？」

「学校に入るのって普通戸籍とかいりますよね？マリアさんはそんなもの持っていないと思うんですけどどうやって入学したんですか？」

詩織の言葉にマリアは優しく微笑む

本来学校柄の入学には戸籍や住民票など厳正に管理された情報が必要不可欠になる。しかし3日ほど前に天界から来たばかりのマリアがそんなものを持っているはずがない

「詩織さん。私は天界の天使ですよ？」

「はい……？」

首を傾げる詩織にマリアは優しい笑みを浮かべてさらに話を続ける
「取り立てて特別な力も持っていないこの世界の情報を操作したり、記憶を改ざんするなんて造作も無いことです。具体的な手段もお教えしましょうか？フフフフ……」

（ひい！黒い！？マリアさんの笑みが黒いよ！！天使なのに！！）

マリアの笑みの奥底から滲み出る、知ってはならない「何か」を本能的に感じ取った詩織の全身が総毛立つ

「け、結構です……」

「ふふふ・残念」

優しく慈愛に満ちたどす黒い笑みを浮かべたマリアはふと思い出したように微笑む

「ちなみに私は界道家にホームステイしてきた一義さんの知人の娘という事になっています。今後聞かれたときはその様に返してください」

「はい・・・」

マリアの言葉に頷いた詩織は改めて九世界の恐ろしさを身に染みて思い知ったのだった

「やっと見つけたぞ」

「！！！！」

不意に天から響いた声に大貴とマリア、それに少し遅れて詩織が反応する

「！紅蓮・・・！！」

そこに腕を組んで浮かんでいる悪魔「紅蓮」を見て大貴が目を鋭くさせると同時に大貴の姿が一瞬で光魔神のそれに変わる

それと同時にマリアの姿も天使のそれに変わり、背中から2対4枚の純白の翼が広がる

「・・・何だ。いつの間にか増えてやがったか」

マリアの姿を見てもそれは予想の範疇だったのかそれほど驚いた様子も見せずに紅蓮は小さく呟く

（マリアさん、声をかけられるまで反応してなかった・・・人間の姿に化けると知覚能力が落ちるって事？）

マリアに視線を向けた詩織は心中で首を傾げる

紅蓮が声をかけるまでマリアはその存在に気付いた様子も見せなかった。全霊命ファーストにとって相手の神能エニトクローアを知覚して戦うのは基本。まだ力に目覚めて日の浅い大貴はともかくマリアにそれが出来ないはずは無い

「・・・懲りないね、君も」

「全くだ」

「・・・来たか」

紅蓮がその声に視線を向けるとそこには漆黒の衣をなびかせた神魔と純白の翼を広げるクロスが空中に佇んでいた

「マリア!」

「任せて!」

クロスの言葉に応じたマリアの腕の中に翼を持ったマリアの身の丈とほぼ同じ長さを持った杖が召喚される

『エーデルフロス!!!!!!』

自らの光力が武器として具現化したその杖に光力を注ぎ込み、マリアは地面に突き刺す。同時に周囲の空間を風景ごと切り取って隔離し、背後に庇った詩織を光力の結界で覆う

「!」

「何だ。予定より増えてるな」

詩織を除く全員が反応した瞬間、空から聞こえたその言葉に詩織は上空を仰ぎ見る

そこには逆立たせた漆黒の髪の上から額に白い鉢巻を巻いた紫色の瞳の人物が佇んでいた

「あの人は・・・?」

「悪魔です・・・それもかなり強い・・・!」

詩織の言葉にマリアが応じる

ゴットクロア

ファースト

ゴットクロア

その存在が神能で構成されている全霊命にとって神能はその人物そのもの。強ければ強いほど強い。つまり相手の神能を知覚すれば戦わずともその強さをおおよそ測る事が出来る

「紫怨」

「・・・ああ」

紅蓮に紫怨と呼ばれた悪魔が軽く手を上げるとその横に空間の扉が開き、そこから身の丈2メートルはあるつかという筋肉質の男が現れる

無精ひげを生やした威風堂々たる精悍な顔つきをしたその悪魔は、軍服のような服に重戦士を思わせる鎧を纏い歴戦の勇士を思わせる

存在感を放っている

「打ち合わせどおりに頼むぜ」

「・・・ああ」

紅蓮の言葉に頷いた紫怨は神魔に向かい合いその手に自身の魔力を武器として具現化させる

『天星！！』

それは紫怨よりも少し長いトライデントを思わせるシルエットを持つ武器。中央の刀身は剣、両側は斧を思わせるその武器は槍と剣と斧を足したような融合武器

それに応じるように神魔はその手に漆黒の刀身を持つ大刀を持つ槍「大槍刀」を顕現させる

『滅神！！！！』

「俺の相手はお前つて事か・・・！」

目の前に立ちはだかった威風堂々たる大男を前にクロスはその手に自分の身の丈ほどもある両刃の白銀の聖大剣を召喚する

『クロスハート！！』

それをも見た威風堂々たる男は自分の身の丈よりも長く先端が数倍の太さになつている棍棒を召喚する

「『臥角』だ・・・そしてその武器『破天』！！・・・参る！！！！』

「神魔、クロス！！」

それぞれの向かい合った神魔とクロスの元に駆け寄ろうとする大貴の前に紅蓮が立ちはだかる

「てめえの相手は俺だぜ！」

「・・・っ！」

戦意をむき出して凶悪な笑みを浮かべる紅蓮に大貴はその手に武器である刀「太極神」を召喚する

「そついや、俺の武器の名前を教えてなかったな・・・『斬軌』。これが俺の戦意だ！！！」

自身の魔力を纏わせた漆黒の剥き身の刀で斬りかかる紅蓮の斬撃を大貴は光魔神の神能太極ゴットクロアールを纏わせた刀で受ける

「ぐっ……！」

「前よりはマシになってるが……まだまだだ！」

黒の斬撃と黒と白の斬撃。2つの力がぶつかり合って拮抗し、力任せに振りぬいた紅蓮の刃が大貴の身体を吹き飛ばす

「はあっ！！！」

紅蓮が魔力を込めた剣を振るうとその軌道にあわせて全てを破壊する意志の込められた魔力によって生み出された漆黒の刃が放たれる

「……っ！」

その漆黒の刃を純白に染められた大貴の刀が斬り裂いて消滅させる

「……ほう」

それを見て紅蓮は口元に笑みを刻む

「……何とか上手くいったか」

いう大貴の脳裏にクロスとの訓練が思い出される

「お前、自分の力の特性をちゃんと掴んでるか？」

訓練の中でクロスという言葉に大貴は目を向ける

「力の特性？」

「ったく、いくら力で全てをねじ伏せるのが全霊命おれたちの戦い方だとは言ってもただ力任せに神能ゴットクロアを振り回せばいいって訳じゃねえんだ

光力には光力の、魔力には魔力の向いている力がある。それ以外に同じ光力でも個人によつて得手不得手なんかがある。ましてお前の太極オは神イルの力。俺達全霊命ファーストよりも明確に特性があるはずだ

「太極おれのちからの特性……」

大貴は自分の手から湧き出る黒と白の力を見て呟く

「普通は感覚で分かるもんなんだけどな」

「んな事言われてもな……」

「なら自分の力を見つめなおしてみたら？」

クロスという言葉に首を傾げる大貴にマリアと共にそれを見ていた神魔が声をかける

「自分の力・・・」

呟いて自分の身体から立ち昇る黒と白の力に目を落とす

光魔神。それは人間を創造した神にして「光」と「闇」の力を同時に行使するこの世で唯一の存在

《光と闇を同時に・・・》

《光》と《闇》を

「！そういえば」

ふと大貴の脳裏にかつてマリアが説明してくれた「光」と「闇」の神能の話が甦ってくる

《光に比べて闇の力はより強大な力を持ちます。その代わりに光の力は闇の力に対して常に有利になる特性を持っています

具体的には光1に対して闇10で互角くらいですね。だから神能ゴットクロアの総力ではクロスより神魔さんのほうが10倍以上離れています。光の力の特性によって二人の実力はほぼ互角になっているという事です》

（光と闇の力を同時に仕えるって事は・・・別々に使う事も出来るかもしれない・・・）

大貴は目の前に立つ紅蓮に純白に染まった太極オールドの力を纏った刀の刀身を向けて構える

「なるほど・・・光と闇の力を個別に行使することもできるのか・・・面白い」

目の前で光の力を放つ大貴に紅蓮は凶悪な笑みを浮かべその身体から魔力の波動を噴き上がらせる

「・・・1つ訊いてもいいか？」

「何だ？」

強大な漆黒の魔力を身体から噴き上げている紅蓮に向かい合いながら大貴はゆつくりと口を開く

「お前たちは何のために戦ってるんだ？」

「！・・・」

その言葉に紅蓮はわずかに眉をひそめた

戦う理由

それはマリアがやって来た翌日の界道家の食卓での事

「そういえば、紅蓮さんたちは何で大貴と戦ってるの？」

不意に尋ねた詩織の言葉に大貴は箸を止める

「言われてみれば・・・何でだ？」

大貴にとって紅蓮は最初に会った時に命を狙われた相手。

レドと現れた時も自分を狙っていたため、いつしか大貴の中で紅

蓮「敵という図式が無意識に出来上がってしまった

「神魔さん」

答えを求めるように視線を向けてきた詩織に湯呑みに入ったお茶を飲み干して神魔は優しく微笑む

「さあ？」

「さあ、ってそんな事でいいんですか？」

詩織の言葉にクロスが口を開く

「武器を持って向かって襲ってくる奴と戦わないわけにはいかない
だろ？こつちだってただ殺されてやるわけにはいかないんだからな」

「それはそうかもしれないけど・・・」

「確かにやむをえない事情で戦っている場合もあるでしょうが、あなたの方から見て紅蓮という悪魔はそういう事情を抱えているように見えましたか？」

マリアの言葉に詩織と大貴は同時に紅蓮の姿を思い出す

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

戦いに歓喜し、より強い強者と戦う事を欲する眼、獣の笑み。それは心の底から戦いを楽しんでいるようにしか思えない

「・・・・・・・・えつと・・・・・・・・」

「そんなに気になるなら直接訊いてみたら？」

それでも尚難しい顔をしている2人に神魔が微笑んだ

「そんな事聞いてどうする？」

大貴の質問に紅蓮はまるで興味がなにかのような表情を見せて剣先を揺らすように弄びながら真つ直ぐに視線で大貴を射抜く

「お前が何で俺に戦いを挑んでくるのかが知りたい」

「お前が光魔神だからだ」

大貴の言葉に紅蓮が端的に返す

「どういう意味だ？」

「強い奴と戦う！弱い奴とも戦う！！戦い続ける！！俺はそのために組織に入ったんだからな」

（ただの戦闘狂か・・・！）

紅蓮の浮かべた笑みに大貴から放たれていた戦意に研ぎ澄まされた太極オールドの力が緩やかに消えていく

「！何のつもりだ？」

「俺はそんな理由で戦う気は無い」

紅蓮の言葉に大貴は手に持っていた刀も消し去る

「馬鹿野郎！戦闘体勢を解くな！！！」

クロスが怒号を張り上げた瞬間、大貴の身体が光を遙かに上回る紅蓮の剣によつて袈裟懸けに斬り裂かれる

「・・・がつ！！」

「大貴！！」

身体から真紅の血炎を上げて大貴が空中で体勢と崩す

「どこを見ている？」

「つ！！」

それを見たクロスが大貴に駆け寄ろうとするのを横から振りぬかれた臥角の棍棒が捉え、何かが潰れるような嫌な音と共にクロスの身体が吹き飛ばされる

「ぐっ、あああああっ」

臥角の魔力が込められた棍によつて吹き飛ばされたクロスはその

まま地面に叩きつけられ、爆音と衝撃を上げて切り取られた空間の中にある街並みを粉々に粉碎する

「クロ・・・！」

声をあげ、思わずクロスの元に駆け寄ろうとしたマリアは唇を噛みしめて踏みとどまると反射的に広げていた翼を折りたたむ

(マリアさん、私のために・・・)

マリアに結界で守られている詩織はマリアがクロスの元へ駆け寄らなかつた理由にすぐに気付き、目の前にある4枚の翼を持った華奢な背中に視線を送る

「クロス！！」

それを見ていた大貴は身体から吹き上がる血炎を手で押さえながらクロスが吹き飛ばされた方向に視線を送る

手加減したらしく紅蓮に切られた傷は血こそ出ていても大貴の命を奪うほどの物ではない。それは大貴との戦いを求めて止まない紅蓮の意志の表れだろう

「俺がその気ならお前は死んでいた。解るか？お前に戦う気があるうとなかろうと目の前に戦意を持った奴がいる以上その刃はお前を殺しに来る

戦意を持った敵をお前が倒さない以上、その敵の刃はお前だけじゃなくその周りにも及ぶ・・・こんな風にな」

そう言った次の瞬間、紅蓮が凶悪な笑みを浮かべる

「！まさか・・・」

大貴が目を見開くと同時に紅蓮の視線の先でクロスを吹き飛ばして戦う相手のいなくなった臥角が詩織を守って結界を展開しているマリアに向かって超光速で襲いかかる

「待・・・っ！」

それを引きとめようとした大貴の前に紅蓮が立ちはだかる

「おいおい、俺と戦うのが先だろう？」

「・・・てめえ」

歯軋りをする大貴の手に刀身を黒と白に染めた刀が顕現される

「！」

向かってくる臥角に気付かない筈もなくマリアは自分の周囲に無数の光の星を出現させてその星から極大の光力の砲撃を放つ

「ほう。出来るじゃねえか」

自分に向かつて放たれた無数の光力の砲撃に口元に笑みを刻んだ臥角は全身から漆黒の魔力を噴き出して棍の先端に収束させ、凝縮させる

臥角の魔力を注ぎ込まれた棍の先端が全てを粉碎する意志を宿した魔力の暴風を纏って乱回転し、それによって光力の砲撃を粉碎しながら光力の砲撃の中をマリアに向かつて一直線に突き進む

「っ！」

光力の砲撃を砕きながら自分に向かつて突き進んで来る臥角を見たマリアは瞬時に自分の前に光力で構成された半透明のレンズ状の防壁を展開する

マリアが光力の防壁を展開させると同時に乱回転する臥角の棍の先端がそれに激突し、相殺された魔力と光力を撒き散らしながら飛び散る

（っ、重い・・・！）

いかに光力や魔力といった^{ゴットクロア}神能が使用者によって破壊対象が限定されていると言ってもそこに込められた意志はむき出しのままだ

マリアの展開した光力の防壁に阻まれる臥角の攻撃は破壊対象を完全に限定しており、周囲に破壊の余波を撒き散らす事はない。マリアの防壁もまた周囲への被害を完全に遮断している

しかしこの世界の最高位の存在である悪魔の力、魔力に込められたあまりにも強力な「破壊の意志」は物理的な破壊力を持ち、それだけで周囲の町並みを粉々に粉碎していく

（は、話では聞いてたけど、意志が世界に物理的に現象として作用するなんて・・・）

砕け散る町並みの風景を見ながらマリアの結界の中で詩織は息を呑む

存在として最高位に属する全霊命ファーストは神能を使わなくてもその意志が世界に現象として顕現する。破壊の意志を持てば、世界にあるあらゆる物質を「破壊」し、「殺意」を持てば殺気や殺意ではない、その「意志」が生命を殺す。もしこの空間がマリアによって隔離された空間でなければこの意志だけで世界にあるどんな大量殺戮兵器よりも世界を破壊していただろう

「おおおおおおつ!!」

雄たけびと共に臥角の放った魔力を纏って乱回転する破壊の棍の一撃がマリアの防壁を凌駕して光力の防壁を粉碎する

「っ!!」

マリアの防壁を粉碎した臥角の棍の先端がマリアに向かって走り、その身体を捉えて漆黒の嵐を巻き起こす

「きゃあっ!!」

視界を漆黒の魔力に覆いつくされて詩織は反射的に腕で顔を覆う

「マリア・・・」

「詩織さん!!」

臥角が巻き起こした漆黒の爆発に歪にひしゃげた腕と翼から血炎を立ち昇らせたクロスが声を詰まらせ、紫怨と戦う神魔が目を見開く

その視界を覆いつくす程の魔力の奔流の中から白金の光力に包まれたマリアが詩織を脇に抱えるようにして後方へ飛翔する

「・・・やるな」

魔力の黒い嵐の中から現れた臥角が棍棒を地面に突き立てる

臥角の棍の先端がマリアを捉える寸前、それを反射的に手に顕現させた杖で防いだマリアは翼をはためかせて後方へ飛翔し、自身の結界で包んできた詩織を抱えてさらに後方へ移動して臥角の間合いから外れたのだ

「大丈夫ですか？詩織さん」

臥角から距離を取って地面に下り立ったマリアは腕で抱えていた詩織をその場に下ろして臥角のほうを向いたままで静かに声をかける

「マリアさん・・・」

マリアと詩織を包んでいる結界の中でマリアから下ろされた詩織はマリアの細くしなやかな右腕から赤い血炎が上がっているのを見て息を詰まらせる

「・・・さすがに片腕であの一撃の威力は殺しきれませんでしたね・・・」

呟いたマリアの腕に光力が収束し、淡く発光を始めたかと思うとマリアの腕の傷が詩織に目でも視認できるほどの速度で復元されていく

「させるか!」

「!」

マリアが傷の修復を始めたのを見て臥角は再び棍に魔力を込めてマリアに向かっていく

一瞬でマリアとの間合いを詰めた臥角はその棍をまるで鞭のようにしなやかに操り、四方八方から連続攻撃を仕掛ける

「っ!」

まるで鞭のようにしななって襲い掛かってくる臥角の棍の乱撃を光力をまとわせて強化した杖で受け止める

しかし元々の力が違うのか、その攻撃をかるうじて防ぐ事ができてもマリアの身体がその威力によってわずかに宙を舞う

(威力はさっきの方が上だけど早くて不規則、このままじゃ・・・)

言うが早いか叩きつけられた強い意志を込められた凄まじい威力を持つ臥角の棍がマリアの身体をわずかに横にずらし、マリアの結界を捉えて、蜘蛛の巣のような細かなヒビを作ってマリアの結界を破損させる

「きゃあっ!」

マリアの結界が碎かれる音に耳を塞いで反射的にその場につづくまる

「……！」

結界の破損もその前にたちはだかたるマリアによって一瞬で復元され、臥角の放つ殺気や意志が詩織の命を奪うのを阻む

しかし次々に止む事もなく降り注ぐ棍棒の連続攻撃を捌きながら、その限界を越える攻撃が詩織を包み込んでいる結界を徐々に打ち砕いていく

「っ、っ、……！」

魔力の暴風を伴った攻撃が四方八方から縦横無尽にマリアに迫る。その攻撃がただでさえ詩織を守る結界と空間隔離に光力を割いているマリアの光力を徐々に削り、今にも結界を砕きそうにヒビを刻み込む

同時に破壊と殺傷の意志を伴った魔力の暴風はマリアの細く華奢な身体を傷つけ、真紅の血炎を空中に舞い踊らせる

「マリアさん！」

「大、丈夫です……そのままです！」

言いながらマリアは臥角の攻撃を阻んで立ちはだかる

「その心意気は買おう。だが、これで終わらせる！」

そう言っつて臥角は乱回転させた魔力を棍棒に宿らせて収束し、触れるモノ全てを破壊し尽くす破壊の渦を巻き起こす

「……っ！」

「今の光力で俺の最大の一撃を防げるか？」

破壊の渦を待とう臥角にマリアは小さく唇を噛みしめると詩織を守る結界と隔離した空間を維持できるだけの光力を残して自身の全霊の光力を吹き上がらせる

金色を帯びた白色の光嵐がマリアの身体を包み、臥角が巻き起こす漆黒の暴嵐と激突して相殺する

（ダメ、敵の魔力のほうが大きい……止められない）

相手の「力」を感知する事が出来る全霊命ファーストは戦わずともその力の大きさを比べるだけで相手との力量差を把握できる

今のマリアの光力で臥角の魔力に立ち向かうという事は竜巻に蟻

が突っ込むようなものだ。荒れ狂う魔力の渦に呑み込まれて跡形もなく破壊されるのは目に見えている

「いくぞ」

漆黒の暴嵐を纏う臥角が純粹な殺気をマリアに向けた

(駄目だ・・・マリアさんの光力じゃあいつを止められない)

紫怨の持つ槍と剣と斧の融合した長柄武器と身の丈ほどの巨大な黒い両刃刀を持った槍「大槍刀」の刃を激突させて神魔は地上で行われているその戦いを知覚する

「あれじゃ・・・戦いにならないな」

1度視線を下に向けて神魔と同じ事を言った紫怨は神魔に向かい合う

今の2人の力の差は誰が見ても勝敗が明らかかなほどに開いている。運や技術で補うにしても単純な威力だけは補いようがない

(このままじゃ・・・マリアさんと詩織さん2人とも死ぬ・・・よくて瀕死のマリアさんが残る程度)

神魔は目の前の紫怨と眼下で戦っている臥角とマリアに知覚を向ける

臥角の放つ魔力の一撃は恐らくマリアの全力の防壁や攻撃を呑み込んでマリアと詩織を守る結界に直撃する

今の魔力から想定される破壊力ならばマリアを呑み込み、結界を碎き、詩織を魔力の波動が喰らってしまふ。もし破壊力を持った魔力の波動に呑み込まれれば詩織の方は確実に助からない

(このままじゃ、詩織さんは確実に死ぬ)

2人の力の激突は2人の死、もしくはマリアが何とか生き残るかもしれないという可能性しかない

(詩織さんが・・・死ぬ)

その言葉を脳裏に思い浮かべた神魔は心臓を握りつぶされるような感覚に見舞われる

「・・・させるか」

「？」

小さく呟いた神魔の言葉に紫怨はかすかに眉根を寄せる

瞬間、目の前で空に留まっている神魔の身体から漆黑よりも尚黒い魔力が吹き上がる

(！何だ！？魔力の質が変わった・・・！？)

紫怨は瞠目する

今までも神魔は決して手を抜いて戦ってなどいなかったはずだ。

しかし今目の前で吹き上がる魔力は決して強大になったりすることこそないものの今までは異質な物へと塗り変えられていた

(・・・闇)

神魔の魔力はまさに「闇」と表現するに相応しく、他に形容する言葉のない純粹なる闇の神能^{ゴットクロア}

目の前に立つ敵を殺傷する一片の曇りのない純粹な殺意も、破壊の意志も、その魔力に込められているはずの「意志」が全く読み取れない。それはまるで底の見えない無限の無明

「また死なせてたまるか」

無意識に半歩にもならないほど後ずさっていた紫怨の耳に神魔の言葉が響く

「！」

そして次の瞬間、神魔の姿は漆黑の流星となり、光を遙かに凌ぐ速度でマリアと詩織の元へと移動しようとする

「そうはいくか！」

その神魔の動きに一瞬で反応した紫怨は神魔とマリアの間に立ちはだかり、魔力を込めた剣と斧の刃をもつ槍を構える

一瞬気圧されこそしたが、魔力の質が変わっても決して「格」が上がったわけではなく、強大な力に変貌を遂げたわけでもない。実力そのものは今までの神魔と何ら変わらない

「退け」

静かで抑制の効いた声音。しかしその声と共に纏う魔力が深淵、闇よりも暗い闇となって紫怨を威圧し、漆黑の魔力を纏った大槍刀

を振り上げた神魔は容赦なく力任せに振り下ろす

「っ！」

その漆黒の一撃を紫怨は自身の魔力を纏わせた武器で真正面から迎え撃つ

2つの漆黒の魔力が真正面から激突し、全てを滅ぼす漆黒の闇の渦を巻き起こす

「おおおおっ」

神魔と紫怨の武器がせめぎあい、漆黒の波動を放って荒れ狂う。

神魔はただ力任せに大槍刀の刀身を押し込む

「っ・・・押される!？」

神魔の身体から吹き上がる全ての意志を塗り潰す漆黒の意志に染まった魔力が紫怨を圧倒しせめぎあっていた刀身が徐々に押されていく

その一瞬で力勝負は不利と判断した紫怨は自らの周囲に無数の魔力の星を作り出す

それは極大の魔力の砲撃を放つ星。いかに神魔とはいえ、ほとんど密着状態に近いこの距離で受ければただではすまない。しかし神魔はそれを前にして距離を取ることはおるか迎撃する様子すら見せない

「なっ!？」

ただ魔力を放出し、力任せに押し通ろうとする神魔に目を見開く紫怨はそのまま周囲に生み出していた漆黒の星の力を解放する

同時に漆黒の星から放たれた魔力の砲撃が長柄武器の刀身を合わせるほどのほぼ密着状態に近い間合いで放たれ、そのままかわす事すらしようとしないう神魔に直撃して漆黒の爆発を引き起こす

(避けない、だと?)

自身の魔力で放った砲撃の爆発に呑み込まれて紫怨は目を見開く自らの存在の力そのものであり、自身の意志で趣向性を持たせている^{コックトコロ}神能は自分自身を決して傷つけることは無い。そのため、その爆発に巻き込まれても紫怨には傷一つつかない

「・・・！」

目の前で起きた漆黒の爆発を見ていた紫怨は息を呑む
神魔の魔力は紫怨と同等。その攻撃を防御せずにこの距離で直撃させられれば命は無い。仮に命を繋いだとしてもしばらくは動けないほどの傷を負う事になる

筈だった。いや、そのはずなのだ

(！・・・まさか)

紫怨は目を見開く

爆発に呑み込まれても神魔の魔力は感知できる。ファースト全霊命は相手の力を知覚する事によってそれによって万全なのか、大きな傷を負っているのか、瀕死なのかといったある程度相手の状態を把握できる

「！！！」

背筋を撫でる無明の魔力の気配に反射的に紫怨は武器をかまえる
しかしそれでも半瞬だけ遅かった。神魔の魔力の気配を察知し、身構えたときにはすでにその身体が大槍刀の漆黒の刀身で逆袈裟に切り裂かれていた

「っ！！！」

身体から血炎を吹き出す紫怨の顔を漆黒の爆発の中から伸びてきた神魔の手が鷲づかみにする

(なるほど・・・それがお前の本性か・・・！)

顔を掴まれた指の間から神魔を見た紫怨は一瞬で理解する

漆黒の眼の中に爛々と光る金色の瞳。無明の魔力の闇に包まれ、その姿も判然としない神魔の姿の中でその金色の瞳だけが爛々と光り、否が応でも目を惹く

次の瞬間、紫怨の顔を掴む神魔の手の中で漆黒の闇が光り、紫怨の頭部が漆黒の爆発に呑み込まれる

「・・・がっ・・・」

神魔が自分の攻撃を伏せいた手段と同じように反射的に魔力を噴き出して自分の周りに魔力の幕を作り出して魔力砲の威力を限界まで削ぎ落とす

しかし完全に防ぎきる事は叶わず、頭部に神魔の魔力の残滓を絡ませた紫怨はそのまま地面にまで吹き飛ばされて漆黒の爆発に巻き込まれる

「！」

その一瞬で反応した臥角は魔力の暴嵐を纏わせた棍をマリアとは逆の方向へ向ける

それと同時にその棍の柄に漆黒の刀身が激突し、轟音と魔力の波動を撒き散らして天に昇る

「・・・惜しかったな」

大槍刀を振りかざして攻撃してきた神魔に臥角が言う

余裕を感じさせる口調だが、それとは対照的にその表情に余裕は無い

「神魔さん」

神魔の姿を見て止めた詩織は思わず声を上げる

その言葉に反応して神魔は一瞬にして臥角の後ろ、詩織を守る結界を張り巡らせているマリアを背に2人を庇うように立つ

「悪魔のお前がゆりかごの人間と天使を守るのか？」

臥角の言葉に神魔は大槍刀を肩に担ぐように持って小さく笑みを浮かべる

「そんなはずないでしょ？僕は詩織さんとマリアさんを守ってるんだよ」

「・・・ほっ」

「・・・っ」

神魔の言葉に臥角は興味深げに小さく笑みを浮かべ、その背後で詩織はほんのりと頬を赤らめる

「詩織さん。怪我は無い？」

「あ、はい。大丈夫です」

神魔に問いかけられた詩織は一瞬呆けていた意識を取り戻して熱にうなされたように何度か頷く

「私には聞いてくれないんですか？」

この命をかけた戦場でなにやら甘い雰囲気纏っている詩織の様子にマリアは不満そうに口を尖らせる

「だって見るからに怪我してるし・・・」

神魔はマリアに視線を送って身体から立ち上る血炎を見て言う

「それはそうかもしれませんが・・・」

大きな怪我は無いがこれだけの怪我をしている相手に「怪我は無い」と聞くのも憚られる

「それにそれを聞くのは僕の役目じゃないでしょ？」

「え？」

神魔の言葉にその意味を知覚したマリアが視線を送るとそこには左腕と左翼をひしゃげさせたままで空を飛翔してくるクロスの姿があった

「マリア！」

腕と翼の治癒もろくにせず必死の形相でマリアの元へ降り立ったクロスは身体中からわずかに血炎を立ち昇らせるマリアを見て切なそうな表情を浮かべる

「悪い、遅くなった。傷は大丈夫か？」

「・・・クロス」

そのクロスの言葉にマリアの頬がわずかに赤く染まる

「大丈夫。そんな大怪我してる人に心配されるほどの怪我じゃないんだから」

言葉とは裏腹に嬉しそうに微笑んでマリアは近寄ってきたクロスに手を掲げて治癒の光を放つ

（そっか・・・この2人って・・・）

その様子を見て詩織は結界の中で小さく微笑む

柔らかく甘い空気を纏って頬を染め、互いに視線を送っている2人は誰が見ても相思相愛の恋人のようにしか見えない

「天使と悪魔が協力か・・・光魔神はともかく、何の力も無いその人間を守るほどの価値があるのか？」

その様子を見ていた臥角はクロスとマリアから神魔に視線を移す。光魔神には守る価値はもちろん、戦う力もある。やがてこの世界で最強の存在になるのなら尚の事。しかしマリアや神魔が守っているゆりかご人間には戦う力も特殊な能力も無い。言うなればただの足手まといでしかない。

「分かってないな。戦う力があることや特殊な力がある事が誰かを守る理由じゃないでしょ？」

その言葉に神魔は小さく溜息をついて微笑む

「・・・なら、お前にとってその女はそれだけの価値があるということか？」

臥角の言葉に神魔は背中越しに1度詩織に視線を送ると再び臥角に視線を戻す

「そうだよ。僕は詩織さんを守るって自分で決めてるんだ」

「・・・っ?!?!?」

その言葉に詩織の顔がこれ以上無いと言うほど赤くなる

(え?神魔さん?それって・・・それって・・・)

早鐘のように打つ鼓動が世界の全ての音をかき消し、詩織の目はいつの間にか神魔だけを映しており、その姿に視線と心が釘付けになる

そしてその神魔の言葉と自分の鼓動に詩織は否が応でも自分の気持ちを認識し気づかされてしまう

(そっか。やっぱり・・・やっぱり私・・・)

いつの間にか神魔の姿を追っていた。その言葉に、仕草に今まで感じた事のない気持ちを抱き「もしかしたら」と思っても「気のせいだ」と目をそらしてきた

しかし神魔に「特別だ」と言われて自分の心と身体が幸福と歓喜に打ち震えるのが分かる。

詩織も今年で15歳。今までそれを告げることこそ無かったものの子供ながらに小さくても確かな恋心を抱いた事もある。しかし今感じる気持ちはそんなものが霞んでしまうほど確かにはっきりと詩織

の心を占領している

(神魔さんのこと好きなんだ)

生まれて初めて理解する確かな「愛情を宿した恋」に詩織は熱に浮かされたようにその相手である神魔を眼で追ってしまっ

「.....」

クロスを治療しながらその様子を背中で感じていたマリアは静かに2人に視線を送る

「さて。悪いけど早く終わらせてもらっよ」

「やってみろ」

大槍刀の先端を臥角向けて不敵な笑みを浮かべる神魔に臥角は口元に獣の笑みを浮かべた

戦う意味

瓦礫を押しつけて紫怨は身体を起こす

「・・・さっきのはやばかったな」

神魔に0距離で顔面に魔力砲を撃ち込まれた事を思い出しながら
ゆっくりと立ち上がると口端から上がっている赤い血炎を拭う

(神魔か・・・)

その脳裏に漆黒の意志を宿した神魔の姿が思い出される

それは天使の女とその天使が結界で守っている人間の危機を察知
して発現した神魔の本質。失った者だけが知る想い

「・・・俺と似てるな」

紫怨の脳裏に金色の髪がよぎる。柔らに波打つその金色の髪を持
った人物は以前のように紫怨に微笑みかけてはくれない

「・・・ちっ」

切ない表情を浮かべているその人物を思い出し、それと共に湧き
上がるやりきれない感情に紫怨は吐き捨てるように舌打ちした

漆黒の刀と白い光を宿した刀が激突する

「どうやらお前の思惑通りにはいかなかったみたいだな！」

そう言っ大貴は白い太極オウルの力を宿した刀を振るう

「・・・紫怨を退けるとは計算外だったな」

魔力を宿した刀でその攻撃を弾いて紅蓮は臥角と戦っている神魔
に知覚を向ける

神魔は軽い傷こそ負っているものの、それほど深手は負っていない。
知覚で紫怨の存在も感じる事が出来るため紫怨も命に関わるよ
うな傷は負っていないだろう

「納得いかねえ」

最上段から光と闇、黒と白の力を宿した刀を振り下ろす

「何がだ？」

その一撃を漆黒の魔力を宿した刀で弾き同時に腕から魔力の砲撃を大貴に向けて放つ

「こんな戦いに意味なんて無いだろ！？」

紅蓮の放った魔力砲を半身捻ってかわした大貴はそのまま刀から太極オールドの力を吹き上がらせる。光と闇、黒と白の力が絡み合って渦を巻き、交わる事無く黒と白2色の竜巻へと変化する

「意味はある。俺には十分すぎるほどの意味が！」

獣の笑みで言い放つ紅蓮に大貴は刀に絡みついて天を衝く黒と白の竜巻をそのまま斬撃の波動として放つ

交わる事のない白と黒の力がまるで絡み合う龍のように空間を塗り潰しながら紅蓮に向かって放たれ、紅蓮は全身から魔力をまるで火山の噴火のように噴き出させるとその魔力を武器に込めて大貴の斬撃波を一刀の下に相殺する

「そのために俺はこの組織に入ったんだ」

「・・・組織？」

紅蓮の言葉に大貴は眉根を寄せる

「何だ、あいつらから教えられてないのか？」

「九世界反体制派組織『十世界』じゅっせかいそれが俺の所属する世界だ」

「十、世界・・・？」

（九世界のテロリストみたいなものか？）

首を傾げる大貴に紅蓮はさらに話を続ける

「正式な名称は『十方唯一世界』じゅっぽうゆいいつせかい。光と闇、全靈命ファーストと半靈命ネクスト、存在や種族の差別を失くし、1つの世界として協力し合い争いのない世界を作る。それが十世界の目的だ」

「・・・なっ！？」

紅蓮の言葉に大貴は目を見開いて息を呑む

「九世界は光と闇の世界に別れて九世界が創世された当初から争い

続けてきた。『相手が光だから、闇だから』って理由で戦うことが当然になつている今の世界からそういうのを失くしたいってのがうちのボスの言い分だ」

「じゃあ、何でお前は・・・」

紅蓮の言葉に大貴は声をわずかに荒げる

紅蓮が所属する「十世界」という組織が九世界の争いを失くそうとする組織ならばそこに所属しているはずの紅蓮と自分が今戦う理由は無いはずだ

それにもかかわらず紅蓮は戦いを仕掛け、戦いに歓喜している

「さつきも言つただろう？ 『九世界反体制組織』だと」

「！」

「どんなにそれらしい言葉を並べても十世界が掲げる思想は九世界から拒絶されたモノでしかない。

上の奴らや志の高い奴は本気でそれを成し遂げようとしているらしいが、俺にとつてはそんなものはどうでもいい。ここにいれば戦いの方からやってきてくれるからな」

九世界反体制組織である「十世界」は言うなれば九世界全てから敵視されている組織。故にこの組織にいれば九世界正規の強者たちと戦う事ができる。戦う相手のほうからやってくる

戦いに生きる喜びを見出す紅蓮にとつて戦う相手を探す必要もなく、十世界を滅ぼそうとする九世界の強者達はさまざま理由で戦いを避けたりする事がない。紅蓮にとつて十世界は戦いを求める場所としてこれ以上無いほどに都合な組織だった

「戦うために組織を利用して言うのか？」

刀を握る大貴の手にわずかに力がこもる

「珍しい事じゃないさ。俺も、あっちにいる紫怨も、死んだレドも自分の目的のためにこの組織を利用してに過ぎない・・・まあボスの事は気に入るがな」

紅蓮は微笑んで言う

確かに紅蓮にとつて十世界は戦うための都合のよい組織でしか

い。その思想も否定まではしなくとも興味が無い

しかし決してただ利用しているだけではない。そうでなければ戦闘狂の紅蓮が戦う相手のいないこのゆりかごの世界に来るはずなどなかったのだから

「俺はボスが気に入ってる。だから十世界の仕事も手伝う。その代わりお前みたいな面白い奴を見つけたときには容赦なく戦う。それが俺の十世界そしきでのやり方だ」

「そんな理屈・・・」

「ならお前は国の誰かの言いなりに生きているのか？」

「!？」

不意に向けられた紅蓮の言葉に大貴は目を見開く

「国の政策や、親や友人の言う事が必ず正しいと思っっているのか？と聞いている」

「・・・っ」

「本当は自分では納得いつていないのに法律だと割り切って仕方なく従った事は無いのか？お前は这个世界の誰もが世界に不満を持っていないといえるか？」

「それが・・・どうした・・・」

紅蓮の言葉を否定してはみたが大貴は内心では分かっていた。分かっってしまった。紅蓮の言葉の意味を

「なら、何故お前は国や誰かに従う？国や社会の仕組みがお前に生活しやすい環境を与えてくれるからだろう？」

お前は国を、社会を利用していないといえるか？たとえその思想が間違っていると感じても多少の不満があってもそれ故に得られるもののために国という入れ物を利用してあるんだらう？」

「・・・っ」

紅蓮の言葉に大貴は唇を噛みしめる

「俺も同じさ。十世界の思想は理解している。ただ賛同はしていない。しかし利用価値があるから利用している・・・何が違う？」

紅蓮が冷め切った目で大貴を見て静かに言う

「そんな事・・・納得できるか・・・」

無意識に刀を握る大貴の手に力が入り、刀の切っ先が軽く震える
「それで良いだろ？」

「!？」

「意志や考えは生きている者の数だけある。同じ意志を持っている奴なんて誰1人いやしない。同じようにお前を守っている神魔もクロスもあの天使の女もその理由まで同じじゃないだろ？」

紅蓮の言葉に大貴は小さく目を見開く

「・・・っ！」

確かに神魔もクロスも自分を守ってくれる。しかしその理由やそこに込められている思いは決して同じではない。

特に本来敵対しあう関係に過ぎない悪魔である神魔と天使であるクロスとマリアは現在ただ利害関係の一致から協力しているに過ぎない

しかし同時に大貴を守るうとして最終的な意志は同じであり、そこに偽りは無い。それは大貴自身も感じている事だ

「そうやって1人1人異なる意志や想いを内包して尚、在り続けられるモノが世界であり、国家であり、集団だ。

それを知っているからこそボスたちは俺達の意志のあり方を認め組織に必要以上の不利益を与えない限り俺達の自由な思想を許してくれている」

紅蓮は大貴に手を差し伸べ、拳を作ってみせる

十世界は最終的に「世界」を作り出すことを目的としている。そこに住まう全ての命ある存在、全ての人の意志を自分達の意味として束縛し、支配すればそれはもはや世界ではない。

だからこそ十世界は組織を利用しようとする紅蓮たちの行いも認めている。もちろん十世界という組織が著しく不利益を被らない範囲で。それこそが紅蓮たちの意志への理解と尊重。それこそが「世界」という多種多様な人々が生きる場所

「多少の反乱因子を内包しても立ってられない組織、まして世界な

ら尚更すぐに潰れるに決まってるだろ？」

不敵に笑う紅蓮に大貴は鋭い視線を向ける

「そんなのお前のただの自分勝手な理屈だ！」

「ああ、そうだな。自分勝手な理屈だ。その何が悪い？」

「・・・何だと？」

「そんなものは十世界でも同じだ。十世界の思想も結局は突き詰めればボスやそれに賛同した連中の自分勝手な理屈だろ？」

「・・・っ」

紅蓮の言葉に大貴は唇を噛みしめる

戦闘狂の紅蓮は大貴にそれなりに筋の通った返答を返してくる。

まさにああ言えばこう言うといった感じではぐらかされる

それは生きてきた年月の差なのか全霊命特有の知識を継承する能力の所為なのかは分からないがこのまま口撃を続けても水掛け論にしかならないのは薄々理解できた

「・・・けどお前たちみたいな奴がいるから十世界って組織は反体制組織って言われるんじゃないのか？」

刀を握る大貴の手が小さく震える

大貴にとって光と闇の争いを失くすという十世界の掲げる理想や思想には十分に共感する事が出来る。そうあればいいと願うことも出来る

しかし紅蓮のように自分勝手な理屈で十世界を利用する者によってそれが妨げられているとすればそれは許しがたく思えてならない

「否定はできないな」

紅蓮は大貴に視線を向けて静かに言う

「不満そうだな。こんな話しても無意味だろ？さっさと戦り合おうぜ。戦う理由なんて戦いたいからでいいだろ？」

大貴と話をするのに飽きてきたのか紅蓮は呆れ混じりに溜息をつく

「お前にとって戦う以上に大切な物は無いのかよ・・・」

「無いな」

大貴の感情を懸命に押し殺した言葉に紅蓮はさもそれが当然のよ

うに返答する

「ふざけるな……！こんな戦いに何の意味があるって言うんだ！？」

大貴はほんの少しだけ強い口調で言う

この平和な国で生まれ育った大貴にとつて戦いや争いというのは知ってはいても対岸の火事ではしかなかった

しかし神魔やクロスと出会い、自らも戦いに巻き込まれ、否応無く命がけの戦いを思い知らされた。目を閉じれば脳裏に浮かぶのは自分達を守るために腕を失って尚立ち続けた神魔の後ろ姿

「意味があるから戦うんじゃない。戦う事に意味があるんだ」

紅蓮の言葉に大貴の手もわずかに震える

「……そんなの……間違ってるだろ」

生まれて初めて自分の無力さを呪い、力を求めた。初めて死の恐怖、戦いの恐怖、家族や親しい者が手の届かないところに逝ってしまふ喪失感と恐怖。それだけが大貴が戦いで得たモノだった

「あ……はいはい。分かった、分かった。俺が間違ってるって事でいいからその間違いを正すためとかつて名分で向かってこいよ。戦う理由があればいいんだろ？」

大貴の言葉に視線を明後日の方向に向けて紅蓮はめんどくさそうに言う

「そついう事じゃないだろ……そんな理由で命を懸けて戦うなんて虚しいだけだろ！？」

紅蓮の投げやりな言葉に大貴は諦めたような口調で静かに言葉を紡ぐ

「……」

その大貴の言葉に紅蓮はしばらくの沈黙の後、大きく溜息をついた

「お前、ゆりかごに毒されたな」

「!?!」

先程までと同じように流されると思っていた紅蓮の予想を裏切る言葉と視線に大貴は思わずわずかに身体を後方に退く

その眼に宿っていたのはあからさまな侮蔑と輕蔑。何かおぞましく汚らわしいモノを見るような視線に大貴は身体を強張らせる

「驕るなよ、糞餓鬼！」

刀を構えて紅蓮は大貴に向かって一直線に空を走る

「！」

光を遙かに越える速度で肉迫した紅蓮の斬撃を刀で受け止めた大貴を紅蓮の金色の瞳が射抜く

「神と呼ばれてになって思い上がったか？」

「！？？」

「俺の意志をお前が勝手に決めて否定するな」

受け止められた刀にさらに魔力を込めて力任せに大貴の刀を弾く
「理解の意味を吐き違えるなよ。お前にとって理解するのは俺がお前の言いなりになることなのか！？」

「！！！」

紅蓮の言葉に大貴は小さく目を見開く

分かり合うということは即ち相手を「理解」する事。しかしそれは同じ理念を持つという意味ではない

「相手の信念と自分のそれがかみ合わないと知った時点ですでに分かり合ってるんだよ！そこから先は自分の意思を押し通したいって
いう自分のエゴだ」

目を見開く大貴の刀に魔力を帯びた紅蓮の刀が叩きつけられる

「お前はお前が言っていることだけが正しくて、それと違った事を言う俺の意志や想いが間違っていると思っているのか！？」

「！！・・・それは・・・」

紅蓮の言葉に大貴が言葉を失う

「分かり合おうとしていないのはどっちだ！？俺はボスもお前も、他の誰の意志も否定はしない。例えそれが気に食わないものでも間違っているなんて言わねえ！」

だが、お前はどうか！？自分の思うとおりになっていないものが気に食わない、言う通りにしない奴が気に食わないか！？

お前はお前自身の考えを他人に押し付けてこれが正しい事だと言
い張って自分にそぐわない者を無理矢理言いなりにしようとしてい
るだけだろうが！」

「・・・っ」

紅蓮は休む事無く斬撃を連続で大貴の刀に撃ち込む

「それらしく耳当たりの良い事を言っているだけでその実、俺やボ
スの想いを勝手に決め付けて自分の思い通りにしたいだけだ！！」

「っ、違うっ！」

大貴は黒と白の力を帯びた刀を振りぬいて紅蓮の斬撃を弾く

「なら、無意識にお前はそうしてるんだ。なお性質が悪いな」

「っ！！」

紅蓮の冷徹な言葉に大貴に目に見えて動揺が浮かぶ

「戦う事に意味が無いだと？それをお前が決めるな！俺たちは自分
の信念に命を懸けて戦っている。俺も、十世界も、神魔も、クロス
も！」

「・・・っ」

紅蓮の刀をかるうじて捌きながら大貴は圧倒的な怒気と殺意を纏
う紅蓮をその視界に捉える

「お前は今、俺達の意志を無慈悲に踏みにじったんだ！俺の意志を
否定し、ボスの意志を否定し、神魔やクロスが抱いたであろう全て
の意志をお前は否定した！！」

互いの武器の刃がぶつかる衝撃と音、そして砕け散った魔力と太
極ルの力の波動が大貴の身体を叩く

「・・・っ、ぐ・・・っ」

紅蓮の一撃に大貴に苦悶の表情が浮かぶ

(今までよりも重い・・・)

ファースト

ユットクロス

全霊命の力神能は使い手の意志の力によってその強度を増す。

紅蓮が強くなったのではなく自身が動揺した事によって太極オールの制御
が甘くなっていた事に大貴が気付ける筈もない

「他人の気持ちをお前が決めるな。お前の気持ちを他人に強要する

な！それをさも当然のように言い放つ貴様には反吐が出る！！」

力任せに叩きつけられた紅蓮の漆黒の刀の刀身が澄んだ音と共に大貴の刀を斬り落とす

武器もまた使用者の意志によって形成される神能ソウルクロアの姿。その意志が緩めば武器の威力も強度も格段に下がり折られやすくなる

「……っ、ごふっ……」

瞬間、大貴の口から真紅の血炎が吹きだし、心臓に刃物をつきたてられたような痛みが胸の中央に奔る

《武器の方は俺達の戦意そのものだ。力が互角でも心が弱いと簡単に折られる上、武器の破損は魂にダメージを与える》

その痛みに大貴の脳裏にクロスの言葉が甦り、瞬時にその意味を理解する

(こっぴどい事か……！)

体勢を崩した大貴を紅蓮の足が空中で蹴りつけ、そのまま急降下した紅蓮は足で朝得込んだ大貴の身体を地面に叩きつける

大貴が地面に叩きつけられると同時に凄まじい衝撃波が発生し、爆音と共に砕かれた街の残骸が天高く舞い上がる

「……っ」

紅蓮に仰向けに踏みつけられた大貴の首筋に紅蓮の刀がそっと当てられる

「お前がやっているのは自分のいう事が正しく他人のそれが間違っているという傲慢を正当化する理解の名を借りた他者の全否定だ」

「……！！」

「堕ちたな、光魔神……」

紅蓮の冷ややかな言葉に大貴はただ目を見開く

「……お前には失望した」

「紅蓮！」

「！」

大貴の首筋に刃を当てていた紅蓮は臥角の言葉に瞬時に反応し、踏みつけていた大貴の上から消える

その瞬間、今まで紅蓮が立っていた場所、その首の位置を魔力を帯びた漆黒の大槍刀の刀身が通り抜ける

刃の先から放たれた漆黒の斬撃が世界を真つ二つに斬り分け、天まで届く漆黒の斬撃の残滓を世界に黒い線として残す

「・・・神魔」

紅蓮に攻撃を仕掛けた人物を見て大貴は思わず声を漏らす

「やけにムキになってたね？たかがゆりかごの人間の戯言に」

神魔が視線を送った先には逆立った真紅の髪を魔力に揺らす紅蓮が静かに立ちはだかっていた

「たかがゆりかごの人間の戯言ではすまない話だ。光^{こいつ}魔神がゆりかごに毒されているって事はな・・・例えいつかはそうじゃなくなるとしても」

(どういう・・・意味だ？)

2人の会話の意味を掴みあぐねている大貴の前で神魔は大貴を一瞥すると再び紅蓮に視線を向ける

「そんなにムキにならなくても大貴君を蝕んでいるゆりかごの毒は彼の成長と共にその内消えるよ」

「神魔・・・」

(ゆりかごの・・・毒？どういう意味だ・・・??)

「・・・大貴君」

神魔は背中越しに大貴の言葉を遮る

「他人を理解するって事は他人の事は理解できないって事を理解する事だよ」

「!・・・」

「人の気持ちなんて他人が理解できるものじゃない。僕達ができるのはせいぜい相手の事を思いやるくらいなんだから」

「・・・神魔・・・」

肩越しに振り向いた神魔は大貴に優しく微笑みかける

「戦いは自分の信念を貫くために他人の信念を否定することだよ。戦わないと大切なモノは手に入らないし、守れない

自分の大切な人が相手にとっても同じでは無いように相手も自分の信念に命を懸けて戦うんだ。僕達はそれを肯定して、でも自分の大切なもののためにそれを否定する」

「……！」

「大貴君は何のために戦いたい？」

「……何の……ために……」

大貴から紅蓮に視線を戻した神魔は大貴に話しかけていたときはかけ離れた殺気と闘気に満ちた視線を向ける

「さて、と……ここからは僕が相手をさせてもらうよ」

「……いいぜ」

神魔に大槍刀の切っ先を向けられた紅蓮は小さく笑みを浮かべる
「僕は大貴君みたいに甘くないよ。武器と殺意を向けてくる以上、容赦しない」

「……上等オ」

神魔の言葉に紅蓮は歓喜に彩られた獣の笑みを口元に刻む

次の瞬間、一瞬にして2人の姿が消えたかと思うと光を遥かに凌ぐ疾さと世界をも容易く滅ぼしてしまう漆黒の魔力が一瞬にして数億、数兆でも数え切れないほどの激突を繰り返し、マリアによって隔離された世界の空を漆黒に塗り潰し、その殺意と破壊の意志が世界を一瞬にして粉碎する

「……っ、何て戦いだ……」

神魔と紅蓮の戦いを見上げながら大貴は息を呑む

ゴットクロア
「……この戦いは大貴が紅蓮と戦っていた時よりも数段上の次元で行われている」

（……これが……本当の全霊命の戦い……）

霊の力の頂点にして究極である神能ゴットパワーは使用者の意志によってその質が定められる。より純粋な想いで染め上げるほど強く、密度の高低力となる

光魔神という九世界屈指の全霊命ファーストとなった大貴では環境的なものの要因なのか未だ彼らのように純粋な戦意や殺意を纏えない。結果その差は能力に著しい差をもたらす

「俺もいつか・・・あんな風になるのか・・・？」

「・・・」

神魔と紅蓮の戦いを見つめながら大貴は内心で小さく呟く

守る力は欲しい。大切なモノを失わないための力を求めたからこそ今自分はこうしてここに存在している

（もし、そうなった時・・・俺は俺のままではいられるのか・・・？）

しかし、自分が光魔神として完成するという事はそれだけ人間から遠ざかっていく事に等しい。決して寿命では尽きない命、老いる事のない存在。

もし自分が光魔神として完全な覚醒をした時、自分は今の自分のままでいられるのか、という心が変わっていくかもしれない事に言葉に出来ない不安と恐怖が大貴の脳裏をよぎる

《大貴君は何のために戦いたい？》

大貴の脳裏には先程の神魔の言葉が甦る

光魔神として覚醒してからはその力を使いこなす事に必死で、自らの命を守る事に懸命で戦う理由など考える暇も無かった。しかしいつまでも目をつぶっているわけには行かない。何のために、何と戦うのかを

「大貴！何しているの！？」

神魔と紅蓮の戦いを呆然と見つめている大貴の耳朵を詩織の声が叩く

「・・・姉貴・・・」

「ぼさつとしてないであんたも戦いなさい！」

思わず呟いた大貴を詩織の声が叱咤する

その言葉に視線を送るとマリアの結界の前で臥角とマリア、クロ
スが、上空では神魔と紅蓮が戦っている

「・・・俺は・・・誰と、何で戦ってるんだ・・・」

大貴は詩織の言葉など聞こえないかのようにただその場で静かに
戦鬪の風に身を晒していた

戦う決意

その瞬間まで考えたことも無かった。考える暇もなかった

ある日「紅蓮」と名乗る「悪魔」という存在に内側に隠された「力」を見つけられ命を狙われた。そして「光魔神」として覚醒した今でも紅蓮は戦いたいからという理由で武器と殺意のこもった確かな戦意を向けてくる

守りたいモノがあつて失いたくないモノがあつたから戦う道を選び、守るために、生きるために強くなろうと決意した

戦いは必要に強いられたからこそ力を磨いてきた。戦いたくは無くても相手が向かつてくるから仕方なく戦い、それが当然であり、「何のために戦うのか」などという考えは大貴の意識の奥に追いやられていた

(・・・そういえば、俺・・・自分で目的もないのに何で戦ってたんだ・・・)

視界に映る2つの漆黒の魔力の激突と魔力と2つの白い光力の激突を瞳に映しながら大貴は呆けたように空を見上げる

「大貴!?!大貴!!!」

マリアの張り巡らせた結界を叩きながら声を上げる詩織の声もまるでそよ風のように耳に留まる事も意識の端にかかることも無く消えていく

(あいつらには・・・目的がある)

紅蓮は強者と戦うという理由が、紫怨や臥角にも十世界の「思想」も彼らの「戦う理由」。神魔やクロス、マリアにも形や立場は違えど何かしらの戦う理由はあるのだろう

(俺には・・・戦う理由が無いんだな・・・)

何かをなしたいわけではない。何か求める物があるわけでもない

死にたくない。家族や友人を守りたいというのも十分な戦う理由だろう。しかしそれは大貴の自発的な意志に基づく「戦意」ではない命を狙われるから死なないように戦う。自分にとって失いたくない人に危害が及ぶから守るために戦う。しかしそれは常に受動的な戦意。「攻撃されるから応戦する」といった程度の物ではない
(俺は・・・何をしたくて戦うんだ・・・?)

大貴は静かに自分の心に問いかける

戦いに理由が必要というわけでは無いだろう。死にたくないから失いたくないから戦うと言うのも十分理由としては成立する。しかしそれは受動的な戦意に過ぎない。だがそれは誰でも同じ。自らの意志で戦うためにはそれ以上の理由が要る

(俺は・・・戦って何をしたい? どういう風になりたくて戦う・・・?)

大貴は無言のまま自分自身に問いかける

《他人を理解するって事は他人の事は理解できないって事を理解する事だよ》

《戦いは自分の信念を貫くために他人の信念を否定することだよ》

《相手も自分の信念に命を懸けて戦うんだ。僕達はそれを肯定して、でも自分の大切なもののためにそれを否定する》

脳裏に甦ってくるのは神魔の言葉

(・・・そうだよな・・・神魔の言う通りだ・・・)

大貴は心の中で呟く。

戦いとは自分の信念を相手のそれとぶつけ合うこと。正義のために戦うのではない。戦う理由を正義という言葉で飾り立てているに過ぎない

ならば自分自身にも必要になる。飾り立てるだけの信念が。自分のそのために他者のそれを踏みにじる覚悟が

《俺の意志をお前が勝手に決めて否定するな》

紅蓮の言葉が脳裏をよぎる

(・・・あいつにはあいつの戦う理由があった。それは俺達の価値観とは違つて、でもそれがあいつらにとっては正しいもの。それを俺が認められないからなんて理由で否定されたらいい気分はしないな)

見上げた空は神魔と紅蓮の魔力の激突によって光すら届かないほどの黒く塗り潰されている

(・・・それでも・・・俺は・・・)

「・・・!!!」

静かに考えをめぐらせていた大貴は目を見開く

「大貴の馬鹿！いつまでそうしてるの!？」

考え事に集中していた所為か今まで届かなかった詩織の声の不意に大貴の耳朵を叩く

「立ちなさ・・・い」

詩織が呆気にとられる前で大貴はゆっくりと立ち上がり、その両脚でしっかりと大地を踏みしめる

「そうか・・・そうだな・・・」

「？」

大貴の呟きに詩織は首をかしげて怪訝そうな表情を浮かべる

一方で憑き物が落ちたようだがすがしい表情を浮かべる大貴は上空で戦いを繰り広げる神魔と紅蓮に視線を向ける

(俺は・・・俺のしたいことをするために戦うんだ・・・!)

その手に黒と白の刀身を持つ自らの神能コックトロアが戦うために顕現した刀、太極神を握り締めると大貴はその背に左右非対称の黒と白の翼を顕現させると羽ばたき一つで一瞬にしてその場から姿を消す

「・・・急にどうしたの・・・？」

マリアが生成した結界の中で呆気にとられる詩織をよそに臥角と戦いを繰り広げているクロスとマリアはその様子を知覚して口元に

薄く笑みを浮かべる

「・・・あいつに絡み付いていたゆりかごの毒が薄くなった・・・この分なら真の光魔神としての覚醒も近いかもな」

臥角の棍を光力を帯びた大剣で切り払ったクロスはそう呟き、この言葉は魔力と光力の渦に呑み込まれて夢幻のように消えていく

紅蓮の刃と神魔の刀身が漆黒の魔力を纏って激突し、漆黒に世界を彩る。破壊対象を制御された世界を容易く滅ぼす闇は二人の間でせめぎ合い霧散する

「クク・・・やはりいい。この命をせめぎあう感覚は他では味わえない」

体の随所から真紅の血炎を立ち昇らせる紅蓮は口元に笑みを刻んで力任せに刃を振りぬく

「僕はそこまでは思わないけど？」

その刀身を大槍刀の巨大な刀身で弾いた神魔は同時に紅蓮を容易く呑み込むほどの魔力の砲撃を放つ

神魔と紅蓮が戦い始めて数分、両者は身体の随所に赤い血をくすぶらせながら向かい合う。凄まじい回復能力を持つ悪魔の身体は浅い切り傷程度なら瞬く間に完治させ、傷の癒えた身体に休む間もなく次の傷が刻み込まれる事が繰り返されていた

「はああっ！！」

神魔が放った魔力の砲撃を魔力を帯びた刃で一撃の下にかき消した紅蓮の懐に神魔が一瞬でもぐりこむ

「！！」

紅蓮が目を見開いたその瞬間、漆黒の一閃が閃き、紅蓮の身体を深々と斬り裂く

「ぐ・・・っ」

逆袈裟に身体を切り裂かれその傷口からおびただしい量の血炎を噴き上げる紅蓮は神魔から距離を取り、傷口を押さえて呻きながら

も浮かべた笑みを絶やすことは無い

神魔と紅蓮の実力はほぼ互角。しかしほんのわずかに神魔の方が勝っている。わずかながらも確かなその実力差は徐々に2人の差を広げ、勝敗を分かっている

「・・・このままじゃあ押し負けちゃうな・・・」

そう言って紅蓮は身体から放出した魔力を手に持った剣「斬軌」に注ぎ込んでいく

(この一撃で決めるつもりか・・・)

このまま戦ってもやがて実力差で押し負けると判断した紅蓮の目的を読み取り、神魔も身の丈ほどの巨大な漆黒の両刃の刀身を持った槍、大槍刀「滅神」に魔力を注ぎ込んでいく

「この一撃で決める」

二人の力の差はわずかながらも確実に存在する。しかしそれは決してわずかな運や戦術で覆せないほど大きなものではない

おおよそ拮抗した魔力を持つ二人はそれを熟知しているが故に決して油断も慢心も確信も無くただ自らの勝利を得、相手に死を与えるために戦意を研ぎ澄ませる

「そうだね」

その存在の全てを自らの^{ゴットクロア}神能によって構成されている^{ファースト}全霊命は人

間のような^{ネクスト}半霊命とは異なり、本能と理性を同一の物として保有している。その意志は本能であり、理性。その完全なる精神は^{ファースト}反射に等しい一切の雑念を持たない完全な究極の思考を^{ゴットクロア}全霊命に与え、その意志が^{ゴットクロア}神能の全能を引き出す

「いくぞ」

紅蓮が静かに宣言したその瞬間、神魔と紅蓮は自分達に向かつて放たれる強大な力を知覚し光の速度を遙かに凌ぐ速さでその場から離脱する

「！！！！」

2人が回避した場所を黒と白の力の入り混じった力の柱が天を衝いて貫く

「これは・・・」

「大貴君の・・・」

相手の神能ゴットクロアを知覚する事が出来る神魔と紅蓮にはそれを放った人物が誰なのか確認するまでも無く理解できる

そして2人がこれを放った人物に知覚を向けると白と黒の左右非対称の翼を羽ばたかせた大貴が神魔と紅蓮の間に挟まれるようにして立ちほだかる

「大貴君・・・」

「光魔神・・・なんだ！？俺達の戦いの邪魔をしに来たのか？」

「ああ、そうだ。俺はこの戦いを止めるためにここに来た」

半分嘲るように言った紅蓮の言葉を大貴は強い口調で遮る

「・・・何だと？」

「俺にはお前達の気持ちは分からないし、俺の気持ちはお前たちには分からない。確かに他人を理解する事は他人を理解できない事を知る事だっと思う。お前達の言っている事は正しい。本当に・・・感情を一切挟まない客観的で一番理にかなった理屈だとも思う」

神魔や紅蓮の言葉には私情が入っていない。人の意志は理解できないと理解し、戦いは自身の意思で自身のために戦うものと、正義も悪も無い全ての意志を肯定し否定するその在り方は感情の入り込む余地の無いという意味で客観的な正論だと言える

「でも、それをはい、そうですね。受けて入れられるほど俺は人間が出来てないんだ」

大貴はそう言うとうと自分を挟んで両側にいる紅蓮と神魔に声を荒げるようにして話しかける

「戦わなくて済むならその方がいい。戦わずに話し合っって解り合えるならその方がいいに決まってる！」

「確かに大貴君の言う事にも一理はあると思うよ。相手が戦いを望んでいるからっただだ戦えばいいわけじゃない。・・・でも」

「それが出来れば苦労はしないだろう？」

大貴の言葉に神魔、紅蓮が答える

確かに闘わなくて済むならそれに越したことはない。話し合つて矛を収め、争いを回避できるならそれに越したことはないだろう

しかしそんな事が出来るならそもそも戦いなど起こらない。結局誰もが自分の守りたいモノのために自分と自分にとつて大切なモノ以外を犠牲にするためにおこなわれるものこそが「戦い」なのだから「ああ、ならお前たちは苦勞するから、できるはずがないって言われたらあきらめるのか？」

「……」

大貴の言葉に神魔と紅蓮がわずかに眉をひそめる

「俺は諦めろつて言われて諦めるような人間になるのはまっぴらだ。俺は俺のしたいようにする。そのためにこの力も使う！」

全身から白と黒の入り混じった力を放出して大貴は静かにしかし揺るぎない信念と決意を込めて言う

「俺は俺のしたい事をするために闘う！！」

ただ誰のためでもなく、自分のために。自分が守りたいと思ったモノを守る事。具体的に何かをしたいわけではない。しかしただ諦めて敵と戦うのではなく、自らの意思で、自らの願いで戦う事

ただ何を成すために戦うのかを自らに問う事こそが戦う理由。たったそれだけの事でいいのだ

「……それを望まない人もいるでしょ？」

「かもな。……けど俺にはそいつの事情なんて知ったことじゃない！」

神魔の言葉に大貴は小さく笑みを浮かべて静かに強く言い放つ

「……そう」

「ふん」

その言葉に神魔と紅蓮はわずかに顔をほころばせて微笑む

「自らを正義と鼓舞するのは傲慢。他者の正義を否定し、それを強要するのは暴虐。しかし相手の正義を肯定し、自らのそれと相容れないからと拒否すればそれが理解だ。忘れるなよ大貴」

紅蓮の言葉に大貴は小さく首を頷かせる

「ああ」

「なら、お前のすべき事はわかるな？」

獣のような凶悪な笑みを浮かべて漆黒の魔力を放出する紅蓮に大貴はその手に召喚した黒と白の刀の刀身を向ける

「ああ、お前を倒してその戦闘狂を改心させてやる！」

「やれるものならやってみる！！」

紅蓮の放つ漆黒の魔力と大貴の放つ黒と白の入り混じった力太極オーウルが空間でせめぎ合う

紅蓮に折られた刀は大貴の力が尽きない限り何度でも再生され、顕現させることができる。その手に握られているのは今までと同じ刀。しかしそこに込められた信念と戦う決意がまるで別の刀のような存在感を与えている

「神魔、悪いけどこいつの相手は俺がする。お前はクロスとマリアの方を頼む」

「・・・やれやれ」
大貴の言葉に神魔はわずかに困ったような笑みを浮かべるとゆくりと2人から離れていく

「そこまです」

今まさに大貴と紅蓮がその意思と信念の下、戦いを始めようとした瞬間、マリアによって隔離されたこの空間に高く澄み渡った女性の声が響き渡る

「！！！」

「！！！！？」

紅蓮が目を見開き、大貴と神魔がわずかに首をかしげた瞬間、マリアの作り出した空間が引き裂かれ、そこに二つの影が出現する

一人は膝裏まではあるうかという柔らかく波打つ金色の髪を持つ美女。もう一人は金色の逆立った髪を持ち、額に漆黒の角を一本生やした漆黒の翼をもつ青年

「・・・・！！」

その姿を見て崩壊したビルの瓦礫の上に佇んでいた紫怨はわずか

に目を見開く

「嘘……だろ!？」

その姿を見て臥角と戦闘を繰り広げていたクロスとマリアもその戦いを中断して上空に現れた二人に視線を向ける

「!つ……な……」

突然現れた二人の人物を見て大貴は大きく目を見開く

(何だ、あの2人……男の方は今まで感じた事の無い力……女の方は魔力だから悪魔か……)

相手の神能ゴットクロアの力の大きさを知覚する事が出来る全霊命ファーストはそれによつて相手の力を図り、その強さをおおよそ知る事が出来る

その存在そのものが神能ゴットクロアである全霊命ファーストにとつてその力の大きさが強さ。即ち力が強いという事はそれだけ強いという事になる

(神魔よりも大きな力を持った奴なんて初めて見た……)

その知覚領域が捉えたのは圧倒的な力。新しく現れた女性の悪魔と漆黒の翼を持った大貴が知覚した事の無い力を持つ青年

「……!」

その頃現れた男女2人組みを地上から見上げていた詩織は恐怖に身体を震わせながら何故か目を離す事が出来ずにいた

マリアの結果によつて半霊命ネクストなど殺意だけで容易に滅ぼす事ができる全霊命ファーストの意志の力から守られている詩織はマリアの結果を通して尚心臓を締め付ける圧倒的な存在の圧力に自分で自分を抱きしめるように身体に手を回す

「詩織さん……」

「だ、大丈夫です……」

不安そうに声をかけるマリアの言葉に今にも崩れ落ちそうに震える足を叱咤して何とか踏みとどまって詩織は空に立つ2人、その女性のほうを見る

(この感じ……あの人から?)

そこにいる美しい金髪の女性は穏やかな笑みを浮かべて戦意など全く感じない。敵意でも戦意でもなくただそこにいるだけで詩織の

ちつぽけな存在など容易く押し潰すほどの圧倒的な存在感を持ってそこに佇んでいた

(あいつら・・・強い・・・!)

「なんて強大な魔力と光魔力だ・・・特にあの悪魔の女・・・ここにいる誰よりもはるかに強いぞ」

「!そんな・・・」

歯を噛みしめるように言ったクロスに詩織は眼を見開く

「うん・・・あれほどの力を持つ悪魔なんて滅多に会うことはないのに・・・!」

驚愕を隠せない様子でマリアは啞然として呟く

「そ、そんなに強いんですか・・・?」

「ああ、少なくとも俺とマリア、神魔と大貴が一齐にかかっても勝てないくらいには強い」

「・・・」

「!」

質問に答えたクロスの言葉にその質問をした詩織は目を見開きマリアは無言でそれに同意する

ファースト

神魔やクロスは全霊命というこの世界の頂点たる存在。しかしその力は互角ではない。悪魔なら悪魔の中で、天使なら天使の中で優劣が存在し強者と弱者が存在する

「俺や神魔は天使として、悪魔としては上の下って所の実力だ・・・だがあの女は間違いなく悪魔の上位に位置付けられる実力者だ」

神魔やクロスは決してそれぞれの世界において最強ではない。実力で言うなら上の下。中の上といったところ。九世界の頂点はそれよりもはるかに高い所に存在する

「あ、姐さん・・・ラグナ」

「紅蓮さん。勝手な行動は慎んでもらえるようお願いしたと思うのですが」

「・・・ちっ」

驚愕に目を見開く紅蓮に金色の髪を波打たせた女性は息をついて

穏やかな口調で大貴、神魔、クロス、マリアの順に視線を動かすと
穏やかな口調で話しかける

「失礼いたしました、皆さん。私は紅蓮さんの上司・十世界分隊
長の一人『茉莉』と申します。こちらは堕天使の『ラグナ』」

柔らかく波打つ膝裏まで届く金色の長髪が優しく揺らめき、翡翠
のような美しい碧眼を持つ整った顔立ちに雪のように白い肌。大人
びた穏やかさを有した茉莉がその澄み渡った清やかな声で自分と隣
にいるラグナと呼ばれた堕天使の紹介をする

圧倒的な存在感を有しながらも目を奪われる人間の理解を超えた
存在としての壮麗な美しさ。それは恐怖と共に詩織の心を掴んで離
さない

（でも・・・なんて綺麗な人・・・そういえば悪魔の女の人って初め
て・・・）

穏やかに話す茉莉を見て詩織はただその美しさに目を奪われていた
女性である詩織から見ても茉莉はとてつもない美人であり、自分
と比肩しようとする思えず、嫉妬する余裕もないほどにまるで次元
の違う美しさに心を奪われる

（本当に綺麗な人って嫉妬する気にもならないんだ・・・）

茉莉の人外の美しさにただ見とれている自分に詩織は気付く

（！もしかして全霊命フェアストの女の人ってみんなこんなレベル高いの？）

結界の中で恐怖と畏怖に身体を震わせながら茉莉とマリアを見比
べて詩織の内心は感嘆と驚愕に彩られていた

マリアと茉莉は印象や雰囲気は対照的だが紛れもない美女。詩織は
まだこの2人しか全霊命フェアストの女性に会っていないがもしこの二人が全
霊命フェアストの平均なら九世界にはこのレベルの女性がうようよいることに
なる

「ラグナてめえ、チクつたな!？」

「報告しろって言ったのはお前だ」

紅蓮の言葉にラグナが淡々とした口調で答える

「!・・・確かに言ったがそこは黙認するところだろ!？」

「そんなことは俺の知ったことじゃない」

「この墮天使が・・・！」

紅蓮の言葉にラグナは素知らぬ顔でそっぽを向く

当然紅蓮の言い分の方に無理があるのだが興味がないのか人との関わりを持ちたがらないのかラグナの返答は常に淡泊なものだった

「マリアさん・・・墮天使って何ですか？」

結界の中から詩織は茉莉の横にいる腰まで届く逆立った金髪を首の後ろで1つに束ねた額に天を衝く黒い1本の角を持つ1対2枚の漆黒の翼をもつ墮天使ラグナに視線を向けて詩織は首をかしげる

「墮天使というのは天使が『墮天使王・ロギア』に呪われて闇の存在へと墮ちたもので、悪魔をはじめとする闇の全霊命とは根本から異なる存在です」

墮天使とは元天使。つまり光の全霊命だった者が墮天使王「ロギア」の呪いによって闇の存在へと墮落した存在。故に悪魔など闇の全霊命と異なる九世界においても異質な存在

「呪われる・・・？」

「光の全霊命の中でもなぜか天使だけが光の存在でありながら墮天使王の能力によって闇の存在へと墮天し墮天使になる。

理由は様々だが自分からなる者と墮天使の間に生まれた生粋の墮天使の二通りが存在する。奴がどっちはわからないがな」

マリアの言葉を引き継いでクロスが説明する

九世界に数多存在する全霊命の中でも光から闇へ変化するものは天使のみ。本来「霊」的な力、神能の持つ光と闇の属性の境界は越えられない。神能は光から闇へ、闇から光へ変化などしないのだ

しかし天使だけがその例外。「墮天使王」と呼ばれる存在は光の全霊命であるはずの天使を闇の全霊命へと変化させる能力を持つ

それは天使の「光力」が最も純正の高い光の神能であるため、純粹すぎる光が持つ影の面とも言われる

「当然光の存在でありながら闇の存在へと墮ちた墮天使は天界では忌み嫌われ、天界を追われ、異世界の一つに墮天使たちの世界、十

番目の世界と呼ばれる『墮天使界』を作つて暮らしています」

(「十番目」の世界・「十世界」・・・?)

マリアの言葉を全靈命ファーストの持つ知覚能力によつて捉えていた大貴はその名にわずかな違和感を覚える

「紅蓮さん」

「ハイ」

茉莉の声に紅蓮が思わず体を強張らせる

「私はあなたにこのゆりかごの世界でこんな事をしてほしいとお願いはしていませんと思うのですが・・・?」

「すまない姐さん。けど光魔神なんて面白い奴に出会ったら戦いたくなつちまうだろ?」

「やはりあなた一人に任せたのは私の間違いでした・・・とはいえ、まさかゆりかごの世界に光魔神がいたとは思いませんでした・・・」

紅蓮にため息をついてから大貴に視線を向けた茉莉はわずかにその整つた眉をよせて一瞬思案するような表情を浮かべる

「紅蓮さん、臥角さん、紫怨・・・さん・・・」

茉莉は穏やかだがよく通る透き通つた声でこの場にいる同じ組織に所属する仲間達に声をかける

「とりあえずこの場は引きます。彼の処遇については我々が決めることはできません」

「・・・ちつ。大貴、この勝負は預けるぞ」

「致し方ないか・・・」

「・・・ああ」

戦いを中断されたことに不満を抱きながらも一応上司の命令には従う気があるらしい紅蓮は武器を収めて茉莉の元へ移動する

それに臥角が続ぎ、紫怨は一度も茉莉と顔を合わせずに抑揚のない口調で応じるとその場で姿を消す

「・・・」

その様子を見つめていた茉莉は一瞬だけ悲しそうな表情を浮かべるが、すぐに今までと同じ穏やかな笑みをたたえたとラグナ、紅蓮、

臥角を従えて大貴達の方を向く

「では、我々はこれで失礼いたします。いずれまたお会いすることになるかもしれませんが・・・」

恭しく一礼した茉莉たちの周囲にあった空間が切り裂かれ、穴か渦のようにしか見えない世界をつなぐ門へと変わる

「大貴、この次に会った時を楽しみにしておくぜ。人の形をしたモノを攻撃できない弱点は克服してきたようだからな」

「！」

紅蓮の言葉に大貴は思わず目を見開く

そんな大貴の様子をよそに茉莉によって開かれた空間の門が再び閉じられた時には茉莉、紅蓮、ラグナ、臥角の姿はまるで幻のようにその場から消え去っていた

「十世界か・・・これは本当に呼ばないといけないかな・・・」

茉莉たちが消え去ったその空間を見つめながら神魔は静かに呟いた

十世界

九世界の次元の狭間・・・夜のように暗く、星のような光が周囲の全方向で瞬くまるで星に包まれているような空間に浮かぶ巨大な島。そこに建造された巨大な城こそが十世界の本拠地だった

「諸君、忙しいところ及びたてして申し訳ない」

一点の曇りも無い純白の髪を頭の後ろで1つに束ね、額に翼を思わせる漆黒の鱗のような硬質を持った男が高らかに語りかけ切れ長の鋭い眼でその場にいる者達を見回す

「今日はお前1人か？」

「姫や他の奴はどうした？」

白髪の男の言葉に男の前に浮かんでいる紋章のような物から白髪の男の声に応じる声が響く

白髪の男の立つ壇上から見えるのは扇形に整然と配列された机。そしてそこには一定間隔で空間に浮かび上がるディスプレイが並んでいる。その紋章の向こうには十世界に所属する者達のリーダー格がおり、九世界のあらゆる場所からそれを介してこの場で白髪の男と会話をしているのだ

「今日は諸君らに私の話を聞いていただきたい」

白髪の男の言葉に紋章の向こうから静かに抑制された声が返ってくる

「お前の話を・・・か？」

「私だけの言葉を信用できない諸君らの気持ちは十分に理解できる。しかし忘れないでいただきたいのは私『ヘイト・アリーダー』が十世界盟主『姫』の側近であるということだ」

「「っ！！」」

ヘイトと名乗った白髪の男の言葉に紋章の向こうから息を呑む気

配が返ってくる

「諸君らを口論する事に意味は無い。そもそもそんな議論を交わしている暇があるなら我等が盟主・姫の理念を実現させる事に時間と労力を割いてほしいからな」

「……」

紋章の向こうからの沈黙を肯定と受け取りヘイトは話を続ける

「まずはこれを見てもらおう」

そう言っってヘイトは指先を鳴らして濁いた音を響かせる

それと同時に2人の正面と机に座っている九世界の十人達の前の空間にディスプレイが浮かび上がってそこに光と闇、白と黒の力を同時に使う者の姿が写し出される

「！これは……」

「光魔神だ」

「光魔神だと!？」

ヘイトの言葉に紋章の向こうからの動揺が広がる。紋章の向こうにいる十世界の代表者たちが口々に何かを話し出し、やがてその中の一人が口を口火を切る

「何故光魔神が生きている？お前達の神が殺したはずじゃなかったのか？」

「奴はこの世界で唯一光と闇という相反する力を同時に行使する事ができる神だ。何らかの方法を使って生き延びていた可能性は高い」

「……この世界はゆりかごの世界、か？」

ヘイトの言葉に一瞬の沈黙の後紋章の向こうから声がかげられる
「そうだ。この世界にいた茉莉の部隊の者が接触した。どうやら光魔神はゆりかごの世界の人間の魂の中に隠れていたらしい」

「馬鹿な!？何故ゆりかごの世界の人間の中に光魔神が?!光魔神が生み出した人間界の人間ならまだしもよりによってゆりかごの世界の人間に!?!？」

ヘイトの説明に紋章を通じて会話する者達に動揺が広がる

「……そういえば15年前の一件があつたな」

「「!?!」」

「・・・何の事だ？真紅^{しんく}」

紋章の向こうからの真紅と呼ばれた人物の声に別の紋章が答える
「15年前ロザリアという天使が十世界裏切って逃走したんだが、その時何かを持ち出したらしい。その件そのものは姫の意向で黙認されたが・・・その時ロザリアをそこにいた筈のお前やお前達の神が見逃したらしいな」

「それは本当の事か!?ヘイト」

「・・・そんな事もあったな。だが、それは邪推というものだ。私も我等が神も姫の意向でその天使を追撃する事をしなかっただけだ」
真紅の言葉に一瞬広がった動揺に微塵も揺らぐ事無くヘイトは平然と話を続ける

「・・・どうなんだ？アーウィン」

「確かにその後の調査でロザリアは九世界のために十世界を壊滅させるため潜り込んでいた節がありました。可能性は十分にあるとは思いますが」

紋章の言葉にアーウィンと呼ばれた人物が紋章の向こうから静かで理知的な言葉遣いで応じる

「そんな事を話し合うために私は諸君らに声をかけたわけではないぞ？」

徐々に熱を帯びていく会話をヘイトは静かな声で嗜める

「光魔神がゆりかごの世界の人間に宿り、ゆりかごの世界に現れた理由など今はどうでもいい事だ。問題は光魔神に対して我々がとるべき対応にある。

報告では光魔神は現在不完全な覚醒状態に過ぎず、せいぜい全霊命^{ファースト}の中の上程度の力しかないが、知つての通り光魔神は最強の異端神、円卓の神座の1人、我等の神と同等の力を持つ唯一の存在。このまま捨て置く事はできない」

「・・・確かにな」

ヘイトの言葉に紋章から静かな肯定の言葉が返ってくる

「私としては彼にも我等の組織に加わってもらおうと思うのだがいかがか？」

「それが今我らが取りうる最善の手段か・・・」

「了承する」

「・・・」

次々と肯定の意を述べていく紋章の中で最初から会話に参加せず沈黙を守り続けている1つの紋章に別の紋章から声かけられる

「どうしたゼノン？」

「・・・異議は無い」

ゼノンと呼ばれた紋章の向こうにいる人物はしばらくの沈黙の後ゆっくりと口を開く

「ならばその様に取り計らわせてもらおう。交渉する相手はこちらで用意しよう。諸君らの手を煩わせるわけにはいかないからな」

「何を企んでいる？」

「何も企んでなどいないさ。もし私に企みがあるとすればそれは姫の意志を叶え、十世界の理念を叶えるためのものだ」

「・・・だと、いいがな」

静かに応じたゼノンと繋がっている紋章にヘイトが静かに視線を向ける

「何か言いたそうだな？ゼノン」

「・・・いや。そちらに任せよう。交渉役も兼ねてな」

ヘイトの言葉にゼノンはしばらくの沈黙を以って応じるとゼノンが繋がっていた紋章が消失し通信が途切れる

「相変わらず協調性の無い奴だな・・・それで、諸君らはどうする？」

一方的に開戦を切断したゼノンに溜息をついたヘイトはその場に残っているゼノン以外の面々に視線を送る

「・・・具体的には誰を行かせるつもりだ？」

「私では信用が無いだろうから・・・『戦兵』^{レキオン}の誰かに行ってもらおうと思っている」

「なるほど。それなら良いだろう」

「ああ、そうだな」

ヘイトの言葉に同意を示した紋章に次々に紋章が同意を示していく
「では、その様にしよう。手間を取らせてすまなかつたな諸君、こ
れで解散だ」

そう言つて身体を翻したヘイトの背後で次々と回線が切れた紋章
が消失していく。そしてヘイトが今まで立っていた壇上の背後にあ
る扉を開く

「ククク・・・」

「楽しそうだな」

口元に小さな笑みを浮かべながら扉をくぐつたヘイトに扉の横に
もたれかかるようにしていた男が静かに声をかける

そこにいるのはニメートル近いがっしりとした体躯の男

その身体に漆黒の紋様を刻み、額と即頭部から大きな角を三本、額
と即頭部までの間に左右合わせて四本、合計七本の角を持ち、まる
で白目をむいているような瞳の無い目を持っている

「立ち聞きしていないで入ってこればよかつたじゃないか」フレイカー「戦王」。

聞いていた通り、君達の眷属に光魔神を引き入れに行つてもらつ事
になつた」

「・・・ああ」

「では、よろしく頼むよ。私は事の顛末を姫に報告しに行く」

それだけ言つて立ち去つていくヘイトを戦王は瞳の無い白目を向
けてただ見送ることしかできない

（『ヘイト・アリーダー先導者』か・・・何を企んでいるかは知らないが油断できない
な・・・）

視線の先にヘイトを捉えて戦王は目に剣呑な光を灯す

味方でありながら味方ではなく、敵ではなくとも敵である存在・・・
それがヘイトをはじめとするかの神の眷属の象徴とも言つべき存在
意義。決して信用してはならない。しかし決して切り捨てる事は出
来ない

(何故悪意を振り撒くものなどが十世界じゅうせいにいるのだ!・・・)

悠然と歩き去って行くヘイトの背に視線を送りながら戦王は自らに問いかける

(・・・いやそんな事は考えるまでも無いことか・・・)

しばらくの逡巡の後、自分で自分の問いに答えを出した戦王は一瞬物憂げな表情を浮かべて軽く天井を仰ぎ見た

「紫怨!」

その頃十世界の本拠地の通路を臥角と共に歩いていた紫怨を澄んだ声が引き止める

「・・・茉莉」

その声の主に視線を移して紫怨は静かにその名を呼ぶ

そこにいるのは紅蓮とラグナを統べる者。十世界の分隊長を務める美しさと力を兼ね備えた柔らかく波うつ金色の髪を持つ美女「茉莉」だった

「何のようだ?」

「・・・怪我、してるから」

紫怨の身体からかすかに立ち昇る血炎に視線を移して茉莉は不安そうな表情を浮かべる

「かすり傷だ・・・放っておけばすぐに治る」

神魔によってつけられた傷は全霊命ファーストの復元能力を以ってしても簡単に回復するような代物ではなく、今でも紫怨の身体にはいくつかの傷が残っている

とはいえ命に関わるような傷が無いのも事実。翌日には何事も無かったかのように傷跡1つ残さずに完全に復元しているだろう

「でも・・・」

そんな事は十分理解していて、それでも不安な表情を浮かべる茉莉に苦笑すると紫怨は茉莉の柔らかく波打つ金色の髪にそっと手を添える

「……！」

「相変わらず心配性だな、お前は……でも本当に大丈夫だ」

顔を赤らめる茉莉に優しく微笑みかけると紫怨は茉莉の髪からそつと手を引き抜いて臥角と共に歩き去って行く

「紫怨……」

「いいのか？積もる話もあるだろう？」

不安げに見送る茉莉に一瞥を向けてから臥角は紫怨に静かに声をかける

「……今の俺にあいつを抱きしめる資格なんて無い」

「資格……か。そんなものにこだわっているのはお前だけだぞ？」

「分かっている。そんな事は……でも、俺がやるうとしてしている事にあいつを巻き込むわけにはいかない」

臥角の言葉に紫怨はわずかに顔を曇らせる

紫怨と茉莉の関係、そして事の顛末は臥角をはじめとして皆知っていることだ。そして2人之間にある距離の原因が紫怨のくだらない男の意地でしかない事も

「……全く、頑固な奴だ。だから俺達もお前についていつてるんだがな」

「それより、他の奴には連絡がついたか？」

自嘲するような笑みを浮かべた紫怨はすぐにその表情を引締めて臥角に問いかける

「ああ。すぐにでも集まるだろう」

「……そうか。ならこつちも手を打たないといけないな」

「光魔神、か……」

「ああ。あいつを味方に引き入れられれば俺達の目的の達成も容易になる」

紫怨の言葉に臥角はわずかに眉間に皺を寄せると重々しく口を開く

「……出来るのか？」

「出来るかどうかじゃない……やるんだ」

臥角の言葉を紫怨は静かにしかし強く否定する

その言葉と視線には確かで強い決意が宿り、ゆるぎない信念がそれを後押ししている。それを知っている臥角は気弱になっていた自分を嗜める様に小さく微笑む

「・・・ああ、そうだな・・・俺たちはどこまでもお前についていこう」

「・・・すまないな、臥角」

「気にするな」

紫怨の言葉に不敵な笑みを浮かべる臥角にわずかに口端を吊り上げて微笑んだ紫怨は一度目を伏せ、鋭い決意の宿った視線を前方へ向ける

「行こう。・・・十世界は俺が必ず潰す・・・!!」

静かに言い放った紫怨の言葉は2人の姿と共に長い通路の中に消えて行つた

夜。界道家では食卓を囲んで一家全員と神魔、クロス、マリアを加えた7人が夕食を取っていた

「どうしたの？全然食べてないじゃない。具合でも悪いの？」

食事の手が止まっている大貴に詩織がわずかに眉根を寄せて心配そうに覗き込む

「いや・・・少し考え事をしてただけだ」

「考え事？」

「ああ・・・」

詩織の言葉に大貴は静かに呟く

大貴の脳裏には紅蓮が去り際に放った言葉が甦る

《人の形をしたモノを攻撃できない弱点は克服してきたようだからな》

（そういえばそうだ・・・俺は紅蓮を攻撃できなかった。なのに今

日は・・・クロスと戦い方を訓練したからか？・・・いや、違うな）
内心で思い浮かんだ仮定を大貴はすぐさま否定する

光魔神としての力に目覚めた当初、大貴は人の形をしたものに武器を向け攻撃する事を躊躇った。それはこれまでの人生で教えられ、刷り込まれてきた当然の感性であり、常識という名の箍とでもいうべきもの

しかし今日に至ってその感覚は全く無くなっていった。人の形をしたものに武器を向け、戦い、攻撃を加える事に何の抵抗も覚えなかった（俺は・・・人間じゃなくなってきたのか・・・？）

不意に頭をよぎったそんな考えにわずかに唇を噛みしめる
「そういえばあの人たち十世界って言っていましたよね？」

「十世界？」

不意に思い出したように言う詩織に一義と薫は首を傾げる

「十世界というのは九世界の中でも『英知の樹』^{フレイツリー}と並んで危険視されている組織で光、闇問わず九世界全ての世界を統合して争いのない世界を作ろうとしている組織です」

「？言ってる事はいい事だと思っけど・・・そんなに悪い事なの？」

マリアの言葉に薫は首を傾げる

光と闇が手に手を取り合い、^{ファースト}全霊命も^{ネクスト}半霊命も関係なく争いのない世界を創造する。それはとても素晴らしく崇高な目的のように思える。現に恐らくこの星の大半の人間はそう感じるに違いない

「九世界の中で人間界を除く^{ファースト}全霊命の支配する8つの世界のうち7つが『軍界王政主義』という社会体系を構築しています」

「軍界王政？」

神魔の言葉に一義はわずかに首を傾げる

「簡単に言えばその世界に所属する全ての者は例外なく『世界』という単位の軍に所属しているという事です。僕の場合は魔界という軍に所属する魔王様の配下の悪魔という事になります」

軍界王政とはその名の通り、世界を1つの軍隊として認識し、世

界に住まう者全員をその世界の軍人として認識した上で敷かれる王政
「なるほど・・・つまり悪魔なら全員が魔界という軍に属した魔王の
配下であり、軍隊のような王政を行っているという事だね？」

その意味を理解した一義の言葉に神魔は小さく微笑んで話を続ける
「ええ。で、九世界のうち、7つの世界が軍界王政を敷く理由なん
ですが、僕達が全霊命だからです」

「？」

「どういう事ですか？」

神魔の言葉にクロスとマリアを除いた界道家の面々がそれぞれの
表情で怪訝そうな表情を浮かべる

「簡単なことですよ。私達全霊命の世界にはあらゆる産業が存在し
ないからです」

「え？」

神魔の言葉を引き継いだマリアの言葉に詩織が首を傾げるとその
言葉をクロスが引き継ぐ

「前に話したと思うが、俺達全霊命は存在としての最盛期を保った
まま殺されるまで生き続ける事が出来る。」

自分の存在から湧きあがる無限の力のおかげで食事も睡眠も必要な
いし、病気にもならなければ生きてさえいればどんな傷でも完全に
治癒する。同じ全霊命以外の存在に対しては絶対無敵の存在だ」

クロスという言葉に大貴はその言葉の意味を理解して小さく声を上げる
「！そうか。食事をしなくてもいいなら農業や漁業はもちろん料理
屋も必要ない」

「あ！」

その言葉にようやく合点がいったのか界道家の面々は口と目を丸
くしてその意味を理解する

「どんな傷でも治るなら医者是要らないし、光よりも早く空を飛ん
だり出来るなら移動にも困らない。服や武器は神能ミュートクロアが作り出すんだ
からそういう店も一切必要ない」

「そういうことです」

大貴の言葉に神魔は小さく微笑んで頷く

自分の存在の力である神能ゴットクロアによって存在を維持している全霊命ファーストにとって食事や睡眠は娯楽。常に最盛期を維持し、あらゆる不利な現象を無効なするその特性によって寿命は無く、毒などは一切無効。しかも常に最盛期を維持する神能ゴットクロアの特性によって限り無く不死身に近く、武器や衣服は神能ゴットクロアが自身の特性に応じてそれぞれ顕現したものの確かに文明は発達しなさそう・・・」

自らの力の及ぶ限りあらゆる理想を現実の事象として顕現させる神能ゴットクロアがあればそもそも科学をはじめとした文明が発達するはずが無いファースト「僕達全霊命は存在として限りなく完全に近いために極端な話をすれば何もなくても生きていられるんです」

「でも、それでは私たちは生きていく意味が無いんです。毎日空を見上げながら老いる事無く、衰える事無く過ぎていく日々をただ見送っていく事を生きているとは表現しないでしょ？」

「・・・確かに、それはキツイかも」

マリアの言葉に詩織はその状況を想像して軽く身体を震わせる

一見夢のように思える生活。しかし何千万、何億という時間をただ何もせず見送って過ごす日々など想像するだけで恐ろしいものだ。働く必要など無い。なぜなら飢える事が無いから。恐れるものなどない。全霊命じぶんたち以外には絶対に害されない存在だから

「生きる事は戦う事だ。だからこそ全霊命じぶんたち以外に敵がない全霊命おれたちは世界の外に、世界の中に敵を作る」

「争いがないことを平和とは言いません。平和とは全ての命が調和し、支えあう共存関係の事を示します」

クロスの言葉をマリアが引き継ぎ淡々と静かに語り始める

「例えば野性では生きるために他の生物を殺して食らい、縄張りを巡り、群れの中での地位を巡り、子孫を残すため雄同士で争い合います

あなた方も同じでしょう？縄張りや国の領土。群れでの地位は仕事の立場や収入、成績と考えれば分かりやすいでしょうか」

「・・・はい」

大貴、詩織、薫、一義はただその言葉に耳を傾け、マリアはさらに話を続けていく

「即ち、生きる事は戦う事に等しいのです。そこにあるのはただ『何と』『どう戦うか』の違いではありません」

確かに争いは無いほうがいいでしょう。死ななくて済むのならそれに越した事はありません。しかし命あるモノは何かと戦っていないければ自らの命を認識できません」

「!??つ、そんなこと・・・」

マリアの言葉に界道家の面々は言葉を詰まらせる

「例えば、あなたたちが生きていくのに呼吸は必要不可欠なものです。普段からその尊さを噛みしめて生きていらっしやいますか？」

「・・・っ!」

マリアの言葉に界道家全員が息を呑む

「呼吸など出来て当たり前。だからこそあなた方は頭では分かっているても当たり前前に存在している空気の尊さを軽んじています。それは命も同じでしょう？」

もし死んでも生き返れるならば命が尊いなどとは誰も言いません。なぜなら死んでいないのですから。死ねば命が終わり、決して戻らないと知っているから命が尊いと仰るのではありませんか？どんな命も死ぬからこそ命を尊ぶのです」

「・・・・・・」

失って初めて気付く大切なものがある。失わなければ分からない尊いものがある。死とは命あるもの全てに等しく訪れる終焉にして最高の恐怖。しかし、それが恐ろしいものだとは知っているからこそ命を尊び、人生を愛する事ができる

「僕達全^フ霊^ア命^スも半^ネ霊^ク命^スも同じ命です。命あるモノはすべてからく生まれてくる事に意味を持っていないんです

だからこそ僕達は生きています。この世に生まれてきた事を証明するために」

「……！」

マリアの言葉を引き継いだ神魔の言葉に大貴、詩織、薫、一義はわずかに目を見開く

「この世界に生まれてきた事を証明する方法は他と比べるしかありません。誰より優れていて、誰に劣っているのか

『容姿』や『能力』そういったものを他人と比べて『勝っている』か『負けている』か。たとえどちらであつても、それが『自分』という存在じゃないですか？命あるモノはその時初めて自己という存在を認識するんです」

もしこの世界に生きている人間が同じ容姿をして、考え方や性格が同じで、同じ能力をしていたならば、それは一体誰になるのか？それはきつと誰でもない誰かではない

自己、存在、自身。個性とは良くも悪くも他人と比べて優れているか、劣っているかでしかなく、その勝敗はどうであれ「何で」「どこが」「誰に」「優れ」「劣っている」か。その違いだけが「自分自身」なのだ

「ま、話は逸れましたけどつまり、僕達全霊命は何もしなくても生きていられる生物として絶対的な勝者としての立場と引き換えに戦いに生きることが宿命付けられた存在だつてことです」

全霊命は神能以外には害されないというあまりにも完全に近い存在であるが故に経済や産業にわざわざ参画しなくてもただ悠久に生き続けることができる。

だからこそ、それと引き換えに生きている事を感じるために、死の恐怖を知るために戦いという手段をとる事しかできない

「……存在として、世界として完全に近づくほど戦いにしか存在理由を見出せないなんて、本当に皮肉ね」

神魔の言葉に薫は少し悲しそうな表情を浮かべる

九世界の歴史でもそうだったが、九世界では全霊命という存在が無限の命を有し、永遠に近い時間を生きられるが故に歴史を「戦争」という尺度で測っている。死を遠ざけ、老いと無縁であるが故に戦

いの中にしか生きられない

「でも！別に戦うために生きてるからって必ずしも戦わなくたって良いじゃないですか！？考えればもっと他の方法が・・・」

その言葉に詩織が少しだけ声を荒げる

たとえ全ての命が戦うために生きているとしても必ずその通りに生きなければならぬわけではない。戦わないために戦うという選択肢も存在するはずなのだ

その詩織の言葉をクロスが小さく首を横に振って否定する

「それに全霊命オレたちの力は大きすぎる。望めば世界だろうと何だろうと壊せてしまふ。一度に億や兆で利かなくらいの命を奪うこともできる。だからこそ『力』によって秩序を維持しないとイケない」

神能ユリトクロアという自らの望む現象や事象を世界に顕現させるというこの世で比類なき無双の力を振るう全霊命ファーストは望めば全てを滅ぼす事も手に入れる事もできる

だからこそその力を振るう全霊命ファーストは命を懸けて戦う事で命の重さを知り、自らの力の責任に向き合っている

それはこのゆりかごの世界において人間と核のようなもの。例えば人間に桁外れの力をもつ核を使って戦いを挑めばそこで起きるであろう惨劇は容易に予想できる

神能ユリトクロアは世界で最強の力であるが故に、軽く振るうだけで天変地異すらも霞むほどの被害をもたらしてしまう。それを防ぐためには互いにその力を突きつけ、その力を以って平穏を保つしかない

「自分達の力で自分たち自身を押しさえ込んで、弱い存在にその力が不条理に向けられるのを防いでいるわけか・・・」

クロスの言葉に大貴が口を開く

「そうだな」

「確かに組織や国も成長しすぎれば外に仮想の敵を作り上げ、安定を図ろうとするものだ。いや、そうしなければ安定が得られないと

「いづべきか・・・」

一義の言葉に微笑んだ神魔はゆつくりと口を開く

「そうですね。それに何より、僕達は光の存在でも闇の存在でも、
全霊命ファーストだろうと半霊命ネクストだろうと仲良くできる人とはするし、合わない人と無理に仲良くしようとは思いませんから」

「そうだな・・・」

神魔の言葉にクロスが静かに応じる

光と闇の存在は古の昔から争い続けてきた。しかしそれは獣が他の獣を食らうように、群れを形成し、縄張りをつくるように、食事も睡眠をするようにその存在そのものに定められた本能のようなものなのだ

だからといって光の存在も闇の存在も相手を憎んでいるわけではない。もちろんそういうものがないわけではないが、全てを敵視しているわけではない。神魔とクロスたちのように利害が一致すれば協力もするし、友情も芽生える。出会っても戦わずに去ることも珍しくは無い

「・・・確かに無理に仲良くするって事も無いか」

「大貴！」

大貴の言葉を詩織がわずかに嗜める

「皆仲良くしようなんて正直余計なお世話って事かな」

神魔は優しく微笑んで言う

「・・・神魔さん」

「？」

神魔の言葉に詩織は唇を噛みしめると重々しく口を開く

「確かに神魔さん達の言う事は間違っていないと思います・・・うん、むしろ感情が入り込んでいない分正論なのかもしれません・・・でも、私たちはそんな風に考えられない」

詩織の言葉に神魔は小さく微笑んで目を伏せる

「良いんじゃないですか？僕達の言い分が正しいとは限りませんし・・・何より正しい事が間違っていない訳でも、間違っていない事が正

しい訳でもないんですから」

「……？」

神魔の言葉に詩織が首をかしげ、一義と薫もそれに同意するかのように顔を見合わせてわずかに眉をひそめる

「……」

その様子を大貴だけが無言のまま見つめていた

変わりゆく日常

その日の夜。詩織はパジャマに身を包み、湯上りで濡れた髪をタオルで包んでリビングに入る

「・・・神魔さん」

そこではリビングのソファに腰掛けた神魔が食い入るようにテレビを見ている

慌てて風呂上りの自分の身だしなみを整えて、湯上りだからだけではない頬の火照りを隠すように神魔に微笑む

「?何ですか?」

「神魔さん、テレビ好きなんですね」

「?そうだね・・・この世界の事が簡単に勉強できるからね。それに結構面白い番組もあるし・・・本当に人間って面白い物を作るよね」

まるで子供のように無邪気に微笑む神魔に詩織の胸は高鳴る

(っ・・・!やだ、私またドキドキして・・・)

「そ、そういうえば九世界にはこういうものはないんですか?産業が発達しないって言っていましたし・・・」

胸の高鳴りを神魔に気付かれないように詩織は咄嗟に夕食の時に話していた「あまりに優れた力を持つが故に全^{フォー}霊命が支配する世界では産業が発達しない」という話を思い出して懸命に取り繕って話を逸らす

「そんな事ないよ。人間界がこういうのを作ってるから」

「ああ・・・なるほど」

(よかった・・・特に変には思われてないみたい・・・)

神魔の言葉に詩織は内心でほっと一息ついて、笑みを浮かべる

(そういうえば、神魔さんは私の事どう思っているのかな・・・)

それと同時に詩織の心にささやかな、しかし看過する事の出来な

い一つの疑問がよぎる

《大丈夫。詩織さんは僕が守るから》

《僕は詩織さんの笑顔も守りたいから悲しむような事はしないよ》

《僕は詩織さんを守るって自分で決めてるんだ》

脳裏に甦ってくるのは神魔の言葉。その一つ一つが詩織の心の奥に残っている大切な言葉。それを思い出すだけで心が温かくなり、頬がわずかに火照ってくる

(もしかして・・・神魔さんも私の事好きでいてくれるのかな・・・?)

そんな事を考えると、都合がよすぎると思いつつ頭によぎったその淡い期待が事実であってほしいという気持ちばかりが強くなっていく

神魔はいつも詩織を大切に守ってくれる。その扱いは詩織の気の所為だけではない特別なものだ

「・・・あ、あの・・・」

そこまで考え、思いついてしまうとどうしてもそれを確かめたくなってしまう

「もしも神魔が自分と同じ気持ちでいてくれたら」そう考えると胸が高鳴り、自然と頬が赤くなってしまう

「そういうええ聞きたい事があったんですけど・・・」

出来るだけ平然を装い、不意に思いついたように話しかける

「何ですか？」

「・・・神魔さん前に言っただじゃないですか？私の事守ってくれるって」

逸る気持ちを抑えてあくまでも不意に思いついた疑問を確認するような口調で神魔に話しかける

「ああ、そうだね」

詩織の言葉に神魔は一瞬思索するような表情を見せる

そんな神魔に詩織は駄目押しをするように出来るだけ自然な形で神魔の自分への気持ちを確認するための言葉を口にする

「何ですか？大貴は光魔神だから分かるけど、何で私も・・・？」
クロスとマリアは現在九世界の存在するモノの中で最強の力を持ち、九世界の一つ「人間界」を支配する人間の創造主である異端なる神。「光魔神」である大貴を天使である2人が守るのは十分理解できる

しかし詩織はあくまでもその光魔神である大貴の姉という立場ではない。極端な話をすれば九世界にとってはそれ以上の価値のない人物だ。しかしクロスやマリアと違い神魔は詩織を常に意識している

(どうして・・・？神魔さんの気持ちが知りたい・・・！)

真つ直ぐ真剣に見つめる詩織の視線に神魔は一度目を伏せてから優しく微笑みかける

「・・・それを言うと詩織さんを困らせる事になっちゃうから」

「・・・え？」

そう答えた神魔の表情は少し困っているかのようで、照れているようにも見える

(！！それってどういうこと？もしかして・・・)

神魔のその言葉に詩織の心の中でほんのわずかな期待と疑念が生まれる

もしかしたら自分と同じように神魔も自分に特別な感情を抱いてくれているのではないか。そんな考えに不思議と胸が高鳴り、何の根拠も無い空想でしかないその考えに自分の心が熱を帯びるのが自分で分かってしまう

「そ、そうですね・・・じゃあ、私は部屋に戻りますね」

「・・・はい」

顔を火照らせ、ややぎこちない動作で反転した詩織が部屋に帰っていく姿を見送って神魔は再びテレビに向かい合う

「・・・僕の気持ちは詩織さんには教えられないよ・・・詩織さんを

傷つける事しか出来ないから・・・」

そんな神魔の言葉はただ静寂の中に呑み込まれていった

翌日。大貴、詩織、マリアが学校へ登校すると一足先に教室にいた刀護が3人の姿を見止めて近づいてくる

「大貴！今日の1時限目は体育だぜ？」

「・・・知ってるよ」

親しげに話しかけてきた刀護に大貴は静かに言葉を返す

「今年一番の勝負は俺が勝たせてもらうぜ？」

「・・・ああ」

「薄っ！反応薄！！」

淡泊に返した大貴の反応に刀護は思わず声を上げてしまう

「あの2人って・・・そういうご関係なのですか？」

その様子を見ていたマリアは隣にいる詩織にそつと顔を寄せて小声で尋ねる

「ああ・・・何ていうか・・・そんな感じ？刀護君って運動もかなり出来る方だけど大貴もアレで以外に出来てね・・・刀護君は一方的に意識してるみたい」

「・・・はあ、なるほど・・・この世界でも男の人というのはそんな感じなんですね」

詩織の説明にマリアは表情を緩めて微笑む

2人の姿にクロスを重ねているなど考えるまでもなくマリアの表情を見れば分かる事だったが詩織はあえて何も言わずに苦笑を浮かべる

「・・・ハハ。まあ、子供っぽいというか、ね」

「とはいっても、2人の戦績はほとんど五分だからね・・・」

「！ポピーちゃん」
その会話に背後から声をかけてきた芥子に気付き、詩織とマリアは視線を向ける

「競技や種目ごとに勝負してるみたいだから、得手不得手はあるし

ねえ。あの2人の身体能力はほぼ互角だから」

「・・・なるほど」

芥子の説明にマリアは小さく息をつく

体育には当然多種多様な競技があり、人には得手不得手がある。

基本的な身体能力が似通っている2人の勝負は当然熾烈を極めると
いう事になる

「さて、どっちが勝つか賭ける？」

「勝つたら？」

「ロイヤルパフェ」

芥子の提案に詩織の瞳の奥に獲物を狙う獣の光が宿る

ロイヤルパフェとはこの界限では有名なスイーツ専門店「ラ・サ
ントビール」が出している最高級のパフェだ。選び抜かれた食材
を用い、贅を尽くしたそのパフェはサイズこそ普通だが普通のそれ
の倍以上の値段を誇る。

「じゃあ大貴に」

「ほほう。無難に兄弟に賭けて来たわね？マリアはどうする？」

「私は遠慮させていただきますよ」

「・・・そ、じゃあ不本意ながら私があ馬鹿に賭けないといけな
いわけね」

マリアが不参加となれば詩織が大貴に賭ける以上、芥子は刀護に
賭けなければ賭けが成立しない。

もつとも実力の拮抗した2人の勝率は五分だなのだから勝敗を分け
るのは運だけだ

(・・・これが友達というもののなのですね)

そんなやり取りをしている大貴と刀護、詩織と芥子を見てマリア
は穏やかな笑みを浮かべる

そしてその数時間後、1時限目の体育の開始と共に白い体操着に
青いハーフパンツという出で立ちをした男女合わせて40名ほどの

クラス全員が運動場に集合する

後ろで束ねられた金色の髪が青い空に揺れ踊り、風と一体となつて疾駆するマリアは目の前に置かれたバーの手前で力強く踏み切り、その細くしなやかな身体を宙に舞わせる

「・・・」

その身体が三日月のように反り、2本の柱に支えられたバーの上を鮮やかに通過していく

細くしなやかな身体を大きく反らせ、金色の髪を日の光に煌めかせたマリアは日の光に照らされ、神々しいほどの美しさを見る者の目に焼きつけ、その心を奪う

「・・・ふう」

「マリアさん。綺麗ですね」

まるで重力など存在しないかのように地面に下り立ったマリアに詩織が感嘆の声を上げるとその言葉にマリアはわずかに頬を染めて恥じらしい表情を浮かべる

「・・・ありがとうございます」

「本当に驚いたよ。あんなに軽々と・・・もしかして日本記録でも狙えるんじゃない？」

「本当。マリアちゃんつてすごく運動できるんだね」

芥子の言葉に周囲にいたほかの女生徒達も声を上げる

(まあ、マリアさんが本気出したら世界記録だって・・・)

その様子を見ながら詩織は内心でそんな事を呟く

今は人間の姿を取っているがマリアの正体はこの世界において最も神に近い存在である全霊命ファーストの天使だ。その能力は物理法則など全て無視し、光よりも速く動く事ができる

今は抑えているが、本気を出せばこの星の人間が出した世界記録など足元にも及ばない成績をたたき出す事など容易なことだ

「いえ、そんな事は・・・」

(それに人間の姿になれるって言うても私はゆりかごの人間じゃなく・・・)

「っ！！！！」

周囲の賞賛の言葉に恥らいながら答えていたマリアは不意に目を見開く

(しまっ……)

「……マリアさん？」

目を見開いたマリアの様子に詩織は怪訝そうに眉をひそめる

目を見開いたマリアは身体を捻り、男子生徒たちが体育をしている辺りに視線を向ける

「……どうしたんですか？」

「っ！……いけないっ！」

詩織の言葉など耳にも入らない様子でマリアは小さく目を見開く

マリアの視線の先では男子生徒が徒競走をしているらしく運動場のトラックに大貴と刀護、そして数人の男子生徒が並んでいた。

そしてトラックの内側では黒色のジャージを着て胸に笛を下げた中年の体育教師の合図を待っていた

「位置について……」

「この戦いは勝たせてもらっぜ？大貴」

「……言ってる」

不敵に笑って準備する刀護に大貴は苦笑混じりに答える

「よい……」

教師はそこまで言う胸に下げていた笛を口に加えて空気を力の限り吹き込み、空を劈く高い音を響かせる

その瞬間、その光景を見ていた全ての人間が目を見開いた

「……え？」

全員が目の前で起きた光景に目を見開く

体育教師が笛を吹き鳴らし、一斉に地を蹴って駆け出した生徒達の中で大貴は瞬き1つほどの一瞬でゴールラインを通り越していた

「……なっ……!？」

一瞬でゴールラインを通り越した事が自分自身で信じられないのか大貴は驚愕に目を見開く

一瞬にして通り過ぎてしまったゴールラインを肩越しに振り返って大貴は自分に起きた事態に思考を巡らせる

(どついうことだ……!?)

「……すご……っ」

その様子を見ていた詩織は思わず言葉を呑む

「今の見えた？」

「タイムは……？」

「……いや、気付いたら通り過ぎてて……」

教師の言葉に計測をしていた生徒が呆然とした様子で言う。声が小刻みに震えているのは気のせいでは無いだろう

何しろ教師がスタートの合図の笛を吹いた次の瞬間に目の前を通り過ぎていたのだ。まるで目の前を戦闘機が通過したようなものだろう

「でも、先生。今のどう見ても1秒切ってた様な……」

「馬鹿言え。50メートルで1秒切ったら時速何キロだと思ってるんだ!？」

言いながらも教師の言葉も引きつつている

その真偽の程は定かでは無いが、大貴の速さが異常であり、正確に測定されていれば確実に世界記録を大幅に更新するほどのものだった事は誰の目にも明らかだ

「……っ」

「!マリアさん!?!?」

周囲がざわつく中で視線を向けた詩織の目の前でマリアの背中から純白の4枚の翼が出現する

同時に世界が空間ごと切り離された

「……これは……」

切り離された空間に大貴が周囲を見回すと、そこにいたクラスメ

「ト全員が動きを止めているのが目に入る

「・・・空間を切り離して大貴さんと詩織さん以外の人の時間を停止せました」

「マリア・・・」

その言葉に視線を向けるとマリアが2対4枚の白い翼を羽ばたかせて大貴の元にゆつくりと降りてくるところだった

「マリアさん。これって一体・・・!?」

マリアの言葉の通り、マリアと大貴以外でこの場で動いている唯一の人間、詩織が息を切らせながら駆け寄ってくる

「申し訳ありませんが話をするために時間を停止させて頂きました。私とした事が迂闊だったのですが、大貴さんはこれから全力を出さないで下さい。そうでないと先程のようになってしまいます」

その言葉に大貴と詩織は一瞬でゴールラインを切った大貴の姿を思い出す

「ああ・・・あれって・・・」

「さっきのアレはどういうことなんだ!?俺は別に何も・・・」
動揺を隠せない大貴をマリアが制する

「落ち着いてください。私は人間の姿になる事が出来ますが、あの姿は正確にはこの世界の人間ではなく、光魔神の力に列なる正統な人間の姿なんです」

「!そうなんですか?」

マリアの言葉に詩織が目を見開く

光魔神によつて生み出された九世界の1つ「人間界」を支配する真の人間はこのゆりかごの世界である人間と姿こそ似ていても全く別の存在なのだ

「ええ。九世界の人間はこのゆりかごの世界の人間よりも高位の半^{クスト}霊命です。だからその能力はこのゆりかごの世界の人間とは比べ物にならないんですよ」

「ああ、だからあんなに運動できたんですね・・・」

マリアの言葉に詩織はマリアの運動能力と突如飛躍的に上昇した

大貴の能力に納得して頷く

同じ半霊命ネクストでも人間界の人間とゆりかごの世界の人間ではその存在の格が違う。そのため容姿こそ似ていてもその能力は別格なのだ
「大貴さんも同じです。光魔神として覚醒した事でゆりかごの世界の人間としての大貴さんの存在を光魔神としての大貴さんの存在が上書きしているのです」

「・・・！」

マリアの言葉に大貴は息を呑む

「・・・それってどういう意味ですか・・・？」

「ゆりかごの世界の人間としての大貴さんの存在はすでに失われているという事です」

「・・・！」

マリアの言葉に大貴と詩織は目を見開いた

「・・・それって・・・どう、いう・・・」

「ゆりかごの人間だった大貴さんの存在は光魔神としての覚醒によって存在の構成そのものを書き換えられています。本来全霊命フエアーストが半霊命ネクストに成る事は出来ないのですが、光魔神は自身の存在を自分の力に列なる者である人間に変える得意な能力を持っていたようですから今の人間の姿を取る事ができるのですよ」

「・・・そういえば・・・マリアさんが人間になれるのにクロスさんや神魔さんはいつも天使や悪魔の姿のままですね・・・」

マリアの言葉に詩織は家にいる神魔とクロスの姿を思い出す

マリアは人間となつて学校生活にまで侵入しているが、同じ天使であるクロスは常に天使の姿をしており、人間の姿になつたところを見たことは無い

「通常、全霊命フエアーストが半霊命ネクストになる事も、その逆もありえませんが・・・私や大貴さんの能力が特別なんです」

マリアが言う

神魔やクロスが人間の姿を取らない理由は至極簡単。「ならない」のではなく、「なれない」からに他ならない

「何しろ、わざわざ弱くなる必要などありませんからね」

「・・・確かに」

マリアの言葉に詩織は頷く

そもそも存在として限り無く最強に近い全霊命ファーストがわざわざ自分たちよりも弱い半霊命ネクストになる必要など無く、基本的にそんな能力を持つている者のほうが稀有だ

「心配しなくても魂や中身そのものは大貴さんのままで変わることはありませんよ。大貴さんは大貴さんのままです」

「・・・そうなんですか？でも・・・」

マリアの言葉に詩織は大貴に視線を向ける

「・・・大貴」

いくら中身は変わらないと言われてもやはりそのショックは隠しきれない。それが本人なら尚更だ

「・・・・・・」

(・・・そうか、何で今まで気付かなかったんだろうな・・・全霊命ファーストは存在の力が魂と身体そのもの・・・そうだった時点で俺はこの星の人間として死んでたんだ・・・)

マリアと詩織の話なごろくに耳に入らない様子で大貴は視線を落とす

全霊命ファーストはその存在そのものを神能コトクロアによって構成された存在。その霊の部分と物理である肉体を有す半霊命ネクストとは根本から異なる存在

大貴が光魔神として覚醒したあの日。大貴の存在は光魔神という全霊命ファーストとして昇華され、光魔神の能力で人間になっていたに過ぎない全霊命ファーストにとっては能力を制限する枷でしかない物理で構成された肉体は覚醒時に不要なモノとしてこの世から消滅していた。

今ここにいるのは人間の姿を取った光魔神。・・・光魔神を宿した人間ではないのだ

「大貴は大貴だから」

力を振り絞るように言った詩織の言葉に大貴は視線を向ける

「・・・姉貴？」

「慰めにならないかもしれないけど・・・余計なことかもしれないけど。何にも分かかってないかもしれないけど・・・知った風な事を言ってるって思われるかもしれないけど・・・でも私にとって大貴は大貴。私の双子の弟だから」

安い慰めの言葉であることは詩織も十分分かっている。結局はこの星の人間である詩織に大貴の気持ちを押し量るなどは出来ない。それでも詩織は伝えたいと思ったのだ。自分の気持ちを。大貴が大貴であるという事を

「・・・なんだよ、それ」

詩織の言葉に大貴は呆れたような、自嘲するような笑みを浮かべる
「まあ・・・今はそれで慰められておいてやるよ」

「・・・うん」

自嘲混じりに笑って言った大貴の言葉に詩織は満面の笑みを向けて微笑む

（まだゆりかごの毒は抜け切っていないみたいだけど・・・その話はやっぱりしない方がいいのかな・・・だから神魔さんもクロスさんも話してないんだろっし・・・）

その様子を見てマリアは小さく微笑む

「あ、そういえば・・・マリアさん」

ふと気付いたように詩織はマリアを見る

「何ですか？」

「前から思ってたんですけど、マリアさんはどうして人間の姿になれるんですか？大貴は光魔神だからってというのはわかりましたけど・・・」

「・・・」

「！」

詩織の言葉にマリアはわずかに目を細める

「・・・今からここにいる人たちの記憶を改竄して先程の記憶を消去します。大貴さん、これからは加減してくださいね」

「あ……ああ……」

詩織の質問に答える事無く話を始めたマリアに2人は怪訝そうな表情を向ける

(姉貴の話を聞き流した……?)

(あれ……?もしかして聞いちゃいけないことだった……?)
そんな2人に背を向けて、マリアは純白の4枚の翼を広げた

その日の夜……界道家のリビングでは全員が集まって談話をしていた

「……」

リビングのソファに腰掛けている神魔に詩織は恋する乙女の視線を向ける

(やっぱり……気になる……)

詩織の頭の中にあるのは神魔の言葉

「どうして守ってくれるの?」と問いかけた詩織に神魔は一言で答えた

《それを言つと詩織さんを困らせる事になっちゃうから》

その言葉に詩織は胸の高鳴りが押さえられない

(だって私は……)

自分の気持ちはもう分かっている

自分が今神魔に恋をしていることくらい自覚している

しかし人を好きになった事はあっても恋人が出来たことのない詩織にはその気持ちを伝えるべきかどうかという迷いがある

(もし……神魔さんが私の事好きだから気にして守ってくれてるなら……)

そんな打算的な、楽観的な考えが頭をよぎってしまう

(我ながら何て情けない……でも)

気持ちを伝えられない自分に若干の自己嫌悪を抱きながらもその

心の高鳴りは止められない

「・・・詩織」

「きゃあっ・・・っってお母さん」

不意に耳元で聞こえた声に反射的に声を上げてしまった詩織に声をかけた張本人である薫は意地の悪い笑みを浮かべる

「詩織つて神魔君のこと好きでしょ？」

「え!?!?・・・な・何で・・・?」

薫の言葉に詩織は顔を赤らめて動揺を隠せずにしどろもどろする
「見れば分かるわよ。まあ、お父さんや大貴が気付いているかは分からないけど女同士だもの」

「・・・うう・・・」

詩織の倍は女として生きている母の目をごまかす事は出来ないと観念したのか詩織は顔を赤くしたままうな垂れる

「我が娘ながら初心で可愛いわねえ・・・で?どこまで進んでるの?」
意地の悪い薫の言葉に詩織は消え入りそうな小さな声で囁くように言う

「・・・そんなの・・・全然・・・」

「私が見たところ神魔君は微妙よねえ」

「微妙?」

薫の言葉に詩織が問い返す

「少なくともクロス君やマリアちゃんとは比べると詩織の事を特別に扱ってるとは思っけど好きなのかっていうと・・・ねえ?」
「うん」

自分と同じ事を感じていたらしい母に感心しながらも詩織はわずかに頬を赤らめて薫に視線を向ける

「これはもう確かめるしかないんじゃない?」

「確かめる・・・って・・・」

「好きかどうか神魔君に聞くのよ」

薫の言葉に詩織は顔をさらに赤らめる

「そ、そんな事・・・できるわけ・・・それに神魔さんは悪魔だし・・・」
「あら、そんな事些細な事でしょ？詩織が本当に好きならお母さんは応援するわよ？」

「・・・・・・・・」

薫の言葉に詩織は一層顔を赤らめて神魔に視線を向ける

「何なら私が聞いてあげましょうか？」

「え？・・・・・・・・」

薫の言葉に詩織は軽く目を見開く

一瞬の逡巡が生まれる。好意を寄せる相手の気持ちを誰かに聞いてもらう事と怖くても勇気を出して伝える事・・・どちらがいいのかと頭の中で考えをめぐらせる

「・・・いい。自分の気持ちは・・・自分で伝えるから」

「それでこそ、我が娘ね」

詩織の言葉に薫は満面の笑みを浮かべる

「・・・・・・・・」

(もう、これは見過ごせませんね・・・)

その様子を見ていたマリアはゆっくりと立ち上がると詩織の元にゆっくりと歩み寄る

「詩織さん。少々お時間をいただけますか？」

「え？・・・・・・・・はい」

突然のマリアの言葉に詩織はキョトンとした様子で頷きながらリビングを後にする

「・・・マリアちゃんどうしたのかしら・・・？」

普段と様子の違うマリアに首を傾げた薫は大貴の方へ視線を向ける
「大貴何か知ってる？」

その言葉に確証がない事を言うべきか一瞬迷った大貴だったが、隠す必要はないと判断してゆっくりと口を開く

「・・・・・・・・心当たりくらいは」

「何？」

薫の言葉に大貴は体育の時間に起きた事を簡単に説明する

「あ、そういえばそうね・・そういうものだと思ってたけど・・・」
マリアが何故人間の姿になれるのかと問いかけた時それに答えな
かったことを聞いた薫は説明を求めるようにクロスと神魔に視線を
向ける

「・・まあ、口止めはされてないが・・俺が勝手にあいつの事情を
話すのもな・・」
「だね」

言い難そうに言葉を濁らせるクロスと神魔に一義が口を開く

「しかし、詩織にその事を話しに行つたのならかまわないんじゃないか？」

「・・・・・」

その言葉にクロスは一瞬逡巡する。もしマリアが詩織に「その事」
を話すつもりなら確かに話してもいいかもしれない

クロスは不意に目を閉じて頭の中で思念を送る

《マリア》

全霊命の持つ「思念会話」ユットクロア。神能によって1度力を認識した相手

に向けて思念を焼き付けた神能ユットクロアを送る事で会話する事ができる能力。

《何？クロス・・》

すぐにその問いにマリアが返答してくる

その効果範囲は限り無く広く、空間を越えた別の世界にいるか神ユットクロア
能クロアによって妨害されない限り必ず届くほど。当然この家の中でなら
問題なく会話ができる

《・・・いいよ。私もこれから詩織さんにその話をするとところだから
》

事情を説明したクロスに一拍置いてマリアの返答が返ってくる

「・・・分かった。ならこっちから話しておく」

マリアの答えを受けたクロスは大貴達に視線を向けた

一方その頃詩織とマリアは詩織の部屋に移動していた

「あの・・・マリアさん・・・？」

詩織は窓の外に広がる夜の空を見つめているマリアに問いかける
普段とどこか違う様子のマリアに不思議と胸が締め付けられるよ
うな感覚を覚える

「詩織さんは神魔さんの好きですよね？」

「・・・え？なんですか、いきなり・・・」

不意に背を向けたままのマリアが言った言葉に詩織はわずかに頬
を赤らめる

マリアにも自分の気持ちを気付かれていたのかと恥ずかしい気持
ちになるが、それを次の言葉が一瞬で打ち消す

「神魔さんの事は諦めてください」

その言葉に詩織の思考が一瞬止まる

「・・・え？」

その呟きは夜の空に吸い込まれていった・・・

もしも愛する事が罪ならば

「神魔さんの事は諦めてください」

マリアの言葉に詩織の思考が一瞬止まる

(え?・・・神魔さんを諦めろって・・・どういう事?・・・もしかしてマリアさんも?・・・でもマリアさんはクロスさんの事が好きなんじゃ・・・?)

突然のマリアの言葉に衝撃を受け、その意味を掴みあぐねて目を見開いている詩織に向き直ったマリアは決意を込めた視線を向ける

「九世界は無法じゃない。当然最低限の法が存在し、それを犯せば処罰される」

一方その頃、界道家のリビングではクロスが静かに話を始めていた
「例えば『九世界の存在はゆりかごの世界への干渉、及び侵入を禁ずる』・・・つまり本来全霊命おれたちはこの世界の人間に接触する事はおろか、このゆりかごの世界に入ることすら禁じられている」

「!」
しかしこの世界で光魔神が見つかったため、天使たちの王「天界王」の命令でクロスとマリアは例外的にこの世界に滞在を許されている

「もし、神魔がここにいることが魔界にばれたら神魔は間違いなく処罰される事になる」

クロスとマリアと違い九世界の「王」の許可なくゆりかごの世界に滞在している神魔はそれだけで罪を犯している

「・・・?」

クロスの言葉の意味を掴みあぐねている詩織を除く界道家の面々が首を傾げる

「そしてその法律には『異なる種族、異なる世界の存在との恋愛、交雑を禁止する』っていうものがある」

「つまり、悪魔なら悪魔、天使なら天使以外の相手と恋をしたり、子供を作っちゃ駄目っていう法律です」

クロスの言葉を補足した神魔の言葉にその場にいた面々は目を見開く

「なっ!？」

「つまり、詩織さん・ゆりかごの人間であるあなたが悪魔である神魔さんと恋人になることはそれだけで九世界の法を著しく犯す行為だということです」

「・・・そんな・・・」

マリアの言葉に詩織は目を見開く

「な・・・何で・・・」

声を詰まらせる詩織にマリアは判決を告げる裁判官のような淡々とした冷徹な言葉の槌を振り下ろしていく

「いくつか理由はありますが、ファースト全霊命には『じゆんしゆきやうせう純種強勢』という特性があります。つまり原種に近いほど能力が高いということです」

「・・・純種?」

首を傾げる詩織にマリアが話を続ける

「以前話したと思いますファーストが全霊命は神から最初に生まれたモノです。原種に近いという事は単純に神に近いという事です。つまり純種に近い者ほど能力が高いのです」

「わざわざ弱くなるような交配をする意味がないだろう?」

クロスの言葉に界道家の面々は納得したように頷く

「・・・我々の世界には雑種強勢という異なる種族の間に生まれたものの能力が高くなるという事があるが・・・全^{ファースト}霊命は真逆なんだね」「そうですね。全^{ファースト}霊命はその原種が神から完全に近い状態で生み出され、そこから増えたモノですが、半^{ネクスト}霊命は交配する事でより強力な種として進化する特性を備えているという事でしよう」

一義の言葉に神魔が答える

全^{ファースト}霊命は神から生まれた最初の原種の存在を細分化することで種族としての個体数を確保し、その中で繁栄する存在

対して半^{ネクスト}霊命は世界から生み出された存在の種が世界に適応して進化していく方法で繁栄していく。

そのため、全^{ファースト}霊命が他の種族と交配すればその時点で力を劣化させる事と同義。それを推奨する理由は何も無い

「・・・まあ、でも・・・それってそんな大切なことかな・・・？」

「僕達に取っては大切なことですよ。それにそれはまだ理由の1つです」

薫の言葉に神魔が答える

「例えば詩織が結婚相手に犬を連れてきたらどうする？」

「「え？」」

クロスの問いに一義と薫が声を揃えて言葉を詰まらせる

「・・・い、犬かあ・・・」

詩織が犬と結婚する姿を想像して薫と一義ががっくりと肩を落とす。特に一義の落胆ぶりは痛ましいと思えるほどだ

「・・・まあ、例えとしてはどうかと思いますが・・・つまりクロスが言いたいのは意思疎通こそできますが、僕達は悪魔なら悪魔天使なら天使っていう異なる種族の存在だって事です」

クロスの言葉を引き継いで神魔が言う

「・・・異なる種族・・・？」

「ええ。例えば肌の色が白いか黒いか・・・同じ種族の中に存在

する差異は言うなれば『品種』という差です。しかし異なる種族は犬と猿というようにその存在の根底を全く異にする種族という差です」

「マリアは淡々と詩織に説明する

「異なる種族と交配するという事は自然の中でライオンと狼が結ばれないように、摂理を踏みにじり冒瀆するあつてはならないことなのです」

「マリアの言葉が詩織の胸を貫く

あつてはならない事。この世界において人間と悪魔に恋が生まれる事はあつてはならない許されざる行為

「・・・でも・・・でも、その人達の気持ちはどうなるんですか!？」

「人の気持ちさえよければ何をしても許されると思っっているのですか？」

「・・・っ」

詩織の言葉を侮蔑すら込められた冷淡なマリアの言葉が打ち砕く「それは自己弁護ですよ。あなた達の世界では不都合だと感じたら法律を無視しても許されるのですか? 1個人の気持ち1つでその是非を変えてしまうその程度のモノを法などと呼ぶのですか?」

「・・・っ」

「マリアの冷淡な言葉がさらに詩織を打ちのめす

「・・・このような理由から異種族同士の交雑は禁忌とされます。・・・ここまで話せば気付いたのでは無いのですか?」

「マリアは淡々と言葉を紡いでいく

「私は天使と人間の混血児です」

「マリアちゃんが・・・」

言葉を詰まらせる界道家の面々にクロスが話を続けていく

「ああ。^{フアースト}全霊命と^{ネクスト}半霊命の間に生まれた子供はまず存在として安定した^{ネクスト}半霊命として生まれ、心身の成長と共に^{フアースト}全霊命として覚醒する

んだ・・その結果マリアの場合全^{ファースト}霊命である人間の姿を持つ事になる^{スト}」

「・・だから、マリアは天使と人間の2つの姿をもっているのか・

」

「異種族同士の混血児は『^{マトラス}混濁者』と呼ばれ、九世界で最も忌み嫌われる存在とされます」

「！」

神魔の言葉に大貴の脳裏にかつての紅蓮の言葉が甦る

《それにしてもお前「マトラス」か。随分と面白い奴が来たもんだな》

(マトラスっていうのはそういう意味だったのか・・・)

「特に天使は九世界でも最も想いが強い種族と言われていて、どんな相手にもかなり強く感情移入するからちよつとしたきっかけで恋愛感情に変化しやすいんですよ」

「そう、なのか・・？」

「だから異種族との交雑、人間との交雑、光と闇の恋愛・・九世界で禁忌とされるこれらを最初に破ったのは天使だからね」

神魔の言葉に一義は小さく呟く

「世界の禁忌を犯して生まれた^{マトラス}混濁者は本来その存在すら許されない。だから両親を含め、世界がその存在を抹殺しにかかる」

「・・・っ！」

クロスの言葉に界道家の全員が息を呑む

「だからあいつは身に染みて知ってるんだ。・・・禁忌を犯した者が、その間に生まれた^{マトラス}混濁者がどんな人生を歩むかを」

「そんな・・でもその子供には何の罪も無いじゃないですか」

マリアの言葉に詩織が声を荒げる

両親は禁忌と知っていて愛し合った。しかしその子供には罪は無い。なのに生まれてきた事すら許されないなどという理不尽な事があっていいはずがない

「そうですね。子供には罪がありません……ですがだからといってそれを見逃す事は出来ないのです」

「……どういう……意味ですか？」

マリアの言葉に詩織が声を詰まらせながら言う

「子供に罪がないからという理由で見逃せば、同じように罪を重ねていく者が増えていくでしょう。……子供も親も両方殺す事によって『これは許されない事なんだ』と世間に知らしめ、他の者が同じ罪を重ねないようにするんです」

「……っ、そんな……」

マリアの言葉に詩織は息を呑む

特例を作ればどんな枷が緩んでいく。子供は罪がないと異種族交雑の子供を見逃せば許されるのだという考えが広がり、その法を犯す者が増えていく

そこで容赦ない断罪を加える事でその罪を犯せばこうなると言う事を知らしめ、更なる犯罪を防ぐ事になる

「でも……それって何か非道い……」

呟いた詩織の言葉にマリアは不快そうに眉をひそめるだけで何も言う事はなかった

（非道い……ですか。やはりゆりかごの人間は毒されてるのね……）

「そして私があなたにこの話をする最大の理由をこれからお話しします」

「……え？」

マリアの言葉に詩織が目を見開く

「だからマリアさんが天界王の命令でここにきたってというのが僕に

「は不思議なんだよね」

「神魔が小さく眩く」

「え？」

「さつきも言いましたけど混濁者マトラスというのは両親もろとも殺すのが普通なんです。光の世界はそういうの特に五月蠅いから一世界の王である天界王が生かしておくどころか自分の近くに置いてたつていうのが腑に落ちないんですよ・・・」

「だって今回はたまたまマリアさんの力が役に立っていますけど、光魔神がゆりかごの世界にいるなんて知るはずがないんだからさ」

「・・・ああ。確かに」

「神魔の言葉に大貴が小さく頷く」

「マリアは天界王の命令を受けてこのゆりかごの世界にやってきた。しかし光魔神がこの世界にいる事を知らなかったはずの天界王が世界の法で禁忌とされている混濁者マトラスを自分で命令が下せる所においていたという事には疑問が拭えない」

「つまり、何で天界王は普通は生かしておくはずがない混濁者マトラスを生かしていたのか・・・って事だね？」

「ええ」

「一義の言葉に頷いた神魔の視線を受けてクロスはそれに応じる」

「知るかよ。俺が会ったときにはもう天界の城に半分軟禁状態だったんだ」

「・・・・・・」

「クロスの言葉に神魔は一瞬怪訝そうな表情を浮かべる」

「まあ、話を戻すが異種族交雑の禁忌の中ファーストでも全霊命ネクストと半霊命の交雑は特に危険視されている」

「・・・どうして？」

「誕生率の関係です」

「・・・誕生率？」

「神魔の言葉に一義と薫が首を傾げる」

「そうですね・・・簡単に言えば子供ができる確率です」

「？」

「例えば同じ悪魔同士で子供が出来る確率を『1』とした場合、同じ闇の異種族である全霊命フェアストとの間に子供が出来る確率は『百億分の1以下』、天使と悪魔のように光と闇の全霊命フェアストの間には子供は生まれません

でも全霊命フェアストと半霊命ネクストの間には限りなく百パーセントに近い確率で子供が出来るんです」

「え・・・っと、それって悪い事？」

「全霊命フェアストにとって伴侶っていうのは半霊命ネクストにとってのそれを遥かに凌ぐ重要な意味を持っているんですよ」

神魔の言葉に首を傾げる薫にクロスが話を続ける

「恋や愛の行き着く所は契り・・・つまり男女の関係です」

「え？・・・え、ええ・・・そうね・・・うん、そういう見方もあるかも・・・」

神魔の言葉に一義と薫は顔を見合わせてわずかに頬を赤らめながら答える

価値観によるところもあるかもしれないが、恋や愛の行き着く所は婚姻であり、男女の関係を結んで子供を成すという考えは1つの答えと考えていいものだ

「僕達全霊命フェアストにとって契りとは単なる子孫を残すための行為ではなく『互いの神能ジョットクロアを交換し合う』という事です

つまり僕達全霊命フェアストにとって『伴侶を得る』という事は自分の力、ひいては命を半分委ねるといいう意味を持つんです」

神魔は淡々と言葉を紡いでいく

全霊命フェアストにとって契りとは単に子孫を残すための行為ではなく、自らの存在の力を相手に与え、相手の存在の力を相手から受け取り、自身と相手の命の半分を共有し会うという事に等しい

愛によって結ばれ、子孫を残し、意志を託すことは半霊命ネクストとさほど変わらないが、永遠を生きる事が出来るその人生において魂を交換し合った伴侶はある意味子孫を残すよりも重要な意味を持っている

るといえるのだ

「へ・・・へえ・・・」

(何？この18禁漫画みたいな設定・・・)

神魔の言葉に界道家一同の脳裏にそんな考えがよぎる

「もしかして変な事考えてます？」

その考えを見抜いているのか神魔は怪訝そうな視線を向ける

「い、いえ別に・・・」

「分かりやすく例えるなら・・・そうだな、あんた達ゆりかごの人間って言うのはA型の血液型の奴にB型の血液を輸血したら死ぬんだろ？でもA型とB型の血液型の人間の子供は生まれる」

「ん？ああ、そうだね・・・」

クロスという言葉に一義は同意する

「存在の力というのは原初のレベル・・・つまり生命の根源に近いほど異なる存在の力と融合する事が出来るんです。僕達の身体は霊の力そのもの。契りだけが唯一その存在の力を交換する手段なんですよ」

「・・・ふむ、なるほど」

神魔の言葉に一義が同意の言葉を示す

半^{ネクスト}霊命のように物理という身体に束縛されていない全^{ファースト}霊命の存在はその全てが唯一無二。血も、肉も力も他の誰とも共有できない世界で自分だけのもの

しかしその完全に確立された個性の中で唯一己以外の相手と存在の力を交換する手段が契りにある。ゆりかごの人間が自らの身体構成^フを宿した塩基と魂の素体を交わらせて新たな命を宿すように、全^{ファースト}霊命は存在の根源を宿した力を交換し合うことで相手の力を受け入れあい、その間に子供をなす

「人間界でもそうだが、血を契約の証や封印の鍵なんかとして使う術が存在するだろ？血はその存在の生命を維持する媒体。つまりそこに込められた存在の形質は強く、その個人を象徴する個性の塊みたいなものだ

対して契りによって交わされる存在の力はあらゆる存在の中でもっとも個性の薄い力。最も自分色から遠い力だからこそ、相手と交換し合う事が出来る」

「・・・つまり、血は自分の特性を強く現しすぎるから別の相手には渡せないけどそういう時に交換する力は個性がほとんど無いから渡せるって事かしら？」

クロスの言葉に確認する薫にクロスは小さく頷く

「そしてそれ故に異種族の交配の中でも特に全^{ファースト}霊命と半^{ネクスト}霊命の交雑は忌避されます」

「!?!」

続けた神魔の言葉に大貴はわずかに目を見開く

「本来、契りによって存在の力を交換する現象は半^{ネクスト}霊命の間でも起きています。ですが、^{ネクスト}霊格の低い半^{ネクスト}霊命にとってはあつてないような微々たるものでしかありません」

「・・・私達には分からないってことですよね・・・」

確認するように問いかける詩織にマリアは小さく頷いて肯定する
「ですが、全^{ファースト}霊命の^{ゴットクロア}神能はこの世界で最も純度が高く、^{ネクスト}霊格の高い力。物理の中に^{ネクスト}霊格を押し込めるために劣化させている半^{ネクスト}霊命にとってその存在の力は受け入れられないほどに強大・・・」

向かい合うマリアは詩織に向かって淡々と言葉を紡ぐ

全^{ファースト}霊命と半^{ネクスト}霊命。そのあまりに次元の違う存在の力は契りによって確実に交換されてしまう

「結果、半^{ネクスト}霊命は契りによって受け取った全^{ファースト}霊命の存在に耐え切れずに確実に死にます」

「・・・!」

マリアの言葉に詩織は言葉を失う

「マリアの場合は母親の方が天使だったからよかったが、契りを交わしたその瞬間に半^{ネクスト}霊命の方が命を落とすことも珍しくない」

クロスは淡々と続ける

あまりに純度の高い最高位の霊格を持った全^{ファースト}霊命の霊格は半^{ネクスト}霊命には大きすぎる。結果的にその魂と肉体はその力を受け入れきれずに崩壊を起こしてしまう

「間に生まれてくる子供はいい。存在の力が交わって生まれたそういう存在だから両方の親の形質を受け継いで生まれる・・・」

だが、全^{ファースト}霊命と契りを交わした半^{ネクスト}霊命はそれが原因で最大で5年・・・その内9割が1年も保たずに魂と肉体が崩壊して死に至る」

「つまり全^{ファースト}霊命と半^{ネクスト}霊命が愛し合うことは相手を殺すことに等しいんです」

「・・・！」

クロスと神魔の言葉に界道家の面々が目を見開く

(そんな・・・じゃあ、詩織は・・・)

「分かりますか？あなたが神魔さんをどれほど愛したところで、その想いを成就し、愛し合う関係を築けば神魔さんにあなたを殺させ、愛した人を愛したから殺したという罪悪感を神魔さんに背負わせる事になります」

「・・・っ！」

マリアの言葉に詩織は目を見開き、わずかに身体を震わせる

「それに貴女は百年もすれば朽ちて死ぬゆりかごの半^{ネクスト}霊命。対して永遠を最盛期のまま生きる全^{ファースト}霊命である神魔さんとは生きる時間が違いすぎます」

詩織に淡々と言葉を紡ぐマリアはさらに言葉を続ける

「その想いはあなたの中に秘め、決して伝えない方がお互いのためです。なぜなら、例え互いに愛し合っても、愛することで愛する人を殺し、愛する人に殺させる事しか出来はしないのですから」

マリアの言葉に詩織は力なくその場に崩れ落ちる
突きつけられた現実が詩織を容赦なく打ちのめす

愛し合えば、愛する人を殺し、愛する人にその罪を一生背負わせる。
それが全霊命ファーストと半霊命ネクストの絶対的な関係

「神魔さんを愛した事が悪いとは言いません・・・ですが、その気持ち伝えることは罪です。なぜなら・・・どう転んでも神魔さんを傷つけることしか出来ないのですから」

「・・・!!」

マリアの言葉に詩織は目を見開く

愛する事は悪ではない。

しかし愛することで愛する人を苦しめることしか出来ないのなら、その気持ちを伝えずに終わらせる事が互いにとって最善

愛する事が罪ならば・・・その想いを伝えない事しか出来ない

「詩織さん・・・あなたの愛はあなたの愛した人を傷つけることしか出来ません」

「!!」

目を伏せたマリアの一言が詩織を絶望の淵に叩き落す

愛することすら許されないあまりの不条理に詩織の目からとめどなく涙が流れ出す

「それを忘れないで下さい」

静かにそう言い放ったマリアは詩織の横をゆっくりとすり抜けて部屋を出て行く

「そんな・・・」

部屋に残された詩織はその場で力なくうな垂れ、ただ抜け殻のよう
に絶望の涙を流し続けていた

十世界よりの使者

闇の静寂を切り裂き、煌めく光が舞う

「・・・ここが、ゆりかごの世界。そして・・・」

見渡す限り漆黒の星々に覆われた世界に白銀の光を纏った一人の女性が降り立つ

眼下に見える青い球体を瑠璃色の目に写したその人物は口元に穏やかな笑みを刻む

「光魔神のいる場所」

ある昼下がり、曇天模様に包まれた校舎の窓に寄りかかるようにして空を見上げる詩織を見て芥子が首を傾げる

「ちょっと・・・大貴君？詩織何かあったの？何か今日様子が・・・」

「いや、俺も変だとは思ってるんだけど・・・今朝からずっとあんな感じなんだ」

芥子に声をかけられた大貴も心ここに在らずといった様子で空を見上げている詩織に視線を向ける

「マリアちゃんは？」

「いえ、私にも分かりません」

界道家にホームステイしているという事になっているマリアに問いかけてきた芥子の言葉にマリアも詩織を案じるような様子で応じる
もちろん、大貴と違ってマリアにはその原因は分かっている

昨夜。神魔に恋する詩織の想いを完膚なきまでに打ち砕いたのは他ならぬマリア自身なのだ

（詩織さんを傷つけてしまいましたね・・・それでも）

心の中で詩織に謝罪しながらもマリアは普段と変わらぬ視線で詩

織を見る

（その想いでは自分以外の全てを傷つける事になります・・・）

自分は混濁者^{マトラス}。天使と人の間に生まれた生まれながらぬ禁忌の存在。異なる存在の間に生まれた者がどうという人生を辿るのか身に染みて知っている

気がついた時には天界の城にいた

自分を引き取ったのは天界王とその伴侶たる天界の女王。しかし決して恵まれた生活をしていたわけではない

半霊命^{ネクスト}である人間として生まれたマリアは最初何故自分に翼が無いのか、何故、他の天使たちのように神秘の力を使う事ができないのか理解できなかった。そしてやがて自分が人と天使の間に生まれた子供であると知る

「マリアちゃんのお母さんはマリアちゃんを守るために天界王様にあなたを預けたんですよ」

マリアには血の繋がらない姉がいた。正確には自分に優しく接してくれた唯一の天使の女性を姉のように一方的に慕っていたに過ぎない

天界王の愛娘。「歌姫」と謳われる九世界でその名を知らぬ者はいないほどに美しく、才に満ち溢れていた姉は王宮から出る事すら許されず、混濁者^{マトラス}として他の天使達に蔑まれていた自分を受け入れてくれた

本当は姉も自分に慕われるのは嫌なのでは無いかとも考えたが、それ以上考えないようにした。そうでなければ自分は孤独の中で絶望することしか出来ないとわかっていたから

天使として覚醒したのは15歳になった時。身体が大人になると同時に完成された魂の力で天使としての自分も確立された

天使の姿を取れるようになってからはある程度外へ行くことも許

された。それでも何も変わることはなかった。所詮混濁者マトラスは混濁者マトラス。その運命を変えることなどできないのだと知った。「どうして・・・どうして私は生きていますか？」

姉と慕う天使に泣きながら問いかけた事があった。その言葉に姉は優しく抱きしめてくれるだけで何も言わなかった。優しい姉は安易が慰めを言えなかったのだと

それでも自分は恵まれていたと思う

本来なら両親共々殺されるのが普通の混濁者マトラスでありながら天界王は自分を王宮の奥に軟禁するという形で生かしてくれていたのだから

(あんな思いをあなたに・・・あなた達にさせる訳にはいかないんです・・・)

詩織を見てマリアは声を押し殺す

マリアから見ても神魔が詩織に恋慕の情を抱いているのかは分からない。それでも明らかに詩織を特別視する神魔と詩織の関係が発展するのを避けたかったからこそ厳しい言葉で詩織の気持ちを打ち砕く道を選んだ

自分は混濁者マトラスとしては恵まれている。天界王の公認によって極秘裏に生かされ、そして何よりも・・・

しかし普通はそうはいかない。自分も親も両親の種族はもちろん、それ以外全ての存在から疎まれ命を狙われる。生まれてきた事が罪、生きている事が罪。ただ生まれてきただけで呪われた生涯を送らなければならなくなる

(私にできる事はただ詩織さんが一日でも早く神魔さんへの想いを断ち切つて新しい恋を見つけてくれる事を祈ることだけです)

そんな視線の先で詩織を案じた芥子がゆっくりと歩み寄っていく
「ねえ、詩織・・・あんな何かあったの？」

「・・・・・・・・」

沈黙

「体調でも悪い？」

「・・・・・・・・」

小さく首を横に振り否定の意志を示す

「あ、そうだ。今日帰りにどこかいかない？何ならロイヤルパフエ奢るよ？」

「・・・・・・・・」

再度首を横に振った詩織はそのまま机に伏せる

「一大事よ。詩織が・・詩織がロイヤルパフエを断った！！」

その場から一直線に大貴の元へ歩み寄った芥子は深刻な表情で言い放つ

「・・いや、それが？」

「あなたは双子の弟なのに詩織がどれだけロイヤルパフエに人生かけているかも知らないの！？こんな事ありえない！！」

「・・パフエに人生かける姉って・・」

深刻に語る芥子の言葉に大貴は複雑な表情を浮かべる

「一体何があればあの詩織が・・！もしかして」

一人で何事か呟いていた芥子はふと何かを閃き、そのまま机に伏せている詩織の横に移動すると詩織の耳元にそっと囁く

「もしかして・・失恋した？」

その言葉に詩織の肩が震える

「もしかして・・凶星？」

「う・・うう・・ポピーちゃん・・」

顔を上げた詩織の目に浮かぶ涙に芥子は慌てて詩織の頭を優しく抱き寄せる

「よしよし・そういう時は女同士話し合っのがベストだ。今日の帰り一緒にロイヤルパフエを食べに行こう」

「・・うん」

教室で声を上げて泣くまいと涙を飲み込んだ詩織は小さく頷く

その頃、世界と世界の境界、空間の狭間に浮かぶ十世界の本拠地の一角

「さて、紅蓮。光魔神のところに案内してもらおうぞ」

「・・・ああ」

紅蓮は自分に声をかけた人物に視線を向ける

（戦兵だ！？こんな奴を引っ張り出してきやがって・・・）

内心で忌々しそうに吐き捨てた紅蓮の視線の先には金色の波打つ髪を揺らす茉莉と漆黒の翼に一本の黒角を持った墮天使ラグナがいる（しかも姐さんにラグナまで・・・本気で大貴を十世界に引き込むつもりか）

「・・・行くぞ」

「はい」

戦兵の言葉に静かに茉莉が頷く

「！！！！」

突如ゆりかごの世界に存在する地球の大気を引き裂いて出現した巨大な神能ゴットクロアに界道家でくつろいでいた神魔とクロスの表情に険しいものが浮かぶ

「！この力は・・・紅蓮とこの前の奴らか！！！！」

ゆりかごの世界に空間を移動して出現した神能ゴットクロアを知覚してクロスが歯を噛みしめる

神魔達を圧倒するほどの強大な魔力を持つ茉莉、そして墮天使のラグナ。どちらもその力は強大で間違っても一対一で勝てるような相手では無い

「しかももう一つ・・・これは戦兵レキオンの・・・！！」

「噂はあったが・・・十世界が本気になったって事か！！」

神魔の言葉に応じたクロスは純白の翼を広げる

「・・・ここがゆりかごの世界か・・・始めて来たな」

天を仰ぎ見る戦兵^{レギオン}の言葉に紅蓮は視線を逸らす

「魔力と光力が1つずつ・・・報告と違うが？」

「・・・光魔神と女の天使は普段人間の姿で過ごしている。『^{ヴェルトクロア}界能』を探れば分かるはずだ」

戦兵^{レギオン}の言葉に紅蓮が不機嫌さを隠さずにぶっきらぼうに答える

「なるほど」

「・・・混濁者か・・・」

「・・・？」

小さく呟いたラグナの言葉に紅蓮は怪訝そうに眉を寄せる

それと同時に紅蓮たち正面に2つの影が現れる。光など遠く及ばない速さで移動できる能力を持つ全霊命^{ファースト}にとつてこの惑星の距離など無いに等しい。ほんの一瞬で目の前に現れることなど造作も無い事だ

「お久しぶりですね。神魔さんとクロスさん・・・でしたよね？」

「覚えていてもらえるとは光栄だな」

「だね」

微笑む茉莉に神魔とクロスはそれぞれの武器をかまえる

「私たちは戦いに来たものではありません」

臨戦態勢を取る神魔とクロスに微笑んだ茉莉の言葉に2人は怪訝そうに眉を寄せる

「今日私たちがここに来た目的は・・・」

「！連れてくる手間が省けたらしいな」

茉莉が言葉を紡ごうとしたその瞬間、新たに現れた2つの神能^{ユットクロア}にその場にいた全員が反応する

「クロス！」

それと同時に天空から4枚の翼を広げたマリアとマリアに抱えられた詩織、左右で色の違う翼を広げた大貴が上空から降り立つ

「茉莉」

「はい」

戦兵レキオンの言葉に応じた茉莉が軽く手を振ると周囲一帯の空間が風景ごと切り取られる

「・・・あの人たちってこの間の」

「はい」

詩織を結界で包み込んだマリアはその言葉に頷く

「・・・でも一人・・・見た事ない人が・・・」

「何だ？この神能コトケクロア・・・今まで感じた事が無い上に茉莉と同じくらいの強力な力・・・！」

紅蓮、茉莉、ラグナと共に立っている男に詩織と大貴が怪訝そうな表情を浮かべる

2人の視界に映るのは頭の両側から突き出した巨大な角、顔に入った紋様と瞳の無い白目を剥いた様な眼が特徴の男

しかもその強大な力は茉莉と同等以上であるのが知覚能力で伝わってくる

「まずは自己紹介をしておこう。俺は戦兵レキオンの一人、ジユダ」

「戦兵？」

ジユダと名乗った巨大な角を持った白目の男の言葉に大貴が首を傾げる

「戦兵レキオンは最強の異端神・円卓の神座・？9『はこくしん覇国神』の力に列なる者・・・光魔神にとつての人間のようなものです」

「！円卓の神座・・・って確か光魔神も・・・」

マリアの言葉に詩織が目を見開く

「はい。本来異端神に限らず神と呼ばれる存在の大半には『ユニット能力』という自らの力に列なる存在である『ユニットファースト』を生み出す能力があります。九世界を支配する光と闇の8種族の全霊命もそれぞれが光と闇の神に列なるユニットです」

「・・・つまりあの人はその覇国神っていう神の部下って事ですか？」

「・・・ええ。覇国神が十世界についたという噂は聞いていましたが、

・本当だったんですね」

マリアが静かに言う

「ああ。今日は光魔神・お前に我等十世界の盟主である『姫』の名の下に十世界の総意を伝えに来た」

「俺に？」

ジユダの言葉に大貴は召喚した刀の先端を下げる

「光魔神・エンドレス・お前を十世界に迎え入れたい」

「?!?!?!?!?!」

「・・・やっぱりそう来たか・・・」

ジユダの言葉に大貴が目を見開き、神魔が静かに呟く

「ああ。我等十世界の願いは光も闇も無い全ての者達が互いに協力し合い支えあう世界だ。お前にも全ての世界を統一した新たな世界を作る手助けをしてほしいとの事だ」

「っ・・・」

ジユダの言葉に大貴は息を呑む

確かに光と闇の世界を1つにし、争いのない世界を作るといふことは素晴らしいと思える

しかし以前神魔やクロスが言っていた言葉も大貴の脳裏をよぎる

ファースト

《全霊命は何もしなくても生きていられる生物として絶対的な勝者としての立場と引き換えに戦いに生きることが宿命付けられた存在だつてことです》

《皆仲良くしようなんて正直余計なお世話つて事かな》

確かに十世界の言う事も間違つておらず憧れるような理想がある。しかし神魔達の言葉には確かな現実があり、そして今を受け入れている生き方でもある

どちらも間違つておらず、どちらも間違っているような考え方の相違。そういうものなのかもしれないがその違いが大貴の脳内を駆け巡る

「・・・っ!」

「お前もどうだ？混濁者の天使」

「!」

ジユダの言葉にマリアが小さく目を見開く

(・・・マリアさん・・・)

「我等十世界が新たな世界を構築した暁には異なる種族同士の恋愛や交雑を解禁する事を掲げているのはお前も知っているだろう?」

「!??」

ジユダの言葉に詩織は目を見開く

十世界は光も闇も無く、争いのない世界を求めている。だからこそ現在九世界が禁止している異なる世界を生きる種族との恋愛、交雑も解禁する事を公約として掲げている

「混濁者だというだけで存在を否定され、命を狙われ、迫害される。だが生まれてくる事が悪いわけではない。生きている事が罪ではない。だからこそ我等はその差別と迫害をも取り去りたいと思っているのだ」

(・・・異なる種族との交雑を認める・・・なら、私が神魔さんを好きになっても・・・でも)

ジユダの言葉に詩織の心が揺れる

確かにそれは詩織のように異なる世界に生きる者に特別な想いを抱く者にとっては素晴らしいことなのかもしれない。しかし全霊命^{フテースト}と半霊命^{ネクスト}が愛し合えば半霊命^{ネクスト}が死んでしまうという現実は変わらない

「・・・詭弁ですね」

しかしジユダの言葉をマリアは静かに切り捨てる

「十世界に混濁者^{マトララス}がいるのは聞いています。ですがそれはただの傷の舐め合いです。

世界の法を破って生まれ、存在を拒絶された事を『自分たちが悪いのではなく世界が悪い』と世界の所為にして苦しみから逃れようとしているに過ぎません。けれどそれは自分の存在から逃げた事と同じです!」

凜と佇むマリアの静かで強い口調に詩織は目を見開く

(マリアさん……)

「確かに混濁者マトラスに対する世界の対応は理不尽で不条理でしょう。しかし混濁者マトラスは混濁者マトラスです。その存在の業も全てを受け入れ向き合わなければいけないんです」

(すごいな、マリアさんは……混濁者マトラスである事を受け入れてそれでも前に進んでいける……私なんかとは大違い……)

絶望するしかない現実の前で立ち止まっている自分の姿とマリアを重ねて詩織は内心で自嘲して目を伏せる

「確かに九世界は混濁者マトラスを容赦なく殺すことで『異種族との交雑を禁ずる』という体制を強く内外に知らしめている。だが、それは法を維持する側の理屈だ。仮にお前はそう思っているとしても誰もがそう思えるわけでは無いだろう?」

マリアの言葉にジユダが応じる

「確かにそうです……ですがこのゆりかごの世界がいい例です」
マリアが切り取られた空間を手で指し示すようにする

「理由があれば犯罪を犯してもいい、責任が取れなければ法を犯しても罰を受けないというような風習を人権を守るという名目で作り出したためにその特例に人が甘え、法の意味が失われていく……」
目を伏せてマリアが静かに口を開く

特例を作ればそこからどんどんと枷が緩み、やがてその法の意味がなくなってしまう

このゆりかごの世界の人間が人権を重んじるあまりに犯罪者に対して寛容な態度を取り、結果的に犯罪を助長し、悪化させているかのように

「それはただの墮落です。法は世界の在り様です。人の意志を安易に受けず、世界の安寧と平穩を機械的な鉄の意志を持って執行しなければなりません」

一度目を伏せたマリアはゆるぎない信念を宿したまっすぐな目でジユダを見る

「あなた達がしていることはこの世界と同じです!!」

「・・・やれやれ・・・ゆりかごの世界と一緒にされるとはな・・・このまま続けても進展しそうには無いな・・・」

「はい」

暗に十世界に入る気はないんだな?と確認してくるジユダの言葉にマリアは静かに強く頷く

「まあいい。お前は どうする?光魔神」

「!・・・俺は・・・っ」

ジユダの言葉に大貴は目を伏せる

ジユダのいう事も分かる。マリアのいう事も分かる。十世界のいう事も分かる。九世界のいう事も分かる

何が正しいのかは分からない

(ゆりかごの毒はかなり薄れているようだな・・・完全覚醒を妨げているのはやはりゆりかごの毒か?)

戸惑いを隠せない大貴を見てジユダは内心で呟く

なぜか全霊命ファーストとして上の下程度の力しか持たない不完全な覚醒の光魔神。最強の異端神「円卓の神座」の「?1」にして最強の異端神の一柱であるこの神の力は現在の九世界においてまさに無双の力を持つ

しかしその力はまだ未覚醒。その理由は不明だ

「俺は・・・っ」

「その男の言葉に耳を貸してはなりません」

「!!!」

「なっ!?!」

不意に切り離された空間に響き渡った凜とした声に全員の視線が一斉にその方向へ向かう

「あれは・・・」

そこにいたのは金色の髪をなびかせ、白銀の鎧を纏った女性。翼

のような飾りのついた兜をかぶるその様は北欧神話の戦乙女を思わせる

鋭く凜と研ぎ澄まされた視線。感情の変化が読み取りにくい氷のような表情を持った女性は金色の髪をなびかせて一直線に空を切り、ジユダに向かつていく

「っ！また感じたことの無い神能か……」

「これは僕も感じたことの無い力……異端神に列なっている事は分かるけど……」

「誰だ……？茉莉やジユダと同等の力だ！？」

大貴、神魔、クロスが怪訝そうな表情を浮かべ、茉莉、紅蓮、ラグナも驚愕を隠せない様子で突如現れた戦乙女に視線を送っている。新たに現れた戦乙女の神能ゴットクロアの大きさは茉莉やジユダと同等。それだけでかなりの実力者だと分かる

「……貴様」

「始めまして戦兵レギオンの人……『シルヴィア』よ。『クラウスターズ』……」

シルヴィアと名乗った戦乙女は表情を変える事無くその手に斧のような刀身を持った槍「斧槍」を召喚するとジユダに向かつて空を切る

「っ！爆雷ばくらいでんついでん天槌……」

斧槍を構えたシルヴィアが攻撃してくるのをみたジユダはその腕に銃のシリンドラーのような機構を備えた剣を召喚し、その攻撃を受け止める

「何故お前がここにいる？あの女がこの戦いに手を出す気か！？」

「さあ？何のことでしょうか」

氷のような無表情を崩す事無く答えたシルヴィアは斧槍を握る手に力を込めた

「なっ！？次から次へと……どうなってるんだ！？」

ジユダとシルヴィアの力が真正面から激突し、強大な破壊の衝撃波を撒き散らすのを見て大貴が思わず声を上げる

「どこの誰だか知らねえが・・・よくやった！」

「紅蓮!？」

その様子を傍観していた紅蓮はその手に抜き身の刀身を持った剣を呼び出し、そのまま大貴に向かって一直線に走り、漆黒の魔力を纏わせた斬撃を放つ

その攻撃を手に召喚した刀で受け止めた大貴に紅蓮は獣のような笑みを浮かべる

「この間のケリをつけようじゃねえか!俺を改心させるんだろ!？」

「・・・ああ！」

紅蓮の言葉に口元に笑みを刻んだ大貴の身体から白と黒の交じり合った太極オールドの力が吹き上がる

「あの女・・・！」

漆黒の翼を広げたラグナの視界に純白の翼が舞う

光力を纏わせた身の丈ほどの大剣の一撃を反射的に召喚した黒い光を纏う自分自身よりも巨大な両刃の斬馬刀でラグナが防ぐ

「お前の相手は俺だ！」

「・・・すぐに終わらせてやるさ」

クロスの斬撃を受け止めたラグナが静かに言い放ったその瞬間、ラグナの持つ巨大な斬馬刀から漆黒の光が吹き上がった

「・・・やれやれ・・・皆勝手に戦い出して・・・」

「ええ、どうなさいます？」

金色の波打つ髪を持つ美女「茉莉」に向かい合う神魔は自身の倍近い長さを持ち、漆黒の刀身を備えた大槍刀を構える

「・・・『夢幻奏槍』」

神魔が大槍刀を構えるのを見た茉莉はその手に槍を召喚する

「あなたでは私に勝てませんよ」

茉莉の身体から神魔はもちろん、この場にいる誰をも圧倒する強大な魔力が吹き上がり、同時に茉莉の持つ槍が鈴のような澄み渡った音を奏でる

「いけない。神魔さん一人であの人に勝つのは無理です！」

「そんな・・・神魔さん・・・！」

その様子を見ていたマリアが声を上げ、その背後で結界に守られる詩織が息を呑む

茉莉の魔力はこの場にいる誰よりも大きい

ファースト

全霊命にとつて魔力の大きさは強さと等しい。即ち自分より強い

魔力を持つ相手に挑む事は自分よりも強い相手と戦うという事だ

「とはいえ、僕達の力の格は同じ。つまり絶対に勝てないって訳じゃない」

神魔が言う

霊の力には「格」というものがある。それは力によって超えられない「絶対値」。この一線を隔ててしまふとその力は相手に通じなくなってしまう。だが逆に強い弱い差があつても、同じ格の中にあれば戦い方や運でその勝敗を覆す事も出来る。

つまり「格」とは戦略や戦術、数や運で勝敗を覆す事が出来る力のレベルを指す。茉莉の力は神魔を遙かに上回つてこそいるが格は同格。つまり戦い方によつては勝機を見出す事が出来る

「そうかもしれませんが・・・奇跡に期待しては勝てませんよ」

確かに神魔が茉莉を倒す事ができないわけではない事は茉莉も知っている。しかしだからといって茉莉の絶対的優位性は揺るがない「そうだね・・・だから僕も切り札を出す事にするよ」

「・・・切り札？」

余裕の笑みを浮かべる神魔に詩織が首を傾げる

「・・・そんなものが・・・？」

「本当は呼ばずに終わらせたかつただけど、さすがに出し惜しみしているわけにもいかなかったからね」

「呼ぶ？」

そう言つて神魔はゆっくりと目を閉じる

《・・・来て》

そう言つて心の中で呼びかける

《はい》

その言葉に静かに応じる声があった

桜花繚乱

神魔は閉じていた目をゆっくりと開く。

瞼の裏に隠されていた金色の瞳が茉莉を見つめ、まるで勝利を確信しているかのように小さく微笑む

「？」

その笑みに茉莉が眉をひそめたその瞬間、神魔の背後の空間が開いた。

「なっ……」

それに目を見開いた詩織の視界に鮮やかな桜の花弁が舞う。

「……え？」

詩織が息を呑んだその瞬間、神魔の背後に桜の花弁が舞い踊る

「っ！！」

思わず詩織は息を呑んだ

詩織の視界に映ったもの、それは桜の花弁などではなかった。それは鮮やかに揺れる桜色の髪。

「……女の、人……？」

神魔の背後に現れたのは、膝裏まで届くほどに長い癖のない桜色の美しい髪を持ち、黒い着物の上に白い羽織りを羽織った女性

神魔の背後に現れたその女性の美しい桜色の髪の間からのぞく鮮やかな紫色の目が神魔を捉える

「っ、すごい美人！！」

神魔の背後に現れた桜色の髪の女性を見て詩織が目を見開く

癖のない桜色の髪の美しさはもちろん、雪のように白い肌。整った顔立ちはまるで1つの芸術のような美しさをたたえ、同性の詩織から見ても目を瞠るほどに美しい清楚な綺麗系の美人

慈愛に満ちた穏やかな顔立ちに、清楚でお淑やかな雰囲気纏っ

たその女性は神魔の元に歩み寄ると恭しく一礼する

「お久しぶりです。神魔様」

（様！？）

その女性の言葉に詩織が目を見開き、神魔は優しく微笑みかける

「うん、そうだね・・・でも挨拶は後回しだよ、『桜』」

「はい」

神魔の言葉に桜と呼ばれた美しい女性が微笑んで頷く

「その人が切り札ですか？」

「そうだよ」

桜の姿を見止めた茉莉は怪訝そうに表情を浮かべると武器の槍を構え、澄んだ音を槍から響き渡らせる

「随分と強そうなお方ですね」

「でしょ？さすがに僕1人じゃ相手できないから頼めるかな？」

「無論です」

神魔の言葉に桜は静かに頷く

（随分と余裕ですね・・・あの桜という女性・・・神魔さんと魔力はほとんど変わらないのに）

その様子を見て茉莉は怪訝そうに眉をひそめる

確かに二対一と数的には相手の方が有利になった。しかし全霊命ファースト

の戦いは神能ユニットクローアの戦い。神魔と桜の力が同等という事は、茉莉とは実力が大きく離れている事を意味している。

そしてそれは、数の優位で容易に覆す事ができるような実力差ではない

（・・・となるとあの自信の源は恐らく・・・）

茉莉は決して気を緩める事無く神経を研ぎ澄ませていく

「桜、久しぶりだけど鈍ってないよね」

「はい・・・」

神魔の言葉に恭しく頷いた桜は、自身の魔力を武器としてその手の中に顕現させる

「天桜雪花てんおうせつか！」

その手の中に薙刀に似た武器を召喚した桜は神魔の大槍刀とその刀身を重ね合わせる

神魔と桜が、武器の刀身を重ね合わせると同時に2人の身体から魔力が吹き上がる。

神魔の漆黒と桜の桜の花弁が舞う夜桜の魔力が折り重なり、混ざり合って融合し、互いの魔力を増幅させていく

(魔力が共鳴して増幅している・・・魔力の融合・・・!!やはりこの2人・・・)

目の前で神魔と桜の魔力が共鳴し、増幅されていく様子を見て、茉莉は目を細める。

「!」

「魔力が増幅している!・・・あの2人まさか!」

「?」

その様子に息を呑むマリアに詩織は首を傾げた

その視線の先で、魔力を共鳴させ、さらにその魔力を高めた神魔と桜は、武器を構えて戦闘体勢を取る

「・・・!」

「いくよ!桜」

「はい」

地を蹴って一瞬で茉莉と距離と詰めた神魔は、サクラの魔力と共鳴し、増幅された強大な魔力を大槍刀に纏わせて力任せに振り下ろす。

(確かに、魔力は増幅されていますが・・・この程度!)

振り下ろされた神魔の大槍刀を、茉莉は手に持った槍で受け止める。神魔の魔力が茉莉の槍によって阻まれ、拡散し、天を衝いて荒れ狂う。

いかに神魔の魔力が増幅されていても、まだ祭りの魔力のほうが上。真正面からの攻撃では魔力値で上回っている茉莉に攻撃が届く

事は無い

「……？」

しかし攻撃を阻まれたはずの神魔の、余裕に満ちた表情に茉莉が疑問を感じたその瞬間、茉莉の真正面に光の速度をはるかに超えて放たれた槍の切っ先が迫る。

「っ！」

自分の顔に向かって一直線に走った槍の刀身を、茉莉は反射的に身体を捻ってかわすが、頬を掠めた槍の刀身によって茉莉の頬から真紅の血炎が舞う

（っ、なんて攻撃・彼の身体の隙間を通してくるなんて！）

茉莉に向けて放たれた突きは桜の薙刀の刀身。大槍刀を振り下ろし、茉莉に受け止められた神魔の腕と身体の隙間を縫うように放たれた一撃

（ほんの少しでも彼の体勢がずれれば彼に当たっている！なんて信頼。なんて正確無比で大胆な攻撃……！）

ほんの少しのミスで神魔に当たってしまう様な攻撃をためらう事なく、正確に相手に繰り出す神魔と桜の絶対的信頼の上に成り立つ完璧な共戦

「はっ！」

桜の攻撃を回避した茉莉に追い討ちをかけるように、世界を水平に両断するのではないかと思われるほどの圧倒的速さと威力を兼ね備えた神魔の一撃が、茉莉の胸を狙って放たれる。

「くっ……！」

体勢を崩しながらも茉莉は物理法則の影響を一切受け^{ファースト}ない全霊命の特性によって、不自然な体勢から魔力を宿した槍で神魔の大槍刀を弾く

神魔と茉莉、2人の魔力を比べれば茉莉の方が神魔よりも強力な魔力を有している。正面きつての威力なら茉莉に軍配が上がる

「なっ!？」

しかしその瞬間、茉莉は目を見開く

弾いたはずの神魔の大槍刀の刀身を、神魔の背後で回転した桜の薙刀の刀身が打ち払って逆向きに弾き飛ばす

(弾いた刀身をさらに弾いて私に打ち返して・・・！)

「っ！」

反射的にその一撃を槍で受け止めた茉莉の反対側からさらに薙刀が襲いかかる

神魔の大槍刀を弾いた桜がそのまま背後で再度回転し、反対側の側面から茉莉に時間差で攻撃を仕掛けてきたのだ

「くっ、・・・はあっ！！」

瞬間。茉莉の身体から魔力が噴き出し、澄み渡った鈴の音のような音と共に魔力が炸裂したかと思うと神魔と桜を呑み込んで魔力の爆発を引き起こす

その爆発から後ろ向きに飛び出した茉莉は、肩からわずかに血炎を上げながら地面に着地する

(強い・・・！)

神魔と桜の魔力はほぼ同等。つまり一対一なら茉莉の方が魔力の強さから圧倒的に勝っているはずなのだ

しかし神魔と桜は2人で戦う事でその戦闘力を2倍どころか何倍、何十倍にまでも高めてきている

(この2人の魔力なら2対1でも確実に私の方が強い・・・けれどこの2人は2対1じゃない・・・もつとそれ以上に・・・いえ、限り無く私に近い1対1！)

魔力の共鳴によって増幅される魔力量など微々たるものに過ぎない。しかし神魔と桜は完璧な共闘によって茉莉との実力差を限り無く0に近づけている。

それはまさに一心同体と表現するべき戦闘。神魔と桜対茉莉の2対1ではなく、神魔と桜対茉莉の1対1の戦いだ

「・・・あれが神魔さんの本当の戦闘スタイル・・・」

その様子を見ていたマリアは結界の中であまりにも完成された動

きを見せる神魔と桜に思わず息を呑む

「・・・っ」

(あの女の人・・・神魔さんともものすごく息が合ってる・・・)

一方でその様子を見ていた詩織の胸には刺す様な痛みが走っていた

(・・・桜さんを見てると胸が苦しい・・・)

自分自身が桜に対して抱いている感情に、詩織は祈るように重ね合わせた手を力の限り握り締めた。

「なるほど・・・あなた達は2人で戦う事を得手としていたんですね。それもこれほどの戦い方・・・魔界、いえ・・・九世界でも屈指と言えるでしょう」

茉莉は向かい合う神魔と桜に静かに言う

その言葉に間違いは無い。戦闘の手段として2人で共闘する事を卑怯とは思わないし、思うべきではない。そんな戦いをする者など九世界には吐いて捨てるほどいるのだから

しかし目の前の2人、神魔と桜の共闘の水準は間違いなく九世界でも最高クラスと言っていいものだ。何しろ自分たちよりもはるかに強大な魔力を持つ茉莉を圧倒するほどのだから

「どうも」

「ありがとうございます」

微笑む神魔と桜を見て、茉莉の表情に一瞬寂しさや悲しさに似た色が浮かぶ

(本当に・・・うらやましいですね・・・)

「桜、こっちもいくよ」

「はい、神魔様」

神魔の言葉に頷いた桜の身体から魔力が噴き出す。漆黒の魔力に桜色の魔力が混ざって舞うその様は夜の闇に桜の花弁が舞っているかのように見える

「参ります」

その言葉と同時に桜の魔力が渦巻き、夜桜の魔力の渦が今にも茉

莉を呑み込もうと怒涛の如く迫る

「はあっ！」

その魔力の渦を茉莉の一刀が斬り裂いて消滅させたその瞬間、茉莉の眼前には薙刀の刀身に魔力を纏わせた桜が肉迫する

そのまま舞踊を舞うように放たれる桜の連続攻撃を茉莉は全て阻んでいく。右から左へ、上下左右に超光速で不規則に変化して放たれる軌道の斬撃を茉莉はこともなげに阻む

「っ！」

茉莉が桜の斬撃を阻んだその瞬間、薙刀を持っていた手を離して、桜が身体を半身離れた隙間から魔力を帯びた神魔の大槍刀の突きが放たれる。

「っ！」

その斬撃を紙一重で回避した茉莉に、さらに桜の流れるような斬撃が放たれ、その斬撃を一瞬で反応した茉莉が魔力を集中させた手で弾く

（今度は彼女が囿・・・攻防を分担するのではなく、攻防を不規則に入れ替え、変化させる変幻自在の多種多様な攻撃・・・！）

手から血炎を上げて、一瞬苦痛に顔を歪めた茉莉に向けて神魔と桜が手をかざし、魔力の砲撃を放つ。

同時に放たれた神魔と桜の魔力の砲撃が一直線に茉莉を直撃し、切り離された空間全体を震わせるほどの魔力の爆発を引き起こす。

神魔と桜の放った魔力放棄込められた破壊の意志が世界を満たし、隔離された世界を滅ぼすほどの破棄を現象化し、大地と、そこに存在する全てを崩壊させる。

「・・・神魔様」

「分かつてる」

桜の声に応じた神魔の目の前で、極大の破壊を引き起こす魔力の爆発が、弾ける様に粉碎される

「・・・っ」

神魔と桜の魔力を相殺し、砕け散った茉莉の魔力の残骸が、神魔

と桜に向かつて降り注ぎ、その爆発の中心から、軽傷を負った茉莉が姿を現す。

(・・・これが、彼と彼女の・・・真の実力・・・！)

神魔と桜の魔力砲を、自身の魔力砲で相殺した茉莉は、身体に負ったかすかな傷を一瞥して、離れた位置で佇んでいる神魔と桜を見る。

「・・・申し訳ありませんでした、神魔様」

「大丈夫だよ」

破壊された魔力砲を貫通してきた茉莉の魔力砲の破片から桜を庇った神魔は、左肩を魔力で焦がして佇んでいる

「それよりこのまま持久戦になると実力差で追い込まれる。・・・だから一気に決めるよ」

「はい」

神魔の言葉に桜が頷き、二人の魔力が解放される。

神魔と桜の共戦は、自分たちよりも強力な魔力を持つ茉莉と戦えるほどの戦闘力の飛躍をもたらす。だが、だからと言って元々の自力の差を埋めることはできない。

長期戦になれば魔力で勝る茉莉が圧倒的優位に戦闘を進められるのは分かりきっている

(・・・やはり短時間での決着に来るようですね)

神魔と桜から吹き上がる完全なる殺意と戦意を宿した強大な魔力に、茉莉は槍を持つ手に力を込める

まるで1人の魔力と錯覚してしまいそうな魔力を放つ神魔と桜に向けて茉莉も魔力を解放した。

瞬間、神魔と桜、茉莉はどちらからともなく地を蹴り、一瞬で激突する

2人と1人がぶつかり合い、魔力の激突と奔流が巻き起こり、乱舞して炸裂する。光をはるかに凌ぐ速度で放たれる大槍刀と薙刀の

乱撃を、それ以上の速度と威力で茉莉の槍が弾き、打ち落とす。

「っ！」

大槍刀に漆黒の魔力を絡ませた神魔の斬撃が天を衝いて茉莉に炸裂し、さらに桜の魔力が四方八方から縦横無尽に追い討ちをかける

「くっ！」

破壊力の神魔の一撃と、変幻自在に多方面から放たれる桜の一撃を澄み渡った音と共に茉莉の魔力を帯びた槍撃が粉碎する

(そして次は・・・！)

神魔と魔力の魔力波を打ち消した茉莉はそのまま身体を捻りながら体勢を沈める

(先程のまでの攻撃から考えて、この2人は私が攻撃を放った直後を狙ってくる！)

その読み通りに、茉莉が身体を沈めた瞬間に神魔の斬撃が真横から一直線に斬り払ってくる

「！！！」

茉莉の魔力を感知して先読みしての斬撃。しかし、それよりもさらに一瞬早く回避した茉莉の視界には大きく大槍刀を横薙ぎした神魔の無防備な胸がさらされている

(これで1人！！)

無防備な神魔の胸に茉莉は魔力を宿した槍での一閃を放つ。その斬撃は神魔の胸を捉え、その身体を真つ二つに両断する。

・・・はずだった。しかし攻撃が当たる瞬間、神魔の身体がその場に崩れ落ち、茉莉の一閃を紙一重のところまで回避する

「なっ!?!」

茉莉が視線を向けると、桜が一瞬の内に神魔の足を薙刀の柄で払い、霊衣の襟を掴んで力任せに神魔の体勢を崩して茉莉の攻撃を回避させていた

(しまっ・・・)

そして同時に茉莉は理解する。この攻撃が自分を誘う罠であった事に

体勢を崩しながらも神魔は全く動じる事無く、茉莉の懐に魔力を収束した手を向け、至近距離から魔力の砲撃を茉莉に叩き込む。

(反撃を……)

それに反応し、迎撃を試みた茉莉の考えを見越していたかのように、神魔の体勢を強引に崩した桜は、神魔を回避させると同時に、茉莉の武器の槍を薙刀の刀身で跳ね上げ、攻撃と反撃を封じる

「くっ……！」

桜に槍を弾かれ、武器で防ぐ手段を奪われた無防備な茉莉に、神魔が放った魔力が直撃し、その漆黒の魔力砲は茉莉の身体を呑み込んで吹き飛ばす。

「っ！く……！」

地平を両断するほどの圧倒的威力と規模の魔力砲が、切り取られた空間の果てまで漆黒の線を引く

「はああああっ！！！」

完全に無防備な状態で打ち込んだ必殺の一撃。本来ならば、勝負が決してもいいはずの一撃だが、神魔と桜は警戒を解かずに、その魔力砲の軌道に視線を送る。

「……！」

その刹那、漆黒の境界線を引いた極大の神魔の魔力砲が途中で捻じ曲がり、打ち砕かれて大気中に漆黒の風花を舞わせる。

「このくらいの事で……！」

至近距離から放たれた神魔の特大の魔力砲を、自身の魔力を以って相殺し、破壊した茉莉の眼前に一瞬で神魔と桜が迫る

「そう何度も、不意を衝かれる事はありません！」

茉莉が魔力を自身の武器である槍に収束する目の前で、神魔の大槍刀と桜の薙刀の刀身が交差するように合わせられる。

「そうでしょうね」

桜が静かに言う

元々の自力で劣る神魔と桜が茉莉に対して取りうる戦法は、2人の戦術で相手の裏をかくか、虚を衝く以外には無い。だがそれをし

てくる事が分かっていたら茉莉ほどの実力者ならそれに相對する事も容易だ

「だから真正面から力づくで叩き潰すんだよ」

「・・・！」

神魔の言葉に茉莉が目を見開く

瞬間、合わせられた2人の武器の刀身で2人の魔力が交じり合い、増幅し、それがさらに凝縮されて充実し、膨れ上がっていく。

漆黒と夜桜の魔力が混ざり合い、漆黒を桜色が縁取って彩る強大な魔力へと変換され、さらに2人の魔力が共鳴し、融合し、何倍にも何乗にも高められていく

(魔力融合・・・！それほどにこの2人は・・・)

一瞬動揺を浮かべたもののすぐに平常心を取り戻した茉莉は、自らの魔力を込めた一撃を2人に向けて放つ

「はあああああつ！！！」

神魔と桜の融合した魔力の一撃と茉莉の一撃が真正面からぶつかり合って炸裂し、空間を軋ませるほどの大爆発を巻き起こす

世界を一瞬にして漆黒が支配し、そこに込められた純粹にして完全な破壊と抹殺の意志が、物理世界に滅びの現象を引き起こす。

「っ・・・！」

「神魔さん・・・！」

圧倒的な破壊力を持った魔力の奔流にマリアの結界が軋み、その中で眼前に広がる全てが消え去ったのではないかと思われるほどの漆黒の世界に、詩織は祈るように視線を送る。

空中で身体中から血炎を上げているクロスと相對し、無傷のまま佇んでいるラグナはその強大な魔力の奔流に眉をひそめる

「茉莉と渡り合えるとは・・・あの2人相当のものだな」

余裕で茉莉と神魔達が戦っている場所へ視線を向けるラグナの背後から、光力の斬撃が空を切って放たれる

それを漆黒の光を纏わせた斬馬刀で一刀両断にしたラグナは、その光力の斬撃を放ったクロスに視線を向ける

「神魔に協力するのは癪だが、加勢に行かせる訳にはいかねえな」

「・・・その必要は無い」

「何？」

クロスの言葉にラグナが無表情に応じる

「俺が加勢に行くまでもなくこの戦いは終わる」

「・・・!!」

ラグナのその言葉にクロスは目を細めた

それと同じ頃、紅蓮と相対する大貴は強大な魔力の爆発を知覚して息を呑む

「何て強大な魔力だ・・・」

大貴の言葉を聞きながら紅蓮は、その爆発の中にいるであろう茉莉に視線を向ける

（まさかあの2人がこれほどの力を持っているとはな・・・）

「あの2人・・・よほど相性がいいらしいな」

「・・・?どういう意味だ」

紅蓮の言葉に大貴が怪訝そうに眉をひそめる

「何・・・お前には関係ない事だ」

そう言うと紅蓮は自信の持つ剣に魔力を注ぎ込む

「こっちはこっちで戦い合おうぜ」

「全く、お前の相手は疲れるな」

刀に漆黒と純白が絡み合う太極オールドの力を纏わせて言いながらも、大貴の表情には笑みが刻まれていた

強大な魔力の爆発が起きたその場所から神魔と桜が後方に飛び退く

「・・・神魔様」

左腕から黒煙を立ち昇らせる神魔を案じる視線を向ける桜に神魔

は小さく笑って見せる

「大丈夫、少し巻き込まれたただけだから。それよりも気を抜いちゃ駄目だよ・・・あれで倒せるとは思えないから」

「はい・・・確かに彼女の魔力を感じます」

神魔の言葉に頷いた桜は、静かに魔力の爆発の中心に視線を向ける
「・・・驚きました・・・」

煙が晴れていくとその中から茉莉の澄んだ声が2人に向けられる
「最後の一撃は加減していなかったんですが・・・」

煙の中から現れた茉莉は、身体のいたるところから血炎を上げてはいるが、どの傷も浅く茉莉を倒すまでには至らない

「当然だよね・・・僕達もほとんど無傷なのに、僕達より強いあの人が致命傷を負う訳ないし」

「はい、何より正面から魔力の一撃で相殺しておられましたから」

分かっただけでも落胆を隠せない神魔の呟きに桜が静かに応じる
2人の魔力は茉莉の魔力に劣る。魔力を融合させてその力を増幅しても、茉莉を凌駕するまでには至らない

「認めます・・・御二人はとても強いと・・・」

茉莉が手に持った槍を軽く払うと澄み渡った鈴の音のような音を立てる

(そして懂れます・・・御二人の絆に)
「・・・?」

茉莉の表情に一瞬、悲しそうな、切なそうな、遠い目を懐かしむようなものが浮かび、神魔と桜はわずかに目を細める

「あなた方はそれぞれでは私に敵わないはず・・・ですが2人で戦うあなた達の力は間違いなく上位の全霊命フェーストのそれに匹敵し、或いは凌駕するでしょう。これほどの絆を私は見た事ありません

私は決して油断していたわけでも、慢心していたわけでもありません・・・それでも私をここまで追い込んでるのは御二人の力です」

それは茉莉の本心、茉莉は今2人に敵ながらも心からの賞賛を送り、二人の絆に懂れすらも抱いている

「どうも」

「お褒めにあずかり恐縮です」

茉莉の心からの賞賛に神魔が微笑み、桜が目を伏せて軽く一礼する
「ですが・・私は負けるわけにはいかないのです」

言った茉莉の身体から漆黒の魔力が吹き上がる

「・・来るよ」

「はい」

茉莉の言葉に神魔と桜が構える

「参ります」

茉莉が静かに宣言したその瞬間、茉莉の頭にジユダからの思念が届く

《やめろ、茉莉》

「・・・！」

「・・・!？」

不意に戦意が消えた茉莉に、臨戦態勢を取っていた神魔と桜も同時に戦意を解く

「申し訳ありませんがこれ以上戦う必要がなくなりました」

手に持っていた槍を消し去った茉莉は神魔と桜に視線を向けて微笑む

「・・・？」

怪訝そうに眉をひそめる神魔に茉莉は穏やかな笑みを浮かべると宙に浮かび上がる

「撤退命令が出ましたのでここで退かせていただきます」

そう言って茉莉は二人に恭しく頭を下げる

「では今日はこれで・・私達に縁があればまた」

その言葉と同時に茉莉の姿が一瞬で消える

「・・追い払った・・・？」

その様子を見ていたマリアは、驚愕を隠せない様子で小さく呟く
決して勝ったとは言い難い状況。それでも誰一人命を落とす事無くこの場に立っていることは、茉莉との実力差を考えれば十分すぎ

るほどの戦果だ

「・・・よかった」

その様子を見ていた詩織はマリアの結界の中で安堵の息をつき、寄り添いあう神魔と桜を見て表情を曇らせた

「止めにしようか、シルヴィア」

その頃、シリンドーのついたジユダの剣を槍斧で受け止めた白銀の騎士乙女「シルヴィア」はその言葉にあまり表情を語らない目元をかすかに細める

「俺たちには戦う理由がない。これ以上我々が殺しあうのは無益だ・・・そうだろう？それともこうするように誰かに命じられたのか？」

「・・・！」

その言葉にシルヴィアはジユダの剣を弾いて距離を取る

「一つ、お尋ねしたい事があります。あなた方はなぜ十世界にいたのですか？あなたの方の真の主は・・・」

「・・・簡単な事だ。我等の主はもうこの世にいない・・・我等の神が十世界の盟主を新たな主として認められたからこそ我々は十世界に組している」

「・・・そうですか」

目を細めたシルヴィアは一言だけ呟く

その目の前に茉莉、ラグナ、紅蓮の順で降り立つ

「今日は退く事にしよう。・・・まさかお前たちがこの一件に絡んでくるとは予想外だったからな」

「お前たち？・・・何の事でしょうか？」

ジユダの言葉にシルヴィアは表情を変える事無く冷たい口調で応じる

「まあ、いい・・・」

その言葉と同時にジユダ達の背後に空間の門が出現する

「光魔神！いい返事を期待しているぞ」

「・・・！」

ジユダの言葉にその近くで様子を見ていた大貴は小さく目を見開く
その言葉だけを残してジユダ、紅蓮、茉莉、ラグナは空間の門を
くぐって帰還する。

「・・・」

ジユダ達の消えた場所を見つめる大貴は、目を伏せたまま無言で
佇んでいた・・・。

桜花繚乱（後書き）

次話で補足しますが、今回登場した「桜」は序章の最後にちらりと描写がある人です。

交錯する思惑

ジユダたちが姿を消したのを確認して、神魔と桜の元へマリアと詩織が歩み寄る

「御見事でした神魔さん・それと・・・」

神魔に微笑みかけたマリアは、神魔に寄り添うように立っている桜に視線を向ける

「はじめましてですね・『桜』と申します。マリアさんと詩織さんですね？」

その視線に気付いたのか、桜は二人に向き合おうと礼儀正しく頭を下げる

「あ・・はい」

「神魔様から伺っていた通りの方々ですね」

顔を上げて微笑んだ桜に、迂闊にも詩織は胸が高鳴るのを感じてしまった

（うわ・・近くで見ると本当に綺麗な人・・・）

穏やかで整った顔立ち、雪のように白い肌、透き通るような紫の瞳、腰まで届く癖のない美しい桜色の髪。

纏った霊衣は和服に似ており、清楚な雰囲気と相まって、まさに大和撫子といった雰囲気で佇む桜は絶世の美女と言っても過言ではないほどの美しさをたたえている

（でも・・・この人、なんで神魔さんを様付けで呼んでるの？それに神魔さんとはどういう関係なんだろう・・・）

そんな事を考えると、詩織の胸は締め付けられるように痛む

マリアに言われ、神魔への気持ち忘れようともした。けれど頭で分かっただけでも心がそれを認めてくれない

忘れようとすればするほど神魔の存在が胸の中で大きくなり、そ

の想いが詩織の胸を容赦なく締め付ける

「自己紹介は後だよ、桜。まだ一人残ってる」

そんな詩織の気持ちなど知る由も無く、神魔は静かに佇んでいる騎士のような出で立ちをしたシルヴィアに視線を送る。

「そうですね。彼女は私達に話があるようです」

周囲の空間を見回してマリアが頷く。

ジユダたちが去った事で解放された空間隔離をシルヴィアが再度施し、神魔達を一箇所に留めているのがその理由だ

「そうですね・・あの人の神能ユットクロア、私は今までに知覚した事がないんですけど神魔さんはどうですか？」

「同じく・・今まで感じた事のない神能ちからだね」

「そうですね・・・」

神魔の言葉にマリアはわずかに目を細める

シルヴィアから今の所、戦意は感じない。だからこそ神魔達も強く警戒しているわけではないが決して気を緩めてはいない

「では・・彼女は何のために私たちだけをここに閉じ込めているのでしょうか・・・」

「話でもあるんじゃないか？」

漠然とした不安を述べたマリアの隣にクロスがシルヴィアを伺うように降り立ち、次いで大貴も左右非対称色の翼をはためかせて降り立つ

「ようやく揃いましたか・・・」

一箇所に全員が揃ったのを確認してシルヴィアはそこにいる全員に聞こえないような小さな声で呟く。

「神魔様、よろしいでしょうか？」

怪訝そうにシルヴィアに視線を送っている神魔達に、桜が穏やかな声で話しかける

「何？」

「あの方・・恐らく『ガイデンナイト神庭騎士』ではないかと」

「！ガイデンナイト神庭騎士！！」

「その通りです」

桜の言葉に目を見開く一同に、透き通った水晶のような声で応じたシルヴィアは、神魔達の前に降り立ちその場にいる一同に視線を向ける

「・・・あ、あの・・・ガーデンナイト 神庭騎士つて・・・？」

神魔達の背後に隠れるようにして様子を伺う詩織の言葉に、マリアが静かに応じる

「ガーデンナイト 神庭騎士とは最強の異端神、円卓の神座・？10 『しほうしん 護法神』の力に列なる者です」

「！・・・また、円卓の神座ですか！？」

息を呑む詩織に、シルヴィアが氷のように冷静な視線を向ける

「付け加えるならば私達の神、護法神様は『守護』と『秩序』、『平穏』と『安定』を司る神。対して戦兵レギオンの神、覇国神は『戦争』と『侵略』、『蹂躪』と『略奪』を司る神・・・つまり彼らと私たちは対であり、対極である存在という事になります」

「対の神・・・」

「ええ、天使と悪魔、光と闇のようなものです。彼らと私たちは表裏一体の存在。しかし、そうであるが故に決して相容れない存在です」

呟いた詩織にシルヴィアは静かに応じる

「で？そのガーデンナイト 神庭騎士が僕達に何の用？・・・確か護法神はそう・・・」
言いかけた神魔の首に一瞬にしてシルヴィアの武器である槍斧の刃が押し当てられる

「！・・・」

「神魔様！」

「！！！」

反射的に応戦しようとした桜をシルヴィアが視線で制する

シルヴィアの力は、茉莉と同等以上の力を持つジユダと同等。つまりシルヴィアは今ここに誰よりも強い。その気になれば神魔の首を一瞬で斬り落とす事も容易いだろう

「私は私の意志でここに来ています・・不用意な事を口にしないようにしてください」

「分かりました」

神魔が頷いてみせるとシルヴィアは槍斧を消して踵を返す

「あなたが光魔神ですか」

「!・・ああ」

シルヴィアの視線を受けた大貴は、気圧されそうになるが、すぐに鋭い視線を返す

「円卓の神座の頂点の一角であるあなたは、本来ならば我らの神の元へお招きするところですが、今のその不完全な覚醒では、まだ時期尚早のようですね」

「目的は光魔神か？」

「目的?いえ、ただの通りすがりです」

クロスという言葉にシルヴィアは、淡々とした口調で返す。

「・・・あくまでも、白を切り徹とおされるようですね」

「深入りはしない方がいいよ。関わりになりたくない」

「はい」

小声で言った桜に、神魔が静かに応じる

「ですが、円卓の神座の頂点にご挨拶をしないのは失礼かと思えますので、私からは一言ご忠告をさせていただきます」

大貴を真正面から見据えるシルヴィアは、ゆっくりと言葉を紡ぐ

「十世界には、『反逆神』が組しているようです。」

「反逆神？」

「円卓の神座 ? 2。光魔神と並んで円卓の神座の頂点に立つ神。

そして、あの時、あなたを殺した神です。」

「!」

シルヴィアの言葉に、大貴が目を見開く

「・・・噂には聞いていたけど、本当に十世界はその神を味方に?」

「あの神は味方にはなりませんよ。そういう神なのですから」

「・・・」

シルヴィアの言葉に、神魔は無言を以って応じる。

「・・・では、私はこれで」

それだけ言うとシルヴィアは空間の門を開いてその姿をくらませる
「一体なんだったんだ・・・？」

特に何かをすることもなく、ただ話をしただけで去っていったシルヴィアにクロスが首を傾げる

「彼女の行動の意図が読めませんね」

ジユダたちが去った事で解除されたはずの空間隔離を再び施し、
神魔達が集まるのを待つて接触してきたにも関わらず、他愛も無い
会話をして立ち去る

その行動に、理由や意味があつたのかすらも分からない

「そうだね・・・ただ一つ言えるのは、予想以上に厄介な事になつてきているってことだよ」

「はい」

桜の呟きに神魔は静かに呟いてシルヴィアの去つた方角へ視線を向けた

その頃、空間の狭間に身を置くシルヴィアは目を伏せて、自らの
コックピット神能に思念を乗せて相手に送る思念会話を行つていた

《・・・シルヴィアです。護衛任務において対象への接触と認識、
1度目の戦闘を終了いたしました》

《ご苦労。引き続き護衛対象の護衛を行ってください》

《かしこまりました》

《対象には接触したな？》

《はい。・・・ですが本当にあれがそうなのですか？私には到底そう
は見えなかつたのですが・・・》

《何しろまだ未覚醒だからな。・・・だが間違いなくあれが我等の守
護対象、『世界を滅ぼすもの』だ。・・・だから守らなくてはならな
い。我等と、我等の主の目的のために》

《はい》

思念会話を終了したシルヴィアは空間の狭間の中で閉じていた目を薄く開いた

同時刻。緑が吹き抜ける草原の中で、オペラグラスを通してその光景を見ていた青年は感嘆の声を上げる

「うっ、ひよおっ！！」

ニット帽をかぶり、金色の髪で顔の右半分を隠したやや幼い顔立ちの青年が、まるで子供ように好奇心に目を輝かせている

「まさか神庭騎士ガイデンナイトまで出てくるとはねえ……。狙いはやっぱり光魔神かな？でもどんな理由であれ、守護騎士がしゃしゃり出てきたって事は、ただ事じゃないなあ」

独り言を呟きながら、青年は湧き上がる興奮を押さえきれずに満面の笑みを浮かべる。

「面白くなってきた。これらかもしっかりと観察させてもらおう」

「……神庭騎士ガイデンナイトか」

「はい。」

十世界の本拠地でジユダから報告を受けた戦王フレイカーは眉間に皺を刻む

「目的は、やはり光魔神か」

「そうではないか、と。あの場であの騎士が出てくるほどの存在となる……」

戦王の言葉にジユダが同意を示す

「一大事ですね」

「！」

その時、聞こえた声に戦王とジユダが視線を動かす

「・・・貴様」

そこにいたのは一人の青年。まるで導師を思わせる出で立ちに、長い白髪。その白髪の先端が角のように硬化化し、頭の両側と、背中の辺りで反りかえっている

「『ディクロア・エクアリテイ平等を謳うもの』・・・!」

「その名は呼びにくいでしょう? 親しみを込めて『クロア』とお呼びください」

「お前たちと親しくなった覚えはないな」

「おや、冷たいですね。十世界に所属する同志じゃないですか」

「同志だと?・・・貴様たちと我々を同じにするなよ」

「・・・やれやれ、嫌われたものですね。それはそうと、お話は伺っておりましたよ? 戦王様。まさかあなた達の天敵である守護騎士が出てくるとは」

「貴様達のせいじゃないのか?」

「言いがかりですよ。・・・とは言い切れませんね。しかし、それも含めて姫は、我々悪意を振りまくものを十世界に迎え入れたのでは?」

271

恭しく頭をさげて、クロアは不敵な笑みを浮かべる

その様子を眉間に皺を寄せて見る戦王に、クロアが口を開く

「ならば、我等が同志である事の証明に、あなた達にとって忌まわしい存在である守護騎士。我等が処分いたしましたでしょうか?」

「必要ない。ここで『フラグメント』を出せば、面倒な事になりかねん」

「かしこまりました」

「・・・他の連中にも釘を刺しておけよ。くれぐれも余計な手は出さな」と

「かしこまりました。我等が神にもその旨、お伝えしておきましょう」

そう言って深々と頭を下げたクロアの姿が霧のように消える

「・・・奴らが我々の計画の妨げにならなければいいがな」

「はい」

独白する戦王の呟きにジユダは静かに頷いた

細く白い指を三本、丁寧に揃えて床に正座した桜色の髪を持つ美女が深々と頭を下げる

「お初にお目にかかります。『桜』と申します。どうぞお見知りおきください」

「あ、いえ・・・」

「こちら、こそ・・・」

床に額がつくのでは無いかというほど深く頭を下げた桜に、一義と薫もつられて頭を下げる

（（大和撫子だー！ー！））

界道家一同が、桜の行動に内心で声を上げる。

「ま、まあ・・・お好きなところに掛けてください」

「ありがとうございます」

一義の言葉に微笑んだ桜は、目を奪われるほどに美しい動作で立ち上がると、ソファに座っている神魔の隣に腰を下ろす

（あ！・・・っ、）

神魔の隣に当然のように腰を下ろした桜に、詩織は思わず出そうになった声を呑み込む

（・・・何なの、あの人・・・、神魔さんとはどういう関係なの・・・！？）

内心で疑問と嫉妬に悶絶しながら、詩織はマリアを一瞥する

（やっぱり、私はマリアさんみたいにはなれないよ・・・）

胸中と脳内が滅茶苦茶にかき混ぜられるような感覚に、詩織は唇を噛みしめる

《世界の法を破って生まれ、存在を拒絶された事を『自分たちが悪いのではなく世界が悪い』と世界の所為にして苦しみから逃れよう

としているに過ぎません。けれどそれは自分の存在から逃げた事と同じです!」

《確かに混濁者マドロラスに対する世界の対応は理不尽で不条理でしょう。しかし混濁者マドロラスは混濁者マドロラスです。その存在の業も全てを受け入れ、向き合わなければいけないんです》

脳内に甦るのはマリアの言葉。

マリアは、自分が全霊命ファーストと半霊命ネクストの間に生まれた子供である事を認め、混濁者マドロラスが忌まわしき存在である事を当然の事のように受け入れている。

(私は、マリアさんみたいに割り切れないよ・・・!)
全霊命ファーストと半霊命ネクストの愛が九世界で禁じられている事は分かっている。その愛では、愛する人を傷つける事しかできない事も頭では分かっている

(だって、だからって神魔さんの事を諦めるなんてできないよ・・・)
忘れようとして忘れられるような想いなら、苦労はしない。諦めようとしても、忘れようとしても、頭で分かっているても心が認めてくれない。神魔の存在が自分の中で大きくなっていく。

(私は・・・神魔さんが本当に好きなの・・・!)
詩織は自分の気持ちをはっきりと再確認する。

(だから私は・・・諦めたくない・・・!)
全て分かっている。この想いが禁忌である事も、傷つける事しかできない事も、この願いが身勝手である事も、全て分かっている。

(私は、私が神魔さんを好きな事を諦めたくない!!)
祈るように、自分の中に芽生えた確かな想いを包み込むように、詩織は自分の胸にそつと手を当てる

「あ、お前、あの時あそこにいた奴だよな」

「はい」

そんな詩織の様子に気付く事無く、クロスは桜を見て言う

「あの時？」

「俺と神魔がここに来るきっかけになつた戦いの時、神魔の近くにいた女だ」

首を傾げる大貴に、クロスは視線を向けて簡潔に説明する

「桜は僕と一緒に旅してますから」

(一緒に！？一緒にって事は2人でつてことですか、神魔さん！？)
神魔の言葉に詩織は内心で叫ぶように問いたです。

もちろん、声にはなっていないが、恋する乙女心は今にも声を張り上げそうになっていた

「一緒につて事は、2人で？」

(お母さん、ナイス！！)

薫の質問に詩織は心の中から最大級の賛辞を送る

「はい」

神魔と桜は当然の事のように声を揃えて頷く

(！！・・・)

「神魔様が、その天使さんと消えて以来、あの場所ですつとお待ちしていたのですが、呼んでいただきましたので、こうして馳せ参じた次第です」

「本当は、桜を呼ばずに終わらせたかつたんですけど、十世界とか出てきたので、さすがにそういう訳にもいかなくなりまして」

桜の言葉に神魔が言う

「神魔君をずつと待つてたの？」

「はい。神魔様から定期的に思念で連絡を頂いておりましたし、神魔様が生きておられる事は分かっておりましたから」

「！」

(やっぱり、この人・・・)

桜の言葉にマリアはわずかに目を細める

「でも、それでよかったの？」

「はい。もちろん時と場合によりますが、待つているように言われたのにそのお方の元へ参じる事は、そのお方を信じていないような

ものですか」

微笑んだ桜の言葉に、神魔を除く全員が目を瞪る

「でも、心配じゃなかったの？」

「もちろん、心配させていただけではありません。ですが、心配させていただけるといふ事は、それだけそのお方を思わせていただけているという事ですから

神魔様の事を想わせて頂きながら過ごすほど、わたくしは、これほどに神魔様の事を想わせていただけているのだと、これほどに想わせていただけるお方がいてくださるのだと実感する事ができます」

((！！大和撫子だー！！！！))

胸に手を当てて、頬を赤らめる桜の言葉に、界道家全員の心が一致する

「そういえば、闇の全霊命ファーストってこういう尽くす系の女の人、多いよね」

「そうだな。まあ、あのレベルはそうはいないだろうけどな」
「そうだね」

桜の様子を見て、マリアとクロスが言葉を交わす

「ありがとう、桜」

「いえ、先程のはわたくしの勝手な言い分です。神魔様には微塵もお気にかけていただく事ではございません」

微笑む神魔に、桜はかすかに頬を赤らめる

(神魔さんと桜さんって、すごく通じ合ってる・・・何であんなに・・・)

そんな二人を、気が気でない様子で詩織が見つめる

胸を焦がす焦燥が詩織を苛み、桜に対して羨望と嫉妬が渦巻く

「・・・羨ましい」

「あなた、何か言った？」

「いえ、何も」

一義の独白を聞き逃さずに微笑んだ薫が、槍の様な視線で一義を貫く

「つきましては、よろしければわたくしもこちらでお世話になりたいのですが、よろしいでしょうか？」

桜の視線に顔を見合わせた一義と薫は、桜に視線を戻す

「それは構わないけど、もう部屋がないの。神魔君と、クロス君と、マリアちゃんの使っている分で全部だから」

「ご心配には及びません。庭先や廊下の隅のような、ご迷惑にならない場所で結構です。特に個室を用意していただかなくても困る事はございませんから」

「それは、そうかもしれないけど・・・」

桜の言葉に薫が言いよどむ

フェイスト

全霊命は睡眠も食事も必要としない。わざわざ部屋で寝泊りしなくても困る事はないが、だからといって「はい。そうですか」と言う訳にはいかない

「そうですか・・・」

「桜。そんなに悩まなくても、僕のとこに来ればいいじゃない」

(！ちよ、神魔さん！？・それって一緒に部屋の寝泊りするって事ですか!?)

神魔の提案に、詩織は引きつった表情を浮かべる

「よろしいのですか？」

「もちろん」

桜の言葉に頷いた神魔に、ついに詩織の我慢が限界を迎える

「いやいや！よろしくくないですよ?!」

詩織は声を上げて、身体を乗り出す

「そうね・・・いくら何でも・・・」

「・・・そうだなあ」

「ああ、それなら心配ないですよ？」

「え？」

いくら一緒に旅をする仲とはいえ、男女を同じ部屋に泊まらせる訳にはいかないというような表情を浮かべた薫と一義に神魔がけるつとした表情で言う

「桜は僕のお嫁さんですから」
その瞬間、神魔の言葉に界道家の面々の時間が止まる

「・・・は？」

「ああ、やつぱりか」

「・・・ですね」

クロスとマリアだけは気付いていたのか、平然と座っている

（お嫁さん！？お嫁さんって言うのは、お嫁さんのこと！？）

しかし、詩織の方はそうはいかない。

詩織が衝撃の事実思考が混乱している傍らで、比較的冷静な薫が桜に確認する

「そ、そうなの？」

「はい。わたくしは神魔様の妻をさせていただいております」

神魔の言葉に桜は頬を赤く染めて、人外の美しさを持つ美貌に恥らしい表情を浮かべる。

「出産と子育て以外は経験済みですので問題はありませんよ」

「神魔様！」

神魔の言葉を嗜めるように桜が言う。その様子はもはやただ惚気ているようにしか見えない

「な、なら問題ないわね・・・」

「そう、だな」

2人がそういう関係であるなら、同じ部屋で寝泊りする事に依存があるはずもない

（お嫁さん・・・2人は深い仲・・・神魔さんと桜さんが・・・）

肩を並べて座っている神魔と桜を見て、詩織はただ呆然とその事

実に打ちのめされていた

（そうよね。そういえば神魔さんは何億年も生きてるのに、恋人がいないなんて事あるわけないわよね・・・何、勘違いしてたんだろ・・・）

他の言葉など耳にも入らず、詩織は内心で呆然と言う

ファースト

全霊命に寿命はなく、神夜も詩織達から見れば気が遠くなるほどの時間を生きている。それだけ長い人生なのだから恋人がいる可能性に気付く事もできたはずだ

（一人で浮かれちゃって、私の馬鹿！）

自分で自分を責めながら、詩織は溢れ出そうになる涙を懸命に堪える

「・・・」

（あの方が、詩織さんですか・・・）

詩織を一瞥した桜はその目をわずかに細めた

「・・・今、この瞬間にも刻一刻と世界の崩壊が進行しています」

そう誰もが聞き入ってしまうほどに美しく澄んだ声が、水面に広がる波紋のように広大な空間に融けていく。

淡い燐光を纏った金色の髪が軽やかに揺れ、女性の周囲に金白色の蛍を舞い踊らせる。神秘的なほどに幻想的な神々しさを纏ったその女性は、足元に広がる鏡のようなものに視線を落とす

「急がねばなりません」

その声と同調するように、その空間に無数の影が出現する。

「世界が減じる前に」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0741v/>

魔界闘神伝

2012年1月6日06時46分発行